

第 3 集

被災から前進するために

未来へのメッセージ



被災から前進するために

第3集

未来へのメッセージ

「被災から前進するために」 第3集の発刊にあたって

気仙沼市教育委員会教育長 白幡 勝美

時々、大震災から3年も経つのにと思うこともありますが、「石の上にも三年」という諺のとおり、大震災から早、3年。気仙沼市も必死に復旧・復興に邁進し、地盤沈下した各地区においても嵩上げ等が進み、集団移転や災害公営住宅建設のための土木工事が本格化し、地域産業を支えてきた魚市場の水揚げも平成24、25年度と確実に回復してきています。

学校教育においても学校職員はもとより、地域の方々、また多くの県外自治体、大学、企業、NPO、その他多くの有志に支えられた取り組みが進行し、復旧・復興そして充実が確かに図られてきました。更には学校を中心とした、公民館、体育館、図書館等の公的教育関係機関による防災や今後の地域の発展に関する取組も進展してきています。

このような中での記録集第3集「被災から前進するために 未来へのメッセージ」の発刊ですが、これまでと違って各学校にその学校として相応しい執筆者を選んでもらい、津波にかかる事実を後世に残す内容としています。

被災から3年後になっての“今だからこそ”という要素と、3年間という時間の筈（ふるい）によって選ばれ、改めて光が当たっている要素が滲んだものになっていると思います。

また、筆者が管理職だけでなく、様々な立場にあった教諭、養護教諭、児童・生徒、保護者、地域の方々、NPOの皆さん等が選ばれたことによる幾多の異なる視点からの内容となっているのも特色となっています。

今回の大震災は、未曾有と言われるだけに、津波被災の真っ只中にあった誰であっても、実はその全体を見ることはできていませんでした。当然ながら、そこからの復旧・復興の全体像も各現場に身をおいて取り組んだ方々のレベルで把握することは困難になっていました。

それだけに、多種多様な内容が含まれていて、本市の学校を中心とした教育現場での津波災害の全体像が分かる本誌は貴重なものと確信するところであり、この先、子供たちの笑顔も本物になっていくはずだと感じていただければ幸いです。

改めてこの3年を振り返りますと、見上一幸学長をはじめとする宮城教育大学職員の皆様によるご支援に対する深い感謝の思いを申し上げなければなりません。そのご貢献は、平成25年度だけでも、気仙沼市・宮城教育大学連携センターを基点にした教員研修、教員免許状更新研修、各学校の教育研究、教育相談、理科教育、教育研究会での指導・助言、図書館実験・工作教室、サイエンスカフェ等教育関係事業指導・助言など広範囲にわたっております。何より未来を担う児童生徒の育成のために、本市が取り組んできたESDをはじめとする挑戦的な教育実践に理解とご指導・ご協力を頂き続けております。1、2号に続いて本誌の発刊ができたのも宮城教育大学の全面的なご支援があつて可能となったのであります。ここに衷心より感謝申し上げます。

巻頭言

第3集「被災から前進するために 未来へのメッセージ」の発刊にあたって

国立大学法人宮城教育大学 学長 見上一幸

東日本大震災から3年以上が経過しました。この間、気仙沼市教育委員会は、復興に向けて全力で取り組みながら、被災地の状況と教育復興過程での経験を多くの方々と共有するために、国内外にむけて積極的に発信されてきました。まず、2012年の3月には、気仙沼市立学校校長会・教育委員会が、震災で多大な被害をこうむった厳しい状況下で、第1集の「被災から前進するために」を刊行されました。翌2013年の4月には海外に発信するために、「被災から前進するために」の英語版“Records of the Great East Japan Earthquake: To Advance Forwards After the Disaster”を出版されました。つづいて昨年の5月には、第2集「被災から前進するために～東日本大震災から2年目の取組」を刊行され、そこには教育環境の回復状況や、児童生徒の心のケアへの取組、地域や行政、外部機関の支援と連携、学力向上への取組などがまとめられています。

そして、今回上梓される第3集の報告書「被災から前進するために 未来へのメッセージ」は、第2集で校長先生による記述を中心にしたものに対して、児童生徒からのメッセージ、保護者・地域の方のメッセージ、教職員のメッセージを中心に構成されています。本報告書を一読すると、地域の未来づくりを担う前向きなメッセージにあふれています。一方では、学校統合や震災による地域社会の変容など厳しい現実がありますが、本報告書を読めば、次世代の子どもたちが、気仙沼の地域の未来を切り開いてくれると確信できます。震災で被害を被った地域に生きる人々と子供たちの底力を示す作品であるといえます。このような貴重な報告書をまとめられました、気仙沼市教育委員会、気仙沼市立学校校長会の皆さまのご尽力に、心から敬意を表します。

宮城教育大学は、教育復興支援センターの事務所を気仙沼に開設し、春夏秋冬の休みを中心に学生ボランティアによる学習支援を通して、全力で復興支援に協力させていただいております。また、気仙沼ESD／ユネスコスクール研修会、気仙沼ESD／RCE円卓会議2013など、防災教育・減災教育を含む持続発展教育（ESD）への協力の他、復興支援の一環として教員を対象にした教員研修なども積極的に行っております。

震災から3年たちましたが、宮城教育大学の教育復興支援や海外への情報発信などはまだ道半ばにあります。第1集から3集までの三冊の報告書「被災から前進するために」にみられるような、気仙沼市の充実した取り組みを、国内外で共有することが、地球上の何処かで起こるかも知れない新たな災害に対する備えとなり、減災、復興のための大きな力となると信じております。この度の第3集の発刊を心からお慶び申し上げます。

「被災から前進するために」 第3集発刊にあたって

気仙沼市立学校長会 会長 藤村 俊美

東日本大震災から早、3年経過しました。宮城県は3月11日を東日本大震災で亡くなられた方々を追悼し、震災の記憶を風化させることなく後世に伝えていく特別な日として、「みやぎ鎮魂の日を定める条例」を制定しました。お陰様で、今年度も多くの皆様からご支援・ご協力をいただきながら、児童生徒は落ち着いた学校生活を送ることができております。

さて、このたび記録集「被災から前進するために」第3集を発刊することとなりました。一昨年の第1集は、「被災から前進するために」の主題のもと、震災の現状と復旧の努力について、各校での取組を記憶の新しいうちにまとめようとの趣旨から作成したものでした。2年目となる昨年度は、同じ主題のもと、各校での復興の努力、防災教育の推進、児童生徒の心のケアや学力向上の取組等を、校長の視点からまとめることができました。

3年目となります今年度は、第1集より3年間同校にて執筆している校長は5名しかおらず、残り27校のうち、16名の校長が今年度赴任しており、第3集の作成は難しいのではないかとのお見解が出されました。役員会で協議し、気仙沼市教育委員会からご指導をいただいた結果、今回のような記録集をとりまとめることができました。

第1集より継続しております主題「被災から前進するために」をそのまま生かし、「未来へのメッセージ」をコンセプトに、校長がコーディネートしながら、児童生徒からのメッセージ、保護者・地域からのメッセージ、そして教職員からのメッセージとして原稿依頼をすることとしました。

寄稿にあたっては、本人または保護者了承のもと氏名を公表し、無理な場合には氏名を伏せるなどの処置をとらせていただいております。第1集、2集とは違い、校長がコーディネートしながら編集しました今回の第3集は、今までの集大成にふさわしい記録集となったのではないかと自負しております。

これもひとえに、気仙沼市教育委員会の全面的なご指導・ご助言のもと、宮城教育大学様からの3年間の変わらぬご支援のお陰と存じ、心より感謝申し上げます。

この記録集が被災地の方々のみならず、今後心配される日本各地での大震災に向けた防災教育等の参考にしていただければ幸いです。

目次

巻頭言

「被災から前進するために」第3集の発刊にあたって	気仙沼市教育委員会教育長	白幡 勝美
第3集「被災から前進するために 未来へのメッセージ」の発刊にあたって	国立大学法人宮城教育大学 学長	見上 一幸
「被災から前進するために」第3集発刊にあたって	気仙沼市立学校長会 会長	藤村 俊美

巻頭論文

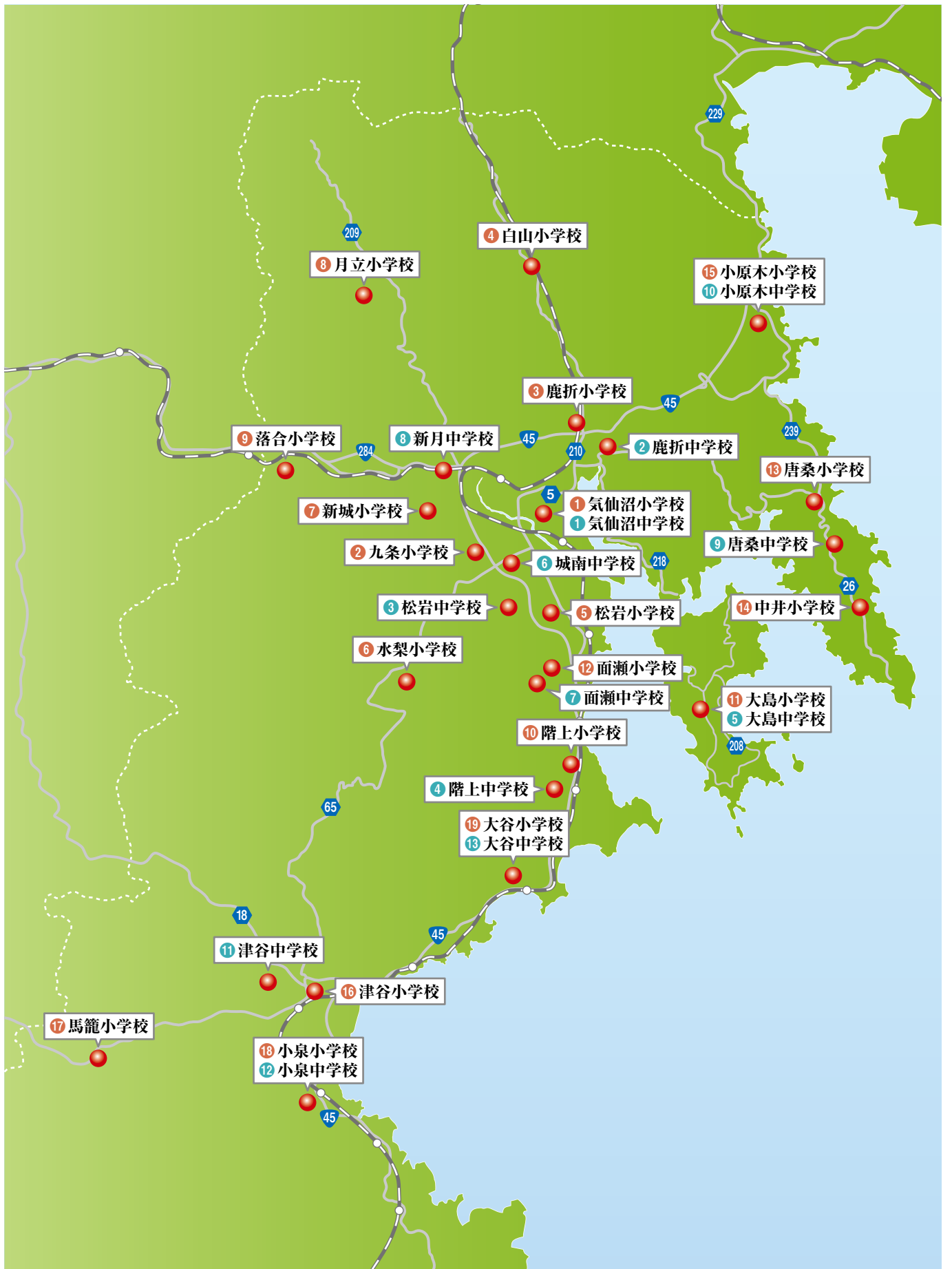
津波と心のケアについて……………	気仙沼市教育委員会教育長	白幡 勝美	002
東日本大震災の教訓をふまえた気仙沼市の防災教育の改善 ……………	気仙沼市教育委員会 学校教育課 副参事	及川 幸彦	008

小学校

01 新たなスタート地点から……………	気仙沼小	山崎 昭	016
02 被災を乗り越えるために、今を伝える……………	九条小	山本 正美	022
03 子どもの笑顔あふれる学校と防災教育の充実をめざして……………	鹿折小	藤村 俊美	028
04 前向きに明るく～本校児童、保護者、教諭の震災3年後の思い～……………	白山小	豊田 康裕	035
05 ふるさと松岩に活力と勇気を……………	松岩小	佐藤 均	040
06 子どもたちの笑顔は力なり……………	水梨小	荒井 由美子	045
07 未来へのメッセージ～児童と教職員から～……………	新城小	菅原 輝夫	051
08 ふるさと 気仙沼の再生を目指して……………	月立小	高橋 康	055
09 花と笑顔に満ちた学校での学びと地域を誇りにして……………	落合小	熊谷 聖	059
10 ふるさと階上を担う子どもたちへ……………	階上小	小野寺 正司	065
11 震災からの復興に向けて……………	大島小	佐藤 幸弘	072
12 多くのご支援を忘れずに、命を守り、未来へ……………	面瀬小	長田 勝一	077
13 学校と地域の輝く未来に向けて……………	唐桑小	熊谷 正子	082
14 被災からの前進Ⅲ～児童・職員から～……………	中井小	松本 尚人	087
15 支援への感謝と未来への誓い……………	小原木小	千葉 哲	093
16 思いやりの心を育み心やすらぐ学校を目指して……………	津谷小	中井 充夫	098
17 命のメッセージ-未来に向かってたくましく生きよ-……………	馬籠小	木村 玲子	103
18 子どもたちの未来に向けて……………	小泉小	三浦 雅彦	108
19 感謝の思いを未来に……………	大谷小	島山 雅宏	115

中学校

01 被災から前進するために～未来へのメッセージ～……………	気仙沼中	小野寺 良一	122
02 未来に向かって……………	鹿折中	菊地 道雄	128
03 復興へのメッセージ……………	松岩中	佐藤 富夫	133
04 苦境にあっても天を恨まず……………	階上中	今野 勝美	138
05 「みどりの真珠」が美しい輝きを取り戻すために……………	大島中	菅原 裕	144
06 「拓け 新しき世紀」……………	条南中	熊谷 利治	149
07 「真の復興を目指して」～教育による日本人の心の継承～……………	面瀬中	佐藤 敏典	153
08 「自分出来ること……」未来志向への転換……………	新月中	中里 寛	158
09 生徒の夢と希望を確かな未来へ……………	唐桑中	小松 康男	162
10 霧立山の麓から幸せの風を吹き起こそうⅢ……………	小原木中	高野 勝則	167
11 よりよい未来へ向けて 今、私たちにできること……………	津谷中	佐々木 弘晃	171
12 小泉の明日を信じて……………	小泉中	加藤 高政	175
13 感謝の気持ちを力にかえて……………	大谷中	舛田 育久	179



津波と心のケアについて

気仙沼市教育委員会教育長 白幡 勝美

1 はじめに

今、心のケアが問われている。心のケアの必要性は悩み苦しんでカウンセラーのお世話になっている児童・生徒・職員を対象とするものに限ったものではない。震災を経て3年も経って自分も震災のダメージを心に受けていたと思う市民が多いのが現実であって、一人で重い課題を抱え続けている例も少なくないとみられており、すぐにでも心の問題への対応が必要となっているからである。津波災害によりこのような大きな心的影響を受け苦しむことへの認識は津波の度に地域の共通のものとなっていたはずであるが、では、いったいどのようにそれに向き合ってきたのだろうか。

本稿はこのことについて先ず現時点で明らかにできる点を押さえ、今日の心のケアによる取り組みの実態を踏まえ、今後の精神健康のための方向を見つめたいとするものである。

2 昭和8年三陸大津波後の精神作興の運動

2-1 宮城県の方針

上述のような問題に答えることに役立つような内容を持った当地域の石碑や古文書の類いの存在は知られていないが、幸いにも80余年前の昭和の大津波の後に出版された『宮城県昭和震嘯誌』、『岩手県昭和震嘯誌』に精神の作興を扱った部分がある。おそらく大津波災害後の心の問題に組織的に取り組んだ最初のものではないかとも思われるが、昭和8年三陸大津波から10年前の1923年（大正12年）に関東大震災が起き、その直後に『国民精神作興ニ関スル詔書』が出されている。同じく大災害の後であることもあり、精神作興の取組はその詔書に拠るものであろうと思われるが、大津波の災害からの復興が願われている中での精神作興とはいったい何であったのだろうか。

『岩手県昭和震嘯誌』では、精神作興は「第三編第四章第十三節罹災市町村長召集」の中での岩手県知事告示と「追緝第六章 一、漁村青年教育振興」の中で扱われている。それらは貴重な内容を持つ記載ではあるが、精神作興についてより細述している『宮城県昭和震嘯誌』の該当する部分を紹介する。

『宮城県昭和震嘯誌』の本文は5つの編で構成されている。

1編 総説 2編 被害 3編 応急措置及救護 4編 復旧・復興 5編 雑録である。この中の4編 復旧・復興は6つの章からできていて、その第五章として精神作興の運動が掲げられている。

第五章 第一節 約説は以下のように述べている。

「・・・震嘯災による物的打撃は官民の一致協力により、素速く、応急救護の実を遺憾なく遂行し得たるが、ともすれば等閑視され易きは、罹災民及附近部落民の不測の災害に遭いて萎微せる精神の復興にあり。仍て災害と同時に、三邊知事より災害に対する精神作興の告諭第三号を發し、・・・」

約説を短く切り取ったこの文からも、精神の問題に対処することの重要性ははっきりと捉えられていることが分かる。

知事の告諭は昭和8年4月10日付けのものである。知事はその中で「・・・惟フニ災害復旧ノ事タル罹災町村民ノ自奮自励ニ俟ツ事最モ肝要ニシテ嚴ニ浮華放縱ヲ戒メ民風ノ刷新教育ノ充実生活ノ改善経済機構ノ統制ヲ策シ協力一致更生ノ郷土建設ノ為ニ邁進シ以テ所謂災禍ヲ転シテ幸福ヲ招来スル永遠ノ復興計画ヲセ

サルヘカラス宜シク勤勉力行・・・」と述べていて、「自奮自励」が精神のあり方として最も重要であるとしている。

これを受け、清水谷学務部長は『精神作興ニ関スル件通牒』を出していて、「・・・被存候處復興ノ要諦ハ精神ノ振作ヲ以テ第一義トスベキ儀ニ有之・・・」としている。

精神ノ振作とは元気づけることであり、奮い立たせることである。このように精神の作興をみてくると極端に精神主義的に思えるが、精神作興の実態を見るためには精神作興のための方策など、その方策がどのように具現化されていったのかをみなければならない。

第五章第三節以降～第八節はその方策を記している部分である。第三節 ポスターに據る運動、第四節 復興懇談会、第五節 罹災地映画巡回、第六節 復興記念館、第七節 災害記念文庫の設置、第八節 漁村振興青年講座となっている。

第三節によれば、ポスターによる運動では写真1のものが大凡3000枚罹災市町村の見やすい所に貼付されている。

興味深いのは、2つ目の標語「心は明るく、気は強く」である。明らかに『国民精神作興ニ関スル詔書』には見られない文言である。

これは詔書の国民への求めから抜け出して、被災者の心のあり方についての願いであって、宮城県の行政としての被災者への働きかけの方向性を表しているものであろう。

第四節によれば、復興懇談会は映画による慰安と懇談的な復興の将来についての協議であったことが分かる。この映画は五節 罹災地映画巡回により具体的に述べられている。

五節によれば映画の種類は「自力更生」二巻、「海の世界」一卷、「鍬の光」四巻とのことで、「復興精神の作興に適切」(五節の文言)は、現在の立場から、タイトルを見るかぎりでは、慰安の面での疑問は無しと出来ないが、当時は映画こそが最大の娯楽になっていたはずであり、教訓的な内容であっても、尚かつ、楽しめる要素も見いだせたことであろう。

第六節 復興記念館は『昭和三陸津波後建設された宮城県の震嘯記念館について』津波工学研究報告第29号によれば、宮城県内に33ヶ所、気仙沼市域にも大沢、只越、宿、鮎立、小鯖、鹿折、大島、階上、大谷、今朝磯の10ヶ所に建設されている。この建物は記念館に多目的の公会堂のような機能を併せもったものであったことから、その後の地域の観劇や映画の上映にも活用されることが可能であったのであり、心の復興にも大きく寄与したはずである。

第七節 災害記念文庫の設立については震災後各学校で図書を充実させたことは小原木小学校や大島小学校の資料から明らかであるが、気仙沼市内におけるそのような書籍の現存が明らかになっているのは、写真2 小原木震嘯記念文庫の『宮城県昭和震嘯誌』一冊だけである。

八節によれば漁村振興青年講座は当地域は開催地とされていない。しかしながら昭和天津波前後、青年団活動が活発であったことは、2-2において天津波後の学校の行事を読み取った小原木小学校、浦島小学校の学校日誌からも窺える。

ここで、「ポスターによる運動」→キャンペーン

「復興懇談会」・「罹災地映画巡回」→集団での話し合い活動・芸術による癒やし

「復興記念館」→ハードの整備による創造的復興

「災害記念文庫の設立」→図書の購入、心の復興、学び支援・地域文化の興隆

「漁村振興青年講座」→若いリーダーの育成

このように捉え直すと、精神作興と東日本太平洋沖地震津波の後で、我々が行っているものと類似している側面も少なくないように思われる。

気仙沼地域では、津波被害が繰り返されているのであり、市民の間



写真1 精神作興のポスター
『宮城県昭和震嘯誌』による。

では、津波は起こるものとの認識が共有されていたとしても過言ではない。そのような文化的な背景の中では、昭和の大津波後の精神作興の取組はこの度の大震災でも耳にすることが無いことから直接的には殆ど継承されていないとすべきであっても市民の意識の深いところで何らかの影響を与える取組になっていた可能性も否定できない。

津波の後で「心のケア、心のケア」としきりに言われたとき、何も知らない子供が言われているかのような違和感のようなものを感じた気仙沼市民も少なくなかったようにも思うが、自分達の心の中に災害に対処する心のあり方にかかる文化のようなものがあつたためなのかもしれない。

しかしながらそれは、心のケアの必要性を否定するものでは全くなかったと思う。2-2で後述するように私共は精神作興の形であっても、心のケアにも当たるような取組を行ってきているからである。

精神作興は罹災地小学校長会（昭和八年四月十四日）で徹底が図られている。

小学校長会議になっていることについては、当時の中学校では現在の高等学校の配置より更に広範囲をカバーする教育施設になってしまい、各々の被災集落の被災に対応できる仕組みでなかったことによるものであろう。

この会議での会議事項については、大きな被害をうけた小原木尋常高等小学校に保存された『昭和8年三月三日 海嘯関係係』に、昭和8年4月14日に開催された『罹災地小学校長会議事項（昭和八年四月十四日）』がファイルされている。そのガリ版刷りの文書は以下のように記している。



写真2 小原木尋常高等震嘯記念文庫
小原木小学校所蔵



写真3 罹災地小学校長会議
『宮城県昭和震嘯誌』による。

会議事項

- 一、震嘯罹災地方民精神作興ニ関スル件
 - 一、学校給食ニ関スル件
 - 一、児童就学奨励ニ関スル件
 - 一、遭難者ノ慰霊法要ニ関スル件
 - 一、復興ニ関スル部落懇談会開催ニ関スル件
- 更に各事項について細述している。

罹災小学校長会議事項

- 一、震嘯罹災地方民精神作興ニ関スル件

四月十日 レタル

(一) キガテ発セラルベキ告諭及通牒ノ趣旨徹底ヲ期スルコト

(近ク各戸ニ配布ス、四月十九日慰霊祭、部落毎ニ懇談会ヲ開ク、□十五日以前□単位青年団長会議ヲ開催)

(二) 精神作興ポスターノ活用並趣旨徹底ヲ企画スルコト

- 1、自主復興ニ一層ノ留意スルコト
- 2、団体的訓練非常時訓練ニ一層留意スルコト
- 3、生活改善、民風ノ刷新、経済様構ノ統制等ニ一層留意スベシ

ここの赤色小文字表示は書き込みであり、会議当日の校長によるものであろう。□は文字の判読できない

かったことを示す。

ところで、この精神作興の取組の方策は多方面に広がっていたことから、カウンセラーによる心のケアに比べると、その深みはともかく、方法論的にも係わる人の輪において十分に広いものがあった。ここでもう一度、精神作興にもどって、その運動の教育現場での実態について述べてみたい。

何と言っても精神作興は宮城県が復興のために精神や心の問題について、組織的に取り組んだ、先駆的な要素を持つものであるからである。

2-2 当地域の小学校における取組

学校における取組は学校日誌から該当する行事を調べたものである。

該当する行事としては「教育勅語、精神作興詔書に係るもの」、「防災、訓練に係るもの」、「映画」、「慰霊に係るもの」とした。

当地域では昭和8年三陸大津波において、特に唐桑地区が大きな被害を受けているが、その中でも小原木尋常高等小学校区の受けた被害は大きい。

小原木尋常高等小学校では児童の死亡・行方不明者3名、負傷2名を出している。

小原木尋常高等小学校の学校日誌は昭和7年4月1日から昭和9年3月31日までの行事を次のように記録している。

なお、昭和7年4月1日～昭和7年10月30日迄、教育勅語、精神作興等にかかる行事の記載は無く、また、防災、防火訓練にかかる行事等の記載も無い。

昭和7年

- 10月31日 教育勅語渙発式
- 12月19日 朝会ニオイテ火気取締ニ付訓話

昭和8年

- 2月3日 活動写真会（唐桑村愛国青年教化団）
- 3月3日 午前二時半津浪ノ来襲アリテ悲惨ナル被害ヲ受ク殊ニ只越部落ノ流出、大沢部落ノ惨害著シ
- 5月26日 校長ヨリ海軍記念日ノ講話及ビ避難演習ニ関スル注意アリ
- 5月27日 海嘯火災避難演習実施
- 9月10日 青森営林署主催映画会開催
- 10月3日 避難演習
- 11月10日 国民精神作興ニ関スル詔書十周年記念奉読式举行
- 11月18日 防火宣伝ノタメ全児童旗行列ニ参加

昭和9年

- 1月13日 避難演習
- 3月3日 海嘯死亡児童吉田芳子伊藤八千代両女ノ慰霊祭ヲ行フ
只越大沢両地区ニ於イテ、只越地区デ海嘯避難訓練ヲ行フ職員二班ニ分カレ参加ス

昭和8年3月3日から5月26日に至るまで殆ど学校行事らしい行事は行われていない。地域が組織等を立て直すのに全力を注いでいたことに対応したものであろう。次第に県の方針に沿うように精神作興詔書の奉読式や津波避難訓練等が多くなる。また、これに合わせて神社仏閣の清掃が多くなっていることが日誌には記されている。これは、時代のうねりの中で起こっていたであろう神道への傾斜に止まらず、供養と心の癒しを兼ねた活動となっていたのであろう。

では、津波被害が比較的軽かった内湾に当たる浦島小学校学区（鹿折尋常小学校浦嶋分教場学区）ではどうであったのか。

浦島小学校には海嘯に関する綴の類は残されていない。また、昭和7年、8年度の『学校日誌』には、昭和7年4月1日～昭和8年3月2日迄、教育勅語、精神作興等にかかる行事の記載や、防災、防火訓練にかかる行事等の記載は無い。

昭和8年

- 3月3日 今暁三陸沿岸地震海嘯ニオソハル
- 4月19日 鶴ヶ浦ニ於テ海嘯災難者ノ慰霊祭施行
- 4月30日 午後ヨリ県主催ノ海嘯地復興懇談会、映画、開催サル
- 9月1日 始業式 関東大震災ニツイテ
- 11月17日 防火宣伝ニツキ本校ヨリ尋五以上男女、及川 山崎、村上 三訓導他村内消防組、来校ス

昭和9年については3月3日を含め、特に記載がない。4月19日は地区の行事であろう。小原木小学校に比べれば回数は少ないが、確かに作興運動に該当するイベントも行われていたことが分かる。

2つの小学校に共通するのは、大津波前と後では精神作興（防災訓練を含む）に係る行事が確かに増加していることである。2つの小学校の実践を通して見る限りでは、罹災した地区とそうでない地区との差があっても、宮城県の指導した精神作興は各地区に及んでいたであろう。

2-3 昭和8年大津波以前における大津波後の心の問題への対処

2-1冒頭で述べたように、このことについての資料等はほとんどない。しかしながら大災害の後の対処の形を探れば、時代によって附加される特有の対処の部分と時代を超えて行われてきた対処の部分とに分けて、心の問題への対処を明らかにできる可能性が出てくるものであろう。そこで敢えて昭和8年大津波後の精神作興は時代によって附加される特有の対処として、そのことを除いてみると、今日にも、共通するものとして震災後学校に目立ったのは、多くの訪問者があったことと、慰問する手紙・葉書が関係各方面から寄せられたことである。

例えば大島尋常高等小学校では昭和8年大津波後の見舞いの葉書が48葉も残されている。これらは直接的、間接的な寄り添い行動である。

明治29年以前の対処も心の問題に係る共通するものとして、寄り添い（奉仕活動を含む）であったように推察される。

3 現在の心のケアとスクールカウンセラー制度

震災以来、宮城県教育委員会は心のケアに特に力を入れており、気仙沼市の中学校全ての学校にスクールカウンセラーを配置し、小学校では市全体に1名及び希望する9小学校に広域カウンセラーを配置している。またこれとは別に希望する小学校17校に他自治体からの緊急スクールカウンセラーを派遣して頂いている。

更に、児童・生徒の高度なケアのため人的な配慮がどうしても必要になる場合には佐藤佳彦所長をはじめとする宮城県南三陸教育事務所に確かな対応を頂いており、加えて、平成26年度にはソーシャルワーカー、スクールカウンセラーを増員して頂ける見通しである。このような体制は極めて有効に機能してきていて、誠に感謝に堪えないところである。

また、各学校において養護教諭をはじめとする職員が児童・生徒の心を支える意志とスキルをもって児童・生徒に向き合っていることも児童生徒の心の安定と発達に大きな効果をもたらしている。昨年度まとめられた『後世に伝えたいこと—震災を経験した保健主事・養護教諭として—』には保健室を中心とした心のケアへの取組が記されており、震災直後に、また、それ以降に児童・生徒に如何に寄り添ってきたのがよく分かるものとなっていて、感動的ですからある。

心のケアをはじめとする心の健康に係る情報やスキルは保健主事・養護教諭をはじめとする学校職員全てにとって今後一層重要になるものである。

気仙沼市教育委員会としては心のケア等に係る研修会等を積極的に開催していく予定である。

4 心のケアの先に

被災地である気仙沼市においては心のケアは現在最も重視しなければならない取組の一つである。しかも被災の影響は被災が直接的なものでなかった家庭や児童生徒にとっても小さいわけではなく、児童・生徒一人一人の個人差も無視できない大きさがある。又、不登校や引きこもり、いじめ等も学校・地域をあげて向き合い克服すべき課題となっていることから、心のケアを包み込んで、更に一般的な心の問題と向き合う仕組み作りが今後必要になってくることが十分予感できるところである。

児童・生徒の心の問題は「心は健康であるとの漠然とした期待」を前提とすることから、「常に起伏のある、場合によってはそれが人生そのものにさえ大きな影響を与えるものであることをしっかり意識する」ことを前提とするように変わっていかねばならない時がきているように思われる。

では、どのような方向性をもって今後に臨むべきなのであろうか。このことについては、当然、当地域の祖先からの文化の中に、先輩諸氏の教育への取組の中に橋頭堡を求めたいところであるが、前述したように、確かなものとしては僅かに昭和8年三陸大津波後の精神作興の運動があるのみであり、しかもこれは継続され今日へと発展してきているとは言い難い。

このような折り（平成25年5月1日）、宮城県立精神医療センター院長小高晃氏の気仙沼市訪問があり、マインドマターズの詳しい説明を頂いた。

これは、心の疾病予防を目指す枠組みとしてオーストラリア政府・保護者の主導により2000年に学校精神保健増進プロジェクトとして創設されたものである。

マインドマターズは11歳から17歳までを対象とした、心の健康の増進・予防・早期介入を促す国家的プロジェクトであり、手法としては、学校環境、校風の改善や、家族・地域との連携という基盤に立つサポート力が重視されている。

特に学校にフォーカスを当てたところがスクールマターズである。

この取組が学校・地域との連携をベースにしていることに注目するべきであろう。気仙沼市教育委員会は宮城教育大学からの助言等の下、連携を最も重要なキーワードに過去十年来、持続発展教育ESDを実施してきたが、これとはかなり相性が良さそうである。実際、マインドマターズでは震災後気仙沼市の教育が大震災以後向き合ってきた「喪失と悲嘆」や「レジリエンス」「コミュニティマターズ」も重要なキーワードとして扱われている。

マインドマターズ的な取組は日本であまり広がっていないようであり、それにかかる取組情報も得難い感がある。あるいは、ここ気仙沼市こそが、大津波の被害という痛みを背負いつつも、そのような方向を切り開く使命と可能性を持っているのかもしれない。

参考文献

- 『津波デジタルライブラリ』 <http://tsunami-dl.jp/document/041>
- 『宮城県昭和震嘯誌』 宮城県 昭和10年
- 『岩手県昭和震嘯誌』 宮城県 昭和10年
- 『海嘯関係綴り』 小原木尋常小学校
- 『学校日誌』 昭和7年 鹿折尋常小学校浦島分教場
- 『学校日誌』 昭和8年 鹿折尋常小学校浦島分教場
- 『心の科学』 No.143～149
- 『昭和三陸津波後建設された宮城県の震嘯記念館について』2012年 津波工学研究報告第29号

(注) 平成25年度第1回気仙沼津波防災市民ネットワーク資料 6月13日の一部変更したものである。

東日本大震災の教訓をふまえた 気仙沼市の防災教育の改善

気仙沼市教育委員会 学校教育課 副参事 及川 幸彦

はじめに

災害時においては、環境・経済・社会・文化的にも「持続不可能」な状況が、極限的な形で現出する。2011年3月11日に発生した「東日本大震災」は、まさしく未曾有と言われるほど極限的なものであった。この東日本大震災の危機的状況の中で、「持続可能な開発のための教育（ESD）」の取組が、危機管理や防災・減災、そして復旧・復興過程でどのように機能し貢献したのかを、2002年から国内でも長期かつ組織的にESD／ユネスコスクールに取り組んできた気仙沼市の防災教育と教育復興の取組から分析する。

これらは、今年2014年に「国連・ESDの10年」(DESD)の最終年を迎え、日本でESD世界会議が開催されるにあたり、日本のESDの成果として世界に向けて発信されるべき証左である。

1 危機管理・防災に果たすESDの役割

1.1 災害時における危機管理及び防災・復興とESD

国の教育振興基本計画に記述があるように、ESDは、新教育基本法の理念と軌を一にするものであり、子供たちに「生きる力」を育み、未来の担い手として育成する重要な教育理念である。そして、この度の東日本大震災においても、これは、震災直後の危機管理や学校再開等の教育復興でも確かに機能したといえる。ESDと危機管理や防災との関連性を考えるとき、次の三つの視点が挙げられる。1つはESDという教育の方向性と防災教育の親和性（Synergy）であり、2つめは、ESDは、災害時の危機管理（DRM）や防災（DRR）に実際、どのように機能するかという点である。そして、3つめは、ESDで育まれる弾力性や復元力（Resilience）が震災を乗り越える復興への力となることである。

防災教育の枠組みを考えると、防災教育には自助、共助、公助の3つの段階があると言われる。しかし、東日本大震災では、自助、共助は、ある程度機能したものの、それだけでは長い期間持続しなかった。一方、公助は、広範囲が甚大に被災したため、支援に時間がかかり、それが届かない地域も生まれてきた。その地域、時間の隙間を埋めるための新たな役割を担ったのがNPO、NGOであり、多様な主体のネットワークによる新しい支援であった。気仙沼市教育委員会は、これを「N助」と表現している。

ESDは、批判的思考やシステム思考、そして、コミュニケーション能力や情報収集・分析力、さらには、意志決定し行動する能力を育む。これらの力は、災害時の危機的状況においては必要不可欠なものである。今回の東日本大震災においても、各学校は、これらの能力を最大限に活用し困難に立ち向かった。実際、子供たちも、これまでの学習経験を生かし、自分たちができることを精一杯がんばり、地域の復旧に貢献したのである。

また、ESDは、コミュニティーや他地域、関係機関との連携と協働のもとで進められる。これらのESDの絆は、この度の震災でもそれぞれのコミュニティーにおいて、避難行動や避難所経営などの面で効果的に機能した。その中で、地域に根ざし、地域と連携してESDを推進してきた気仙沼市の各学校は、この危機的状況においても地域住民と連携しながら防災や避難の拠点として役割を担ったのである。

1.2 ESD の視点からの防災教育の充実・発展

UNESCO は、DESD の後半年で取り組むべき優先事項 (Key Action Themes) として、①気候変動 (Climate Change)、②生物多様性 (Biodiversity)、③防災・減災教育 (Disaster Risk Reduction and Preparedness) の3つを掲げている。このことから防災・減災教育がESDの中でも重要な視点であることは疑う余地はない。しかし、防災・減災だけで、ESDの学びが成り立つ、あるいは完結するわけではなく、上記の3つのアプローチを含めたESDの各要素が連関して学びが構成されてはじめて、有効かつ実践的なESDが推進できる。

この意味からも、上記の3つのプライオリティーを連関・統合した形で防災・減災教育のプロセスを考え、プログラムを開発する必要がある。その開発には、表1にあるように、段階と目的、育成する能力・態度、取り組む内容とESDの要素との関連を整理して、学びのプロセスに配置していく必要があると考える。(表1)

表1. ESD の視点からの防災教育のプロセス

段階	第1段階 気候変動と災害発生 の仕組み	第2段階 気候変動と災害の社 会や環境への影響	第3段階 気候変動と災害リスク 軽減への対応と準備	第4段階 被災からの復旧・ 復興
能力	知識・理解 Knowledge & Awareness for Mechanism	影響・因果関係 Recognition of Influence & Relation	備えと実践 Response & Preparedness for Mitigation	創造と協働 Creativity & Collaboration for Recovery
内容	気候変動や災害の種 類や発生のメカニ ズムを科学的・客観 的に理解する	気候変動と災害が人 間生活や生物多様性 にどのような影響を 与えるかを認識する	気候変動がもたらす災 害のリスクを軽減す るための対応や準備の仕 方を理解し実践する	災害による被災から の創造的な復興に向 けたプロセスや視点、 貢献のあり方を学ぶ
ESD	科学的な仕組み 社会的な要因 経済的な要因	生物多様性への影響 社会的影響 文化的影響	インフラの整備 組織力の向上 知恵とスキル	経済的な復興 文化的な復興 精神的な復興

防災教育は、学校教育においても組織的に取り組んでいくことが重要であるが、そのためには、体系的かつ実践的な防災教育の学習プログラムの構築が必要である。その際にはESDのカリキュラム開発手法が有効である。一つは、既存の各教科・領域の学習内容の中で防災に関する内容を抽出し、連携させて防災を意識した学習を進める手法である。これは、既存の教育課程の枠組みの中で防災教育を進めようとするものであるが、内容的にも系統的・体系的にも不十分であることは否めない。

もう一つは、児童生徒の発達段階と教科・領域等活動場面の相互連関を考慮し、上記の防災教育のプロセスや内容をもとに必要な防災学習のコンテンツを開発・配置してプログラムを再構築する手法である。気仙沼市教育委員会では、市教育研究員の研究を通じて、ESDの視点から発達段階に応じて各教科、領域等の活動場面で実践すべき防災に関する学習内容を組織した「防災教育マトリックス」を開発し、防災教育カリキュラムの体系化を図るとともに、それに位置付ける個々の学習内容の実践例を「防災学習シート」として提案することで防災教育の充実・発展を図っている。(図1)

「防災学習シート」

活動学年	活動場面	活動時間の目安
中(高)学	行事・集会	2時間

対象学年や活動場面、時間の目安

活動の展開例を、学習指導案「活動の展開」の形式で記載

活動内容を発展するためのポイントを記載

図1 防災学習マトリックス (H25気仙沼市教育研究員作成)

2 震災の教訓と地域とのつながりを生かした学校の防災教育の取組

東日本大震災の経験と教訓を踏まえ、上述したESDが重視する地域（コミュニティー）との連携という視点から防災教育を組織的かつ実践的な取組へと改善・発展させている気仙沼市立階上中学校と小原木中学校の2つの事例を考察する。

2.1 震災の経験と教訓を生かした階上中学校の「地域連携型防災教育」

階上中学校は近い将来、来襲が確実視されていた「宮城県沖地震」に備え、平成17年度からESDのアプローチとして「総合的な学習の時間」を中心に防災教育に取り組んできた。中学校3年間で取り組む「自助・共助・公助」をサイクルとしたプログラムは、国内でも先進的な取組として評価され、その成果は、東日本大震災の際にも、避難行動や避難所運営など様々な危機的な場面で、生徒が自主的かつ積極的に活動・貢献する姿として発揮された。

しかしながら、未曾有の大災害とはいえ、卒業を翌日に控えた3年生の3名の尊い命が失われたのをはじめ、階上地区内で203名という市内で最も多くの津波犠牲者が出た現実を前に「防災意識」のさらなる浸透と「危機対応能力」の向上の必要性を突きつけられた。

(1) 東日本大震災が残した課題と教訓

そこで、階上中学校は、震災後の防災学習を、「自分の命は自分で守る」という「自助」をベースにしな

がら、これまでの取組で「何が足りなかったのか」、今後「すぐ取り組まなければならないことは何か」など、震災の経験をもとに、実践に基づきながら課題や教訓を洗い出すことから始めた。階上中学校の独自の聞き取り調査の結果、階上地区は、海と共に生活する人が多く、防災意識も決して低いとは言えない地区であるにもかかわらず、「過去の経験から津波が来てほしかったことはないと思った」等の①「危機意識」の問題。「居住地の海拔は知らなかった」や「自分で判断せずに、周りを見て行動してしまった」等の②「知識や認識不足」の問題。そして、「家族が心配で家に戻ってしまった」や「老人がいたので車で避難したが、途中で渋滞に巻き込まれてしまった」等の③「家庭の事情」の問題等が浮き彫りとなった。階上中学校は、これらの課題と教訓を踏まえ、震災後の新たな防災教育の再構築に挑むこととなった。

（２）震災を踏まえた階上中学校の防災教育プログラムの改善

震災直後の平成23年度は余震が続き、地震や津波への恐怖が消えない中で防災への取組を始めたが、「自助」をテーマに、校舎内の避難者や校庭の仮設住宅の住民とも連携した避難訓練や発表会などを行い、「自分の命は自分で守る」ことの再認識から改善に努めた。

平成24年度のテーマは「共助」であった。前年度取り組んだ「自助」で自助意識がなければ共助も公助も成り立たないという教訓のもと、震災以前の「共助」ではなく「自助を基盤とした共助」をテーマに掲げて取り組んだ。

学校として震災時の避難行動の実態調査を集約した結果、階上地区でも「正常化のバイアス」や「同調性のバイアス」といわれるようなそれぞれの勝手な思い込みや災害に対しての正しい知識が身につけていなかったことによる誤った避難行動が大きな犠牲を招いたことが分かった。一方、児童生徒が学校にいる時間は1日24時間の3分の1程度であり、それを1年間365日で長期休業日や土日祝日を勘案すると、わずかに約20%程度にしか過ぎず、1年間の約8割の時間は学校外に身を置いているということになる。

このような認識から、階上中学校では、学校だけの防災学習では不十分であり、生徒の家族や地域を巻き込みながら「正しい知識」と「災害から身を守る行動スキル」を身につける防災学習を推進していかなければ「守れる命も守れなくなる可能性がある」という教訓から、より一層地域と連携した防災教育をめざそうと改善を試みた。

そこで「知る」「備える」「行動する」の3つの段階で、生徒が「学校にいた場合の防災」「校外にいた場合の防災」の2つに分けて考え、計画を見直した。

①「知る」段階

まず「知る」段階では、災害についての知識理解に努めた。それは、理解していたつもりでいた地震と津波の関係や災害のメカニズム等を再認識したり、自分が住んでいる地区の海拔や避難する場合の避難経路や高台はどこかを確認したりすること。また、地区にはどんな人がどれくらい住んでいるかを把握しておくこと等である。

②「備える」段階

次に、「備える」段階では、頭で知識として理解しただけではなく、大災害が再来襲しても混乱せずに対応できるような備えが大切であることから、「非常持ち出し袋」の準備や「通学路の点検」や「避難マップ」の作成、安否確認や連絡方法の整備に力を入れた。また、各地区の自治会長にも協力をいただき、それぞれの地区において地域の実態を踏まえた「防災講話」や「防災活動」を実践してもらった。

③「行動する」段階

そして「行動する」段階である。災害から身を守る行動を「避難」と捉え、「訓練でできないことは実際の災害時にはできない」との共通認識のもと、様々な災害場面を想定しながら、ショート訓練や図上訓練、地域と一緒に行う「総合訓練」を繰り返し実践した。また同時に、生徒が学校に



図2 階上中学校の避難所設営訓練

いる時に災害が発生した場合を想定した「避難所開設訓練」も実施した。生徒たちは、実際に震災を体験しているだけに、生徒会長が中心となって各種委員会の役割をあらかじめ明確にして一人一人がよく考えて行動し、実践さながらの雰囲気の中で訓練に取り組んだ。これらの経験が階上中学校のスローガンである「未来の防災戦士」としての生徒の意識をさらに高めている。(図2)

(3) 防災教育における地域との連携の意義と体制構築のプロセス

この度の東日本大震災は、午後2時46分という、偶然、児童生徒の多くが学校にいた時間帯に発生したために、ほとんどの児童生徒は学校の管理下にあり、危うく難を逃れることができたが、もし休日や夜中に発生していたらより多くの犠牲者が出たことは想像に難くない。これが、階上中学校が、「家庭や地域と連携した防災学習」に取り組んで行かなければならないと考えた理由であるが、いざみんなでまとまって取り組んでみると、誰もが防災・減災は大事であると考えてはいるにもかかわらず、そこには地域の事情や家庭の都合、それぞれの考え方の違いとさまざまな壁が立ちあがった。学校を核とする地域防災のための「家庭や地域との連携」は「言うは易く行うは難し」という状況であったという。

しかし、階上中学校では、地域と学校とが連携して共助体制のもとで防災に取り組み、活動を継続することができれば、次のような効果が期待できると考えた。

- ①いつ、どこで発生するか分からない災害にもスムーズな避難行動ができる。
- ②子供から高齢者までの異年齢集団で防災活動(訓練)を推進することで、生徒の地域の一員としての自覚や連帯感が高まり、互いに気にかけてたり助け合ったりする集団ができる。
- ③学校を含めた地域全体で継続的な防災活動に取り組むことで地域全体の防災意識を高揚させるだけでなく、震災体験の風化防止にもつなげることができる。

そこで、校長が、階上地区の自治連会長や地区振興会長さんをはじめ地域のリーダーと何度か話し合いを行った結果、「階上中学校区防災推進委員会」を立ち上げて階上地区全体での防災訓練を実施する体制を確立することができた。実際に、2014年11月には、中学生と地区民の総勢約700名での防災訓練を実施した。地域の働き手という年代の参加率は高くはなかったが、地域の多様な主体が参画して防災訓練を実施できたということは今後につながる大きな成果である。また、その中で地域の住民からは、中学生の活動と貢献に対する賞賛と期待も寄せられ、階上中学校としては、さらなる活動の充実を目指している。

2.2 震災の教訓を地域に発信する小原木中学校の「海拔表示プロジェクト」

小原木中学校の学区は「大沢」・「館」・「只越」の3つの地区からなっているが、今回の東日本大震災では、「只越」・「大沢」の2つの地区が津波による甚大な被害を被った。特に大沢地区は世帯の約80%の家屋が流出、壊滅状態となった。

小原木中学校の生徒たちは、東日本大震災という大災害を経験する中で、「自分の命を守るため、状況を瞬時に判断し、最善の方法を選択し、行動できる自助の力を身につける必要性」を強く認識するとともに、ライフラインや通信がすべて途絶え、食べ物も十分でない非常時の生活を送る中で「これまであたりまえのこととして過ごしてきた日常生活の大切さ」を実感した。また、避難生活の中で感じた「地域の結束力」や日本のみならず世界各地からよせられた支援を通じた「人と人とのつながりの大切さ」、さらには、避難所でのボランティア活動などをとおして味わった「自分たち中学生でも地域に貢献できること」や「人の役に立つことのすばらしさ」など、実に多くのことを学んだ。

このような経験や学びをふまえ、震災の教訓を地域や後生に伝えようと小原木中学校では、「海拔表示プロジェクト」に取り組んだ。これは、震災の経験を踏まえ、地域の防災意識を高めるために地域住民と一緒に、学区内の電柱に、その地点のおよその海拔を示した標示板を取り付けるプロジェクトである。

(1) 海拔表示プロジェクトの目標

プロジェクトのねらいは、大きく3つある。

- ①「電柱に海拔表示板を取り付ける」ことで、日常的に海拔を意識した生活を送る環境を作り出す。この環

境を整備することで、海拔に関する感覚を育成し自分自身だけでなく地域の方々の防災対応能力の向上を図る。また、取り付ける表示板を表示海拔によって色を変えることで、緊急時の幼児・低学年児童の避難行動の目安にする。

- ②地域の方と協働してプロジェクトを行うことで、地域の方とのつながりを強化する。このことで、生徒たちの地域の一員であることの意識や地域復興の担い手であることの自覚を高めていく。
- ③メンテナンスなど定期的にこのプロジェクトに関わることで、東日本大震災の記憶を忘れないようにし、災害の教訓を風化させることなく後生に伝承していく。

(2) 海拔表示プロジェクトの過程

①海拔表示のためのタウンウォッチング

実際の活動としては、まず電柱調査活動として、5つのグループに分かれて、学区内にあるすべての電柱の番号をしらべ、その設置位置を地図上にマーキングするという作業を行った。そして、調査した電柱から表示物取り付け候補電柱をリストアップした。

②海拔表示プレートの制作

次に、実際の表示物の図案を考案し、美術教員からデザインのアドバイスを、大学から制作費の支援を得て、海拔表示のプレートを作成した。表示海拔によって、赤・オレンジ・黄緑・緑・青の5色に色分けした。これは、幼児や低学年児童が大人と一緒にいないときに地震・津波災害に遭遇した際の避難行動の目安にできるように考えた。東日本大震災の際の地区内の最大遡上高が、20数mという教訓を基に、津波被害から逃れられる安全な高さを一応30m以上と生徒たちは考えた。したがって、幼児や地域住民には、津波襲来時には、最低でも緑か青の表示板がある高さに逃げるように呼びかけることにした。

③地域住民との海拔表示の取り付け

その後、地域の住民と一緒に取り付け作業を行った。まず2012年の1回目は、学校周辺の電柱約35本に5グループに分かれて取り付け作業を行った。最初のうちは慣れない作業に思うように仕事が進まなかったが、地域の大人たちに見本を見せてもらったり作業のコツを教してもらったりしながら支援を受け、予定どおり無事に設置することができた。(図3)

④海拔表示プロジェクトの発信と継続

生徒たちはまた、防災意識を次の世代にも継承するために、地域の保育所や小学校にでかけ、この海拔表示プロジェクトのPRを行った。そして大きな地震、長い揺れがあったら、まずは落下物や移動物などから身の安全を守り、ゆれが収まったら、すぐに海拔表示の緑や青の表示板のある高さ以上のところに逃げるように話をした。(図4)

また、その後も継続的かつ定期的に、取り付けした表示プレートの取り付け状況をチェックし、不具合があればその修正点を検討し修正するなどのメンテナンスを行うとともに、さらに設置場所を拡大していく取組を行っている。



図3 小原木中学校の海拔表示プロジェクト



図4 海拔表示プレート (小原木中学校)

3 ESD を基本理念とした復興教育の展開

気仙沼市では、大震災の教訓を踏まえながら ESD が今後の復旧・復興へのプロセスにおいても、重要な理念になると考え、次の5つの視点から「創造的な復興教育」に取り組んでいる。

(1) 地域と連携し危機対応力を育む教育

防災教育では、よく「自助」「共助」「公助」のサイクルが重要であると言われる。しかしながら、今回の東日本大震災は、「千年に一度」と言われる規模であったが故に、発災当初は「公助」が十分に機能せず、第一義的には「自助」、すなわち各自の判断力や危機対処能力が命運を左右した。また、避難や避難所においては、自治会やボランティアによる「共助」が機能した地域や避難所も数多くあった。

しかし一方では、それらの過程で、「正常化のバイアス」や「同調性のバイアス」、「愛他行動」といった思い込みによって、多くの地区で尊い生命が失われた例もあった。これらの教訓を生かし地域と共に防災教育を充実・発展させていくことが、喫緊の課題と言える。

(2) 自然との共生をめざす教育

この度の大震災では、気仙沼市は、地震と津波という自然の驚異にさらされ、甚大な被害を受けた。しかし、豊かな自然に抱かれ、海の恵みを享受して発展してきた気仙沼市は、市の復興計画のキャッチフレーズ「海と生きる」が表すように、やはり自然と共生した暮らしや街づくりを志向していかなければならない。

その実現に向けては、気仙沼が ESD/ユネスコスクールの活動で、先進的に実践を重ねてきた環境教育や食教育を基軸とする ESD が、今後も重要な役割を担うものと期待される。

(3) 故郷の心を受け継ぐ教育

この度の大震災の津波や火災によって、環境や経済的側面だけではなく文化的な面でも大きな影響を受けた。被災による人的・物的な被害やコミュニティーの崩壊により、貴重な文化財や伝統芸能等、これまでの文化の継承が危機に瀕している。

復興の担い手を育成するという復興教育の趣旨においては、未来を担う子供たちに地域への誇りや愛着を醸成していく必要がある。そのためにも、震災でダメージを受けた地域の伝統や文化の再生につとめ、ふるさと教育を切り口とした教育 (ESD) を推進して、子供たち一人一人に、気仙沼人としてのアイデンティティーを確立していくことが期待されている。

(4) 地域や国境を越えた学びの共有

震災直後から、気仙沼をはじめとする被災地は、全国各地、そして世界各国からの数多くの支援に支えられてきた。多くの気仙沼市民は、この経験を経て、これほど自分自身や地域が、他地域や他国とつながっているという実感をもったことはなかったとの感想を述べている。

気仙沼市は、これまで ESD/ユネスコスクールの先進地として、その取組を通じて日本や世界のユネスコスクールや RCE などの ESD の推進拠点と交流し、ネットワークを構築して、「グローバルな学びの場」(Global Learning Space) の創造に努めてきた。今回の震災を契機に、その復興に向けては、今後より一層広い視野で世界との絆を強めながら歩いていかなければならない。そのためにも、地域や国を越えて学びを共有する場面を設定して、子供たちにコミュニケーション能力や国際的な視野を育んでいく必要がある。

(5) 未来を創る教育

復興教育を進める際には、自分たちや地域の未来をデザインする力を、特に復興を担う子供たちに育成することが大切である。そのため気仙沼市では、未来を想像し、創造するような作文や絵のコンテストやワークショップを開催してきた。また、この被災した困難な状況の中でも、子どもたちが未来に向かって夢

や希望を抱くことができるように、子供たちの「折れない心」や「しなやかな心」、すなわち、「レジリエンス」を高める教育活動にも力を注いでいる。例えば、一線で活躍する芸術家やスポーツ選手、宇宙飛行士などを招いて講演会やワークショップを開催したり、子供たちをサマーキャンプや海外研修に派遣したりするなど、子供たちの志を育む取組を積極的に行っている。

4 結びにかえて～東日本大震災を乗り越えるための絆と発信

今回の東日本大震災では、コミュニティと学校とがうまく連携しているところは、避難行動やその後の避難所運営、そして、復興に向けて高いポテンシャルを持っていた。したがって、ESDを推進することで両者の良好な関係を醸成することは、防災や復興には極めて重要である。また、海外とのグローバルなネットワークも復興に向けて大きな力となってきた。気仙沼市は、震災前からESDの推進によって、UNESCOや国連大学、フルブライト等を通じて絆を深めた世界中の学校や、自治体、機関から数多くの支援と励まし、そして復興に向けた機会を得ている。今後は、UNESCOやOECD等のプログラムを活用し、復興を担う次世代のリーダー育成も視野に入れている。これらのESDによって築かれたグローバルな絆もまた、学校や地域の再生と復興に大きく貢献しているのである。

その一方で、気仙沼市が、東日本大震災において経験し、蓄積した防災の教訓や復興のプロセスを国内外に発信し、今後予想される他地域や他国の災害への備えや対応に貢献することが求められている。気仙沼市では、このような活動や貢献を被災して時間を置かずに開始している。具体的には、市立学校長会が中心となって記録集を被災後3年にわたって発刊し、震災時の危機対応や学校再開までの準備、学校教育正常化への取組等の経験を国内外に発信してきた。また、生徒も、多くのスピーチや作文等で経験と思いを全国に発信したり国際ワークショップで防災や復興の取組を世界に発信したりしている。さらには、市教育委員会としても、国内外のシンポジウムや著作、研究紀要等を通じて、気仙沼のESDや防災教育の手法や体制づくりを発信するとともに、気仙沼市の教員からなる「気仙沼市教育研究員」にESDを視点とした新たな防災教育のプログラム開発の研究に取り組ませ、その成果を研究紀要や「防災学習シート」(日英版)にまとめて防災教育の新たな提案として国内外に発信している。

このように、ESDは、災害時の危機的な状況において、アプローチの面からもネットワーク構築の面からも、防災や復興に向けた理念・手法として確かに機能すると言える。気仙沼市は、今後もESDを基本理念として多様な主体の参画と協働による豊かな学びを創造し、復興への歩みを進めようとしている。そして、この道程にこそ、今日の数多くの課題を抱える国際社会と地域への、「持続可能な社会・未来を創る」という視点から大きな示唆があるものと考えている。

主な参考文献

- 及川幸彦 (2012)「気仙沼市におけるESDを基軸とした教育復興」、『震災からの教育復興—過去、現在から未来へ—』, 国立教育政策研究所監修, 悠光堂
- 及川幸彦 (2012)「本当の生きる力とは…現場から見た防災教育～学校・家庭・地域のつながりで育む力～」, 『東京都幼小中高PTAリーダー合同研修会報告書』, 東京都公立PTA協議会編
- 気仙沼市教育委員会・宮城教育大学・日本ユネスコ協会連盟編 (2013)『気仙沼ESD共同研究紀要2—震災からの再生と創造を担う児童・生徒の育成をめざして—』
- 見上一幸・及川幸彦 (2012)「12章 環境教育の目的と方法④—学校と地域との連携—」, 『環境教育』, 日本環境教育学会編, 教育出版
- ショウ ラジブ・塩飽孝一・竹内裕希子 (2013)『防災教育』, 明石書店
- Oikawa Y. (2012) “Education for Sustainable Development and its implication to Recovery Process in Kesennuma” in East Japan Earthquake and Tsunami. Shaw R. & Takeuchi Y. (eds.) Research Publishing, Singapore,
- Oikawa Y. (2013) “Institutional Response in Education Sector in Kesennuma City” in Disaster Recovery: Used or Misused Development Opportunity, Shaw R. (ed.), Springer Japan 2014
- Oikawa Y (2013) “Surviving Disaster is Lesson Learnt in Kesennuma” in SangSaeng. No.36 Spring 2013, Asian Pacific Centre of Education for International Understanding under the auspices of UNESCO (APCEIU), Korea
- UNESCO (2010) UNESCO Strategy for the Second Half of the United Nations Decade of Education for Sustainable Development. UNESCO, Paris



新たなスタート地点から

校長 山崎 昭

1 はじめに

(1) 本校の位置

市中心部の高台（標高35m）に位置している。北側は鹿折小学校学区、西側は新城小学校学区、南西側は九条小学校学区となっている。

(2) 震災時の被害

校舎被害は壁の亀裂程度であったが、学区沿岸部（魚町・南町・河原田・港町・魚市場前）が津波による大きな被害を受けた。平成24年4月に統合した南気仙沼小学校も、学区内のほとんどの地区（幸町・仲町・弁天町・潮見町・川口町・朝日町・内の脇・南郷）が津波により甚大な被害を受け、校舎は1階部約1.9メートルの高さまで浸水し使用不可となったため、23年度は、気仙沼小学校東校舎で授業を行うことになった。

(3) 震災後の影響

① 経済面に関して

震災前は40人程度であった就学援助費受給児童が160人～180人となり、全児童数の約4割となっている。これは、家屋全壊・半壊の児童数の割合とほぼ一致している。

② 学区外通学に関して

応急仮設・見なし仮設から通学する児童の多くが学区外からの通学となっており全児童数の2割を超えている。その中で、バス通学している児童は50人余である。交友、学習面での制約がどうしても生ずる状況となっている。

③ 心のケアに関して

保健室利用児童数の増加、情緒不安定等と思われる言動が、特に24年度に見られた。二人の養護教諭の体制、毎週木・金曜日に来校するSCの相談活動がなければ、個々への対応は不可能な状況であった。

2 子どもたちからのメッセージ

【学校文集「あんばん」から①】

「楽しかった合同運動会」

5年 広瀬 史華（平成24年3月作・当時3年生）

○ 10月（注：平成23年10月）に気仙沼小学校と南気仙沼小学校合同の運動会がありました。私は、この運動会が一番思い出のこっています。今年は「東日本大しんさい」で南気仙沼小学校が使えなくなってしまったのでいっしょにやりました。私は、南気仙沼小学校と合同で運動会をやるのでドキドキしていました。理由は、初めて他の学校といっしょにやるのでちゃんとやれるか心配でした。でも、いっしょになかよく運動会ができました。それに、私たちは、南気仙沼小学校の3年生といっしょに学年のきょうぎをしました。私は、運動会の中で一番学年のきょうぎが楽し



みだったのが楽しくできました。私が運動会で一番きんちょうしたのは、ときょう走です。けっかは、ビリでしたががんばって走ったので楽しかったです。はじめての合同運動会とても楽しかったです。

【学校文集「あんば」から②】

「初めての全校遠足で」

6年 村上 知優（平成24年3月作・当時4年生）

○ 6月9日（註：平成23年6月9日）気仙沼小学校全校で安波山登山をしました。遠足はしん災でできなくなってしまうのかなと思っていたけど、全校でも遠足ができてうれしかったです。

学校を出発して、私は沢田を下りていきました。市役所のうらから安波山の入り口に入っていきました。道はすべりやすくなっていましたが、木がたくさんあってすずしかったです。何分か歩いてやっと休けい地点までこれました。先生たちからキャラメルをもらい水とうの水をゴクゴクと飲みました。休けいが終わり、今度はペアの3年生と歩きました。



意外と楽な道でした。それから、ドラゴンの像がある所で記念さつえいを学年ごとにしてまた歩いた所で校長先生、各学年の代表者が木を植えたりもしました。またまた歩くと……ついに頂上に着きました。下を見下ろすと気仙沼が見えました。少しあれてはいましたが早くふっこうできると思います。私達は気仙沼の街に向かって校歌を歌いました。美しい気仙沼にもどれることを願ってです。

とてもつかれましたが、お弁当を食べたら、まるで今、家にいるような感かくで、つかれがとれた気がしました。いつもよりおいしく感じられたお弁当を食べ終わり、かたづけやゴミ拾いもしました。おにぎりなどに使われ包んであったアルミホイルやサランラップの他にもゴミは散らかっていましたが、ちゃんと拾いました。また今度、安波山に登った時はどうなっているか楽しみです。

【学校文集「あんば」から③】

「5年生の思い出 統合」

6年 佐藤 花音（平成25年3月作・当時5年生）

○ 私が5年生で一番心に残っているのは、4月に行った気小と南小の統合です。南小と気小が統合することが決まったのは、私が4年生の時、私はとても心配ですごく不安でした。そして、多くの友達が転校したのもあって、（気小はどんなところなんだろう。気小の人とも仲良くできるかな、どんなひとがいるのかな、どんなクラスになるんだろう。）といつも心配していました。でも、統合すると、保育園で気小に来た友達と再会して、私に会ったときに「わあ。花音ちゃん、ひさしぶり。」と、とてもうれしそうに言ってくれました。私は、とてもうれしくなってしまう、少し泣きそうになってしまったほどでした。それに、私のクラスには、南小の友達もいて、クラスが別々になってしまった友達もいるけれど、同じクラスになった友達と、とても仲がよくなって、前から親しい友達とはもっと絆が深まりました。



初めて会った友達は、最初はきんちょうしていたけれど、少しずつゆっくり仲がよくなっていきました。今では、クラスの人みんなが友達だと私は思っています。それに、委員会やクラブなどで、別のクラスの人達まで仲がよくなりました。

そして、これまでいろんな行事がありました。5月には運動会で5年生は組体操をしました。初めてで上手に完成しなかったりしましたが、本番では一回も成功しなかった技が成功して感動しました。9月には野外活動でクラスの絆がもっと深まった二泊三日でした。そして、すぐに10月の学習発表会で台本にはないセリフをつけ足したりして工夫をこらして、最後に歌った「花は咲く」は気持ちがこもってどの学年よりすごかったです。

他にもたくさんの行事をしました。そして、たくさん問題がありました。ですが、それは全てクラスの絆と協力で乗り切っていました。私は、気小と南小が統合して良かったと思います。このクラスでたくさんの経験を積むことができました。元気で優しくてみんなで笑顔になれるこの5年1組は、とてもよいクラスだと思います。私は気仙沼小学校5年1組が大好きです。

【依頼作文から】

「明日に向けて」

6年 永澤 友理香

- 卒業。あと数か月が経つと、私たちはそれぞれへの道へと新しい一步を踏み出します。学校を離れることが、こんなにも胸をしめつけるものなのか。思い出を作った教室とともに成長した級友と離れることが、こんなにも胸をしめつけるものなのか。統合したばかりの頃は、今の自分の気持ちを想像したこともありませんでした。『私は、この学級この学校が大好きだ。』という思いが、毎日大きくなっていくのを実感させられます。

平成24年度に統合した気仙沼小学校と南気仙沼小学校。二つの学校が一つになり、新しい学校が生まれました。でも、私は、なんだか少し違和感を抱いていました。お互いに歴史を積み重ねてきた学校なのに、南小の名前が消える。本当にこれでいいのかと、疑問に思っていました。しかし、この疑問は、この二年間の学校生活が解決してくれました。

一年目、統合初年度、5月の運動会。二つの学校の運動着が校庭を走り回りました。気小は青の運動着、南小は赤の運動着。私たちは、6年生の先輩と一緒に組体操に挑戦し、青と赤の力と心をつなげて、大きな感動を生み出しました。秋には、青と赤を組み合わせた新しい運動着が、支援をいただき出来上がりました。その時はとてもうれしかったけど、なぜかさみしさも感じました。



そして、統合二年目。6年生となった私たちは、新しい児童会の歌を作るため、歌詞を各学級から募集しました。広報委員会の私は、それらをまとめ歌詞に仕上げるとという仕事を中心になって進めました。

「この土しっかり踏みしめて 赤い心を背負ってく」

これは、歌詞の中の一文です。統合はしたけれど、南気仙沼小学校が無くなったわけではないということを表現しました。南小の伝統や思いを歌い継ぎ、後輩たちに伝えていきたいと考えました。その他にも、この歌には、毎日変わらない朝の風景や元気なあいさつなど、あたり前のことがたくさん並んでいます。震災後、私たちが必死になって前を向き、学校生活を楽しむことが、多くの方々に希望を与えるということが分かりました。私たちの汗や涙は、人々のエネルギーになることも知りました。みんなで手を取り合い、毎日を全力で頑張ることで地域を元気にしたい、そんな思いも込め作りしました。

この二年間の数々の取組は、私たちを大きく成長させてくれました。同時に、新しい気仙沼小学校を大きく成長させたのではないかと思います。南小が無くなったのではないのだと、私たちに気づかせてくれました。

東日本大震災から、私たちは多くのことを学びました。悲しみや苦しさは、もちろんありました。同時に学ぶことも多かったと思います。復興のために地域が一丸となって頑張ったことを過去のものとして、私たちが架け橋となって未来につないでいきたいです。明日は、きっと今日よりもっと……。一日一日を大切に、私は歩みを止めません。

学び舎輝け すくすくと ♪
学び舎輝け のびのびと ♪
学び舎輝け いきいきと ♪



3 支援者の方からのメッセージ

「この夏の日を忘れない～気仙沼キッズ『祈望』を結ぶ架け橋となれ～」

気仙沼キッズ北海道体験学習実行委員長 板垣 晨

ー普段着の住民による気仙沼キッズ交流プロジェクトの発足ー

東日本フェリーの白い船体が滑るように苫小牧に接岸、二人の教師に率いられた気仙沼キッズ11名。迎えの子どもたちと地域の人達の歓迎の中、不安と期待に表情をこわばらせタラップを下りてきた。2012年7月27日「気仙沼キッズ北海道体験学習」の始まりであった。

私達、宮の森町内会は苫小牧の西部地区にある。周囲が山に囲まれ、街中を二本の清流が走り、夏には、そこにホテルが飛び交う。工業都市の中であって自然情緒がまだ残る町内である。街並みには神社と寺があり、静かな中に376世帯が「伝わりますか～やさしさ・感じますか～ふれあい」を合言葉に暮らしている。高齢化率37%のこの小さな町内に大きな波紋が広がった。「広場を失い遊び場を失った子どもたちに、思いっきり北海道の夏を楽しんでもらおう」という企画である。「どんなに辛くても、どうか負けないで！」と気仙沼の子どもたちを思う切なる願いは、住民の心を動かし、ご近所・PTA・職場の同僚・サークル仲間など様々な人の輪が拡がり重なり合って実行委員会が誕生した。規約に5年間継続の約束をして。

ことの起こりは、震災の年の7月。何をしたらいいのか分からないもどかしさの中、住民有志が、町内で飼育しているホテルを「心の癒し」「復興への道を照らす灯り」として届けようと被災地を目指したことに始まる。

宮城県最北端、気仙沼の現場に立った彼らの見てきた報告は、TV映像をはるかに超える未曾有の大震災・津波激流・大火災の現状と人々が支え合いながら生きる姿の数々であった。「子どもたちに北海道の緑と遊び場を提供したい」という思いは一直線に私達の心を驚づかみにし支援を広げる活動に積極的に取り組んだ。ボランティアの資格も経験もない、助成金もない普段着の住民による出発であった。地元住民の好意と熱意と善意に支えられ、健康管理班・行事班・食事班・記録班・車両班・防犯担当など、実行委員会は形づくられ、第1回目の交流事業が大地のぬくもりの中、4泊5日の日程で気仙沼と苫小牧の子どもたちの楽しい交歓はいろいろな場面で行われ魅了した。



ー子どもたちの笑顔が力となって生きる力を育んでいくー

苫小牧で過ごした4泊5日の交流体験を一人の女子の母親がこう綴っている。

「(前略)5年生の時、仮設住宅に入居してからしばらくの間、娘は復興ボランティアのイベントなどにも参加せず、学校にSMAPの慎吾君(娘は慎吾君が大好きだった)が来ても見に行かず『〇〇に参加する?』と聞いても答えはいつも『行かない』でした。6年生になって、夏休み少し前から『苫小牧に行ってみようかな』という気分になったようなので、思い切って北海道行きに応募させたのです。見事当選し本人は喜んでいもの私は内心とても心配でした。当日、仙台港のフェリー乗り場で手を振って乗り込む娘の顔は、やはり少し不安そうに見えました。ところが、帰ってくる日、船から下りてきた時の顔は、(ステキな思い出が沢山きたんだなあ。余程楽しかったんだなあ。)と一目で分かるような元気いっぱい顔になっていました。目は泣きはらして真っ赤になっていましたけど……。思わず『どうしたの、ケンカでもしたの?』と聞いてしまいました。『みんなと別れたくなくて、ずっと泣いていた。みんな号泣だよ……。』との返事。娘の言葉を聞いて感謝の気持ちでいっぱいになりました。

それからの娘は、学校でもあり余るほどの明るさと元気さで振る舞い、行事にも積極的に参加したり(中略)無事に卒業を迎えることができました。(中略)こんな素晴らしい思い出が沢山できて娘は本当に幸せです。本当にステキなプレゼント有難うございました。感謝の気持ちを込めて気仙沼から……。』

子どもたちの笑顔に出会うことは、支援活動を行う上で強力な動機付けになっていたが、それは被災者の家族にとってもなおさらのことだろう。どの家族も生活の中心には、子どもたちの笑顔が必要なのだ。子どもたちが前に向かって歩く姿が家族の救いなのだ。子どもたちもまた、不安と恐怖のショックで眠れない夜を過ごしながらも、ほのかに見える「祈望」の光を求めながら必死に生きていこうとしている。両市の子どもの満面の笑顔と心の交流は、生きる力を強めていく一筋の光になりえるのだと私達は信じて疑わない。

「お・た・が・い・さ・ま」

静岡県富士市 佐野 五十三

2011年3月11日、東日本大震災は長い揺れが続きました。仕事につけたテレビから、素直に受け止められないような真実が叫ばれていました。音声は全く別世界の出来事、画面は外国映画の一場面のようなものでした。

その日の夜、東京電力西端の富士市内は闇でした。信号の点灯しない交差点は、われ先にと進入する車がひしめき、無法地帯となっていました。私は、事故に遭わずに車を運転し帰宅することで精一杯でした。中部電力管内の私の家はいつもと変わらない夜がありました。闇の市街地に車のライトのみ輝く非日常の世界と、昨日が継続するだけの世界を、私は同時に経験したのです。

2008年、富士市との合併以来、まちづくり活動に関わっていた私は、東日本大震災が他人事とは思えませんでした。被災地の人々は、これからどのように立ち上がるのか。被災地には地域づくりの根幹となるヒントが必ずある。被災地の現実を見届けたい、私はそう思ったのです。

気仙沼とのきっかけは、地元の小中学校の「目に見える支援」活動です。富士市富士川第二小は気仙沼小を、同第二中学校は階上小の支援活動を継続しています。私の地元の児童生徒諸君の結ぶ気仙沼との縁を大切にしようと思ったことから、ためらうことなく気仙沼ボランティア行きを決めました。

鹿折唐桑駅前の「第18共徳丸」は解体されました。3.11の生証人は、存在感たっぷりに立ちつくし、人々に多くのメッセージを伝えていたのです。10年後か20年後、立派に復興した岸壁を見つづ振り返った時、そこには大輪の向日葵と石碑がポツンと立っているだけなのでしょう。物云わぬ生き証人「第18共徳丸」は自然への畏怖と、もともと小さい存在である人間へ、静かな警告を発していたのです。

ボランティアの日々で、地元の大きな本屋に行きました。3.11関連の書籍は、売り場の片隅の歴史コーナーに置かれていました。まだ復興が緒についたばかりなのに、3.11は歴史のページになってしまったのか。レジの正面、最も人目がつく場所になぜないのか。

ボラ宿の主人と復興の進捗状況が話題になりました。時間が止まった被災地では、やっと防潮堤の高さが決まったとか。肝心の被災者の生活再建はどうか、仕事の確保はどの程度進んでいるのか。気仙沼に何回行っても私には分からないことだらけです。ポチポチ「絆」の糸がほころびはじめたようです。マスコミも「絆」の連呼に疲れたようです。

ノーベル平和賞受賞者、ケニアの故ワンガリー・マータイさんは、日本語の「もったいない」に大きな感銘をうけられ、環境保護活動のキーワードとしました。最近では、東京五輪プレゼンテーションにおいて「おもてなし」が滝川クリステルさんから世界の人々に発信されました。

私は毎回のボランティア終了時に必ず同じセリフを言います。いつか東海地震が来ます。ボランティア活動へのお礼の言葉は必要ありません。静岡をよろしく、助け合いは「お互い様」なのです。世界に通用する日本語にこもる美しい心と、ひたむきな思いやりの心を大切にしてくださいね。

4 教職員からのメッセージ

「共に手を取り、歌声響かせ」

教諭 山内 ゆき

平成23年4月、東日本大震災からわずか3週間後、私は新任教員として南気仙沼小学校に赴任しました。学校が被災し、辛く苦しい状況ではありましたが、学校全体に「児童も教員も家庭も地域も皆で支え合って前向きに進んでいこう」という明るく力強い雰囲気が常にあふれていました。まだ、不安な表情で登校する児童もいた1学期のはじめ、私は、ちょっとした時間に、いつも児童と一緒に歌を歌っていました。一番最初に歌ったのは「友達賛歌」でした。

「一人と一人が腕組めば、たちまち誰でも仲良しさ・・・」と明るく皆で振りをつけて歌っているうちに、泣きべそをかいていた子どもにっこり笑顔になりました。初めて受けもった児童に「辛い時でも、仲間と力を合わせて、置かれた状況の中で、よりよく生きることのできる人間に成長してほしい。」と願いながら毎日を過ごしていました。

翌年、気仙沼小学校と南気仙沼小学校が統合し、私は気仙沼小学校に赴任しました。そこには、すぐに打ち解け、お互いを支え励まし合う児童の姿がありました。「気小では、こういうきまりがあるんだよ。」「南小ではこうだったよ。」「じゃあ、二つを合わせて新しくこうしよう。」と教え合ったり、新しいものを考えたりしながら、仲間としての意識を高めているようでした。この統合して1年目に受けもった学級でも、子どもたちの絆を強くしたひとつのものは、やはり「歌」でした。昨年まで過ごしてきた環境は異なるものの、今は、みんな同じ仲間だという思いを全員の力で「詩」に表し、オリジナルの歌を作って毎日歌いました。大変な状況の中にありながら、仲間と共に前に進もうとする児童の姿から、私は、たくましいこの子どもたちなら、きっと、気仙沼の未来を担っていけるだろうと心から思いました。

被災地の児童と共に生きる教師として、私は、常に心に歌がある子どもを育てたいという思いをもっています。この子どもたちが、辛い時には仲間と共に歌い、明るく前を向いて突き進む大人になって欲しいという願いを込めて・・・。

5 おわりに

記録集のタイトル「未来へのメッセージ」にふさわしい内容にするには・・・と考えた時、『現在は過去の未来である』という言葉思い出した。このことから、本稿のタイトル「新たなスタート地点から」を記すには、スタート地点となる平成24年度の前後を子どもたちの作文で飾りたいと思い、既刊の学校文集「あんば」から三人の作文を掲載するとともに、永澤さんには現在の思いを書いて欲しいと依頼した。

支援者の方のメッセージは、お二人に依頼したが、北海道苫小牧の板垣さんからいただいたメッセージには、実は、まだ続きがあった。紙数の関係で掲載できかねたが、それは「復興の祈りをこめ拡がる支援の輪——『支援』は『支縁』を結ぶ」と見出しが付けられたものであった。1年目の北海道体験学習が地元で反響を呼び、支援団体が15団体に増えたこと、それに伴い、2年目は、本校だけでなく市内小学校への参加呼びかけとなり、交流の輪が更に広まったことが綴られていた。板垣さんたち実行委員の方々にとっても、新たなスタート地点であった。もうお一人、メッセージを依頼した佐野さんには、来校される度にお心遣いをいただいております。とてもエネルギッシュな方である。今回いただいたメッセージから、日本人として受け継がれ、失ってはいけないもの、世界に発信できる出発点になるものについて、改めて考えさせられた。

最後になる教職員からのメッセージには、震災直後に社会人・教員としてスタートした山内先生に執筆を依頼した。子どもに寄り添う1年目、そして2年目は南小から気小へ。歌が明日を開き照らしていく・・・今後の取組が楽しみです。

本稿が、気仙沼小学校を確かな未来へと導くひとつの道標となることを念じ掲筆。



被災を乗り越えるために、 今を伝える

校長 山本 正美

1 はじめに

(1) 本校の位置

本校は、昭和39年に気仙沼小学校から独立して、ちょうど50周年を迎えた。
気仙沼市の市街地から西に延びる丘陵地に位置し、東日本大震災時には市民の避難場所となった。

(2) 震災時の被害

震災時には子どもたちと教職員は全員無事だった。外壁の一部が崩落したり、受水槽が壊れ、水があふれ出した。ものが散乱し、子どもたちの避難路を確保することも大変だった。校舎内の家庭科室と会議室を避難者に開放した。

(3) 震災後の影響

震災後、海岸に近い直接大津波に襲われた地区を中心として、本校に転入する児童が多くいた。学校再開後しばらくはもともと九条小学校に在籍していた児童と新たに本校に通学することになった児童との良好な人間関係づくりに苦労した。

また、直接津波を見た子どもたち、家族や親戚の人を亡くしてしまった子どもたち、住んでいた家を一瞬のうちに失った子どもたちの心のケアが重要な課題となってきた。幸い、学校再開後直ちに山口県を中心とした県外のスクールカウンセラーの派遣をしていただき、常時、組織的、継続的に子どもたちや保護者の心のケアに取り組むことができた。

始められたときよりは、派遣回数は減ってきたものの、震災後3年目を迎える今年度も年間を通して隔週3から4日間、山口県のカウンセラーに来ていただきカウンセリングを行っている。



平成25年3月末に小野弘之前校長先生より引継ぎを受けた。心のケアに継続して取り組むとともに、被災した子どもたちが多くいる学校だからこそ、落ち着いたある学習環境を整え、一人一人がしっかりと学習し、その内容を確実に身に付ける学校づくりを引き継いだ。

2 子どもたちからのメッセージ

私を成長させてくれる祖母の言葉

6年 岩槻 花奈

私の祖母は、厳しくて正しいことを教えてくれる人です。

私が、前に友達とケンカをしてしまった時、祖母は、

「いくら自分が悪くなくても、花奈が友達に悪いと思うんだったら、自分から謝ったほうがいいと思うよ。」
と言ってくれました。確かに私も言い過ぎた所もあったので、次の日、私から友達に謝りました。その結果、今はとっても仲良くしています。あの時、祖母からこの言葉を言われなかったら、その友達とは今でも仲良くしていないと思います。祖母の助言にとっても感謝しています。

私は、あいさつをすることが苦手でした。でもある日、祖母と散歩をしていた時に、祖母が通りかかった人に「こんにちは。」とあいさつしていました。私ははずかしくてあいさつができませんでした。少したって、祖母から

「あの時、なんであいさつしなかったの。あいさつすると気持ちですっきりするんだよ。」と言われました。その一言で私がふっと思い出したのは、祖母とあいさつを交わした時の通りかかった人の笑顔でした。

私は心の中で、

「私は今までは、はずかしくてあいさつができなかったけど、これからは、がんばってあいさつをしよう。」と思いました。それで、次の日になって、学校に行く途中、通りかかった人に私から「おはようございます。」と言いました。そうしたら、その人は笑顔で「おはようございます。」と返してくれました。私は、(あいさつをしたら、祖母が言っていたとおり、気持ちがすっきりするな)と実感しました。今では、はずかしがらずにあいさつをすることができます。

私は手伝いをする事の大切さも祖母から教わりました。私には、幼い弟がいます。祖母から、

「花奈には、弟がいるんだから、弟の世話や花奈の世話でいそがしいお母さんに、いろいろ手伝わなくちゃいけないんだよ。」と言われ、(確かに、お母さんは、家の仕事をたくさんしているんだし、私ももう六年生なんだから手伝いをしないとね。)と思いました。それから私は、家のお手伝いを進んでするようになりました。すると、お母さんから、

「花奈が手伝いをするようになってくれて、すごく助かるよ。」とほめてもらいました。お母さんにたよりにされているようで、とてもうれしい気持ちになりました。それも、家族の一員として自分にできることをする大切さを教えてくれた祖母のおかげです。

私は、いろいろなことをたくさん教えてくれた祖母に心から感謝しています。これからも、祖母の一言一言をしっかりとむねに刻んで、成長していきたいと思います。



震災の写真展を見て感じたこと

6年 清水 諒祐

先日、ぼくは、お母さんとおじいちゃんと友達といっしょに、リアスアーク美術館に行きました。そこには、東日本大震災で被災した様子を写した約二百点の写真とたくさんの品物が展示してありました。展示品の中には、ぐちゃぐちゃになった車の一部や泥まみれになったファミコン・ぬいぐるみなどがあり、改めて津波のすごさ、恐ろしさを感じました。どれもこれも、目をそむけたくなるようなものばかりでしたが、ぼくは、ちゃんと見ておかなくてはならないような気がしました。

あの日をさかいに、気仙沼の町の様子は、すっかり変わってしまいました。たくさんの魚が水揚げされていた魚市場も、観光客でにぎわっていた海の市も、大島へ行く船が着いていたエースポートも、無残な姿になってしまいました。

ぼくの家は九条にあるので、幸いにも津波の被害は受けませんでした。でも、クラスの四分の一は、前の学校や家が被害にあって、転校してきた友達です。中には、福島からお父さんの実家である気仙沼に避難してきた人もいます。みんな、大切な家や家族、思い出の品々を失い、どんなに辛かったろうと思います。震災から二年が過ぎ、今はみんな明るく、楽しそうに学校生活を送っています。町も少しずつ新しい建物が建ったりして、復興に向かっていきます。

そんな中で、震災の写真展は、あの時の大変さを思い出させました。震災の直後は、電気や水がこなくて、苦労した人がたくさんいましたが、ぼくの住んでいる九条地区にはずっと水が供給されていました。後で知ったことですが、新月浄水場は、震災の時にも断水にならなかったのだそうです。それは市民の命をつなぐために、必死で水を守った人たちがいたからです。

支援物資をおくってくれたり、炊き出しをしてくれたり、いろいろなイベントをしてはげましてくれたりと、全国、いえ、世界中の人たちが被災地のために手をさしのべてくれました。消防士や自衛官の人たちも、自分たちが休む間もなく働いてくれました。

時間がたつにつれて、あの時の大変さを忘れてしまいがちだけど、電気がつくこと、水が出ること、おなかいっぱい食べること、家族や友達と笑いあえること、そんな当たり前のことが本当はと



でもありがたいことなんだということを忘れてはいけないと、震災の写真の前でほくは思いました。

これからほくは、多くの方々への感謝の気持ちを忘れずに、『気仙沼を元気にするために、ほくにできることは何か』を考えていきたいです。

3 支援者からのメッセージ

支援をつないで

山口県スクールカウンセラー 太田 列子

(1) 緊急スクールカウンセラーの派遣

平成23年3月11日14時46分に発生した東日本大震災によって、甚大な被害を受けた東北3県に対して、文部科学省及び東日本大震災心理支援センター(社 日本臨床心理士会)は、児童生徒の心のケアを行うため、全国の臨床心理士会に緊急SC(スクールカウンセラー)の派遣を要請した。山口県臨床心理士会は、平成23年5月10日から毎週4日間、岩手県釜石市および宮城県気仙沼市に山口県SCを派遣した。宮城県では最初の3週間は、気仙沼市内の小・中学校で教職員に対するコンサルテーションを行い、4週目以降は気仙沼市立九条小学校に継続配置された。

平成23年度は愛知県SC1名の協力を得て、15名のSCがリレー方式で、延べ34回、132日間活動した。平成24年度は東京都SC1名が隔週1日加わった。愛知県SCを含む山口県チームは隔週4日、10名のSCが延べ21回、76日間活動した。平成25年度は宮城県SC1名(毎月1日勤務)と共に、隔週4日支援活動を継続中で、9名のSCが述べ20回、73日間勤務する予定である。

(2) 緊急スクールカウンセラーの後方支援体制

山口県臨床心理士会では、被災地の支援にあたって震災支援部会を立ち上げ、SC派遣のため後方支援体制を整えた。その際心がけたことは、被災された方々に寄り添った支援であることと、もう一つは被災地に派遣されたSCが、二次受傷などのメンタルヘルス不調に至らないための支援である。想像を遥かに超えた未曾有の被害状況の中で、SCを派遣するに当たっては、その期待される成果を得るためにも、派遣されたSC自身のメンタルヘルスが重要である。後方支援担当者はSCの派遣中、必要な物資の手配だけでなく、毎晩活動報告を聞き取り、必要な助言を与えたり、次のSCに繋ぐなど、物心両面のサポートを行った。また、多くのSCが関わるため、継続性が何よりも重要であることから、引き継ぎのためのミーティングや研修会を実施して、情報を共有し支援計画を細かく修正した。気仙沼市派遣に際しては、宮城県教育庁義務教育課の川田課長補佐並びに気仙沼市教育委員会の菊田指導主事による全面的な支援を受けた。

(3) 九条小学校での活動

① 1年目(平成23年度) 小野 弘之 校長

九条小学校では、被災した児童が60名あまり他校から転入しており、この児童たちへの対応が急務であった。緊急SC活動は、大きく初期対応と中・長期対応に分けられる。初期対応は急性ストレス反応(ASR)への対応である。これは大きなショックを受けた時に誰にでも起こる反応で、通常は1か月程度とされるが、今回は被害の深刻さや度重なる余震、おびただしい瓦礫のために、半年以上続くと思われた。そこで1学期から、児童の行動観察と個別面接を実施し、教員とTTでこころの授業(こころの健康教育、ストレスマネジメント)、リラクゼーションを行った。教職員へはコンサルテーションと研修を、保護者には保護者会での講話、保護者面接などを行った。3学期には震災1周年を迎えることから、アニバーサリー反応(記念日反応)の予防として、児童に対して心とからだの健康調査を実施し、個別面接および保護者面接を行った。また、教職員を対象にアニバーサリー反応に関する研修も行った。

② 2年目(平成24年度) 小野 弘之 校長

2年目以降は上記の支援を継続して行いつつ、中・長期対応として、外傷後ストレス障害(PTSD)への対応や表現活動を行った。表現活動は、教員やSCによって守られた安心できる空間で震災体験を表現することで、自身の体験を振り返り、整理して、心のケアを目指す活動である。集団で実施して他の児童と体験を共有することで、受け入れられる体験やクラス内の人間関係作りを行った。さらに語り継ぐことによって、防災意識を高め、アニバーサリー反応の予防とレジリエンス及び防災教育へと繋げた。

③ 3年目(平成25年度) 山本 正美 校長

3年目の今年度は、これまでの支援を継続して、年間を通して児童の行動観察や個別面接、2学期に表現

活動、3学期に心とからだの健康調査を実施する予定である。また、震災時に未就学であった児童の中に、激烈な体験をした児童が存在することから、個別面接や表現活動に加えて、クラス全体で落ち着いて行くために、ソーシャルスキルトレーニングを実施している。

(4) 緊急スクールカウンセラーの想い

①派遣前の戸惑いと不安

臨床心理士の仕事の基本は、共感的に“聴く”ことである。派遣前に感じたのは、被災地から遠く離れた山口県にいる我々が、震災に遭われた方々の感じた恐怖や苦痛、混乱、絶望、怒りを“あたかも自分自身のものであるかのように”感じることができるだろうか。更に、もしも“あたかも自分自身のものであるかのように”感じられたとしたら、とても耐えられないのではないかと、という不安であった。派遣前のミーティングで「私たちは被災された方の苦痛を知らない。しかし、知らないからこそ、聴かせていただくのだ。そのとき、被災された方々は支援される“与えられる存在”から、自らの体験を伝える“与える存在”になるのではないかと」と確認することで、カウンセラーとしての気持ちを整理することができた。

②九条小学校での体験

1年目はすべてが手探りの状況の中で、兵庫県SCの高橋先生や富永先生を始めとする、心理支援センターからの情報提供をもとに、小学校の実情に合わせて工夫を重ねつつ柔軟に支援を行った。震災から1周年を迎えた3月12日に行われた震災記念行事の後、6年生の面接希望が相次いだ。面接の中で、児童たちは日常の学校や家庭でのことを話すと同時に、自身の被災体験を語り、自分がその時にどのような思いをしたか、父親や母親、祖父母や親戚がその時にどのようなようであったかを語った。そうして、震災によって自身が失ったものについて話した。また、震災遊びや避難ごっこについて話す児童もいた。

その後で、将来の希望として「地産地消の料理人になりたい」「(工業高校にいったら)ものを作る人になりたい」「パティシエになって、気仙沼にお店を開きたい」と自分の育った地域の復興や将来の希望について語った。震災に遭ったからこそ出てきた言葉(覚悟)だと思われる。この年に行われた卒業式では、児童が思い思いに正装して卒業式に臨んでいた。学校がやっと本来の姿を取り戻しつつあることを象徴する光景であった。

③児童の様子

平成23年5月に九条小学校で勤務し始めた頃から、児童たちは元気だった。震災の経験やショックについて語る児童はいたが、そうした児童は現在も継続面接を行っている。児童たちは、今回の震災で、程度の差こそあれ、心に大きなショック(外傷)を受けた。今でも時折余震があり、家族関係の変化や、新しい家がいつまでたっても建たないといったストレスにさらされている。しかし、医療機関での治療が必要なほどの重篤な症状は見当たらない。毎日学校に登校し、集団の中で健康的な日常生活を送っている。2年目以降は他校からの転入生も次第に馴染んできて、相談内容もクラス内の人間関係や家庭での事柄といった通常の相談が増えてきた。不登校傾向や落ち着きが無いといった震災の影響を伺わせる児童はいるが、教員とSCが連携して注意深く関わっている。

(5) 未来へ、繋がり続けること

災害派遣の支援活動にはいつか終わりが来ると言われている。支援者は常に“撤収”を意識しなければならない。しかし、今回の派遣を通じて少し考えが変わってきた。日本各地で災害が起こっている現在では、被災地以外の地域から継続的に支援に駆けつける体制が必要ではないだろうか。山口県SCも当初は“撤収”を前提に、教職員や東京都SC、宮城県SCへ活動を繋ぎ、児童の心理的支援が継続されることを考えていたが、今では九条小学校への緊急SCの派遣が終わるまで、継続的に関わり、繋がり続けることが大切であると考えた。その意味では、これまで遠地であった宮城県が、とても近くに感じられるようになっている。

最後に……

子どもたちは大変な状況にあっても、その子なりに成長している。私たち大人は、そうした子ども自身の成長する力を信じて、これからも見守って行きたいと思う。



4 教職員からのメッセージ

震災を通して未来に繋ぐこと

教諭 川村 槇太郎

私がこの震災を通して感じたことは、普段の学校での生活が当たり前のものではなく、とても尊いものであるということです。

私は震災発生時、被害を大きく受けた学校に勤務していました。卒業式を間近に控えた6年生を担任し、将来どのような道に進んでいくか胸を弾ませる子どもたちに、夢についての授業をしていたところでした。地震発生後まもなく津波が押し寄せてきました。自分たちの学校は四方を津波に囲まれ、校舎に取り残されてしまいました。恥ずかしい話ですが、あのような大きな津波の被害を受けて初めて自分たちの通っていた学校がこれほどまでに危険な場所にあったことを実感させられました。夜になると向こう岸でガスタンクが燃え火柱が上がるのが見えました。余震に怯え泣き叫ぶ子どもたちに声をかけ安心させながら、学級についていたカーテンなどをかけて暖を取り、震える身を寄せ合って恐怖の一夜を乗り越えました。校舎の1階は全て浸水し通勤に使用していた車なども流されましたが、幸いにも校舎に避難した全員の命は助かりました。

私たちの学校は校舎が使えなくなったため、近隣の学校の校舎を間借りすることになり、新学期をスタートするための準備が始まりました。今までなかったところに新しく学校をつくることになり、大変でしたが自分たちの学校が再開できる喜びで毎日が充実していました。学校があり、そこに子どもたちが来て、教師が迎え入れるという当たり前の場所をつくってあげることが、震災を経験した子どもたちにとって一番必要なことであると思っていました。家が流失し、避難所や仮設住宅でつらい生活を送っている、震災で家族を失いつらい思いをしているといったつらい経験をした子どもたちにとって、学校に来れば震災前の日常を感じさせてあげることができると思いました。登校してきた子どもたちは、今までと違う環境に戸惑いや不安もあるようでしたが、そこは柔軟な子どもたち。すぐに笑顔を取り戻しました。そんな日常をとてもうれしく思い、学校に登校してきた子どもたちとの時間というのはとても貴重な時間であるということを実感することができました。1年後、自分たちの学校は間借り先の学校と統合されなくなってしまうことになりました。安心して新しい学校でも生活していけるよう、笑って子どもたちを送り出してあげました。

それから自分も学校が変わり、新しい気持ちで仕事に向かうことになりました。転任先の学校は、震災の被害が比較的少ない学校だったため、子どもたちの間で震災の経験にギャップがありました。大変な思いをしたことは同じだったのですが、その重さや直接の被害を目の当たりにしたかに違いがありました。家ではまだつらい思いをしているのに、学校ではそのような顔を見せまいと頑張っている子も中にはいたと思います。始めは大きな被害を受けて心配な子どもたちもいましたが、学校に行くという日常を続けていくことやカウンセリングの先生と共に心のケアに取り組んだりすることで、子どもたちは震災前の日常を取り戻しつつあるのではないかと感じています。

震災から3年が過ぎようとしています。まだ、十分な生活を取り戻せていないという人たちもいると思いますが、この町の復興は徐々に進んでいます。また、学校では震災の教訓を生かし避難訓練や集団下校といった取り組みを重点事項として取り組んでいます。ただ、子どもたちは震災があった記憶が薄れてきているように感じます。震災で経験した不便さはなくなり、震災前の便利な日常生活が戻っているからです。しかし、あの震災はなかったことにはできません。いろいろなものを失い大きすぎる代償を払いましたが、震災でつらい思いをした経験は実際に経験した人でしかわからない貴重な学びとなりました。万が一震災が再び起こった時の対応の仕方や、互いに助け合って生活していくことを大切に思う気持ちは、これからも子どもたちの意識から薄れさせないようにしていくこと、それが震災を経験した私たち教師の使命であると思っています。

私がこの地域の子どもたちに思うのは、震災の被害を受けたこの地域で生活していく自分の人生に、失望したり、諦めたりしてほしくないということです。いくらつらい思いをした人も、まだ震災の被害から立ち直れない人も、今より辛いことはないはずです。あの震災を乗り越えた子どもたちには、これからの可能性がいくらかも広がっています。震災を乗り越えた自分の力に自信をもち、今後の生活を送ってほしいです。震災の被害にあった地域でこれからも生活していく私にとって、この地域の子どもたちをこれからも見守り、通ってくる子どもを学校で待ち日常を与えてあげることが教師である自分にできることだと思っています。



5 おわりに

11月23日に創立130周年・独立50周年の記念式典を行った。記念事業の一つとして、校木「あかまつ」を植樹した。気仙沼小学校から独立する前から校地内にあった赤松の木々。その中から見事に成長を遂げた一本を校木とし、大切に見守り続けてきた。ところが、昨年、松食い虫に侵食され伐採を余儀なくされた。しかし、地域の皆様方のご支援により、50周年の節目の年に再び、二代目校木を植樹することができた。新しい校木はまだまだ幼い苗木である。けれども、これから、子どもたちの元気な声や地域の皆様方の温かい眼差しとともにすくすくと成長し、年輪を刻んでくれることと期待している。

東日本大震災は人びとの生活を根こそぎ変えた。人びとの心に大きな傷跡を残した。けれども、やはりここふるさとの復旧、復興は成し遂げなければならない。その大きな力となるのが、今はまだ幼い子どもたちの力である。一人一人の力の源に震災の経験があることを繰り返し確認するために、今を記す意義があると考ええる。





子どもの笑顔あふれる学校と 防災教育の充実をめざして

校長 藤村 俊美

1 はじめに

(1) 本校の位置

気仙沼市の北東部に位置し、鹿折川流域に沿った南北に細長い地形とそれをはさむ山地、及び河口に広がる湾岸部からなっている。河口の北・西湾岸部は、震災以前には、商店・住宅・水産加工工場で市街地を形成していた。東湾岸部は造船所とその関連工場が集中していた。20の行政区から構成され、海・山・川などの自然に恵まれた地域であり、学校はそのほぼ中心部に位置している。



鹿折地区の全景

(2) 震災時の被害

校舎は、地域住民長年の悲願が叶い、平成22年12月13日に新築され入校式を行った。まさに入校3か月目にして大震災に遭った。体育館はまだ新築工事が行われており、平成23年6月の完成予定であった。その後体育館は3か月遅れで完成し、平成23年9月7日に鍵の引き渡し式が行われた。

震災当日、1階校舎には津波が約140cm押し寄せ、約9cmのヘドロが校舎1階のあらゆる床面に堆積した。職員室はじめ1階の各教室は机が倒れ破壊され、瓦礫が流れ込むなどの悲惨な状況であった。

1階校舎の放送設備、火災報知器、ストーブ集中管理制御盤、防災監視盤、警備保障機器、保健室の戸棚、ベッド、1階教材室の教材や備品などは全て使用不能となった。その他、新校舎用として備えた真新しい数多くの備品等は全て流出したり使用不能となったりした。

校長室に備えてあった数百キロの耐火金庫は倒れ、卒業証書や学校備え付け表簿等は全てヘドロまみれとなった。1年生教室に残っていた児童用の鍵盤ハーモニカや運動着をはじめとして、学校用品等は全て使用不能となった。また、全校児童が上履きで避難したため、昇降口にあった外靴は流出したり、ヘドロまみれになったりした。

学校近くの気仙沼バイパスを境として、南側にある河口に向かって2kmの範囲にある住居等は津波により流失したり、火災により焼失したりで全壊状態であった。学区のおよそ半分以上が被災した。

(3) 震災後の影響

震災直後、児童の安否確認には大変手間取った。連絡を取る上で、学校の固定電話は流失しており、個人の携帯電話も通じなかったり、電気がないので充電できなかったり、教職員の車も全員分廃車になるなどで交通手段にも困った。また、歩いて確認するにも道路には瓦礫が散乱していたり、溜まっていたりで道の確保が困難であった。更に、確認を阻んだ最大の要因は、家庭・地域が流失しており、誰がどこに避難しているのかの情報が全くなかったことで



1階職員室の状況



解体された第十八共徳丸

ある。全員の確認を終えるにはかなりの日数を要した。

校庭の瓦礫には、手を付けることができなかった。子どもたちを迎え入れるにあたって、至急取り組まなければならないことは、1階校舎の復旧（ヘドロの除去等）であった。校舎の復旧作業は、教職員だけで始めたが予想以上にはかどらず、先の見通しは全く立たない状況であった。作業にあたっては、保護者も被災していることから、被災していない地域の力をお借りしての復旧活動であった。

震災後の学校再開にあたっては、地域が崩壊していたり、鹿折に限らず気仙沼市内の各避難所に避難していたり、親戚や知人宅に避難していたりで、交通手段の確保が大変であった。住居もなく職を解雇されたなどにより、転出児童は54名にも上った。転出先で最も遠いのは福岡県であり、他県への転出者は10名を超えた。また、保護者への連絡も大変であった。学校再開のお知らせや他の連絡など、避難所を回って掲示したり、よく行きそうな店舗をお借りして連絡用のポスターを掲示していたりした。しかし、徹底することはかなり難しかった。

震災前は356名（平成23年3月1日現在）の児童数が、現在（平成25年11月1日）は235名である。2年6か月の間に、3分の1にあたる120名もの児童数が減少したことになる。

このような中、平成25年9月4日（水）に新校舎・体育館落成式並びに祝賀会を実施した。多くのご来賓、市並びに教育委員会関係者、関係業者、地域・保護者の皆様方の参加のもと、予定より2年2か月遅れで開催することができた。



被災した校舎1階の床・壁張替作業



校舎・体育館落成記念式典

2 子どもからのメッセージ

平成25年9月4日（水）、2年2か月遅れで行われた新校舎・体育館落成記念式典での児童代表のこぼを紹介する。

6年 菅野 匠

新しい鹿折小学校の校舎、そして校庭ができあがりました。僕たちは、この新しい鹿折小学校の完成をずっと待ち望んでいました。校舎と校庭の完成に当たり、たくさんの方々にお世話になりました。工事関係の皆さんや、震災に当たりたくさんの支援を頂いた方々など、僕は感謝の気持ちでいっぱいです。

思い起こせば僕たちが3年生の時でした。新しい校舎で勉強を始めたばかりだったのに、津波の被害を受け、校舎の一階が使えなくなってしまいました。あまりにひどかったので僕は、（これじゃもうだめだ。）と思ってしまいました。

ところが、たくさんの工事関係の皆さんとご支援頂いた皆さんのおかげで、震災前と同じように立派な校舎、そして新しい体育館と校庭が完成しました。僕は今、新しい学校で勉強できることの喜びと、これから一生懸命に頑張っていかなければという使命感でいっぱいです。

震災の後、たくさんの友達が転校していきました。転校していった人たちも、きっとこの新校舎に入って友達と遊んだり、勉強をしたり、給食を食べたりしたかったと思います。僕はそんな友達の気持ちを大切にしたいと思っています。新しい学校で生活することを喜ぶだけでなく、学校を建てるために頑張っていた皆さん、そして、転校していかなければならなかった友達、多くの人たちの想いを大切にしていきたいです。

また、新しい鹿折小学校が鹿折だけでなく、気仙沼、そして、日本の復興のシンボルになったらいいなとも思っています。そのために、僕たちができることを今一生懸命に取り組んでいきたいと思っています。



式典での児童代表のこぼ

3 保護者からのメッセージ

本校では、平成24年度より横浜市にある鶴見大学より、長期休業中の学習支援を受けている。

平成25年度は、夏季休業中の2週間に渡り、計9日間の支援を受けた。実施後に行ったアンケート調査の結果、想像以上に多くの保護者から、喜びと感謝に溢れた感想を寄せていた。その一部を紹介する。

- ・今年、初めて参加させていただきましたが、とても良かったと思います！一年生でまだまだ勉強も分からずに夏休みを迎え、なにをどうしたらいいかと思っていたんですが、お兄さん、お姉さんのお陰で楽しく勉強ができたと思います。また、イベントなどを考えていただき、とても楽しい夏休みになりました。ぜひ冬休みにも開いていただきたいと思います。本当にありがとうございました！
- ・遠くから、横浜からわざわざ気仙沼まで一回のみならず継続して行っていただくのは、とてもありがたいと思います。過疎地でなかなかどこへ行くのも遠い気仙沼では、他の地域との交流もあまり盛んではないので、都会の方々と交わってよかったです。子どもたちも楽しそうに行っていました。どうもありがとうございました。
- ・去年は参加しなかったのが初めての参加でしたが、毎日「楽しかった。」とテンション高めで帰って来ては、「学び一ぱ」での事を楽しそうに話してくれました。大好きなお友達とボランティアのお兄さん、お姉さんがとても優しく接してくれているみたいで、本当に毎日楽しそうでした。私も「夏祭り」に参加させて頂き、嫌いで苦手な工作も楽しめて出来た様子を目で感じ、遊んでいる様子も、普段見る息子ともちょっと違う息子を見れた気がして微笑ましかったです。これもみなお兄さん、お姉さんのおかげだと思っています。子どもたちの為に、きっとたくさん、たくさん考えてくれたんだと思います。素敵な夏休みにして頂きありがとうございました。来年もしもあるのなら、また参加させたいと思います。
- ・学区外の仮設にいたので、震災後は学校とは別の場所で友達と交流をすることができなかったのが、「学び一ぱ」を通して、友達や大学生の方々と一緒に時間を過ごせたことがとても嬉しかったようです。本当にありがとうございました。
- ・息子の二人が「明日も行く!!」と帰ってくると毎日言いました。お兄ちゃんに無理矢理連れて行かれた二男も「お母さん、明日学び一ぱあるんでしょ？」と楽しみにしていたようです。流しそうめんなどなかなか自宅でできないことを経験させていただき感謝致します。何より、大学生の方々に優しくしていただいたことが震災で心に傷を負った子どもたちの何より良い治療になったように思われます。本当にありがとうございました。また、来年もお願いできたらと思っています。



みんなで学び一ぱの準備



学び一ぱの閉校式

4 地域からのメッセージ

気仙沼鹿折復幸マルシェ 村上 健児

鹿折地区・中みなと町にある仮設商店街「気仙沼鹿折復幸マルシェ」は東日本大震災の発生から1年を迎える平成24年3月に開場しました。震災前に鹿折地区で事業を営んでいた被災事業者が中心となって立ち上げ、商業、飲食業、サービス業の25店が軒を連ね、事業の再開を果たしました。

鹿折地区の中心部は津波と大火災によって壊滅状態となり多くの住民が町を離れたために、区内で事業を再開することは困難との判断が大勢であり、多くの事業者が地区外に事業再建の場を求めることとなりました。そうした中、私達鹿折復幸マルシェに集ったメンバー達は厳しい事業環境であることは覚悟の上であえて鹿折の地にとどまり、この町で暮らす人々と共にふるさとの復興に向けて進んでいこうと歩き始めました。

マルシェは商業施設であり様々なサービスの提供により地元住民の日常の暮らしのお手伝いをさせていただいております。震災によりほとんどの店舗や事業所が失われた鹿折の町で暮らすことは日常生活に大きな不便が生じ、震災後多くの地域住民が本意ではない形で町を離れざるを得ないという動きが生じていましたが、そうした状況を少しでも克服することに役立ちたいと考えています。

また、そうした基本的な商業活動という一面以外にも、私達の出来る範囲で地域の復興支援にも取り組むということをもットーとし、これまでも様々な復興支援活動を行ってきております。鹿折地区内の環境美化・緑化活動、地域コミュニティ再生支援、住民の方々に楽しんでいただくための様々なイベント開催などをはじめとして、「みなが集まる場所」というキャッチフレーズのもと鹿折復興のために多くの人々が集い、繋がり、町の賑わいを取り戻していけるようにと願い活動しています。

そうした復興支援活動の取り組みの一つとして、地域の子どもたちへのケアということにも重点的に取り組んできております。鹿折小学校様を通じては、私達マルシェの独自支援という形や様々な支援団体との橋渡し役という形で、いくつかの子どもたちへの支援活動をさせていただいております。今年には「香港から日本を励まそう会」様のソーラー式街路灯及びマルシェオリジナルプランターの寄贈仲介、川崎市の復興支援団体「メッセージ鯉のぼり」様からの防災用頭巾カバーの寄贈仲介などを行ってまいりました。

「香港から日本を励まそう会」様は、香港の日本人保護者会が中心となって震災復興支援のために立ち上げた団体であり、昨年夏に香港から来市された団体の関係者に鹿折小学校の被災状況を紹介させていただいたことがきっかけとなって、昨秋に私達を香港日本人小・中学校での震災語りべ活動で招きながら、現地で大規模なチャリティイベントを催してくださいました。そこで集められた鹿折小学校の子どもたちへの支援金70万円相当により今年の2つの寄贈が実現する運びとなりました。藤村校長先生をはじめとする先生方のご理解とご協力をいただきながら、今春に校庭に2機の街路灯設置を無事終えることができました。「メッセージ鯉のぼり」様は毎春マルシェに支援メッセージ入りの鯉のぼり500匹を掲揚するイベントや気仙沼の支援活動を行っている団体ですが、こちらにもについても同様に小学校や子どもたちの被災の様子をお伝えしたことが寄贈品を頂戴するきっかけとなっています。

震災から2年半以上経ちましたが、あらためて私達が真の復興を遂げるまでにはまだまだ長い年月を要するものと実感しております。そして、遠からずきっと今この町で暮らす子どもたちにもその役割の一部を担ってもらう時が来るのだらうとも感じています。子どもたちも大震災によってその小さな心に大きすぎる傷を負ってしまっていることでしょう。それでも彼らがひどく傷んでしまったこの町を自らのふるさととして愛し、将来力強く町の復興の第一線で活躍してくれることを願ってやみません。「鹿折が好き」と一人でも多くの子どもたちに思ってもらえるように、私達はこれからも地域の子をたちを支える活動に取り組んでいきたいと考えています。



防犯灯の寄贈・6年生と一緒に



プランターの寄贈・復興マルシェ



防災頭巾カバーの寄贈

5 教職員からのメッセージ


5-(1) 養護教諭としての立場から

今年度より養護教諭が2人体制となり、主に心のケアを担当しています。普段の仕事の内容としましては、不登校児童家庭への毎日の電話のやり取りをしたり、登校した場合は、別室登校児童と一緒に、相談室で勉強や活動の見守りをします。また様子をみて、それぞれの教室や活動場所に促してみたりします。大切にしていることは、その児童の心に寄り添いながら、また家庭や担任の先生と連携を図りながら、声掛けや見守りをしています。

カウンセリングについては、今年度は年間34回を予定しています。東京都より1名のカウンセラーが来校しています。鳥根県より月に連続2日ずつ、3名のスクールカウンセラーが交替で来校しています。月初めには、家庭向けにお便りを発行し、スクールカウンセラーの来校日をお知らせし、希望をとります。希望のほかに、普段の様子や教育相談等で担任の先生から、カウンセリングを受けた方が良いのではということも勧めたりする場合があります。それらの時間調整や連絡調整をし、カウンセラーの先生をお迎えます。

また、兵庫教育大学大学院教授の富永良喜先生による心のサポート授業も担当しています。昨年に引き続き、ストレスマネジメントに関する授業を行っていただいています。今年度の9月には、1年生と4年生を対象に実施しました。授業の中では、昨年度も実施した「心とからだの健康かんさつ」というアンケートも実施しました。授業の後には、「リラックス法が分かって良かった。」「津波という言葉は何もしないんだということがわかった。」「アンケートを書くことでスッキリした。自分の気持ちが整理された。」等の感想があげられました。同時期に、他の学年もアンケートを実施したのですが、このアンケートでストレスの点数が高かった人数は、昨年度の40人から、20人弱に減りました。しかし、新たに「また津波が来て家族がバラバラになるのでは？」と不安になる児童もいます。2月に、今年度2回目のアンケートをとる予定です。このようなアンケート結果や普段の児童の様子をきめ細かに見て、心の変化に気付き、必要な時はカウンセリング等を勧めるなどして心のケアを大切に、児童が心身共に健全で安心して学校生活が楽しく送れるよう、これからも見守っていきたいと思います。

代替養護教諭 米倉 裕子

 **よつばのクローバー** 平成25年11月5日
カウンセリングだより NO. 7
発行者: 鹿折小学校 米倉裕子

校庭の桜の葉っぱも大分色づき、風に吹かれてたくさん落ち葉となりました。秋も身近な場所を感じられるようになりましたね。また、マラソン大会に向けて練習にも励んでいます。体力をつけながら、スポーツの秋も楽しみましょう!!

★11月のスクールカウンセラー(SC)来校予定日

13日(水)	岩川 SC
14日(木)	荒川 SC
15日(金)	

★申し込みについて…カウンセリングを希望する場合は、申込用紙に記入し、担任に出してください。なお、すでに約束してある場合は改めての申し込みはなくても大丈夫です。急ぎの場合は電話でもかまいません。
TEL 22-6876

★カウンセリング可能な時間…9:40～16:00頃まで(時間の相談可)
----- マリトリゼン -----
カウンセリング(11月)を希望します。

(児 童 ・ 保 護 者) ※保護者の方もできますので希望があればOを記入してください。

年 組 児童名 _____
保護者名 _____
※希望する場合 _____
日 時 分 頃 希 望 _____

保護者へのカウンセリングだより



担任がドラえもん・心のサポート

5-(2) 防災主任(主幹)としての立場から

鹿折小学校 防災教育の取組

主幹教諭 畠山 政明

5-(2)-① はじめに

本校では、今年度から防災教育に力を入れて取り組んできた。校内研究では防災学習を校内研究のテーマと設定し、全職員一丸となって取り組んでいる。

研究主題を「自分の将来、そして地域の未来を安心して創造できる児童の育成～自助・共助の力を育む防災学習を通して～」として、年間を通して、低・中・高学年部から1回ずつ全校での授業研究を行い、子どもたちの大切な命を守るためのよりよい防災学習の在り方を研究してきた。

また、防災に関する行事についても昨年度の課題を踏まえて、避難訓練の在り方の改善を図ったり、新たに「緊急時引渡し・引取り訓練」を実施したりと充実を図ってきた。



1年2組 危ない場所に印を付ける様子

5-(2)-② 取組の概要

(1) 校内研究

① 職員の研修

校内研究で防災学習を扱うにあたって、まず教職員がしっかりと防災教育を理解しなければならない。年度初めには、研究主任、防災主幹を中心に防災教育の在り方について、各研修会の内容を伝えたり、気仙沼市教育研究員の防災学習に関する取組の例を紹介したりなど、防災教育の先進校の実践例を数多く学んだ。

② 第1学年2組 授業実践 9月24日

学級活動「じしんからみをまもろう」

地震が起きたときの初期動作について、「防災ダックカード」を使って楽しく分かりやすく学習できるよう工夫した。また、自分の教室以外の場所にいるときに地震が起きたら、どこで安全な姿勢をとったらいのか、児童が主体的に考えてシールを貼るなどの取組の工夫をした。

③ 第4学年2組 授業実践 10月7日

総合的な学習の時間「地域の防災マップを作ろう」

気仙沼津波フィールドミュージアムを活用した防災学習に取り組んだ。グループごとに鹿折小学区を分担して、フィールドワークに出かけた。津波の被害の様子が分かる場所や避難場所について確認し、スマートフォンで写真を撮った。それを登録すると、気仙沼津波フィールドミュージアムのWebサイト内地図に表示される。

フィールドワークに出かけた後で、グループごとにまとめを行い、コンピュータとプロジェクターを使って発表会をした。

(2) 学校行事

① 授業時避難訓練（地震・津波想定）5月実施

昨年度の実施後の反省や課題を生かして、避難経路の見直し等を行った。また、防災学習と関連させて、児童には自分の命を守る大切な活動であることを伝え、これまで以上に高い意識をもって訓練に取り組むことができた。

② 下校時避難訓練（地震・津波想定）6月実施

昨年度より、授業時間中の地震・津波想定に関わらず、下校途中を想定して避難訓練を行っている。教師主導で指導するのではなく、「この場所で大きな地震が起きたらどうするか」「津波警報が出たらどうするか」児童自身で考えさせた後で教師がアドバイスを加えるようにしている。

また、「落ちてこない場所」「倒れてこない場所」「移動してこない場所」を意識して初期動作をするよう指導してきた。

③ 休憩時避難訓練（地震・津波想定）9月実施

休憩時には、教職員が付いていないことがある。先生がいなくても自分で判断し、どの経路でどこへ避難しなければならないのかをしっかりと身に付けさせるための訓練をしている。

④ 緊急時児童引渡し・引取り訓練 11月実施

今年度から安全確実に児童を保護者に引き渡すための訓練を実施した。事前に保護者と連絡を取って引渡しについてしっかりと確認した。当日は大変スムーズに実施できたが、今後さらによりよい引渡しの方法を検討していきたい。



津波フィールドミュージアム画面



4年2組 発表会の様子



第2避難場所に向かう様子



下校時避難訓練の様子



休憩時避難訓練の様子

5-(2)-③ 将来に向けて ― これからの取組 ―

(1) 今後の地域連携の方向性

- ① 地域との連携の柱として、公民館、家庭、P T Aを位置づけていきたい。
- ② 特に鹿折地区では、被災後、公民館が鹿折小学校内に設置された。この立地条件を生かして、常に連携を密にすることが可能である。また、公民館は日常的にもっている人材ネットワークが広いので、積極的に連携を図っていきたい。
- ③ 防災に向けた連携組織の立ち上げの際は、現在ある組織を生かして設置するよう配慮する。



緊急時児童引渡し・引取り訓練の様子

(2) 地域と連携した取組に向けて

東日本大震災の教訓から、わたしたちは未曾有の災害にあつて、多くの物を失ったが、それでもあきらめずに同じ地域の人たちが支え合い助け合って生き抜くことができた。鹿折地区では、多くの子どもたちが行き場を失ったとき地域の方々がお世話をし支えてくれた。また、震災のさなかにけなげに生き抜く子どもの姿に地域の人たちも支えられた。

まさしく、地域あつての子どもであり、子どもあつての地域なのである。今後もさらなる連携の在り方を模索していきたい。

6 おわりに

子どもからのメッセージとして、今回は新校舎・体育館落成記念式典での菅野匠君の児童代表のこぼれ話を紹介した。『転校していった人たちも、きっとこの新校舎に入って友達と遊んだり、勉強したり、給食を食べたりしたかったと思います。』とあるが、この言葉が切なく重い。この人達に分まで頑張りたいとの強い思いが、未来へのメッセージとしてふさわしいと思い掲載した。

地域からのメッセージとして、「復幸マルシェ」の村上さんに原稿を依頼し、復幸マルシェでの取組についてご紹介いただいた。学校との関わりも非常に強く、今後共地域代表の一つとして関わりをもちたいとの思いで掲載した。

教職員からのメッセージとして、今年度より配置された代替養護教諭と主幹教諭(防災主幹)の取組を紹介したが、児童への心のケアと防災教育の取組は、本校にとっての最重点努力事項である。「未来へのメッセージ」としてふさわしいと考え原稿を依頼した。

前校長からの引き継ぎに際し、「本校の復旧・復興は、地域の力なくしては為し得なかった。」「学校自体が被災したり、学区の半分が被災したりしている学校としては、膨大な課題を抱えている。課題解決の一つとして、学校は地域の学校であることを教職員一人一人がしっかりと自覚し、学校の教育活動も防災教育も地域と一体となった活動になるようにしていかなければならない。」との話を受けた。このことを改めて重く受け止めなければならない。

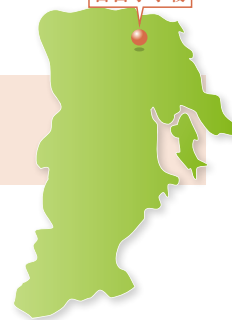
現在、校舎が立派に修復され、校庭が新しく整備され、遊具も真新しく設置され、子どもたちは元気に校庭で遊んでいる。校長室の窓からは、サッカーをしている子ども、ドッジボールをしている子ども、一輪車や竹馬に乗って遊んでいる子どもなど、寒さに負けずに元気に校庭で遊んでいる子どもの姿が広がっている。この光景の素晴らしさ、尊さを、今改めて噛みしめている。



全校遠足・安波山登山



校内マラソン大会



前向きに明るく～本校児童、保護者、教諭の震災3年後の思い～

校長 豊田 康裕

1 はじめに

(1) 本校の位置

白山小学校は、海岸から600m先に打ち上げられたサンマ巻網船（現在撤去）で有名となった鹿折地区から約6km北上した宮城県最北端に位置している学校である。学区の東西両側には山が連なり、その間を北から南に流れる鹿折川沿いに田畑と住宅が点在する。学区の南端は標高20m、学校は標高40mに位置する。

平安時代より、この地は産金・産馬で知られ、それらは奥州平泉に送られ、その繁栄を支えたと伝えられている。



校門と西校舎・標高40m

(2) 震災時の被害

気仙沼であっても山間部に位置する学区には津波被害が無かった。また、地盤も強固で、学校は東校舎と西校舎の数cmの段差が生じただけであった。地域の被害も屋根瓦の落下等で済んだ。

(3) 震災後の影響

震災直後の平成23年4月には、家を流失するなどして、実家を頼り5名の児童が本校に入学・転入してきて、全校児童25名の完全複式の3学級（1・2年、3・4年、5・6年）となった。本校の理科はAB年度方式で3年の学習を主に指導する年度であったため、転入した4年生児童3名には管理職が1年間補助に当たった。

また、保護者の多くが働き場を無くしたり、収入が大きく減ったりするなどの経済的な傷手を負った。そのため、PTAの会費をその年に限り3,000円返金したり、学級費・児童会費を平成23年度以降廃止したりするなどした。また、平成23年度だけではあったが副教材等の教材費も支援団体に全額援助をお願いし、支援していただいた。

現在の児童数は21名である。本校には震災前から、市の少子化に伴う教育課題等へ対応するため策定された義務教育環境整備計画案が示されていた。震災後、保護者や地域との懇談会が再開され、今年7月市長より平成27年4月1日に鹿折小学校と統合するという説明があった。

このような状況の中で、本校では次の方々には現時点での思いを紹介したり、寄稿していただいたりすることにした。

はじめは、本校児童5・6年8名である。平成25年6月に神奈川県輝望プロジェクトの支援で、横浜・鎌倉の修学旅行に招待された時、支援の中心であった神奈川新聞を訪問し述べた感謝の言葉である。前夜、ホテルの部屋で分担して作成したものである。

二人目は、震災当時、3年児童の保護者で、現在は本校のPTA会長さんである。会長さんは震災前は気仙沼市内でコンピュータ関連の会社を経営されていた。震災後はコンクリートミキサー車の運転手として、復興の一翼を担い日夜奮闘されておられる。

三人目は、震災当時、前任校の南気仙沼小学校で勤務していて、廃校に伴い昨年、本校に転勤してきた女性教諭である。2年続けて防災主任をお願いしている。

2 子どもたちからのメッセージ

感謝の言葉（平成25年6月）

輝望プロジェクトの皆様こんにちは。

私達は気仙沼市の白山小学校から来た5・6年生8名です。今、気仙沼市は施設や漁業などの産業が復興を始めています。被災した人たちも悲しい気持ちでしたが、段々笑顔を取り戻してきました。仮設住宅がたくさん建っているなど難しいこともたくさんありますが、少しずつ気仙沼は元気になってきています。

私たち気仙沼市立白山小学校は、全校21名という小さな学校ですが、みんな明るく仲良く暮らしています。学校には震災後全国からたくさんの支援をいただきました。今はいただいたコンピュータなどを使って一生懸命授業に取り組んでいます。

この輝望プロジェクトの修学旅行支援も、一生の思い出に残るような素晴らしい旅行で、とてもありがたく思っています。

きのうまでの二日間はまるで夢のような世界でした。

自分たちの泊まる部屋のドアを開けたとき、こんなに広い部屋はもったいなくて、眠れないくらいでした。それに、朝食はバイキングでどれを食べようかと目をキョロキョロしてしまいました。夜はホテルの部屋から氷川丸がキラキラと光り、その後ろにはベイブリッジも見ることができてとてもすてきだと思いました。

外での食事では、1日目の中華街では、初めて回転するテーブルで食べ、おなかいっぱいになりました。次の日の英一番館では、ナイフとフォークを使って食べて緊張しましたがとてもおいしかったです。

きのうの新江ノ島水族館見学では、大水槽の前に立ち、魚達と一緒に泳いでいる気分を満喫しました。

鎌倉の大仏見学では、山の中にあるのに、大昔、津波の被害を受けたことを知り、びっくりしました。気仙沼も鎌倉も海のそばです。これからも襲ってくるかもしれない津波に備え、堤防や避難路をつくり、一人でも多くの命が助かる工夫をしていかなければと思いました。

今日は最終日です。カップヌードルミュージアムでマイカップヌードルを作るのと、ランドマークタワーの展望台で273mの高さを体験できるのが楽しみです。私達をこのような素晴らしい修学旅行にご招待いただきありがとうございます。

白山小学校では2つの縦割りグループに分かれて活動することを「村活動」と呼んでいます。今年は希望村と絆村という二つの村の名前で、私達高学年がリーダーとなってみんなを引っ張っています。白山小学校の伝統的な行事「雪上カルタ大会」も村対抗で行われとても盛り上がります。

これからも私達は協力しながらいろいろな活動に取り組み、どんな困難も乗り越えていきたいです。

本当にありがとうございます。

5・6年生8名



支援先の神奈川県新聞を訪問



過去に津波に襲われた大仏

3 保護者からのメッセージ

震災からの復興と今後に向けて

PTA 会長 畠山 光男

(1) 震災当時の状況

当日たまたま家にいた私は、尋常ではない大きな揺れにより、本棚から崩れ落ちて来る本から次男（当時2歳）を守るため必死でした。

その後、白山小学校へ子どもたちを迎えに行きましたが、先生方の適切な避難誘導と児童の保護により全員無事だったことに安堵したとともに、先生方に感謝しました。

白山小学校は内陸部に位置しているため、幸いにも直接的に大きな地震や津波の影響や被害は他の地域に比べれば非常に少ない状況でした。しかし、市内の被災状況がひどく多くの事業所等が被災したため、保護者や地区のみなさんが働き場を無くしたり、収入が減ったりするなどの経済的な傷手を負いました。復興がなかなか進まず現在もその状況はあまり変わっていない状況です。

また、当日の大きな衝撃や環境の変化などにより、子どもたちの心の中にも多くの傷跡を残したと思います。

(2) 震災後のPTA

震災後、5名の児童が新たに白山小学校に入学・転入があり全校児童25名になり、PTA 会員も増えました。

PTA 活動は、学校の事情や市全体の混乱により多くの活動の自粛を余儀なくされました。復興がなかなか進まず現在もその影響がまだ残っており、長年やってきた鹿折地区のスポーツ交流会（ドッジボール大会）は今も開催されていない状況です。

(3) 今年度の学校行事およびPTA 活動

今年度も、入学式から始まり、地区民合同の大運動会、市内体育祭への参加、5・6年の修学旅行、鹿折小学校との二校合同夏休み親子行事、校内水泳大会、全校遠足、祖父母交流会、学芸会、市内音楽祭への参加、校内マラソン大会、フットサル交歓大会、雪上カルタ大会などたくさんの行事や活動を通して、子どもたちがぐんぐん成長していく姿がみられ、ほほえましい限りです。

何より今年度の運動会は、あいにくの前日の雨天のため体育館での開催となってしまいましたが、3年ぶりの地区民と合同での大運動会となり、大いに盛り上がり地区の皆さんといっそうの絆を深める事ができました。

白山地区の子ども会行事も、今年は2つ実施できました。

7月27日に白山のコミュニティーセンターで行われた「白山3地区合同夏休み行事」は、あいにくの悪天候によりお泊り会はできませんでしたが、みんなで夕飯のカレー作りと会食、ホテルの観察、肝試し、アニメ映画鑑賞会と、親子共々楽しい夏休みの思い出になりました。

また、8月17日に一泊で行った種山高原「星座の森」への白山日ノ口地区キャンプでは、PTA のOB さんや卒業生も参加し、草原でのスイカ割り大会やバトミントン大会、じゃんけん大会、溪流での水遊びなどをしたりして、子どもたちの思い出づくりはもちろんの事、保護者のアルコール親睦会もありとても楽しい行事となりました。

(4) 今後のPTA 活動

震災後、市内の被災地域からの児童の受け皿となっていた本校では、震災からの復興が一向に進まない中、今後もその役目や防災関係のバックアップ機関として重要な役割を担う事となるでしょう。

PTA 活動としては、今後も多くの学校行事、鹿折小学校と合同で行う行事への参加や、地域の方々を講師に招いてのコラボスクール等（太鼓の伝承、地域探検、昔の遊び・ニュースポーツ）を通して子どもたちの健全な育成を支回り絆を更に深めて行きたいと思います。

ただし、本校は、たいへん残念なことに、市の少子化に伴う教育課題等へ対応するため策定された義務教育環境整備計画に基づき、平成27年3月31日をもって閉校となり、隣接する鹿折小学校と統合することが予定されています。



地区民合同大運動会



草原でのスイカ割り大会

鹿折小学校は、東日本大震災により、校庭や校舎には津波が1.4mの高さまで押し寄せ、ヘドロが1階のあらゆる床面に堆積し、校職員室や各教室は机が倒され破壊され、瓦礫や被災車両が流れ込みました。また、約6割の家庭が被災した悲惨な状況でした。現在でも自宅以外から3割弱の子どもたちが通学しています。

しかしながら、市が計画している今後の防災対策は、東日本大震災レベルを想定しているわけではなく、多くの不安が残るところです。今後は、何より子どもたちが本当に安全・安心な教育環境において、学校教育目標の「豊かな心と自律心をもち、未来に向かってしなやかに伸びる児童の育成」が実現できるよう、地域の皆さんと共に考えて行きたいと思えます。

4 教職員からのメッセージ

これからの子どもたちに伝えていきたいこと

2011年3月11日大津波が襲来した時、私は南気仙沼小学校に勤務していました。

大川を遡る大きな波、家やトラックや船が流されて来てついに学校前の道路にも流れてきました。そして後ろを振り向けば、校庭東側の桜の木をなぎ倒して真っ黒な波が校庭に押し寄せてきました。校舎1階は浸水し、一晩中水が引きませんでした。

夜は周辺の海が火事で真っ赤に染まり、学校まで火の手がこないようにと願うだけでした。ラジオから流れる情報は、各地で200人以上もの遺体が発見されたことを伝え、恐怖と不安がかき立てられました。

水が引いたのは翌日の朝、学区は壊滅していました。

自宅のある唐桑町大沢地区も大津波が襲来しました。地区は壊滅してしまい180戸中残ったのは40戸だけでした。自宅からは海が見えるようになってしまいました。

3月15日、九条小学校を間借りしての臨時職員室が設置されました。その後4月1日から気仙沼小学校東校舎での再度の間借り生活がスタートしました。4月21日には始業式と入学式が行われ、子どもたちの元気な声が学校に戻ってきました。児童数は220人。100人以上も減りましたが、震災前の仲間と再び勉強できる喜びをかみしめているようでした。今まであった物がないなど不便は多々ありましたが、気仙沼小学校からたくさんのご配慮を、そして多くの方々からの励ましと支援をいただき、無事1年を過ごすことができました。

しかし、南気仙沼小学校は翌年3月31日で閉校となってしまいました。

このような形で閉校を迎えようとは、誰が予想したでしょう。いつかは大地震が起きるであろうことを予想しつつも、大津波が現実のものとなるとは思っていませんでした。閉校は、本当に寂しくて悲しくて残念な出来事でした。

今年は、白山小学校に勤務して2年目になります。白山は地震が発生しても津波襲来の確率が非常に低い地域です。震災当日、子どもたちが津波の恐怖を味わわずに済んだことは、本当に幸せなことです。しかし6kmも車を走らせれば浸水した地域が広がります。そして近い将来、安全な白山地区を離れる日がやってきます。

私は、子どもたちには「地域を知り考える力」を身に付けてほしいと思っています。

自分が住む場所はどのような地形なのか
どんな災害が予想されるのか
どこに避難すればいいのか

教諭 伊藤 かほる



壊滅した南気仙沼小学区



地震避難訓練の講話

どこに住もうと、この3つを常に考えられる大人になってほしいと思っています。自分の命を守るためにこれらは当たり前のことだからこそ、しっかりと考えられるようになってほしいと思います。

昨年、5年生の子どもたちと「白山地区防災マップ」を作成しました。まずは、地域の地形をよく観察することから始まり、地形から予想される危険を考えていきました。自分の暮らす地域を見直し、そこに潜む危険と自分の行動について考えるよい機会になったと思っています。

今でも時々地震があります。「千年に一度の大津波、こんな津波はしばらくはこないだろう」と思いつつも、長い揺れには体が敏感に反応し、津波への不安と恐怖がこみ上げてきます。震災を経験し、あの恐ろしい津波を目の当たりにした自分だからこそ、震災を風化させないためにも、自分の経験を子どもたちに伝えていかなければと思っています。

一瞬にして私たちの家や町を奪い、生活を一変させてしまう津波の威力と怖さを教えることを通して、自分の命を守るすべをしっかりと考えさせていきたいと思っています。



白山地区防災マップ発表会

5 おわりに

震災から1年たった頃であろうか。月に一度の全校昼食会で、被災してアパートを失い本校に転校してきた児童と一緒にテーブルになり会話をしていた時のことである。

「校長先生はなぜ腕時計をしていないの。」

という質問を受けた。私の腕時計は永年勤続表彰の記念品であった。そのこともあってとても大事にしていたが震災の混乱で紛失してしまった。そのようなことを話したところ、思いもよらない言葉が返ってきた。

「校長先生は腕時計だけだったの。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

このようなこともあり、今回、この原稿の依頼をするに当たって、執筆することでいやなことを思い出させないか、どのように頼んだらよいかと悩む日が続いた。そのような杞憂に対し、幸いにもご快諾の上、玉稿をお寄せいただいたPTA会長様、本校職員に厚く御礼申し上げます。そして、前向きに明るく取り組んでいる子どもたちにも。



ふるさと松岩に活力と勇気を

校長 佐藤 均

1 はじめに

(1) 本校の位置

本校は、気仙沼市南東部の標高34mの丘陵部に位置している。

(2) 震災時の被害

児童は全員無事で、校舎そのものには目立った被害はなかったが、17地区PTAのうち、海岸部の7地区が被災し、住居も壊滅状態となった。一時的に活動を停止せざるを得ない地区も出た。

(3) 震災後の影響

震災時は432名在籍で、現在は395名となったが、管内では人数の最も多い学校となっている。被災した保護者は住居等の移動を余儀なくされ、従来の地区以外から通学している児童も相当数いる状況である。仮設の住宅に入居している保護者も多い。そのような環境の変化に伴い、少なからず児童への様々な影響はあると思われる。学校の行事、地区の行事等を通じ、コミュニケーションの醸成に少しでも役立てるよう努力している。

2 子どもたちからのメッセージ

支えてあげられる人に

5年 熊谷 慎之助

ぼくは、学校で帰りの会をしているときに被災しました。学校や家族は無事でしたが、ぼくの家は津波に流され、小さい頃にお世話になった母のお兄さん夫婦は津波の犠牲となってしまいました。震災後、ぼくは仮設住宅で生活することになりました。仮設住宅は前に住んでいた家よりも小さく、遊ぶ場所もアスファルトの小さなスペースしかないので、少しきゅうくつだなと思いました。数か月した頃、「ソコアゲ」という団体の方々が仮設住宅の集会所に勉強を教えに来てくれました。大学生や社会人の方々が多くいましたが、中でも区ネットの市民アナウンサーをされている成宮さんには音読を聞いてもらい、とてもお世話になりました。仮設住宅での暮らしは不安なこともありますが、少しずつ慣れ始め、前向きに考えられるようになってきました。

夏休みには、東京で太鼓の活動をしている方々が来てくれて、一緒に太鼓をたたきました。ぼくは小さい頃に太鼓を習っていたので、久しぶりにたたくことができ、やっぱり太鼓は楽しいなと感じました。ぼくの他にも、仮設住宅に住む方々も参加し、とても楽しそうに太鼓をたたいていました。

こうして、多くの方々からの支援により、ぼくたちは元気をもらうことができました。

でも、ぼくを一番近くで支えてくれているのは母です。



ぼくの住む仮設住宅は、松岩小学校の学区外にあり、毎日母が送り迎えをしてくれます。母は、車で20分もかかるのに面倒くさそうな顔を一切せず、毎日ぼくを学校まで送ってくれます。引っ越しても松岩小学校に行きたいと言ったぼくのわがままも受け入れてくれました。そんなやさしい母に、本当に感謝しています。だから、母がぼくにしてくれた分、ぼくも大人になったら恩返しをしたいと思います。

ぼくの将来の夢は、自衛隊員か消防士になることです。震災後、自衛隊員や消防士の方々がみんなのために汗を流して頑張っている姿を見て、とても感激しました。被災した鹿折地区は、多くのがれきが山積みになっており、その撤去にはたくさんの時間がかかると思いました。しかし、自衛隊員や消防士の方々が弱音をはかず、何日も休まずに働いている姿を見て、ぼくも困っている人の役に立つ仕事がしたいと強く感じました。

今、ぼくは周りの方々に支えられ、元気に過ごすことができます。でも、ぼくがこうして幸せに暮らしている間にも、きっとどこかでつらく苦しい思いをしている人達がいるはずです。ぼくもまた、そうした人達の役に立てるように、これからもっと勉強や運動に励み、将来多くの方々を支えてあげられる人間になりたいと思います。

生きぬく

6年 中島 彩花

あの震災は、私から大事なものを奪っていきました。住んでいた家、見慣れた風景、そして私をここまで育ててくれた父や母方の祖父母まで。私の周りの大事なものを、全てがあの一瞬で消えてしまいました。この悲しみは、生涯消えることはありません。

しかし、私はその現実と向き合い、前に向かって生きていくことを決めました。それは、つらいことから目をそむけるのではなく、心にそっとしまっておくということです。どうにもならない気持ちを否定せず、自分の気持ちに正直に、ありのままの自分でいたいと思います。

私にそう思わせてくれたのは、支えてくれる人達の温かさ、感謝の気持ちからでした。何もかも失った私に、唯一残ったのが高校生になる兄と、もう一人の祖母でした。今も仮設住宅で一緒に暮らし、三人で生活をしています。被災した直後は、電気も水道もなく、あるものを賞味期限前に食べるという生活でした。

もちろん、学習用具など、勉強に必要な物もありません。もし、学校が再開したらどうしようと不安でした。しかし、他県の方から食べ物だけでなく、たくさんのノートや鉛筆などの支援を受けることができ、学校へ行ける喜び、勉強できる嬉しさを改めて感じることができました。震災前は当たり前すぎて考えたことがなかったけれど、こうやって学校で友達と勉強したり、目標に向かって努力したりすることは、とても大切な時間なのだということが分かりました。何かをすることができるということは、幸せなことであり、それが「生きている」という喜びなのだ初めて感じました。こうやって、多くの方々から支援をいただく中で、私は徐々に日常生活を取り戻し、元気に毎日勉強することができます。本当にありがとうございました。

今、私は学校で防災の授業をしています。震災当時の様子や被災した状況から、また大きな災害が発生した場合、私達はどう行動するべきか考えています。もう二度とこんな地震には遭いたくありません。しかし、二度とないということは誰にも言えないのです。だからこそ、万が一に備えて正しく行動できるように考えていくべきだと思います。自分に何ができるのか、何をすべきなのか、しっかり考えて行動していきたいと思います。

確かに、私は多くのものを失いました。しかし、私の周りには支えてくれたり、励ましてくれたり、元気にしてくれる人達がたくさんいます。私はこのかけがえのない人達とともに、これからも互いに声を掛け合い、支え合って、精一杯生きぬいていきたいと思っています。そして、せっかく助かった命を大事にして、助けてくださった方々への感謝の気持ちを忘れず、たくさん勉強をして、夢をかなえていきたいと思っています。



3 保護者・支援者からのメッセージ

3月11日、あの日から

父母教師会副会長 菅原 水脈

2011年3月11日、あの日もいつもと変わらぬ穏やかな午後でした。誰もがその後、あの地震と津波により私たちの住む気仙沼が一瞬のうちに破壊されることなど想像すらしていなかったのです。永遠に続くかと思われる様な長く激しい揺れになす術もなく立ちすくみながら、「こんな大きな地震では必ず津波が来る」と直感的に覚悟したことを、今もまざまざと思い出します。

耳慣れぬサイレンが繰り返し大津波の襲来を告げる中、停電により大混乱となっていた基幹道路を、子どもが無事を祈りながら職場から学校へと急ぎ向かいました。当時、中学三年で卒業式を翌日に控えていた長男の無事を確認し、小学校の校庭に着いた時には既に児童は先生方の引率で校庭に避難していました。絶え間なく続く余震、無情にも降り出した雪の中、学校の下の方からは続々と避難して来た人々が集まり始めていました。

そのまま松岩小学校は避難所となり、卒業式、終業式もままならぬ状況のまま子どもたちは、長く自宅や避難所で登校可能になるまで待機することとなりました。あの時、気仙沼に住む誰もが困難な状況に否応なく置かれていましたが、凶らずも避難所の運営にあたらなければならなかった先生方も並々ならぬ苦勞があったことと思います。あまりにも甚大な被害、市内の惨状を目の当たりにして、今年はまだ通常の学校生活は望めないと諦めの気持ちを覚えました。

学校が避難所になるのと同じくして、私も職務として総合体育館に救護のため赴く事になりました。千人を超す避難者でごった返す体育館で、まさに不眠不休で避難所の運営に従事しました。苦しい状況にあっても子どもたちの健気で明るい姿に救われる思いがしましたが、同時に避難所の中で所在なく一日を過ごしている様子が胸が痛み、一刻も早くこの子どもたちを学校という日常に戻してあげたいと強く思いました。子どもは、やはり子ども同士の中でこそ震災によって受けた苦しみを乗り越えていけると思ったからです。それだけに4月の末に学校が再開された時の喜びは特別なものでした。学校が始まったとはいえ、自宅を流し仮設住宅や遠方からの通学を余議なくされた児童も多く、また体育館も避難所として使用されているなど制約の多い中での学校生活でしたが、修学旅行、運動会、学習発表会と一つ一つ行事を実施することができ、その度に通常どおり活動が行える有難さをかみしめました。あたりまえの毎日が、あたりまえにできることの大切さを、私たちは震災によって気付かされました。

震災から2年半余りを経てなお、街並みはまだ復興したと言える状態ではありません。それでも、人々の暮らしには平穏さが戻って来ている様に思えます。気仙沼の街が以前のような美しい街並みに戻るまで、道のりは長いでしょう。それでも復興を果たすためには、私たち一人ひとりが諦めることなく自分のなすべき事を積み上げて行くことが必要です。そしてその姿を子どもたちに示すことこそが、あの震災後、気仙沼に残された者の責任ではないでしょうか。壊れた街を見ながら育つ子どもたちに、再び美しい街並みと海を取り戻し、生まれた街に誇りを持ってもらうために努力する姿勢を持ち続けていたいと思います。



継続はチカラなり

国際武道大学水泳部 コーチ 一木 成行

松岩小学校でのボランティア水泳教室は、震災以降今年で3回目となります。毎年毎年、気仙沼の町並みは少しずつ変わってきており、復興への歩みが感じられます。しかし、3年経っても全く変わらない所もあり、復興への道のりの遠さを実感させられます。

3度目となる今回の訪問でも、松岩小学校の子どもたちや先生方から学ぶことが多過ぎて、上手く文章や言葉で表現することが出来ません。おそらく現地に出向いた全てのメンバーが同じ思いなのだと思います。

東日本大震災から2年半。復興への道のりは始まったばかりなのです。

校長先生が言っていました。

「(復興には)少なくともあと10年はかかる。今、この小学校に通う子どもたちが中心となって、この地域

を、この町を、この国を元気に、そして笑顔にして
いって欲しい。そのためには、今、この子たちに本
当の笑顔覚えてもらい、人の為に何が出来るのか
を感じ取って欲しい。」

自分たちがやってきたことが、少しでもお役に立
てれば。

どんなメダルよりも、どんな名誉よりも、それが私
にとっての大きな誇りであり財産です。そう感しまし
た。

来年も、再来年も、5年後も、10年後も、子ども
たちに笑顔を与え、笑顔を貰いに伺わせてもらいま
す。継続はチカラなり。



4 教員からのメッセージ

「ふるさと」をつくる一人として

教諭 常山 佳子

「唐桑瀬戸」といわれる美しい内湾を臨む丘の上。そこに建つ実家に、心の救いを求めるかのように訪れたのは、震災後2か月後の5月のことだった。ふるさと……。子どもの頃よく遊んだ海、コンクリートでできた岸壁の内湾に美しく浮かぶ小舟、いかだ。そのいかだの上からドボンと海に飛び込んで遊んだ夏の日。幼なじみと共に一日中遊んだ大好きな海……。地盤が沈下し、がれきが打ち寄せられ、すっかり変わってしまった姿に目を覆うようにしながら家に入った。そこに母がいた。久しぶりに聞いた母の声。

その瞬間、目の前の風景は再び幼い頃の美しい姿に戻った。

険の奥に浮かぶ美しい風景。今そこに9.9メートルの防潮堤が建とうとしていても……。美しい大切な思い出はよりいっそう憧れとなって私の中に生き続ける。それを心の中で繋ぐのは、今は、母の顔や言葉にかわっている。

大切なものが変わってしまった今、私たちの心を支えるふるさとってなんだろう。それはそこにいる人の顔であったり声であったり言葉であったり、心に触れることであったり、人に支えられることであったり、人を支えることであったり……。人によってつくられる環境そのものであるのではないかと思いつけている。

私にとってそうであるように、子どもたちにとっても、今ある環境はすべてがふるさとになる。学校はそのふるさとの中の一つの大切な場所である。私たちは、ふるさとの中の役割を担っている。明るく力強く行動し、子どもたちを将来へと導かなければならない。その役割を自覚する中で、特に毎日考えていることがある。

「一人一人の存在を認める言葉を……。」昨年度お世話になった福岡のスクールカウンセラーの先生からいただいた言葉。初めは難しさを感じた。今まで、行為に対して認める言葉掛けをしてきた自分。「存在を認める……。」どうすれば伝わるのだろう。顔を見つめて話す、相手の体温を感じるくらい近くに寄り添う、手を握る、顔を覗きながら名前を呼ぶ、呼びながら背中に手を当てる、笑顔を誉める、元気に登校したことを一緒に喜ぶ、そんなことを続けてみた。するとどうだろう。子どもたちがますます身近な存在に思えた。距離がぐんと縮まったことを感じた。「存在を認める」とは、相手に「あなたは大切な人なんだよ。」と感じさせることなのだ。

そして今年の夏、市内の復興支援ライブである人と出会った。ゴスペルフォークシンガーの神山みさ。彼女は歌う。

「you are special あなたは宝石のようにすばらしい……

you are special この世界にたった一人の君……
you are special 大切な人」

カウンセラーの先生からいただいた言葉とつながった。



～子どもたちと共に考えていきたいこと～

まずは自分を大切にしよう。そして、隣の人、周りの人、家族、自分を支える人たちを大切にしよう。人を大切にすることは自分を大切にすることだということに気付こう。自分と人を大切にすることが、自分の生き方に必ず帰ってくることを感じよう。そしてあなたが大切にしたい人がまた違う人を大切にしたい、それが繋がっていくことを思い描いて。

～子どもたちへ メッセージ～

震災を乗り越えて2年と9か月。それぞれに大変なことがたくさんあった2年9か月だったけれど、その大変さを乗り越えて、みなさんは学校での自分の役割を果たして、しっかりとがんばっていますね。これから大人になるにつれて、大変なことはもっと増えてくるかもしれません。考えなくてはならないことも多くなると思います。苦しくなることもあるかもしれません。そんなとき、自分を励ましてくれるのは、それまで色々なことを頑張ってきた自分だと思います。自分の力で頑張った経験は貯金のように自分の中にどんどん貯まっていき、自分を強くしてくれると思います。前に頑張れたことは必ずまた頑張れる。これからも自分と向き合って、頑張りの貯金を増やしていきましょう。

1年生の時、あさがおを育てる勉強をしましたね。一粒の種に、早く芽が出るようにと願いを込めて毎日水をやりましたね。やがて出てきた小さな芽に、どんどん伸びると願いを込めて水をやる。じっくりと一つのことを思いを込めて手を掛ける喜び。あの時の気持ちをいつまでも大事にできますように。それが勉強、友達づくり、好きなこと、将来の夢・・・これから先のどんなことにも当てはめることができます。じっくりと自分の中の種を育てて、お日さまに向かってしっかりと開く花をたくさん咲かせてくださいね。

5 おわりに

今回の各方面からのメッセージは、被災地気仙沼の今置かれている状況をすべて物語っていると思われる。子どもにとっては、被災によっての大きな環境の変化とそれらを支えてくれた人々への感謝の気持ちが、逆に一回りも二回りも大きく成長するきっかけとなったことが、メッセージからうかがうことができる。また、保護者、地域、支援者からのメッセージは、単なる同情だけでなく、心の底から故郷を思う気持ち、子どもたちを大切にしたいという気持ちとこれから更に飛躍してほしいという願いが伝わってくる。震災は確かに大きな傷跡を私たちに残したが、それと同時に私たちの生き方について考え直す大きな機会を与えてくれたような気がする。学校としては、当然のことながら、子どもたちの成長を通じ、故郷気仙沼、松岩の地域に更なる活力と勇気を提供できるよう努力していかなければならないと改めて思いを強くした。



子どもたちの笑顔は力なり

校長 荒井 由美子

1 はじめに

(1) 本校の位置

本校は気仙沼市の郊外南西部に位置し、市街地や海岸部と異なり、周りは山に囲まれ四季の自然が美しい山紫水明の故郷である。近くには日本一のツツジの自生地「徳仙丈」や市民憩いの「市民の森」、古い歴史をもつ「羽田神社」などがある。

(2) 震災時の被害

- ① 学校の被害としては、屋根瓦が多数破損した。また、校舎西側のコンクリートの通路が陥没したり、ひびがはいったりしている箇所が数箇所あった。校舎内には、特に被害はなかった。
- ② 児童の保護者の安否が確認できない家庭があったので、被災4日後に全員の安否を確認することができた。地域でも大きな被害はなかった。
- ③ 教職員については、なかなか連絡がとれない教員がいたが、被災後11日目に安否を確認することができた。教職員の被害状況については、自宅やアパートを津波や火災で焼失してしまった教員や家族が行方不明になった教員がいるなど甚大だった。

(3) 震災後の影響

- ① 大分県別府の自衛隊が気仙沼入りし、本校体育館を宿泊所として救援活動にあたった。
- ② 支援活動が多くなった。小規模校ゆえほとんど全校児童で受けなければならず、本来の教育課程に支障のないように精選して受けるようにしてきた。
- ③ 学区内に、会社や工場が建ち、また、海岸を避けて山越えをしてくる通勤の車両が多くなり、通学路の交通量が急増した。毎朝交通指導を行ったり、地域の方々がパトロールを行ってくださったりして、子どもたちの登下校中の安全を確保している。
- ④ 現在も、校庭の半分に仮設住宅が建っており、学校行事やコミュニティーとの合同の行事等の駐車場確保が難しい状況が続いている。



2 子どもたちからのメッセージ

それは、一人の子どもが出した一通の手紙から始まった。

2011.3.11東日本大震災後の4月に、災害救援のため気仙沼入りし、本校体育館を宿泊所として救援活動にあたった大分県別府の自衛隊の方々と5月の運動会で、綱引きをしたことを思い出し、6年の尾形幹太君がお誘いの手紙を出したところ、今回の運動会にはお出でいただけなかったが、メッセージがたくさん届いた。

子どもが別府駐屯地のみなさんへ出した手紙

6年 尾形 幹太

別府駐屯地のみなさんお元気ですか。

震災の時は、3年生でしたが、とうとうぼくも6年生になりました。自分がたよりにしていた上級生もいなくなり、自分たちが最高学年になりました。

震災の時、自衛隊のみなさんといっしょに春の運動会をしたことを覚えていますか。いっしょにつなひきをしたことが楽しくて、とても印象に残っています。

来月の18日に、小学校生活最後の運動会があります。今、校庭の半分が仮設住宅になっていて、2年前にやったときより、広さは半分になりました。

去年は小学校だけの運動会でしたが、楽しくできました。今年は、小学校と水梨保育所そしてコミュニティの合同の運動会になります。もし、自衛隊のみなさんの中で気仙沼に来れる方がいましたら、運動会を見にきてください。来れないときは、応援してくださいね。

気仙沼の状況は、まだ大きく変わりませんが、海の近くでは、かさ上げがだいぶ進んできました。でも、なかなか工場が建つのが思うように進んでいないと新聞に書かれていました。人口も減ってきているようです。自衛隊のみなさんのおかげで、ここまで気仙沼はなんとかがんばっていますので、みなさんも体に気をつけてお仕事に励んでください。応援しています。



別府駐屯地第41普通科連隊第1中隊の方からの手紙

第1中隊 代表

水梨小学校の皆様お久しぶりです。

東日本大震災から2年が経過しました。

復興の進み具合はいかがでしょう。テレビ等で拝見する限り、復興の明るい兆しは見えるものの、まだまだその進み方に苛立ちを感じるようなところがあるように思います。災害派遣時におきましては、私たちのために貴重な教育の場を提供していただきありがとうございました。当時3年生だった尾形幹太君からお手紙をいただき、隊員一同感動し、ある者は当時を思い出し、涙し、また、逆に元気づけられました。幹太君も6年生になり、5月18日に最後の運動会が実施されるとのことで、勤務の都合上、全員ではありませんが、応援のメッセージを送らせていただきます。

最後に、皆様のご健康と一日も早い復興を心から祈念申し上げます。

応援メッセージ

★私も3年前の災害派遣任務中の休息日に、先生方のご厚意で綱引きに参加させていただき生徒の皆さんが一生懸命頑張っている姿を見て、久々に笑顔と勇気を分けてもらい非常に良い思い出ができました。気仙沼はまだまだ大変だと思いますが、生徒の皆さんが元気よく力一杯頑張ることが復興への力になると思うので、団結し、楽しい運動会



になることを期待しています。最後に気仙沼には行けませんが別府の地から応援しています。

- ★復興作業されている気仙沼の人々と一緒に微力ではありますが、一生懸命100%の力で頑張らせてもらいました。私たちが帰隊するときに、道中にわざわざ足を運んでもらって、涙しました。2年経った今でも色々な問題が山積みだと思いますが、前を向き頑張ってください。いつまでも応援しています。
- ★東日本大震災で、みなさんの学校を拠点として活動中に運動会が開催され、困難にもめげずに力一杯競技している姿を今でも思い出し、私たちの力にもなっています。一緒に綱引きをしたことがすごく印象に残っています。これからも何事も「一致団結」力を合わせて頑張ってください。
- ★あの時の運動会のことは、今でもよく覚えています。みなさんの楽しそうに競技をしていた時の笑顔は一生忘れません。これからも元氣よく明るい笑顔で頑張ってください。 【他多数】

児童の御礼の手紙

- ★遠いところでお仕事をしていて、お忙しいのにたくさんの応援がとってもうれしかったです。運動会は、とてもいい天気で、みんな元気に運動会ができました。みなさんも身体に気を付けてください。私たちも地域の行事に進んで参加し、みんなを元気にしたいです。 (鈴木 愛美)
- ★手紙には応援のメッセージがいっぱい書いてあって、うれしかったです。そのおかげで、楽しい運動会になりました。今年の運動会は、白組が勝ちました。綱引きでは、私が入っている白組が2回勝ちました。私たちが卒業した後でもいいので、いつか運動会に来てください。 (菅野 采未)
- ★5月18日の運動会では、みんなで協力して楽しい思い出に残る運動会になりました。自衛隊の仕事が忙しい中、わざわざ手紙を送ってくださって、本当にありがとうございました。これからもお仕事頑張ってください。 (菅野 紗耶)
- ★いただいた手紙には、運動会頑張ってくださいなど勇気ができる言葉が書いてあったので、おかげで運動会も頑張れたし、盛り上げることができました。自衛隊の仕事で忙しいのに、わざわざ手紙を送ってくださりありがとうございました。 (齋藤 みな美)
- ★お手紙とてもうれしかったです。運動会は、負けてしまいましたが、精一杯頑張ることができました。今年は最後の運動会でみなさんと綱引きができなくて残念ですが、また気仙沼にきてください。 (斉藤 明里)

3 保護者からのメッセージ

(1) 平成23年4月の転入児童の母からの手紙

5・6年保護者 齋藤 絢

早いもので震災後に転校してから、2年半が過ぎようとしています。親戚の家から水梨コミュニティーの仮設住宅に移り住み、慣れない環境で不安だったであろう娘たちを温かく受け入れてくれた皆さんに毎日感謝しています。

平成24年3月11日の夜、私たち家族は、内湾へ向かい、三本の光を見ながら、手を合わせてきました。元の家近くの通りながら、震災の当日の思い出やいろいろな話をしました。まだこの現実を受け入れることができない私とは一転、娘たちは「新しい家ができたら〇〇がしたい。」「これから〇〇がしたい。」と、とても前向きで毎日が充実しているように思いました。人見知りだった娘たちが水梨小学校に転校してからは、学校の様子をたくさん話してくれたり、友達の家へ遊びに行ったりなど、前の学校に通っていたことを忘れてしまうほど水梨に馴染んでいます。

私も、地域のみなさんと一緒に、地域の行事に参加し、太鼓を叩いたり、保育所の行事に参加したり、



地域の方々との絆を深めています。長女は今年で卒業、次女はあと1年、来年は息子が入学します。娘たちに負けない強い気持ちを持ち、これからも前向きに生活していきたいと思います。震災により、新しくできた人とのつながりや出会いを大切にしたいと思います。

(2) 平成24年4月の転入児童の母からの手紙

5年保護者 三浦 留理

我が子が、水梨小学校に転校してから、1年半が経とうとしています。南気仙沼小学校が残るのなら、これまで一緒に過ごしてきた友達と共に卒業させてあげたいと願っていましたが、気仙沼小学校との統合が決まり、転校を決めました。それを決めた息子と私は不安でいっぱいでした。息子から「お母さん、どうしても転校しなくちゃダメなの？」と聞かれる度に、「転校することをやめようか。」と悩みました。しかし、安全を第一に考え、息子にもきちんと話し、納得してもらい始業式を迎えました。

始業式が始まるまでの時間、職員室で待っていると、戸が開き、「おはようございます。」と児童があいさつをして教室へ。その子だけ特別なのかと思っていたら、また、戸が開き「おはようございます。」と“おお～！”と心の中で感動していました。始業式が始まり、息子のあいさつ・・・彼にとっては、これまでの学校生活の中で一番緊張した時間だったはずでした。

「南気仙沼小学校から来た三浦圭翔です。よろしくをお願いします。」と精一杯の言葉だったと思います。

始業式が終わり、各教室へ。教室へ入って、3・4年生の皆と接している姿を見て一安心。

あとは先生をお願いして私は仕事に戻りました。そろそろ下校の時間、朝は、「迎えに来てね。」と言っていたはずなのに、連絡がない。どうしたものかと思っていると、「お母さん、一人で帰ってみるから。」との連絡でした。その連絡を受けて、更に安心したことを覚えています。

それから毎日、帰宅するとその日の出来事を話してくれるようになりました。そして、今では帰宅するたびに「〇〇くんの家に行くてくる。」と言って出かけて行きます。そんな息子の姿を見ると嬉しくなります。

震災後、私と離れて夜を過ごすことができなくなってしまった息子。今年の修学旅行へ出発する前、「もし、津波がきたら??会津は大丈夫?お母さんは大丈夫?」と不安そうでした。

しかし、息子は、「すごく楽しかった!また行きたい!!」と笑顔で帰ってきてくれました。

9月には、羽田神楽を披露するため一泊で目黒のさんま祭りへ。もう泊まりも大丈夫!神楽もバッチリ!!出発前の彼にはもう不安はありませんでした。

私も、松岩地区少年少女球技大会参加のために、バレーボールの練習で子どもといっしょに活動し、多くの保護者と交わる機会もでき、すぐに水梨小学校に馴染むことができました。親が安心して働くことができるのは、子どもが学校生活に満足しているからだと思つづく思います。水梨小学校へ転校してきたからこそ経験できることがたくさんあります。

息子には、もっともっとたくさんのお話を聞いてほしい、経験してほしいと願っています。「これからも頼むよ、我が息子よ!!」

あの日、もし先生が下校した子どもたちを呼び戻してくれていなかったら・・・もし、新しい学校に馴染むことができなかつたら・・・今の息子の笑顔はありません。

子どもを守っていただいた南気仙沼小学校の先生方、息子が笑顔で学校へ来れるようにと常に気にかけていただいた水梨小学校の先生方、我が子のように接していただく地域の方に、心より感謝いたします。



4 教職員からのメッセージ

教諭 小山 千賀子

私は、震災当時、海辺の学校に勤務しておりました。6校時目の授業をしているときにあの恐ろしい地震が起きました。それまでに経験したことのない大きな揺れが長く続き、加湿器や花瓶など棚からいろいろなものが落下しました。ロッカーに入れた児童のランドセルが飛び出し散乱しました。簡易に固定したスチール本棚も倒れました。壁はあちこちがひび割れ、落下しました。早く児童を避難させなければと焦る気持ちと、もうここへ戻って来ることはできないだろうという絶望的な気持ちでいっぱいになりました。後で分かったことですが、東校舎は倒壊の危険があると言うことで立ち入り禁止になったほど地震による大きな被害がありました。校庭へ避難した児童の上に粉雪が舞いました。備蓄倉庫の全ての毛布を出しても、凍える児童全員をくるむことは到底不可能でした。数分すると、数人の保護者が迎えに来たので、私たち担任は「高台の中学校へ避難してください。」と伝え、児童を引き渡しました。吹きさらしの校庭にいつまでも児童を置いておくわけにはいかないという思いがありました。

私の後悔はここにあります。私のとった行動は、それまでの避難訓練通りのものでした。しかしながら、ハザードマップで学区の広い範囲が津波浸水区域になっているわけですから、保護者に児童を引き渡すことは、本当に正しい行為だったかということです。学校のすぐ近くまで津波が到達し、私たちは中学校へと二次避難をしました。ここに、一番始めに引き渡した児童が来ていませんでした。中学校の至る所を探しましたがどこにもその姿はなく、家にも戻っていないことが分かりました。さらに、児童を乗せた車は、小学校を出て45号線を走り、幼稚園へ向かったことが分かりました。なぜあのか、学校に留めなかったのか、どうして引き渡してしまったのか、やりきれない後悔が堂々巡りを続けました。その夜遅くなって、近くの避難所に救助され運ばれた児童が、傷だらけになって連れて来られました。児童は九死に一生を得ました。けれども、児童が死と隣り合わせの恐ろしい体験をしたことに違いはなく、学校に留めていればそんな思いをさせずに済んだのでした。

あの日は、1週間後に卒業式を控えた日でした。小学校最後の授業を最高のものとするために全員が一生懸命練習に取り組む姿に、「明日が卒業式でもいいね。」とその出来映えに談笑した矢先でした。卒業式会場となるはずだった体育館は、遺体安置所となりました。卒業式は諦めるしかない思いながら、校長から「卒業式を行うことはできません。校長と担任とで各家庭を訪問して、卒業証書を渡そうと思います。いいですね。」と言われたときには、前述の児童が戻ってきてから二度目の涙がこぼれました。けれども、中学校に避難した多くの方々が、卒業式をさせてやりたいと体育館の半分を空けてくださり、さらに、中学校が予定していた卒業式の時間を半分にして、その半分の時間を小学校の卒業式に譲ってくださり、ありがたいことに、諦めていた卒業式を行うことができました。他県に避難した児童もおり、全員揃ってとはいきませんが、普段着ながらも胸を張って卒業証書を受け取る児童を見送ることができました。

それまでの私は、大きな地震が来る、そうしたら気仙沼の町の多くが津波の被害を受けることになるだろうという話を聞いても、すぐに避難すれば大丈夫くらいにしか考えていませんでした。ですから、本当にそのやり方で命を守れるかどうかの検討は人任せだったように思います。震災を経験した私にできることの一つは、学校の実態に即した防災計画を立て、防災教育を行うことだと思います。どこにあっても一律の避難訓練をするのではなく、児童の命を万が一の危険から守るために、それぞれの学校ごとの計画があり、そこから学校ごとの実践をするべきだと思うようになりました。そして、もう一つ。あの日、それぞれが、辛く大きな悲しみを背負いながらも、児童の旅立ちを見守り、励ましてくださった多くの方々の温かさに応えられるよう、自分にできることを見付けていきたいと思っています。

震災から2年7か月が過ぎ、現在の勤務校である水梨小学校においては、震災で自宅を流失し転校してきた児童も、笑顔で学校生活を送ることができています。その笑顔がもっともっと輝くよう、まずは、そこから全力で取り組もうと思います。

これまでの数限りない、温かいご支援に心より感謝いたします。ありがとうございました。

5 おわりに

本校は、沿岸部の学校と比べると、建物被害はあるものの震災後すぐに運動会を開催したり、修学旅行を実施したり、震災前とあまり変わらず教育活動に取り組むことができた。たくさんの支援物資や支援活動も受けた。

救援活動に尽力してくださった自衛隊の方々と子どもたちとの交流にみられるように、お世話になった方々に対し感謝の気持ちをもち続けることは、人間として大切なことである。月日が経つにつれて、震災のことは忘れられつつあるが、子どもたちの心の中に残る、あの日のこと、あの時のこと、そして、その後の支援等に対する感謝の気持ちは、大人になってもきっと消えることはないだろう。

また、小規模校で、転入生などめったにない学校に被災した転校生がやってきた。そうでなくても転校生にどう接してよいか戸惑う子どもたちが、被災してきた子どもたちにどのように接するのか心配だったが、それは我々大人の取り越し苦労、思い過ぎだった。被災して転校して来た子どもたちに対しても、その痛みを忘れさせてあげるくらいに接していた。失ったものは多いかもしれないが、得たものもそれ以上に多いものだと思いたい。

学校行事等でいらっしゃる来賓や保護者、地域のみなさんは、子どもたちの笑顔、元気からたくさんのパワーをいただくと帰り際に声をかけてくださる。

最後に我々に課せられた課題は、将来ある子どもたち一人一人の命を、自らの手で守っていこうとする防災教育の充実である。今年度の防災計画マニュアルが本当にこれでいいのか、子どもたちの安全を守るに値するものであるかどうかを常に検証し、必要であれば変更し、訓練に当たらなければならないと考えている。

完全などない、完璧などない。子どもたちの命を預かる学校としては、よりベストな判断、対応が出来るように、教職員が常に研修を積み、知恵をしまり対応することが大切と考えている。未来ある子どもたちのより一層の笑顔のために……。





未来へのメッセージ ～児童と教職員から～

校長 菅原 輝夫

1 はじめに

(1) 本校の位置

新城小学校区は、気仙沼市の西部に位置した丘陵地帯にあり、もともと都市近郊純農村地帯であった。しかし、近年、住宅が建ち戸数が増加している。さらに、20数年前学区東部の東新城地区には広大な宅地が造成された。

(2) 震災時の被害

学区に震災による大津波の被害はなかった。

(3) 震災後の影響

被災にあった方々が学区内に住居を新築している。特に東新城地区は、宅地として造成された所に商店や病院が建設され、一大商業地が形成されつつある。それに伴い震災当時191人だった全校児童が225人に増えた。

また、学区内を国道45号バイパスと国道284号線が通っているため、もともと交通量が多かったが、震災後は復旧・復興のためのダンプ等の通行量が増大している。



桜と校舎（海拔66m）全景

2 子どもたちからのメッセージ

気仙沼の未来をにぎやかに

6年 女兒

今、気仙沼はにぎやかな姿を取り戻そうとしています。震災以降多くの支援物資や、ボランティアなど多くの人のお世話になって元のようになろうとしています。多くの支援にはとても感謝しています。

私は総合的な学習の時間で「気仙沼の未来」について勉強しています。私の考えている10年後、20年後の気仙沼は観光客がいっぱいでとてもにぎやかになっていると思います。私はもっと観光客が体験できるものを増やしたいと思っています。私は修学旅行で盛岡市に行きました。そして自分で「チャグチャグ馬こ」を作りました。それを見るたび修学旅行の楽しかったことが思い出されます。そんな風に気仙沼でも来た人の体験できることがあるといいと思います。私の父母は飲食店を営んでいるので、それに関連のあることはできないかと考えました。私のイメージでは気仙沼の食材を使ったラーメンのめん作りなどもいいと思っています。

「観光客をどう増やすか」、それは私の勉強の目標です。観光スポットを増やす、看板、ポスターなども使って説明していきたいと思っています。震災前の気仙沼も十分ににぎやかでしたがそれよりももっとにぎやかにしていきたいです。

3 教職員からのメッセージ

(1) 人と人とのつながりの大切さ

変わらないものを探す方が大変なぐらい、多くのものが変わった。多くのものを奪い、変えてしまった震災。しかし、この大災害は、私たちに大切なものを認識させてくれた。改めて知らせてくれた。「人と人とのつながりの大切さ」である。

震災を機に、担任していたクラスに「一体感」が生まれた。未曾有の危機を乗り越えようとする一体感は今まで私が経験したどのクラスよりも強かった。4月21日に学校が再開できたときの喜びは一生忘れられないだろう。

いろいろな方が学校を訪れ支援してくださった。友人、知人、全国の団体、個人、タレント、スポーツ選手、多くの方が私たちとつながり、応援してくれていることが実感できた。つながっていると感ずることがこれほど心強いことなのかと思わされた。人間は大津波や地震などの天災には力では勝てない、悔しいけど自然の大きな力には勝てない。しかし、「人とつながること」で、この「困難な状態」には十分打ち勝ってきていると思う。わがままを言わず、我慢し、前を向き、頑張ってきた。将来を担う子どもたちにはこの経験を忘れないでほしい。

(2) 「子どもの命を守る」という点では想定外があってはならない

「子どもの命を守る」という点では想定外があってはならないことである。子どもの命を守るという点では妥協せず、あらゆることを想定し、絶対に救うのだという意識をもって計画をし、有事に対応していかなければならない。それが私たち教師に課せられた使命である。

(3) 震災後の防災への取組の強化

震災前までは、地震・不審者対応・火災を想定した三つの避難訓練を行っていた。震災後はそれに加えて「大地震を想定した下校時安全訓練」と「休み時間や清掃時間に地震が起きたことを想定した避難訓練」を追加した。休み時間における想定では、訓練時刻を児童や教師に教えないで行った。さらに、防災マニュアルの見直しを行い、防災マニュアルを作成した。



スポーツ心のプロジェクトの支援1



スポーツ心のプロジェクトの支援2



下校時における避難訓練1



下校時における避難訓練2



集団一斉下校の様子



下校時における避難訓練3

(4) 非常災害時における新城小学校の対応についてを全家庭に配布

非常災害時において、次のようなプリントを作成・配布した。

自宅にいる時や休日に災害が発生した場合、登校・下校途中に災害が発生した場合、そして、学校にいる時に災害が発生した場合における対応を①津波注意報②津波警報③大津波警報④震度5以上の地震が発生した場合に分けて、学校の対応を示した。

このプリントをもとに、各家庭で話し合って避難する場所について約束を決めておくように依頼した。児童が学校で生活する時間はおよそ20%しかないということから、「津波てんでんこ」で避難することをお願いした。話し合った結果は用紙に記入し見えるところに張っておくことを各家庭にお願いした。

(5) 継続的な心のケア

震災後すぐに臨床心理士の今出雅博先生（三重県チーム）が来校し、全校の児童の様子と学校が置かれている状況を観察し、専門的な立場からの確に分析し、今後の具体的な対策まで示唆していただいた。震災1年目、2年目、3年目の各段階において気を付けなければならないこと、毎年3.11の迎え方などについてアドバイスをいただいた。

また、本校は被災が少なかったため、転入児童が多く、被災により親を亡くした児童、親の会社が被災した児童、仮設住宅に住むことになった児童など、児童を取り巻く生活環境が大きく変化したことで、児童のPTSD（心的外傷後ストレス障害）が心配された。

児童の中には1人であるのが怖くなったり、大きな物音に過敏に反応するようになりたりした。震災時の夢を見る。夜尿などストレス反応が見られた。そのような症状を見せた児童に対しては、今出先生にカウンセリングをしていただいた。

なお、カウンセラーの先生には児童の実態をよく知ってもらうことはもちろん、担任との信頼関係が構築されることが大切である。幸いにも本校では、震災初年度から今年度まで今出先生に定期的・継続的に来校していただき効果を上げている。

また、震災以降休むことなく走り続けてきた教職員の心の状態が心配されたので、今出先生とのカウンセリングも実施している。

現在、表面上は落ち着きを取り戻している児童と教職員だが、これだけの大災害なのでいつ変化が現れるか心配である。阪神淡路大震災の時は5年目にピークがきたと言われている。最低でも5年間の臨床心理士さんの派遣をお願いしたい。

(6) 保護者へのメールによる情報発信

東日本大震災発生時に、電話、携帯電話等の通信手段が不通になった。平成23年度より保護者への緊急時の連絡方法として保護者にメール登録をお願いした。ほとんどの保護者に登録をしていただいた。このおかげで連絡が早く容易になった。

4 おわりに

電気・水道・ガス等ライフラインが完全にストップした状態での避難所での生活は想像を絶するものがあった。電気がないためにストーブが使用できず、とても寒い思いをした。食料も水も毛布も何の備蓄もなかった。そのような巨大地震と大津波に襲われた経験をした児童や教職員にメッセージを寄せてもらった。

最後に、前任校での経験を述べて、おわりの言葉とする。

今回の震災では、電話等の連絡手段が使えない状態が長く続いた。さらに、ガソリンの入手が困難で、教育委員会や保護者との連絡が取れない状況が続いた。その中で校長は様々な場面で判断や決断をしなければならなかった。一つ一つに責任の重さを痛感した。

また、これまで学校教育で積み重ねて行った各種の避難訓練（地震・火災・不審者）が大津波の避難にとっても役立った。「継続は力なり」という言葉があるが、教員の指示により整然と避難することができ、全員が助かったのはこれまでの訓練の成果といえる。大震災の翌日に、児童全員の無事が確認されたとき、本当にうれしかった。

避難所では、「弱者優先」「自分でできることは協力する」の考えで運営を行い、避難民が整然と指示に従い避難していた。支援物資や食事の配布等も整然としていた。

千年に一度という大震災を経験した者として、ここに書かれていることを確実に後世に伝えていかなければならないと思う。

例年行われている行事ができ、元気に活動している児童の様子



第38回ふるさとまつり（平成25年度）



運動会



学芸会



稲刈り

気仙沼市立 月立小学校



ふるさと 気仙沼の再生を目指して

校長 高橋 康

1 はじめに

(1) 本校の位置

本校は宮城県の北端に位置する。学区の地域は昔から八瀬と呼ばれている地域で、南北8kmに広がり、その中央に本校がある。気仙沼の市街地より、北西10kmにあり、標高約200m～600mの起伏を連ねる八森平山・君鼻山・黒沢山・大森山に囲まれた七つの地区が、その中央を流れる八瀬川と松川の溪流に沿って列状に点在している。古い歴史があり、自然環境に恵まれた当地域は、数多くの学習素材に恵まれている。



(2) 震災時の被害

東日本大震災発生時、備品等の落下による破損や校舎中庭の地盤の沈下などの被害はあったが、その他には校舎に大きな被害はなかった。

震災時、子どもたちは全員下校前で学校内に残っていた。地震の揺れが収まった後、子どもたちを一箇所に集め、全員の無事を確認し、保護者や祖父母が迎えにきた子どもから順次下校させた。校内にいた職員も全員無事であったが、停電のために市内の状況が十分把握できず、繰り返し広報無線で大津波が来襲していることを知らされたため、学校内で待機し、津波被害の心配がない職員だけ帰宅させ、心配のある職員は学校に宿泊させた。

震災直後の日から特に心配されたことは、市内から学校が10km程離れているために、移動手段としての車のガソリンの確保であったが、市教育委員会から各学校1台の緊急車両指定と指定車両への10ℓのガソリンの優先的供給という情報を得て、その後の子どもたちの様子や家庭状況の確認、学校からのお知らせなど、学区内外の移動手段の確保に大変役に立った。また、地域の方々からは震災発生直後から学校へ安否の確認やお見舞い、食料や衣類寝具の差し入れなど、たくさんの支援をいただいた。

なお、学校は震災直後の停電に続き、水道も断水した。通水が再開したのは、3月27日の朝、通電したのは翌28日の昼頃であった。水については給水車が来るようになったので、飲料水の確保ができた。トイレの水ははじめ500m離れている旧校舎敷地内にあるプールから水をバケツに汲み、リヤカーで上の校舎まで運ぶ作業を行っていたが、東京消防庁の宿泊所として施設の一部を提供するようになってからは、必要量が追いつかず、消防庁のポンプ車で水を汲み上げてもらい、その水をトイレ用として利用した。新校舎になってから暖房器具等、主要な設備は全て電気がないと作動しないようになっているので、電気の必要のないストーブ2台だけが暖房として役立つだけであった。当然のことながら、電話、パソコン等、電源の必要な全てが停止したままであった。



(3) 震災後の影響

地域は山間部であり、地震や大津波による直接の被害を大きく受けなかったが、保護者が仕事を一時的に失ったり、親戚や知り合いの中に大震災で犠牲となった人がいたり、これまでの海辺の風景が一変したりと、

子どもたちの心には言うに言えない不安が重くのしかかっている様子がかがえた。

このような子どもたちの心に寄り添いながらも、それを乗り越えていけるような資質や能力、態度を育てていかなければならないと思い、ボランティアの方々や支援にお出でになる方々との交流の機会は積極的に受け入れ、人との交流の大切さに気づかせるとともに、何よりも、これまでの日常を取り戻すことを第一に考え、教職員が一丸となり指導を行ってきた。

この地が復旧復興するまでにはまだまだ長い年月を要すると思われる。ほんの小さな一步一步の歩みを着実に、そしてより確かなものにし続けることが重要であり、それがこの地の復旧復興そのものであると考える。

2 保護者からのメッセージ

大震災の教訓を語り継ぎ、未来に伝えていくことの大切さ

PTA 会長（男）

2011年3月11日、私は6歳の長男と大型小売店にいました。買い物も終わり帰ろうとしていた14時46分、「ドーン」という音とともに激しい揺れに襲われました。今まで経験したことのないような大きく長い揺れ、私は長男を抱きかかえ、立ってられずその場にうずくまりました。

店内ではショーケースが倒れ、看板が落ち、そして停電。建物自体が倒壊するのではないかと強い恐怖を感じ、外へ走りました。外へ出てみると、たくさんの人たちが避難しており、駐車場を見ると、車が今にでも走り出すかのように前後に大きく揺れていました。しばらくして地震はおさまり、急いで車に乗り、長女のいる小学校へ車を走らせました。道路は停電のため信号機が消え、避難する人たちのため大渋滞。それでもなんとか小学校にたどり着きました。その後、沿岸部にある大津波。私は市街地にある職場へと向かいました。

東日本大震災よりご支援・ご協力を頂いた日本そして世界の方々に感謝申し上げます。間もなく未曾有の被害をもたらした震災から3年が経過しようとしています。

今、私たちができること、そして、しなければならないとは何でしょうか。まだ苦しんでいる方々の力になること、私たちが毎日精いっぱい生きること、そして、あの震災を忘れないこと。震災に遭わないことが一番幸せなことですが、今だからこそ防災意識を高めることが必要であり、その高い防災意識を保ち、継続していくことが一番大切なのだらうと思います。今日と同じ明日は二度と来ない、昨日より今日が幸せでいられるように、また明日、今日よりもっと幸せでいたい。平穏な日々がどれくらい貴重な時かを知り、日々それを積み重ねていくことが必要だと思います。改めて自然災害の脅威を感じ、かけがえのない命・未来ある子どもたちまでも奪い去った震災を憎く思います。

今、少しずつ元の生活を取り戻した人たちの中には、震災の教訓を忘れかけている人たちがいるのではないかと不安を感じています。地震・津波があったことを覚えているが、震災の脅威、備えることの大切さなど、震災から学んだ教訓を忘れているかもしれません。震災の教訓は、被災した人々だけでなく、すべての人々が忘れてはいけないことだと思います。あの惨事を繰り返さないためにも、全国・世界の人々が過去の震災からの教訓を共有していく必要があると思います。今回、過去の教訓から「津波」とは何かを理解していれば、これほどまでの犠牲者を出すことはなかったのではないかと考えることがあります。昨今、様々なメディアでは、「震災の記憶の風化」などと言われていますが、震災を経験した私たちにとっては記憶の風化はないと思います。多くの人たちにとって東日本大震災は忘れることのできない大きな出来事です。地震の揺れ、そして恐ろしさ、その時の町の風景、匂い、不便な生活は経験した私たちの脳裏に焼き付いています。私たちが経験し、体験したことを未来へ語り継いでいかなければいけないと思います。つらい、悲惨な過去から目をそらし、早く忘れてしまいたいと思う気持ちが、「震災の風化」につながってしまうのではないかと思います。この震災から学んだすべてのことを自分だけのものとしてしまいこんでしまうのではなく、未来に繋いでいこうという思いが何より大切なことだと思います。悲惨な過去を伝えていかなければ、今後、東日本大震災が記憶にない、また、経験していない世代になっていきます。この大震災の教訓を語り続け、未来へ伝えていけば、ひとりひとりの防災意識も向上していくと思います。私たちには東日本大震災を経験したこの教訓を未来へ語り継いでいかなければならない義務があると思います。

最後に、家庭の宝・地域の宝・そして世界の宝である子どもたちの未来が、明るい未来であることを心から強く願います。



3 教職員からのメッセージ

山も風も海の色も 君のふるさと 僕のふるさと ここはふるさと

教諭 白倉 彩枝子

(1) あの日

私は、職員室に一人いた。出張者が多く、職員室の留守番をしていたのだが、(そろそろ1年生も下校かな。)と思った瞬間、大きな地鳴りとともに下から突き上げられるように、学校全体が大きく揺れた。尋常でない揺れに、校長室から慌てて校長先生が出ていらした。これまで体験したことのない状況に、お互いしばらくの間無言だった。しかし、揺れが収まると、校長先生は教職員や子どもたちへの指示に動いた。幸い、1年生も下校前だったので、全校児童29名が学校におり、保護者への引き渡しも全員無事行うことができた。一方、職員室では、夕方になっても家族や家と連絡が取れない教職員がいて、得体の知れない不安と恐怖感が続いていた。その夜、私は、校長先生の車で一旦自宅に戻ったのだが、市街地に近づくと空が赤々と燃えて不気味な様子だったので今でもはっきりと覚えている。そして、翌日の朝、昨日まで当たり前であった美しい「ふるさと」を失った現実に、私はただ呆然と立ちすくむだけだった。

(2) あれから

本校の児童の中には、家族の車を流されたり、家族が仕事を失ったり、身内を亡くした児童もいたが、震災後、私たちは、カウンセラーの先生等にいろいろ教えていただきながら、「心のケア」に一心に取り組んだ。また、これまでの日常を取り戻すことを第一に、授業改善や指導力の向上に向け、今まで以上に努力した。教職員の心が一つになってくると、子どもたちの表情や様子も落ち着いてきた。本校は、学区内で大きな被害がなかったこともあり、比較的早い時期に日常的な学校生活が送れるようになった。

そして、あれから2年目の春。私は、防災主任として、災害から子どもたちの命を守る最前線に立つことになった。初の取組として、地震時の避難訓練を休み時間に「予告なし」で行った。

教師のいない教室以外の場所から、どのように避難すると安全なのかを考えるよい機会となったようだ。次に、担任する3・4年生の学級活動で、地震時の「安全な避難の仕方」を指導した。

保護者の方からいただいた地震時のビデオを見せ、地震が起きた時は、「落ちてこない」「倒れてこない」「移動してこない」安全なところを素早く見つけて避難するということを確認した。

その応用として、「今ここで(多目的ホール)、地震が起きたら、みなさんはどこに避難しますか。」という課題を出したところ、11人中8人が外に避難した。なぜ外に避難したか理由を聞くと、「外なら落ちてくる物や移動してくる物がない。」(実際、本校は屋根瓦が落ちてくる可能性があるのだが…)という答えもあったが、ほとんどは「みんなが外に逃げたから。」というものだった。「みんなが逃げたから」この理由に、私は大きな問題が隠れていると感じた。地震だけではない、最近では竜巻や水害による山崩れなど自然災害が増えている。いつも近くに大人がいるとは限らない。その中で、自分で考え、行動する力を育てることこそ急務だと考えた。そして、その力を育てるには、授業を中心とする学校生活全般を通して、継続的に指導することが重要であると思った。

その後、私のこの思いを、全校児童に伝えたいと考え、朝会で話す機会を作った。「自分で考え、自分から行動する人づくり」これが、防災主任としての指針となった。

(3) そして、これから

本校は、今年度の市内音楽祭で、NHK 合唱コンクールの課題曲「ふるさと」を歌った。

この選曲には、あの日、「ふるさと」を失った気持ちを忘れてはならないという自分への戒めと、思い出いっぱいの「ふるさと」を共に再生していこうという願いを込めた。歌詞の中に『山も風も海の色も君のふるさと 僕のふるさと ここはふるさと』という一節がある。

「ふるさと」を再生し守るのは、人である。

人の命があってこそふるさとである。だからこそ、様々な自然災害から自分の命を守れるように、自ら考え行動することを忘れてはならない。防災主任として、私はこれからも「自分で考え、自分から行動する人づくり」に取り組んでいく。さらに、これからは、学校から一歩踏みだし、地域との連携をさらに強め、地域とともに防災を考えていきたいと思っている。あの時失ったみんなの「ふるさと」を、みんなでもう一度取り戻すために。



4 おわりに

未曾有の被災から間もなく3年を迎えようとしている。各関係機関では創生復興を目指して、真摯な努力が日々継続されている。これからの復興の主体は、現在学校で学んでいる未来の歴史創造を担う子どもたちである。

今、自分の頭で考え、自分の全知全能を傾けて実践する力を備えた次世代の養成こそが私たち大人は課せられた使命であると考えます。

本校のPTA会長は、「大震災の教訓を語り続け、未来へ伝えていけば、ひとりひとりの防災意識も向上していくと思います。私たちには東日本大震災を経験したこの教訓を未来へ語り継いでいかなければならない義務があると思います。」と述べている。

また、本校職員は「ふるさとを再生し守るのは人である。人の命があってこそそのふるさとである。

だからこそ、様々な自然災害から自分の命を守るように、自ら考え行動することを忘れてはならない。」と述べている。

子どもたちには、3月11日に遭遇した東日本大震災の事実を真摯に受け止め、記憶に深く留め、前を向いて歩いて行ってほしい。

そして、未曾有の大震災の事実を未来に伝えてほしいと願う。

ふるさと 気仙沼の再生を目指して



花と笑顔に満ちた学校での学びと地域を誇りにして

校長 熊谷 聖



1 はじめに

(1) 本校の位置

本校は気仙沼市中心部から西に8km、車で15分程の標高130mにあり、岩手県一関市との境に位置する。東北自動車道一関ICから国道284号線を進み、市内に入ると右側、山の中に校舎が見える。学校は、一関市室根町から流れる大川と黒森山、手長山から流れてくる廿一川が交わる場所にある。地域は農山村地帯であり、四季折々の風景は桃源郷の趣がある。

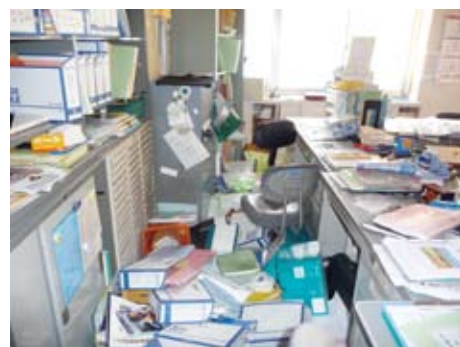
(2) 震災時の被害

震災時は強い揺れが長く続き、立ってられない状態だった。

理科室では、実験器具やビーカー等が落ちて割れ、家庭科室の食器も、図書室の棚にあった図書もことごとく床に散乱した。

<主な被害状況>

- ・校門の石柱2本の内1本が倒壊した。
- ・校庭に直径約1m、深さ約80cmの穴があいた。(以前、井戸があった場所とのこと)
- ・校舎周りの地盤が約70cm沈下した。
- ・ロッカー転倒や物品が落下した。ガラス破損等の被害は甚大。
- ・2階温水器の配管部分破損のため漏水した。階下の職員室が水浸しとなりパソコンや書類が破損した。
- ・音楽室の天井が落下し、使用不可能になった。



職員室



校庭に出現した穴

(3) 震災後の影響

①学校の状況

本校は、気仙沼市の西の玄関口とも言える場所にある。震災後まもなく、国道284号線を100台ほどの消防自動車通過した。東京消防庁の方々である。その後の救援活動、大火事が発生した鹿折地域の消火作業に尽力された。

また、3月15日には、本校校庭に災害派遣の自衛隊が到着した。校庭に入りきらないほどの自衛隊車両が駐車し、自衛隊の皆さんは本校に一泊した。翌朝には市街地に入り、条南中学校に移動したという。

体育館は、避難所にはならなかったが、被災し親戚等のお宅に身を寄せた方のための支援物資の配給場所にもなった。その後、市教育委員会あてに全国各地から寄せられた支援物資(ランドセル、文房具、図書等)の置き場となった。大量の支援物資は、ボランティアとして支援活動をしていた、当時東北大学大学院准教授だった浅沼 宏先生と大学院生数人が泊まり込みで仕分け作業を行い、市内の小中学校や幼稚園に配布していただいた。残った支援物資は、5月の中旬に、



災害派遣の自衛隊車両

学校の体育館機能を取り戻すため、同じ新月地区の月立小学校旧校舎に移された。

②地域の状況

震災後、他地区と同じように停電し、水道が止まった。しかし、ガスはプロパンであり、井戸をもつ家庭もあることから、学校に避難する家庭はなく、各家庭で過ごし、電気・水道が復旧するのを待った。中には、沿岸部で被災した方々が落合地区の親戚や実家の家などに身を寄せていたという。下廿一地区では、被災者25人の方がしばらくの間、親戚宅等に宿泊していたとのことだった。震災後、地区の自治会長さん方は、避難者の名簿作りや自衛隊が運んでくる救援物資の仕分けと配布に奔走したという。

(4) まとめるにあたって

震災からまもなく3年を迎える。市内は復旧・復興に向け、慌ただしさを増している。本校の通学路も工事関係の大型車両が通行し、児童の安全に一層の注意が必要になってきている。学校施設については、校舎内外の復旧工事が終了し、震災前の状態に戻ってきている。児童についても、国内外からの物資支援のほか、楽器演奏や理科実験、サッカー等、多くのボランティアの方々の励ましもあり、学習や運動に元気に取り組んでいる。時間の経過と共に児童の意識の中で震災の記憶も薄れつつある状況にある。そこで、改めて、震災時の状況を振り返り、児童に自助、共助について考える機会をもたせ、未来へのメッセージとしてまとめることとした。

2 子どもたちからのメッセージ

(1) 支援者へのメッセージ

①理科実験教室「ディレクトフォース」のみなさんへ

ディレクトフォースとは、化学、工業系の企業で働き、定年退職するなどして一線を退いた方々が立ち上げた団体である。東京、横浜の小中学校を中心に理科実験教室を行い、理科の楽しさ、ものづくりの面白さを教えている。震災後は、沿岸部の学校を対象にボランティア活動を実施している。今回は、発泡ポリスチレンを使った表札作りやエタノール船、表面張力の実験などをしてくださった。ものづくりや実験に興味津々で、夢中になって活動していた。



エタノール舟

※一部抜粋

2年児童

「りかじっけん教しつをひらいてくれてありがとうございます。すごいと思ったところは、ふねのうしろにエタノールをたらすとすごいスピードに進んだところです。いろいろな実験があったので、もう一回来てほしいと思いました。」



表札づくり

5年児童

「表札作りでは、表札を発泡ポリスチレンで作るのが意外でした。電気コンロで熱しているところを見て、文字がうき上がってすごいと思いました。わたしは理科がまあまあだったけど、少し好きになりました。すごくおもしろかったです。ありがとうございます。」

②キリンスマイルフィールドのみなさんへ

キリンビールグループが3年間で沿岸部の小学校を対象にサッカー教室を開催する支援活動である。元Jリーガーで日本代表としてフランスワールドカップにも出場した秋田 豊さんがコーチとなり、サッカー教室を開いてくれた。児童は、秋田さんらと一緒に楽しく活動することができた。



※一部抜粋

5年児童

「キリンスマイルフィールドのみなさん、サッカーを教えてください」

てありがとうございました。わたしはサッカーが苦手でもこの機会に上手になれました。わたしにとって、最高の思い出ができてうれしかったです。ありがとうございました。」

5年児童

「いっしょにあっきーさんとサッカーをしたとき、すごく楽しかったです。楽しい遊びを教えてくれてありがとうございました。バナナシュートもすごくて、ほくも大人になったらやりたいです。あっきーさんはすごい人だと思いました。ほくもがんばってあっきーさんみたいな人になります。」

(2) 支援に来てくださった方について

被災地の子どもたちを元気づけたいと支援に来てくださる方々は、沿岸部に集中する。本校は、津波の被害を受けた沿岸部から離れた山間部にあり、支援のために来校する人たちは多くはない。しかしながら、震災後、そのような支援活動のお陰で児童は、普段、味わうことができないような経験をすることができた。音楽家による生演奏やアスリートのスポーツ教室、理科実験教室など、貴重な体験をすることで児童は喜びを感じ、将来への夢を広げ、希望を抱きながら前向きな気持ちをもつことができた。支援に来てくださった方々も、児童の純真で素直な心に触れ、笑顔で帰られた。支援をいただいた後、お礼の手紙を送ったが、支援者から「みなさんからのありがとうの手紙を読むのが一番うれしいです。」との返事が寄せられた。支援した方々が、被災者から逆に元気もらったという話もうかがった。全国各地からの心の通い合うご支援に心から感謝したい。

3 地域の方からのメッセージ

下廿一自治会長 熊谷 勝義 さんから震災当時のお話をうかがった。災害に対して、支援する側の立場で備えるべきことは何かを考えさせられた。お話の内容は次のとおりである。

震災当時は、下廿一地区の自治会長だった。下廿一地区では、9世帯25人（大人19人、子ども6人）が親戚・知人宅に身を寄せた。9世帯の内5世帯は家を津波によって流失したり、全壊したりした方々である。残り4世帯は一部浸水だった。中には、陸前高田市からの避難者もいた。まったく予想もしなかった出来事だった。いまでも親戚が同居している状態である。まもなく新居が決まり引っ越し予定だ。震災直後に停電になり、電気が復旧したのは一週間ほどたった、3月19日だった。岩手県境はもっと早く復旧したと聞いた。

体育館での救援物資の配付は、3月22日から始まった。救援物資は当初、自衛隊が体育館に運んだ。必要なものは体育館に来て持って行ってもらうように、全戸に周知するために通知を出した。上廿一地区でも、20名以上が避難したと聞いている。落合小学区は上前木地区、下前木地区（一部）、上廿一地区、下廿一地区の4地区のため、100人程度の避難者があるのではないと思う。その後、住む場所や働き口が見つかったので、奥州市にいった人や東京に行った人もいる。

苦労したのは、支援物資の配付だった。3月22日からは前木文化センターに4地区分の救援物資が運び込まれた。金曜日から土曜日に地区自治会長やお世話役の人が集まって物資の仕分けを行った。この状態が7月まで続いた。7月9日が最終（缶詰、レトルト、米など）となった。

各地区に希望調査を書かせて、その希望を伝えることもした。一方、青果市場に取りに行くようにとの連絡も入り、対応が大変だった。

物資仕分けで心がけたことは、全員に行き渡るようにすることだった。きちんと数を確認して数えて配付することにした。はじめは被災者のみ渡るようにしていたが、徐々に物資の量が増えて分けきれなくなり、全戸に通知をして、避難者だけでなく全員に取りに来てもらった。

停電時は、食事が大変である。水もポンプがないと動かない。水は当初通じていたが、水源濾過池の水を取り入れる機械が壊れたのでしばらくして出なくなった。市の職員が避難者全員の名簿をつくった。物資仕分けにしても、名簿づくりにしても、人数が必要になる。地区の人たちは、知り合いの安否を確かめに出かけるため、人手が不足してしまった。

今後は、災害発生時に対応できるような地区全体の体制づくりが必要であると考えている。

4 教職員からのメッセージ

教諭 榎木 千枝（1、2学年担任）

（1）全校学級活動

目 標：東日本大震災で被災した気仙沼の様子を知り、今後の災害への備えの在り方について考える。
授業日：平成25年10月30日（水）5校時

（2）授業の意図

落合小学校は、東日本大震災で津波の被害は免れたが、校舎には深刻な被害があった。震災から約3年が経過し、修理・修繕され、現在はどれも、元通りに戻っている。

また、気仙沼市内の様子を見ても、壊れたり汚れたりした建物が解体されたり片付けられたりして、どこが津波の浸水域だったのかが分かりにくくなっているところもある。震災を風化させず防災に生かすことが求められているが、震災の爪痕が分かりにくくなってきた今、子どもたちに、震災を経験した気仙沼市の被災時の様子を教えたり、これからについて考えさせたりする学習が必要になってくると考え、全校児童14名を対象に学級活動を行った。



震災直後



2013年11月



震災直後



2013年11月

（3）授業の展開

はじめに、東日本大震災の日時、「地震・津波・火災」が起こったことについて確認し、気仙沼市内の小・中学校の校庭にも、たくさんの応急仮設住宅（以下仮設住宅）が建てられていることを確認した。

次に仮設住宅の間取りについて資料で紹介した。児童はスペースが狭く、物を置く場所が限られていることに気付き、自分の生活と比べながら仮設住宅での生活の様子について考えていた。その後、平成25年防災功労者として防災担当大臣から表彰された三重県尾鷲市光が丘の「そばこ会」の取組や、東日本大震災の時の落合の様子を子どもたちに紹介した。

最後に、気仙沼の津波の歴史について伝え、今後の災害にどのように備えていきたいかを児童に考えさせた。



〈三重県尾鷲市光が丘「そばこ会」の取組み〉 ※「みえの防災大賞」選考理由から抜粋

「そばこ会」は、山間部にある新興住宅地にある。自治会活動と自主防災活動を連携し活動している。東日本大震災を受け、山間部という地域特性を活かして、津波による被害が予測される沿岸部からの避難住民を地域で受け入れることを視野に、沿岸地域の自主防災組織と連携した「山が海を助ける」訓練を実施している。今後、他地域への波及が期待されている。

（4）児童の感想

- （多数）「仮設住宅は、小学校より中学校に多く建てられているということを知りました。」
- （1年児童）「仮設住宅に暮らしている人は、早くおうちが建てられたらいいなと思いました。」

- （5年児童）「仮設住宅は狭く、自分たちの家のように広々とできないから大変だと思った。」
- （4年児童）「仮設住宅が不便だということが分かりました。そばこ会の人みたいに災害に備えていきたいです。」
- （6年児童）「仮設住宅がたくさんあることが分かって、多くの家が流されたんだなと思いました。これから地震や津波が来るときに備えて、いろいろな物を用意したいと思います。」
- （6年児童）「小学校の校庭に仮設住宅を建てると、校庭で遊ぶことができなくなるから中学校に多く建てられたことが分かった。でも、どちらの校庭も狭くなってしまうから、早く復興すればいいと思う。」



（4）授業を振り返って

今回、学級活動の授業をしてみて、東日本大震災の日時や「地震・津波・火災」が起こったことは、全児童が知っていた。だが、あと数年で、震災を経験していない子どもたちが入学してくることになる。震災を風化させず防災に生かすためには、震災による被害状況や被災した市民の生活等について、震災を知らない子どもたちに教えたり、考えさせたりしていくことが大切ではないかと考える。仮設住宅については、「仮設住宅」という言葉については全員が知っていたが、落合小学校の校庭には仮設住宅はなく、どこにどのくらい建てられているのかについては知らない児童が多かった。仮設住宅は、市内の多くの小・中学校の校庭に建てられている。自分たちと同じ小学生でも、被災して仮設住宅で生活している人がいるのだということを子どもたちに知らせ、共感的な心を育んでいきたい。

また、授業では、震災直後に果たした落合小学校や落合の保護者や地域がどのようなことをし、どのような役割を担ったのかを知らせ、日頃の備えや、「山が海を救う」として活動している他地域の先進的な取り組み等についても教えたり考えさせたりした。「山沿いの地域だから被災の度合いが少なくてよかった」ということではなく、次の災害に備えたり、災害が起こった時に、自分にできることを考えたりできるような児童の育成を目指し、教材研究や実践授業を行っていきたい。

5 おわりに

本校は、児童数の減少が著しいことから、気仙沼市義務教育環境整備計画に基づき、平成26年3月31日をもって閉校し、新城小学校と統合する。昭和22年に新月村立落合小学校開校から67年、明治7年の新城月立小学校落合出張所のころを含めると138年という歴史と伝統のある学校である。受け継がれてきた教育活動の一つ一つに学校と地域の絆の深さを感じる。また、保護者の皆様や地域の方々の学校に寄せる思いには並々ならぬものがあり、植栽や設備など、惜しみないご協力をいただいていたことに対し、改めて感謝申し上げます。

閉校する落合小学校をどのように使ってほしいか、全児童14人に聞いてみた。結果は下のとおりだが、その願いの一つ一つから、学校での豊かな体験活動や震災での体験等を踏まえた、優しさと未来に向けた希望が伝わってくる。

花と笑顔に満ちた学校での学びと地域を誇りにして、これまで育んできた力を存分に発揮し、新しい学校で確かに学び、大きな花を開かせることを心から願う。

【落合小学校の校舎や校庭をどんなことに使ってほしいですか？】

- 避難場所に使ってほしい。（災害に遭った人たちの住む場所がないから）
- 体育館などに支援物資を置いて困った人にあげる。（被災した人たちに支援物資を送って助けたいから）
- みんなが楽しく遊べる場所にしたいと思う。
- ブランコなど遊具を増やして公園にしたいと思う。
- 夏休みに子どもと地域の人が集まって遊ぶ。（新城小にいくと地域の方と会う機会が減るから）

- どこの地域の人でも自由に出入りできるようにする。
- 校庭をグランドゴルフ（ゲートボール）ができる所にする。
- 田んぼや畑で米作りや野菜作りの勉強をする場所にする。
- 図書室を残したり、花を植えるために花壇を残したりする。
- 地域の人たちや仮設住宅の人たちが交流するために、花壇にたくさん花を植えたり畑で野菜を育てたりする。（花作りが好きな人が仮設住宅に住んでいたらなかなか作れないから）
- 観察池があるから、地域の人とふれあいながら勉強する。
- 林間学校に使う。（木がたくさんあるから）
- 野外活動をする人たちの泊まる場所にする。（落合小学校は自然が豊かで住み心地がよいと思うから）
- 校舎や体育館、プール、校庭とかを地域の人や誰でも使える場所にすればいいと思う。



平成25年度落合小学校 在籍児童
「花いっぱいコンクール最優秀賞の花壇の前で」



ふるさと階上を担う子どもたちへ

校長 小野寺 正司

1 はじめに

(1) 本校の位置

本校の児童数と学級数は、平成25年5月1日現在全校で228名、10学級であり、気仙沼市の中部の沿岸部、標高15mに位置している。学区の東側は三陸復興国立公園の南端、景勝地岩井崎・お伊勢浜を含む海浜地帯、西側は丘陵地帯で中央部は起伏が少なく農地と居住地域になっている。また、学区の中央には、国道45号線とBRT線が縦断している。震災後、仮設住宅等が国道45号線の西側に集中して建設され、集団防災移転事業、三陸自動車道の建設などの復興作業に携わる大型トラックが行き交い、通学路の交通量が大幅に増加している状況である。

(2) 震災から今日まで

東日本大震災により学区の沿岸部は、壊滅的な被害をうけた。児童の家屋の被災状況は、全壊45戸、半壊51戸であり全体の半数にも及んでいた。児童の被害については、当時6年男子2名が引き渡した後に津波に流されたが、地域の方に救助された。しかし、母親を亡くした子ども2名（共に母子家庭）、祖父母、親戚等が津波の犠牲となっている児童が十数名いる。

被災した児童に対する心のケアについてであるが、被災以来定期的に「心と体の健康調査」を実施し、配慮を要する児童に関しては、学級担任、スクールカウンセラーと保護者面談等を行い、観察を続けている。風の強い日や余震により、PTSDやフラッシュバックを起こしたり、怖い夢を見たりする児童が数名いるが、他の児童も含め長期的な観察や配慮が必要である。

また、家庭環境の急激な変化、復興事業の進捗に伴う地域環境の大幅な変化、被災した世帯の復興状況のスピードの違いなどに対応できない児童もいる。教職員の相談技術の研修、スクールカウンセラーの増員など、心のケアに関する相談体制の充実を図る必要がある。

2 子どもたちからのメッセージ

(1) 笑うことが楽しくなった

階上小学校も各地からたくさんの支援をいただいた。その中でも震災直後から、子どもたちの心の復興に携わっている神戸の「アトリエ太陽の子」の支援がある。平成23年4月26日、市内にはまだ瓦礫が残っている時、学校の校庭で巨大鯉のぼりの共同制作を企画していただいた。また、同年10月20日には、とびっきりの笑顔の横断幕制作、それから卒業時には「命の一本桜」の取組を企画していただいた。絵画という表現活動による手法が、子どもたちの心のケアに果たした役割は非常に大きいものがある。

太陽の子のみなさんへの感謝の手紙の中に、「笑うことが楽しくなった」とか、「今度は私たちの笑顔でありがとうと言える時が来ることを信じている」と書いた子どもがいた。

「笑顔をくれてありがとう」

4年 K・M

アトリエ太陽の子の方々に来てくださって、全校のみんなで大きな桜を書いたときは、とても楽しかったです。あの時みなさんは、私たちに笑顔と元気をくれました。私はみなさんが来てくださった時から笑うこ

とが楽しくなりました。

アトリエ太陽の子のみなさん、何度も何度も私たちのために支援に来ていただき、ありがとうございます。

遠くからわざわざ来てくださり、とても大変な想いをしていると思いますが、今度は私たちが、（私たちの笑顔でありがとうと言える時が来るといいなあ）と思います。

アトリエ太陽のみなさん、私はあなたたちが大好きです。



階上小の笑顔たち



（２）神戸で「人と人のつながりの持つ強さ」を学ぶ

震災後、子どもたちは支援という名のもと様々な地域に招待されることが多くなった。階上小でも九州長崎や北海道への招待を受けた子どもがいた。中でも18年前の被災地「神戸」に招待された子どもがいた。神戸についての第一声が「信じられない」である。大都市神戸の町並みや復興の様子を説明される中で、人と人のつながりや全国各地からの協力の意味を真剣に考えることができ、震災前のふるさと階上の様子を思い浮かべながらも、10年後、20年後のふるさとを創るのは自分たちであるということに気づいた子どもがいるので紹介する。

気仙沼と神戸

6年 O・M

「信じられない」

私が、神戸に着いて、1番最初に口にした言葉でした。私は、今年の夏休み阪神・淡路大震災にみまわれた被災地神戸に招待されて行ってきました。昨年、地元の「さかなの駅」という商店街が募集した作文コンクールに、私は、作文を応募しました。私の住む階上は、三陸復興国立公園になっている岩井崎があり、「日本の快水浴場百選」に選ばれたお伊勢浜海水浴場もあります。

リアス式海岸の美しい観光地でした。その階上がある気仙沼市は、日本有数の港町です。サンマやカツオの水揚げはもちろん、サメの水揚げは日本一。



養殖業も盛んで、階上地区にも、ワカメやのり、ホタテなどの養殖施設が多くありました。家族が、水産加工会社に勤めているという友達もたくさんいました。

しかし、その気仙沼、階上の海が、大地震で起きた大地の変動により、これまでに経験したことのない大津波が襲いかかりました。夏になると、たくさんの人でにぎわった御伊勢浜は、ガレキ置き場になっています。友達と遊んだプロムナードセンターの公園はありません。

元気な野球部のお兄さんたちがいた向洋高校は、違う場所に移り、誰もいない建物だけが残っています。学校でも参加していた「荒磯祭り」の会場へ続く岩井崎への道は、ガレキを乗せたたくさんのトラックが行き交っています。



この大きな被害にあった気仙沼ですが、みんな少しずつ前に進もうとしています。「さかなの駅」は水産関係のお店の人たちが造ったお店の集まりです。その「さかなの駅」が主催した第1回の作文コンクールを開催しました。「お魚をおいしく、たくさん食べよう。」という主旨の作文コンクールだったと思います。私は、作文に学校で体験している「ワカメの養殖」学習について書きました。もちろん、震災前と同じ活動は

できません。海岸には、危なくて行けませんし、船にも乗せてもらえません。しかし、階上漁業協同組合の人が学校に来て、海での作業のことを話してくれました。そして、ワカメの挟んである網を持って来てくれて、陸上での刈り取り体験や、家庭科室での塩蔵ワカメ加工体験をさせてくれました。階上のワカメは懐かしい海の香りがして最高の味でした。

さらに、岩手県一の関市での植樹体験をしたことも書きました。5年生の時の野外活動の取組の1つです。そこは「ひこばえの森」という名前でした。切り株から出でくる、新芽を「ひこばえ」というそうです。名前の由来や名前に込められた願い。そして、離れた山と海とが、深く結びついていることなどを丁寧に話していただきました。

その作文がコンクールで優秀賞になり、今回の神戸への招待へとつながることになります。神戸は、今から18年前大地震にみまわれ、たくさんの家や道路、建物が崩壊し、多くの命が失われたそうです。気仙沼と同じように大震災で多くの被害を受けたところです。しかし、現在の街は、高層ビルがたくさん建ち並び、大きな神戸港や阪神高速道路が通っています。とても大きくきれいな街でした。初めて神戸の街を見たとき、私は自分の目を疑いました。

「信じられない。」

来る前に聞かされていた大震災の跡などどこにも見られません。（本当にここで、大きな地震があったのだろうか。大きな火事が起こり、多くの建物やたくさんの人々の命が奪われたところなのだろうか。）目に写る街並みは、そんなことは信じられないくらい美しいのです。がれきは見あたらずプレハブの建物などここにもありません。私は、神戸の街を見ながら、気仙沼を思い出していました。

今の気仙沼は、震災から2年半しか経っていないということもありますが、がれきの焼却処理が24時間行われています。また、津波の被害を受けた場所では、家や建物などの土台が残り、空き地に草が生い茂った状態です。

（10年後、20年後、気仙沼もこの神戸の街のように、美しくなることができるのだろうか。）と不安に襲われました。きっと、神戸の人たちも震災後はたくさんの不安に襲われたことと思います。その神戸の街が、ここまで復興することができたのはなぜなのでしょう。私は、人と人とのつながりが原動力となったからではないかと、お話を伺っていて思いました。神戸の人たちは、生活するためには働く場所の確保が必要だ、と考えたそうです。そうして、地域住民の方々も参加しての協議会を繰り返し開いたそうです。その結果、神戸市の協力のもと震災からわずか、4か月余りで、仮設店舗の村が完成したそうです。仮設店舗を計画した人たちや、その計画を実行した人たち、運営・設計に至るまで携わった多くの人たちのつながりや協力があったからこそ、こんな短い期間で完成できたことだと思いました。

それから、全国の人たちからの「たくさんの優しさと励まし」があったからだとも思いました。

私自身も全国から寄せられた支援物資をたくさんいただきました。ライフラインが復旧せずのお店も閉まっていた頃、おにぎりやパンがたくさん届きました。また、文房具や手作りの手提げバックなど、心のこもった物をたくさん届けていただきました。

さらに、ボランティアとして、全国各地からたくさんの方々に来て、がれきの処理をしてくれたり、津波でどろだらけの家の掃除をしてくれたり、たくさん助けていただきました。また、私は、今回神戸に行くため行きと帰りの夜に車中泊をしました。車中泊は、バスのアクセルの音や揺れなどでなかなかねむることができず、肩や背中も痛くなってとてもつらかったです。夜行バスでボランティアに来ていた人は、もっとつらかったと思います。それなのに、遠い気仙沼まで来てボランティア活動をしてくれました。私は、改めてとてもうれしく、ありがたく思いました。



神戸の街にも、たくさんの優しさが届いたと思います。全国からの優しさや励ましがあったからこそ、神戸の人たちも「つながり」と「協力すること」ができたのだと思います。そうして、復興への第1歩を踏み出す力をもつことができたのではないかと思います。

最後に、神戸では、震災後子どもたちの意見も聞きながら復興を進めたそうです。そのため、神戸市内には、公園などの遊べる場所がたくさんありました。公園のある街は、とても楽しそうでした。この機会にさまざまな年齢の人たちの意見を聞き、それぞれの年齢の人たちが必要な施設の計画を考えることも大切だと思いました。

私が神戸から学んだことは、「人と人とのつながりのもつ力の強さ」です。協力は、復興に欠かせない原動力だということです。私の住む街、気仙沼の復興はまだまだです。しかし、気仙沼も10年後、20年後には、震災前の街並みを超えるようなすばらしい街に復興しているはず。そして、そんな街に復興させていくのは自分たちだと思いました。今は、小学生の私ですが、10年後は22才、20年後は32才です。人とのつながりを大切にし、感謝の気持ちをもちながら多くのことを学んでいきたいと思いました。たくさんの人と出会い、意見を交わしていきたいと思っています。そして、大好きな気仙沼の復興の力になっていきたいです。



3 保護者からのメッセージ

(1)「PTA 会報・平成24年3月特別号」から

階上小のPTA広報部では震災後、「この一年、様々な苦労を乗り越えてきたことや感じたこと、そして、喜びを会員みんなで共有し合えるような記録を残そう」という合言葉のもと震災直後の保護者の項を残していた。震災後の今だからこそ記録を残し、未来への教訓を伝えようと取り組んだ保護者の取組を紹介したい。(※学年は、平成23年度の学年です)

◇1年保護者

3月11日、自宅の庭先で、ものすごい勢いで瓦礫を飲み込み、高さを増しながら国道45号線を越えてくる真っ黒な津波を目撃し、家には危ないと思い避難しました。津波の恐ろしさ、余震の恐ろしさに震える毎日。子どもたちも津波を見たためか、薄暗くなるとパニックになりました。私も震えが止まらずに不安な毎日でした。川に水を飲みに行ったり、川で洗濯もしました。水や電気の貴重さが分かりました。自分の命、家族の命を守れたのですから、人に感謝することを忘れず、一歩ずつゆっくり前に進もうと思います。笑顔で・・・。

K・E



◇2年保護者

ちょうど帰ってきた時に地震にありました。あと5分遅かったらと思うとゾッとします。大きな揺れの中で親子で必死に外に出ましたが、途中で足がもつれて転び、痛さも分からず逃げました。窓ガラスは外れて落ち、家の中はメチャメチャでした。家の前の道路に車でみんなが逃げました。お父さんに危ないから「車の中にいろ」と言われ、子どもと一緒に車の中にいました。強い余震の中で「どうしてこんな日に雪が降るのだろう!」とぼんやりしながらどうしようもない気持ちに襲われたのを覚えています。この地震のためにすべてが狂ってしまうとは考えもしませんでした。

S・S



街がなくなり、道がなくなり、多くの人々が亡くなったと知った時は、本当に涙しか出ませんでした。家も家族も無事でしたが、悲しい日々が続きました。強い余震のためにすっかり頭の中に「津波」という文字が浮かび安心して過ごせませんでした。それは子どもも同じだったと思います。言葉に出さなくても、ガレキの山、壊れた車、あちこちで聞く「津波の怖さ」から考えると誰も安心して過ごせていたかと言うと、そうではなかったと思います。

でも、全国各地から届く物資に「がんばってください」の一言が、家族みんなの心に響いたような気がします。今でも部屋に飾ってあります。「決して一人ではない。応援しています。」と書かれた「うちわ」。学校からの物資の一つですが、とても心に響きました。全国の子どもたちみんなが応援していると思うと、大人の私まで励まされました。その中で学校の行事、運動会、学芸会など小さかったけど少しずつ前に進んでいる様な気がして、嬉しく思いました。ガレキの山など、すっかり片付いてきれいになりましたが、震災前のように安心して生活できるようになるまで、何十年とかかると思います。子どもたちは大変な思いをしたかもしれませんが、これから何十年と先へとこの震災で経験したことを生かして、いろいろなことに対して目を向けて行ってほしいと思います。「辛さ」「悲しさ」だけでなく、自分たちの生活の中に取り入れて、前を向いて歩いて行ってほしいと願います。



4 教職員からのメッセージ

子どもの日常生活を考えると、学校にいる時間より家や地域にいる時間の方が圧倒的に多いにもかかわらず、学校にいるときだけの防災教育を考えていた。登下校中、休日家に一人だった時、夜間時に大災害が発生したときなど様々な場面での身の対処の仕方を学ぶ必要がある。

そこで、階上地区が取り組んでいる「地域と連携した防災教育のあり方」について紹介する。

(1) 地区防災教育推進委員会の設置

学校教育の中だけでは、児童生徒の防災教育は限界がある。

そこで昨年度は、階上中学校が中心となり、階上中学校区防災教育推進委員会を立ち上げ、地域の防災教育の推進に力を入れてきた。本年度からは、防災担当主幹教諭も事務局の一員として加わり、会の名称も変更した「階上地区防災教育推進委員会」として、防災に関する企画・立案・運営に携わってきた。

その委員の構成メンバーは40名程であり、各地区自治会長連絡協議会長や振興協議会長、防犯協会会長、青少年育成会会長、消防団第七分団長、婦人防火クラブ長、市危機管理課、公民館長、駐在所長、各小・中学校長、父母教師会長などの方々で組織されている。

検討事項としては、防災意識の高揚・減災対策の推進、危険箇所の調査・把握、災害発生時の自助・共助体制作り、学校で行う防災教育への支援・協力などである。自治会長の防災意識が高められれば、新たな活動やシステムが生まれ、これまで以上に地域の人々の防災教育に対する意識も高められると考えた。また、学校・地域・行政機関が共通した課題や話題を持ち、よりよい解決策を見出すことにより、児童生徒一人一人が地域の為に大切な担い手であることを実感させていくことができる。

(2) 地区の地震・津波対応マニュアル作成を

階上小・中学校には、各校独自の防災マニュアルがあり、それを基にして避難訓練や防災学習を実施している。しかし、教員や児童・生徒の行動に共通していない箇所がある。そこで、両校の防災マニュアルを協同で見直し、災害の状況に応じた避難の仕方や教職員の配置や児童・生徒の避難行動など、共通の対応ができるように再考をする機会を設定した。

次に、階上地区は、気仙沼市地域防災計画をもとに災害時の行動を判断しているが、地区としての防災マ



階上地区防災教育推進委員会

マニュアルを作成していないので、小・中学校のそれと比較・検討しながら階上地区独自の防災マニュアルを作成していく事が大切であると考えた。その作成のためには、階上の地形・自然の調査、公共施設や民間施設などへの訪問、地域の方への取材などを通して地域を知り、その上で防災マニュアルの作成していかなければならないと考える。そうすることで、階上地区全体の避難行動の基準が明確になる。

(3) 地区防災訓練の内容の充実を

階上地区防災教育推進委員会の活動の一つとして、地域住民の防災意識の高揚がある。

各自治会には地区避難訓練があるが、地区の避難訓練に対する地域住民参加意識があまり高くなかった。そこで、両小・中学校と自治会がこれまで以上の連携を図り、住民参加型の避難訓練の体制作りが必要があると考えた。

そこで、防災担当主幹教諭と両校の防災主任は、防災教育の先進地区の実践事例を調べたり、最新の防災教育研修会等に参加したりしながら、新たな防災訓練の方法や内容を紹介した。また、毎月1回階上公民館を会場にして行われる階上地区自治会長連絡協議会にできるだけ参加し、防災教育に関する小・中学校の取組の様子、注意報や警報発令時の対応などの話題を提供している。



休み時間の避難訓練の様子



授業参観での防災教育の授業の様子



児童引き渡し訓練の様子



中学生による防災教育の授業の様子



右：防災カルタ 左：防災紙芝居

(4) 防災便りの発行で地区の共通理解促進を

本年度から、小・中合同で防災便りを地域内全戸に発送している。定期的な発行までには至っていないが、月1回は発行し、季節や時期に沿った防災便りを発行し、保育所や小中学校の防災活動、地域の自主防災活動を紹介し、地域住民の防災意識を高めていくことができるのではないかと考えた。

これらの活動を通して、地域に住む人々の命は地域住民一人一人の手で守るという防災意識を高めていきたい。また、防災教育だけの関わりだけでなく、地域の行事や活動に常日頃から親子共参加していくことが大切であると思う。つまり、それらの活動を通して、地域とのコミュニケーションを図る事がこの地域で最も必要な事ではないかと考えた。

階上地区防災だより

共に！

子ども達と一緒に！ 防災訓練を！！

日中は過ごしやすいものの、朝夕冷え込む日が多くなってきたこの頃、皆様にはますます訓練の日とお喜び申し上げます。

さて、通り第2回階上地区総合防災教育推進委員会が行われました。話し合いの内容は、11月2日(土)の階上地区防災訓練についてでした。この日は気仙沼市津波総合防災訓練の日にもなっております。また、今回、階上小・中学校は授業日とし、全員がこの訓練に参加します。さらに、階上中学校で家族への児童・生徒引き渡し訓練を行う予定です。詳しい内容は、下記を御覧ください。

ぜひ地域の皆さんの多数の御参加と御協力の程よろしくお願い申し上げます。

階上地区防災だより(令和5年11月号)にて

1 日時 平成28年11月2日(土) (雨天決行)

地区毎の避難訓練 : 9:00~10:45
児童生徒引き渡し訓練 : 13:55~15:00

2 訓練内容

【午後】地区毎の避難訓練

- 自宅から避難所へ避難する。
- 各地区自治会長さんを中心に、防災訓練(4学割)を行う。
- 地区ごとの防災訓練終了後、児童・生徒は一緒に学校に集合する。(小・中学生は小学校、中学生は中学校は)
- 各学割毎に防災に関する授業を受ける。

時刻	活動(指示)	行動	担当者
9:00	地震発生	数が揃ってこない安全な場所へ避難	階上地区住民
9:05	防災無線で避難指示	近くの一次避難場所へ移動 ※指定避難場所不適合時、 必要時持ち出し袋や必要な物 を持って移動	※階上地区小・ 中学校職員 氏、それ以外 の一次避難場所 は対応いたしません。
9:30	各地区毎の活動	自治会長さんの指示で地区毎 に活動する。	

-4-

小中合同防災だより

(5) 教訓として

防災に関する実践を通し、次のことを伝えたい。

- ①学校が地域との関わりを更に生かした防災教育を推進し、保護者だけでなく、地域の住民も巻き込んだ防災活動を展開することで、共通理解が図られ、地区住民の方とも繋がっていけると確信できた。
- ②学校として、地域に対する防災教育の役割が十分果たせるようにするためには、防災に関わる研修等に積極的に参加し、当学区である階上地域に最も適した防災教育を今後も展開する必要がある。

5 おわりに

～ふるさとを大切に子どもを育てるために～

現在階上地区の瓦礫処理場では、昼は他県ナンバーの大型トラックが行き交っている。夜になると、大型プラントは、あたりの暗闇を引き裂くかのように煌々と明かりを灯している。また、集団防災移転事業や防潮堤の三陸縦貫道の工事、向洋高校新校舎建設などハード面の復興は進んでいる。この光景を子どもたちは、どんな目と心で眺めているのだろうか。

平成25年6月、階上地区町づくり協議会が設立されてから、震災後の地域をどのように復興させるか地域の力が集結されている。そこに小学生や中学生・高校生が考える未来、地域に対する夢や希望を取り込むために、「第1回階上町づくり子どもフォーラム」(平成25年12月)を実施する。対象は、小学校高学年、中学生であり、そのうちの何人かは、10年後、20年後の地域活動の主役となっているはずである。そこで、今必要なのは、防災・減災に関する安全教育や、今回の大震災で得た教訓を次世代に伝えるというソフト面での復興であると思う。

ふるさと階上を大切に子どもが育ち、100年後の子孫たちにとって津波による犠牲者がでない地域になってほしいと願うばかりである。



震災からの復興に向けて

校長 佐藤 幸弘

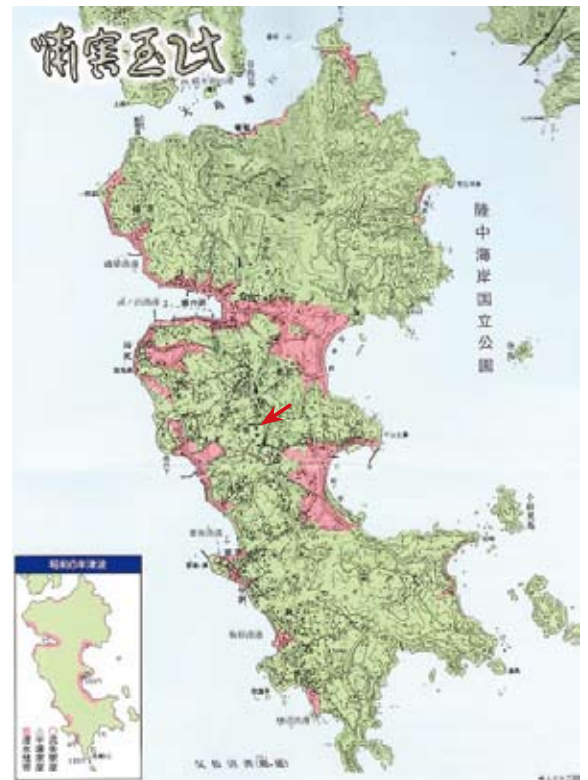
1 はじめに

(1) 本校の位置

大島は気仙沼湾の入口に位置し、水上不二が「緑の真珠」と詠った海の青さに木々の緑が映える自然豊かな島である。本校はその島の中央部に大島中学校と並んで立地している。

(2) 震災時の被害

東日本大震災では島を二分する大津波が襲来し、沿岸の地域は壊滅状態となった。(図中の地図の赤い部分が浸水区域) 被害者も少なくなく、その後は、気仙沼湾の火災が島の北部に延焼、亀山の山頂付近まで燃える大火災となった。ライフラインが断たれ、水、電気、食糧補給、交通手段もない状態で、島民約600人が大島小学校の体育館で一週間以上、避難生活を送ったと聞いている。また、米軍の「トモダチ作戦」でガレキが撤去され、自衛隊が、ヘリで本土まで被災者を輸送する他、世界中から支援を受けてきた。



(3) 震災後の影響

震災直後から現在に至るまで、全国から多くの支援があり、支援物資や心温まるメッセージ等を、数多くいただいている。特に、目黒区立駒場小学校、大田区立中富小学校などをはじめ、全国の多くの学校と交流を継続できていることは心強い限りである。

2 子どもたちからのメッセージ

震災を経験して

6年 M・S

震災が起きた3月11日の午後、私たちはお楽しみ会の話合いをしていました。地震が起こり、最初はどうなっているか分からなくてとても不安でしたが、自衛隊や米軍の方々の支援のおかげで、不安だった気持ちが軽くなりました。その後も全国の皆様からたくさんの温かい励ましの手紙をもらいました。写真教室・勉強会など大学生の方々との交流の機会もあり、今でも勉強会には欠かさずに参加しています。他にもたくさんの文房具、うどんや食料など、全国からたくさんの支援をいただき、感謝の気持ちでいっぱいです。東京の駒場小学校との交流や神戸の方々とのキャンプでは、新しい友達がたくさんできました。震災から2年半が経過しましたが、私たちは復興に向けていろいろなことを頑張っています。去年は、総合的な学習の時間で大島の海藻を使ったそば作りや大島のイメージキャラクター作りをし、全国の方々に食べてもらったり、知ってもらったりできるような工夫をしました。今年も、大島の海をテーマにホタテの養殖や料理、ホタテ

の生態を調べたり、大島のパンフレットを作ったりしています。まだ、完全に復興してはいないけれど、これからも復興に向けて頑張りたいです。

ご支援いただき、ありがとうございます

6年 S・Y

震災が起きてから、いろいろなことが変わりました。大事なものが全て流され、悔しい思いと悲しい思いがありました。でも、友達や家族、学校の先生、地域の皆さんに温かい言葉をかけていただきました。だから、少しだけ元気になってきました。そして、全国からこの大島に来てもらい、支援物資だけでなくたくさんの勇気ももらいました。僕たちのことをとても考えてくれました。本当にうれしかったです。今でもたくさんの友達が来てくれます。僕たちを心配してくれる人のためにも、頑張らなければと思います。このことは、僕たちが大人になったとき、子どもたちに伝えなければならないと思います。



全国からの支援物品 砂川市・本田様より

人は、一人の力で生きているわけではありません。周りの人たちの力で生きているということを忘れてはいけないと思います。そして感謝の気持ちを持ち続けたいです。この二つを忘れないように、これからも頑張りたいです。

いろいろなご支援をありがとう

5年 K・A

震災から2年8か月が経ちました。今も私は2011年3月11日に起きた悲しい出来事は、絶対に忘れられません。そんな大変な時に、全国各地からいろいろな支援をいただきました。鉛筆やカバン、食料品、本当に数え切れない支援物品でした。体育館に避難している時、布団や食器など生活に欠かせないものをたくさんいただき、本当に助かりました。とても感謝しています。



楽天イーグルス様より野球観戦のご招待

私は、この震災で家を流されてしまいました。最初は何が起きたのか分かりませんでした。地震の後、小学校に避難しましたが、いつになったら家に帰れるのか不安でした。しばらくして、母から「家が流された」と聞きました。後で家のあった場所に家族で行ってみましたが、本当に何もありませんでした。大切にしてきたものや家族の宝物も全てなくなっていたのです。最初は悲しくて、悲しくて仕方がなかったのですが、私だけでなく、大島や東日本のみんなが悲しくて怖い思いをしているんだなと思いました。だから、いつまでも悲しんでいないで、まず自分のできることをしようと思いました。私は、母やおばあちゃんの手伝いを一生懸命にやりました。そして、小学校の体育館にいた人たちと、みんなで協力して毎日過ごしました。

私は、今日まで家族や友達、先生方や地域の方々、全国の方々に支えられてきたように思います。日本全国の方々からいただいた支援物品、支援の気持ちを忘れずに、感謝の気持ちを持ち続けたいと思います。そして、困っている人がいたら助けてあげられる人になりたいと思います。

東日本大震災を越えて

6年 O・M

東日本大震災から2年以上が経ちました。当時よりはガレキの処理が進み、少しずつ復興が進んでいます。でも、私の身の周りではこれと言った復興はなされていないような気がします。でも、まだ私たちに支援を続けてくださる人たちがいます。その方々に心から感謝いたします。私のクラスでは、震災の後2人が転校し、今は12人で小学校生活最後の年を送っています。



広島市・緑井小学校よりビデオメッセージ

私には、将来の夢、なりたい自分があります。それは医者になることです。大震災から2か月ぐらい過ぎて、学校の保健室に神奈川県から医師団が来て、大島の困っている人たちを助けてくれました。私はとても感謝しています。だから、私は将来、災害時に地域の役に立ち、たくさんの人を助けられるような活動をしたいと思います。

気仙沼市、大島はたくさんの支援を受けました。でも、支援がとどいていない地域もたくさんあると思います。そのような地域に、私でもできるような支援をしたいと思います。一人ではできないようなことでも、みんなで協力すればできます。復興も一人一人が協力し、助け合えば必ずできると思います。

この大震災は、私たちが次の世代に語り継がなければなりません。大震災を風化させないようにしたいと思います。

3 保護者からのメッセージ

一人じゃない みんながいる

2011年3月11日、私たちは未曾有の体験をしました。今もどこか恐怖心が抜けず、小さな揺れが来ても心臓がドキとする日々です。震災で亡くなられた方々、ご家族の皆様にご心からお悔やみ申し上げます。

大島は、ライフラインが復旧したのは1か月が過ぎた頃です。テレビをつけると、コマーシャルでサッカーの日本代表選手が「一人じゃない、みんながいる。日本は一つのチーム、つながっている。」と言っていました。当初（そんなきれいな事言われても、大変なのに）と素直に共感することができませんでした。毎日、おにぎりやパン、水、雑貨と多くの支援をいただいても、誰から来るのか分からず、感謝の気持ちを忘れてしまっていたのです。2012年の夏、トモダチ作戦で大島に来ていた海兵隊の方から、「大島の子どもたちを沖縄に招待したい」という申し出があり、私も引率していくことになりました。行く先々で震災の御礼をしているうち、震災後、沖縄のコンビニからおにぎりやパンが消えたという事実を知り、自分が恥ずかしくなりました。支援でいただいた物品は、日本全国、沖縄の方々にも不自由をかけ、被災地に送られていたのです。私はその時にあのコマーシャルを思い出しました。日本国中の皆が応援してくれていたのです。

大島は離島というハンディを気にかけていただいたのか、全国から沢山の支援がありました。たくさんいただいたが故の一つ一つの想いに気付けなかったのだと思います。人を想う気持ちが人を支え、その時代や背景を築いていくということを改めて教えられました。今後は、様々な場面で子どもたちにこのことを伝え、困っている人に手を差し伸べていく心を育てていきたいと思っています。

震災から前進するために

東日本大震災の後も、豪雨、竜巻、台風と自然災害は枚挙にいとまがありません。災害の爪痕は被災直後を彷彿させ、平静ではいられなくなります。当時は日本中・世界中から多くの支援を受けながら、今、被災されている皆様に無力であることが、歯がゆさに拍車をかけています。

災害とは、正に想定外のことばかりが起こるものです。2年7か月前の教訓が活かされていない面もあるように思え、虚しく感じることもあります。あれ程、死が身近にあった時間を経験したことはありませんでした。子どもや家族を残して逝くことなど、現実には起こるはずがないと高をくくっていたのですが、そんな楽観は簡単に覆されてしまいました。非情な別離はいつでも起こり得るものです。圧倒的な自然の力の前にはひれ伏すしかありません。私たちが、子どもたちに身に付けさせなければならないものは、いかなる時でも自分の命を自分で守る判断力と教育、経験であり、様々な理不尽や不条理を受け入れて、耐えていく精神力と勇気なのではないでしょうか。多くの犠牲とともに今はここに辿り着きました。結論めいたことは言えませんが、これからもこの現実に様々な角度から向き合い続けることで、子どもたちを導くことができるのではないかと模索しています。与えられた命題は安易ではありません。

街の復興も心の復興も時間が必要だと思っています。少しでも歩みを進めたいと念ずれば、必ず前進できると、

PTA 会長 O・M



駒場小から新入学生へ温かいメッセージ

PTA 副会長 K・R



駒場小との交流会 野外活動・5年生 体育館

自分たちが信じていれば子どもたちにも伝わると思います。そして、子どもたちのためにと、向き合ったことでいつしか自分自身が救われていることが不思議です。親とは、子どもの姿を通して成長するもののようなのです。東北の子どもたちは、他人の痛みを想像し、寄り添い、手を差し伸べることができるかと確信しています。大勢の人々が示してくださったように。これも一つの前進であると言えるのではないのでしょうか。

震災から前進するために

千年に一度、という未曾有の東日本大震災に、私たちは遭遇してしまいました。寒さと不安、恐怖の中、子どもたちと肩を寄せ合い、励ましあって夜明けを待った体育館。あれから3年が経過しようとしています。やっと以前のような学校生活が送れるようになった今、当時を振り返ると、どれだけ多くの方々を支えられここまで来られたのか。思い起こすと今でも胸が熱くなります。

全国各地、そして世界の国々からも支援の物資が届きました。そこには、子どもたちに元気を出してほしいという願いが込められたお手紙が添えてありました。大島小学校では校長先生をはじめ、保護者、子どもたちも全国の支援者の皆様に御礼の手紙を書きました。

今も子どもたちに支援を継続してくださっている方がいます。その方は、写真撮影をする楽しさから元気が笑顔が戻るように、そしてファインダーを通して素晴らしい大島を見つけようと今も通い続けています。また、毎月来島して、子どもたちに学習支援してくれている大学生の方々は、今年は気仙沼みなとまつりの「はまらいんや踊り」にPTA、子どもたちと参加しました。本当にたくさんのお会いがありました。子どもたちの心に残ったもの、それはあの震災の恐怖と悲しみ、そして日本の国の素晴らしさ、心から湧き上がるような感謝の気持ちだったのではないのでしょうか。

今後、私たちはご支援をいただいた皆様に報いるためにも子どもとともに、力いっぱい前進していくことが大切だと思います。当時、3年生だった娘も小学6年生になり、来春には卒業式を迎えます。震災当初、大島は全滅したと噂され、その中で、先生方は家族の安否も分からぬまま、避難所となった体育館で子どもたちと避難してきた島民を守るため、必死でした。気仙沼に戻ることができたのは一週間もたってからだったと思います。今でも感謝の気持ちでいっぱいです。先生方にも支えられ、励ましていただいたことは、子どもたちも私たちもこれから先もずっと忘れないことでしょう。

PTA 副会長 K・H



気仙沼みなとまつり
はまらいんや踊りに参加



大島小中合同運動会
大島ソーラン

4 教職員からのメッセージ

大島小学校に赴任して

変わり果てた故郷を眺め、だれもが目を疑った忌まわしい震災から早2年8か月が過ぎました。人々の現在は、置かれた立場や環境の中、震災前の生活を取り戻そうと必死に生き抜こうとしています。また、それは登校してくる児童も例外ではありません。当時、公立学校では人事異動が発令されていました。私は大島小学校の勤務を命ぜられ、4月1日に赴任しましたが、前任校でも一週間ほど兼務し、2日間ほど学校で夜を明かしました。大島小学校では、学校再開に向けた準備、避難所対応、支援対応に追われる日々が続きました。

大島では、米軍の海兵隊が「トモダチ作戦」として献身的に復旧活動をしてくださるとともに、大島島民の生活を支援してくださいました。学校が再開してから避難所運営と支援対応は続き、校舎は支援物品であふれるほどで、来る日も来る日も物品の整理に追われました。気付くと、児童の表情には「支援をいただくことが当たり前」という気持ちが表れるようになっていました。とても残念なことです。私は折に触れ、子どもたちに支援に対する感謝の気持ちを抱くことの大切さを語りかけました。

私は、大島における本当の意味での復興は、現在の子供たちが担うと考えています。震災によって子どもたちが受けた心の傷は決して小さくはありません。しかし、子どもたちは互いに切磋琢磨しながらこの試

教諭 I・H

練を乗り越えなければなりません。その第一歩は様々な方々の支えがあって自らが成長することに気付き、感謝の気持ちをもつこと、そして、相手を敬い、思いやりの心で接すること、更には生まれ育った大島を愛し、ふるさとを甦らせる高き志を抱くことだと思います。

そのためには、保護者や地域との連携を密にしながら、子どもの心に寄り添う指導を展開しなければなりません。私は、その一心で大島小学校に勤務しますし、困難を乗り越え、力強く生き抜く子どもを育てたいと思います。そして、近い将来、ふるさと大島が子どもたちの力によって、本当の意味での復興を成し遂げられることを願ってやみません。



砂の造形展・小田浜にて

共に歩む

養護教諭 T・K

東日本大震災で、我が故郷気仙沼は一瞬にして姿を変えてしまいました。あまりの惨状に言葉を失い、啞然と立ちすくんだあの時から、2年8か月あまりの月日が過ぎました。改めて、家屋等をなくされ、未だ不自由な生活を強いられている皆様へのお見舞いと、なくなられた方々のご冥福をお祈り申し上げます。

私は、昨年度より大島小学校で勤務しております。現在、子どもたちは明るく元気に学校生活を送っています。しかし大島も甚大な被害を受けており、災害時には極度の緊張状態におかれ、不安の中、我慢を続けてきたのではないかと思います。そして今でも尚、つらい思いをため込んだり、恐怖心や不安感を抱えたりしている子もいると思います。心の傷は、時間が過ぎてもなかなか消えません。PTSDとして現れることもあります。子どもたちには自分の心と体の状態を理解し、適応力を身に付け、どのような生活環境の中でもたくましく生きていってほしいと願っています。そのために、周りの大人たち、教職員や保護者、関係機関が連携して支援していくことが大切だと感じています。

保健室は子どもたちが様々な症状を抱えて来室します。子どもは自分の気持ちをうまく言葉で表すことが難しく、身体症状で訴えたり、自分で気が付かないうちに心の問題が症状として現れたりすることがあります。養護教諭の役目は、その変化に素早く気づき、受け止め、早期に対応することであり、その責任の重さを感じているところです。今後も子どもの心に寄り添ってしっかりと声を聴いていきたいと思っています。「普段通りに学校生活を送れること」は本当に素晴らしいことです。明日が見えない中で時間が過ぎていた2011年4月の始業式、登校してきた子どもたちを昇降口に迎えたとき、子どもたちの笑顔に勇気付けられ、うれしさ、安堵感、感謝の気持ちで胸がいっぱいになりました。あの時の想いは今でも忘れることができません。

つらい体験から、人は命の大切さ、絆の大切さを知り、悲しみを前進の力に変えてきました。子どもたちも震災を乗り越える中で、成長し、力を蓄え、周囲を励ますような心強い存在になっていくことでしょう。子どもたちの回復力と希望に満ちた未来を信じて、私も共に歩みながら力を注いでいきたいと考えています。



亀山へ！ 全校児童での遠足

5 おわりに

現在、児童数66名と震災前の三分の二の人数となった。南隣りにある中学校の校庭には仮設住宅が並び、浦の浜港はかさ上げ工事の最中である。仮設住宅から通っている児童もおり、大震災の後遺症はまだまだ消えそうにはない。今後とも児童の心に寄り添った心のケアを進めていかなければならない。

復興にはまだまだ時間がかかりそうだが、学校の教育活動は、少しずつ元の状態に戻りつつあり、児童は元気いっぱい活動している。伝統である遠泳大会や大島ならではの海での総合的な学習活動なども、少しずつ復活できるよう取り組んでいきたいものである。

今後も、『地域の笑顔は子どもたちの笑顔から』という思いで教育活動を進めていきたいと考える。子どもたちの笑顔が地域を元気にし、そして、大島・気仙沼の復興を担うのは、今学校で学ぶ子どもたちに他ならないと考えるからである。



多くのご支援を忘れずに、 命を守り、未来へ

校長 長田 勝一

1 はじめに

(1) 本校の位置

本校は気仙沼市のほぼ中央にあり、西山間地から東沿岸部に流れる面瀬川両岸に広がる丘陵にまで学区が広がる。

(2) 震災時の被害

震災当時の11地区中4地区に直接の津波被害があった。午後2時46分の地震と約40分後の未曾有の高さの津波襲来のために、地区内では60数名の犠牲者、行方不明者がでた。保護者や家族は沿岸部の会社で勤務中だったり、家族の安否確認のために海沿いの道路を車で帰宅したりする人もおり、犠牲者が拡大した。

学校は当時在勤中の職員が児童の避難対応を行い、ほとんどの児童を面瀬中学校に避難させた。幸い児童の犠牲者はいなかった。しかし、家族を失ったり、自宅を流失した児童はかなりの数にのぼった。その後、学校が再開になるまで児童は自宅待機や地区ごとの学習会などで過ごした。その間、断水や停電、物資不足で不自由な生活をした児童は多い。校舎は開校建設当時、北に土盛りした校地なので北側の特別教室、体育館に大きな破損をみた。強い揺れのために校舎内の施設・備品・物品も大きく散乱、破損した。

(3) 震災後の影響

上記の被災から教育課程の通常の実施が不可能となり、時数的に取り戻すことが困難な状況にあった。また、学区の西側が丘陵地のために転居者が多くあり、他校からの転入児童が多くいた。それらの児童ほとんど及び以前からの在校の被災児童には心的なケアが必要であった。

その後、新入学してくる児童にも幼稚園、保育所時期において被災している児童が多く、今後とも対応が必要である。

また、近隣の面瀬中学校校庭が全面的に仮設住宅の設置場所となり、中学校の体育や部活動の場として本校校庭が利用されている。そのために、本校の体育の授業、放課後活動やスポーツ少年団活動もある程度の制限が生じた。しかし、同じ学区という共通意識があり問題はない。

なお、本校が取り組んでいる「ESD教育」としての面瀬川を中心とした環境学習については、まだまだ漁業復興が道半ばであり、海についての学習の取り組みが不十分なところがある。

職員についても半数近くが被災者であり物心ともに配慮が必要であった。

(4) 教育復興へ

このような中、本校は全世界、全国から多大な支援と励ましをいただいていた。それら一つ一つの多くの心に丁寧に御礼を差し上げるとともに、何より児童が震災地のふるさとを復興から発展へと力をつくそうとする心を養うことが学校の大きな役割と考え、職員一同一丸となって取り組んできた。

また、今年度が開校30周年の節目を迎えることから、地域とともに歩む学校としてそれが復興の契機の一つになるように開校記念事業に取り組むことになった。

学校教育における主題研究のESDのテーマを「人とかわり自然とふれあいながら『ふるさと気仙沼』への思いや考えを深め、表現できる児童の育成」として、学びの中で児童自らよりよい地域づくりに取り組む態度と考えをもつような指導を展開してきた。

さらに、教科学力の向上を意識して、ESDの学習と教科学習の関連を深めた年間指導計画を策定して普

段の教科教育を充実させることこそ、ESDのねらいが達成される、ということを校内研究において確認し共通の指導を行っている。

また、被災地の学校として防災教育を充実させ命を守る行動を自らとれる児童の育成も肝要であり、毎月11日を「防災の日」として実践的に取り組んできた。被災3年目においても平均3、4か月に1回は当地方に津波警報や注意報が出されている現状から常に防災マニュアルの見直しを検討している。そのような取り組みの中で、復興支援を前向きにとらえ、未来に志を持ち自分の生き方、そして将来のふるさとのあり方を、真剣に考える児童が増えてきた。

なお、前述の多くの支援の中でも大学生ボランティアを中心とした学習支援が児童の学習や心のサポートとなっていることも特筆したい。

2 子どもたちからのメッセージ

(1) 児童作文から

私が考える復興未来の気仙沼

6年 石橋 尚実

私が考える復興未来の気仙沼は、山と海が今よりもっと豊かで、人々の豊かな心に包まれた気仙沼です。私が五年生の時、みんなで未来を想像して描いた壁画があります。タイトルは「夢・未来・私達の面瀬」で面瀬地区の復興と発展の願いを込めて、将来を真剣に考え、完成させました。

今、その壁画は校庭の西側にある防災倉庫に描かれています。その絵は、いくつかの山が連なり、たくさん動物が描かれ、緑が濃く生き生きとした力強さを感じます。山から海に向かって流れる面瀬川には、総合学習で学んだヤゴやサワガニ、小さな魚などが生息しています。下流には、大きな海が広がり、貝やウニ、サメなどの生きものがたくさんいます。その他に養殖いかだがあったり、船が行き交う豊かな海です。青い空には、鳥やチョウが飛び交っています。このような自然の中で、人々が楽しく生活することを願って描きました。この壁画は、リアスアーク美術館の山内先生が指導してくださいました。その時、先生から、「未来の面瀬は、君達を作るんだよ。」と言われました。その言葉を聞いて私は、震災の大きな被害があっただけでも、これからも、もっと面瀬の自然を守っていかなければならないし、もっと自然について学びたいと思いました。

そこで私が考えたのは、自然について学べる施設を造るということです。これからの気仙沼の復興を担う子ども達が、自然や動物、魚類と遊ぶことができ、図書館があって、遊びを通して疑問に思ったことをすぐに調べられる施設です。自然について知識を深めながら、自然と共存することで、たくましさや思いやりの心を育てることができると思います。このような豊かな心があれば、美しいものを見た時に感動したり、おいしいものを食べる時は感謝して食べたりすることができたりするのではないのでしょうか。このことで、心の復興につながったら、明るく生き生きとした毎日が送れると思うのです。

もう一つ私が考えたのは、観光と養殖業の復興です。カキいかだなどの養殖施設の上に森をつくり、海に浮かぶ島を作るのです。森と海はつながっているということ、緑のいかだで表現できたらと思いました。森には花も植えて、花を育てることができます。また、海上を移動することもできるので、観光の一つにもなるし、未来の気仙沼にとって夢のいかだになると思います。私の夢は、山と海の豊かな自然にめぐまれた気仙沼で、すべての人が思いやりのある豊かな心で幸せに暮らすことです。それを実現するために、努力していきたいと思っています。

(2) 児童の25年度夏休みの自由課題から

震災から3年を経過しようとするこの時期に児童にとってふるさと気仙沼の復興のために必要だと思うものを自由記述させた。「水族館があったら」「津波が来ても安心な町作りをすべき」「エネルギーを太陽光にしたら」など児童の心の中に震災を乗り越え海を生かした楽しく安全でエコなまちづくりの願いが込められていた。



児童から寄せられたメッセージ

3 大学生ボランティアの方からのメッセージ

中央大学3年 宮崎 汐里

3-1 はじめに

発災から1年後の2012年3月、私たち中央大学の面瀬小学校への学習支援活動は始まった。それは、地域の大人の「子どもたちが、子どもらしさを失ったように思う。」との声がきっかけであった。学生ボランティア同士が仲間を募り、集まった。それから約1年半、大学の長期休暇を利用して活動をさせていただいている。

3-2 支援の内容

(1) 家庭学習の指導（自由参加型）

2012年3月の最初の活動から、面瀬小学区内の自治会館を舞台に長期休業中の児童の宿題を見る活動を行ってきた。休憩時間は“フリータイム”と呼び、外で体を動かして遊ぶもよし、自治会館のなかでくつろぐのもよし、勉強の続きをしてもよし、という時間になっている。

① 出会いの場

小学生と大学生、小学生と小学生、小学生と地域の大人など、様々な出会いの場である。遠く離れた出身の大学生と小学生の出会いの場はもちろんのこと、異学年の子ども同士が名前を覚えあいともに過ごす場、時には自分のふるさとに住む大人と出会う場ともなった。

② 発散の場

外部から来た大学生と過ごす場、子どもだけの空間のなかでは、そこを発散の場とする子どももいたのではないかと。活動前に耳にした、“子どもの遠慮”ということは、いい意味で、強くは感じなかったように思う。

③ 成長の場

普段はあまり一緒に遊ばない年代の違う子ども同士が集まりわれわれ大学生との交流をしていくなかで、彼らの成長をうかがうことも出来た。また、「大学に行きたいと思うようになった。」と語る子どももいて、彼らの将来に新たな選択肢をもたらせたことは私たちにとっても喜ばしいことであった。

(2) 地域を学ぶ体験学習（登録制）

2013年3月の活動からは宿題指導に加え、体験学習を通じた“楽しみながら地域を知る”学びの活動を開始した。彼らを“気仙沼の未来を担う存在”にとらえ、地域の良さ・魅力もしくは課題を、地域に住む大人たちの手を借りて外から見た私たちの目線で子どもたちに伝え、時には子どもたちが私たちに教える。そんな経験がいつか、子どもたちにとって地域を思う気持ちをさらに育むきっかけとなることを目指している。

3-3 面瀬小学校の子どもたちの姿

上記のような活動のなかで、子どもたちは私の予想と違った姿を見せた。想像していた“元気がない子どもの姿”と少し違う形で、様々な気付きを与えてくれたのである。

(1) 元気に明るく過ごす姿

面瀬へ行くと、子どもたちは笑顔で私たちを迎えてくれた。われわれメンバーはいつも、「この子どもたちは東京の子どもたち以上に元気かもしれない。」と感じ、その姿は子どもたちの被災の背景をまったく感じないほどであった。

(2) あの日の経験や今の生活を語る姿

しかし、子どもたちは、勉強中や休憩時間に遊んでいる最中に突然、震災の経験を話すことがある。発災後しばらく母に会えなかった時に感じた心細く辛い気持ち、自身の家が流されたこと、被災して住居がかわり転校してきた戸惑い。そのたびに、やはりあの経験をしたのは事実であり、あの日、私がテレビで観ていることしかできなかった災害が、今ここで接している子どもたちにとってどれだけのものだったのか、彼らの何を奪い、何を残したのかを考える。

(3) ふるさとを思い、人を思う姿

あの日の経験や今の生活について話すとともに、彼らは、家族や友達や周りの人、そしてふるさとを思う姿を見せる。一緒に散歩している時には、「仮設住宅に住んでいる人たちを元気づけたい。」という言葉もあった。緑地公園化の計画が出た尾崎地区について取り扱ったときには、「ここで働きたい。」と言う子どももいた。そんな姿を見て私達は、「もしかすると彼らなら、この震災の経験をポジティブな方向につなげられるかもしれない。」と思う。

3-4 学生にとっての学び

以上のような、小学生と大学生の交流がもたらす学びや成長の可能性は、小学生だけでなく、むしろ、われわれ大学生にこそある。私は始め、「とにかく何かしたい。」という漠然とした考えで学習支援の活動に参加した。しばらくはがむしゃらに動くこと、日々子どもたちと真剣に向き合うこと、受け止めることだけで活動していたが、そのうち、理念を持たなければボランティアとして成り立たないことを知った。“理念を持ち、考えながらボランティアをすること”を意識してから活動がより多くの学びにつながるようになった。



学生ボランティアとともに食事する子ら

3-5 子どもたちに伝えたいこと

周りを大事にし、そしてそこに思いを持つということはなかなか出来ないことであろう。それをやってのける子どもたちの姿は、大学生の私にとって尊敬の対象なのだ。子どもたちをそんなふう育てたふるさととも、私にとって憧れで大事な場所となっている。気仙沼は人を豊かにさせる自然でいっぱい、そして人のあたたかさにあふれる場所だ。そんな場所や人を、誇りに思っている。そんなふるさとの魅力にすでに気付いている人もいるかもしれないし、もしかしたら別の場所に行ってみないとわからないことかもしれない。でも、いつかその魅力に気付いた時、今、周りにいる大人たちのように、ふるさとのことを思い行動する人になってくれたらと思う。

3-6 おわりに

様々な学びを与えてくれた面瀬小学校での1年半、とても多くの方々の力をいただいていた。尽力いただいているすべての皆様に感謝し、子どもたちのふるさとを思う気持ちを大事にすべく、これからもお手伝いしていきたい。

4 教職員からのメッセージ

防災主任 教諭 大和 美香

(1) はじめに

千年に一度の災害と言われる3・11に学ぶべきことはたくさんあった。どんな心構えが必要で、その時に何をすべきだったか。三年目に入るが、未だに整理しきれいな気がする。何が正解なのかは分からないが、必要だと思うことはいくつかある。それらを、一つ一つ試行し、妥当なのかを確かめていくという、暗中模索の時期になるのかと思う。そこで、今年度、防災主任を引き継ぎ、昨年度からの流れで進めてきたことをまとめてみた。

(2) 児童が自分の命を守るために

震災後、「津波、てんでんこ」という言葉が取り上げられ、小学生が地域の大人達に声をかけ、自分たちの命を守った話も報道されている。それは、先人の知恵を受け継ぎ、普段からの防災教育が徹底されていたためだったと思う。しかし、児童の実態を考えると、台風の警報が出ていても友達の家遊びに行ってしまうような、危機意識の低い児童もいる。長く安全だと思われていた地域にあって、自分の命を守らなければ

いけないという意識改革を図っていく必要があると考える。そのためには、まず、子どもたちに具体的な設定でいろいろな訓練を続けていくことが将来につながる一歩だと思う。休み時間や放課後など、時間設定を変えての訓練。

自分たちの教室だけでなく、特別教室や体育館等、場所を変えての訓練。津波を想定して、3次避難、4次避難の訓練。その他にも、登校時に津波警報が発令された時に、中学生や地区の人たちとどのように避難するかという訓練も行った。

(3) 防災マニュアルについて

昨年度、津波警報発令時に、各校の防災マニュアルに沿っての対応が求められた。しかし、実際に震源が遠く、津波の到達時刻までには時間がある場合についての言及はなく、本当にこれでよかったのかという思いも残る。今年度行った地区懇談会で、話題に出してみたところ、命を守ることを第1に考えていくことについての理解は得られてきていると感じた。しかし、引き渡しの方法など、まだまだ課題があり、訓練などを通して、保護者から理解を得られる方法を考えていかなければならないと思っている。今年度は、まずは学校区の擦り合わせを念頭に置き、中学校の防災主任と話し合いをもち、合同避難訓練の時には地区の方々にも協力を得るようにした。

(4) 地区との連携について

3・11では、避難所運営を迫られた。いざ、避難するというときには、地域との連携が大変重要な位置を占めている。今年度は、登校時の訓練の時に、地区の方々に協力をお願いし、各地区の第1次避難所で、子どもたちの避難の様子を見守ってもらった。実際にやってみると、地区の方々は大変協力的に動いていただいた。しかし、避難所運営などについて学校と地域と方向性を確認していく場も同時に必要だと思う。地域との連携を図り、いざという時の備えを進めたい。

(5) おわりに

防災主任という役割を担うことになり、課題を突きつけられることが多くなった。しかし、実際に大きな災害が目前で起きたとき、状況を読み判断する力が求められる。将来を担う子どもたちが、起きて欲しくない災害を目の前にして、命を落とさない、次へ踏み出す力をつけられるような教育を進めていかなければならないという気持ちでいる。3年という節目を迎えているが、3・11はまだまだ収束していない。子どもたちの心のケアはこれからだと思う。学校現場は、まずは足下から普段の学校生活を充実させていくことを大切にしていきたいと考えている。

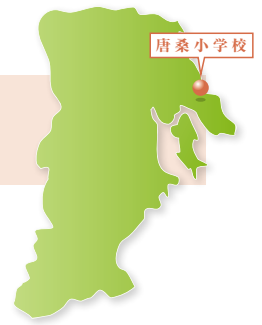
5 おわりに

もうすぐ東日本大震災から3年が経過しようとしている。阪神淡路の大震災から経験的に伝えられていることは児童の様々な心の問題は被災3、4年後からがピークになると言われてきた。

本校においても以前からの生徒指導上の問題も含め、先生方から「授業中の落ち着きがない。」「親の職業等家庭環境が変化してきて不安を訴えている。」「家庭学習など基本的なことができていない。」「友人間のトラブルが増えてきた。」などの訴えが今年度になって急増してきた。

未来を担う児童を育成する学校教育において、このような諸課題に適時、適切に指導をおこなっていくことは当然として、「教育による復興」を大きなテーマとして掲げて前向きに取り組んでいくことが今の地域、社会からの強い要請と考える。今後とも地域、保護者、支援の皆様とともに進んでいきたい。

最後にもう一度、多くのご支援の皆様へ深々の感謝を申し上げますとともに、震災当時から今日まで自らも被災しながら児童の教育にあたってきた教職員の皆様へ、深い尊敬の念を忘れてはならないと考える。



学校と地域の輝く未来に向けて

校長 熊谷 正子

1 はじめに

(1) 本校の位置

本校は気仙沼市北東部の標高13.6mの海辺に位置している。

(2) 震災時の被害

平成23年3月11日（金）午後2時46分、今までに体験したことのない強く長い地震に襲われた。その時2年生は全員が下校した後だった。1年児童と3～6年の児童は校庭中央に避難を行った。その後、迎えにきた保護者には引き渡しを行った。間もなく大津波警報が発令されたため、校長は残った児童と教職員に学校近くの高台の公民館に避難指示を出した。移動完了後間もなく津波が襲来した。

校長は危険を感じ、さらに高台の山頂付近の高松園まで避難した。その夜は高松園に宿泊した。本校への津波は、校舎の海側に面した駐車場まで到達し地面から約30cm程度となった。翌日（3月12日）学校に戻り、全教職員で児童の安否確認と校舎の被害状況を確認した。その結果、児童は全員無事であることと校舎に大きな被害はなかったことを確認した。学区内の状況は、海に面した宿、舞根、鮎立の各地区においては、津波により多くの住民や家屋が流されるなど被害は誠に甚大であった。

(3) 震災後の影響

3月12日より学校で避難所の開設を行った。寒さを考慮して校舎1階教室を開放した。3月13日約60名、3月15日約360名、3月17日約80名が避難した。校舎の造りがブロック毎になっているので、避難所を運営しながら問題なく4月25日学校を再開することができた。後日、唐桑幼稚園も、平成25年6月に新園舎が開設するまで併設となった。

① 1年目の様子（平成23年度）

防災計画、心のケア、総合的な学習についての3点に絞って述べることとする。

震災を経て防災計画の見直しを行った。避難場所を第3次まで設定した。第1次避難（校庭）第2次避難（公民館）第3次避難（高松園方面）とした。前もって共通理解を図り津波警報等発令の際は、警報が解除されて安全が確認できるまで引き渡しを行わないと決めた。また、子どもたちが自分で自分の命を守るように、判断力を養うような避難訓練を実施した。さらに通学路の危険箇所留意して安全な登下校の指導と見守りを続けた。

また震災による強い不安感から、登校不安を訴える児童に対して、学校と保護者、スクールカウンセラーなど関係機関と連携を取り、対応にあたり続けた。

さらに、本校は特色ある教育活動として、ふるさと学習や福祉講座等の学社融合の活動、学校支援委員会を中心とした「牡蠣養殖体験活動」等への支援が積極的に進められてきた地域であった。しかし、震災により学区内の漁業関係の方が大勢被災し、平成16年度から続けていた牡蠣養殖体験活動を中止した。

② 2年目の様子

平成24年度は主に防災学習の見直し、心のケア、総合的な学習の時間等における取組の三つに重点を置いた。

防災学習においては下校時の地震・津波を想定した下校時避難訓練を行った。自分の命は自分で守ることができるように、実際に通学路のどこに避難したらよいかを具体的に確認した。また、地域安全マッ

ブを学校とPTA役員が共同で作成した。学区内の危険箇所や津波の浸水域を確認しながら、子ども110番の家なども明記した。完成したマップは校内の昇降口近くのスペースに設置し、日常的に児童の目に触れるようにした。また被災した唐桑幼稚園と一緒に過ごしていたので、幼稚園と小学校の合同避難訓練を行った。

心のケアについては、児童が通常の学校生活ができるようにすることが大切と考えて推進した。また多くの団体・個人から様々な支援の申し出があり、子どもの心のケアや子どもが元気づけられる支援については積極的に受ける方向で対応した。

総合的な学習の時間における取組の牡蠣養殖体験活動については、再開することができた。地元の関係者の皆様から地域の復興・復旧で忙しい中、本校の児童・教職員のためにご支援・ご協力をいただいた。広島県牡蠣養殖業者ボランティアの皆様のご協力もあり、津波で流された学校用の牡蠣筏を新しく作り、体験活動を行うことができた。

③3年目の様子

平成25年度は、主に防災教育、総合的な学習牡蠣養殖体験活動、唐桑幼稚園との交流に重点を置いた。

防災教育では、配置された主幹教諭を中心に唐桑地域防災研修会を開催した。7つの小中学校・幼稚園の職員がお互いに学びを深め、自校に持ち帰って、各学校における防災学習に活かすこととなった。また、避難訓練はもちろん、学校や家庭での防災等についての学習を進めることができた。6月には牡蠣養殖体験活動を行った。牡蠣処理場（震災後の資材不足等で完成が遅れた。）はまだ完成しなかったが、学校支援委員会、保護者PTAボランティアの方々の多大なるご支援の下、たくさんの学びを得た活動となった。11月には本校校庭において地域の一大イベントである「リアス牡蠣まつり唐桑」が開催された。地元はもちろん東京や盛岡などから約2万8千人の人々が訪れた。6年生の児童が生産者の皆様のお手伝いをして、牡蠣、海産物の販売、あら汁など試食コーナーの手伝いを行った。「リアス牡蠣まつり唐桑」の手伝いを通して、ふるさと唐桑の一員としての意識を持ち、産業や自然についての理解を深め、復興をめざした活動を行うことができた。

被災した唐桑幼稚園の新園舎が落成し、6月に引っ越しをすることとなった。桑の葉児童会ではお別れ会を開いた。朝夕園児と過ごし、「あそびまつり」など多くの交流を行ってきたことから、仲良く過ごせたたくさんの思い出を語り合ってお別れをした。同じ屋根の下で過ごしたことにより、自然に年下の幼児に親切に触れ合うことを体験することができた。

2 子どもたちからのメッセージ

3年目を迎えて、子どもたちは未来に向けてたくさんの思いをもつことができた。次の3つの作文を紹介する。総合的な学習「牡蠣養殖体験活動」、被災した幼稚園の園児と過ごした約2年間を通して育まれた「将来の夢」そして、交流支援をいただいた方への「御礼の手紙」である。

カキ養殖体験をして

きのうは、カキの種ばさみやくつき方を教えてくれて、ありがとうございます。

カキをくたくし時には、あなたの使い方を教えてくれたので、手を切ったりせずに、安全に作業をすることができました。

私たち6年生が4年生の時は、養殖体験はできませんでした。2年間の経験を生かして、養殖業で将来働くのも良いかと思いました。

安全で楽しい作業ができたのも、カキの養殖をしている皆様のおかげです。これからも仕事をがんばって、おいしいカキを養殖してください。

6年 吉田りな



将来のゆめ

6年 菅原 小乃葉

私は、小さい子と遊んであげるのが好きです。

震災のために唐桑幼稚園が小学校にいた時に交流会をしました。

魚つりゲームをしたら、幼稚園の子が喜んでくれてうれしかったです。

将来は幼稚園の先生になりたいと思います。



未来のひまわりプロジェクトの皆さんへ 6年 畠山 美那

8月3日から5日までの3日間、ありがとうございました。

私が残っているのは、新しくできた友達と朝の3時までたくさん話をしたことです。初めは知らない人ばかりで声をかけられなかったのですが、四万十市の人が話かけてくれたので、すぐ打ち解ける事ができました。

初めてカヌーに乗るなど、新しい体験ができて良かったです。

3 教職員からのメッセージ

平成23年4月に被災地の唐桑小学校に赴任した新任教諭がいる。熱い情熱をもって勤めてきた3年目。今、未来へのメッセージを伝える。

子どもたちと前を見つめて

教諭 及川 渚

残りわずかとなった大学生活の名残を惜しみながら、もうすぐ訪れる新生活への期待や不安を友達といつものように語り合っていたあの日、東日本大震災が起きました。隣県山形は翌日の夜に電気が復旧し、すぐさまテレビを点けると信じられない光景が目飛び込んできました。家族や友達と出かけた思い出の場所、数週間後に自分が教員生活の第一歩を踏み出すはずの場所に津波が押し寄せ、真っ暗な画面と次々と流れるニュース速報に目を奪われました。

4月3日、初めて唐桑にやってきました。4月1日の辞令交付式には間に合いませんでしたが、辞令をいただいた時の気持ちは今でも覚えています。教員として歩みだそうとする自分の「ここから始まるんだ。前に進んでいくんだ。」という思いを、震災後の街の風景に勝手に照らし合わせていたからかも知れません。しかし、前向きな気持ちで自分自身を奮い立たせようとする反面、震災を経験せずに被災地と言われる場所にやってきたことに不安も感じていました。震災前の気仙沼市の街の様子や多くの人が携わっていた漁業のこと、そして3月11日の唐桑小学校の様子など、いろいろと話してくださる同僚の先生方の声に耳を傾けました。

4月21日、平成23年度第一学期始業式が行われました。3年生13名の担任になり、子どもたちの前に立ちました。「おはようございます。」と笑顔で登校する子どもたちの姿がありました。私も笑顔で明るく迎えたという思いはもちろんありましたが、緊張感で表情はこわばっていたのではないかと思います。子どもたちと打ち解けようと話をする中で、「春休み、長かったよね。早く学校が始まってほしいって思っていた。」という声があちこちから聞かれました。真っ直ぐに輝く目でこちらを見て口々に伝えてくれたその言葉は、子どもたちの純粋な思いそのものでした。そして、私は、子どもたちの居場所である学校が再開されたことの意義を噛みしめるとともに、学校に来て友達や先生と勉強や運動に励むという当たり前の日々を子どもたちがいかに待ち遠しく思っていたのかを知りました。明日も明後日も学校があるということを楽しんで、子どもたちが学校に来るのを楽しみにしていることを思うと、私がこれから教員として歩いていく毎日は、どのような失敗や困難に出合ったとしても価値ある毎日にしていかなければならないと思いました。それと同時に、そういう日々を積み重ねていけるように仕事をしていきたいということも強く思いました。

あの日から約2年半が過ぎました。登下校時に、「触ってはいけません。」と指導した瓦礫はほぼ片付けられました。道路の補修工事が行われ、堤防を作るために資材を積んだダンプカーを多く見かけます。店舗の外壁だけが残っていたコンビニエンスストアも再開されて地域の方で賑わっています。少しずつ少しずつ前に進んでいるのを変わっていく町の様子から感じ取ることができます。その一方で、全国各地から届く支援の気持ちや、復興するのを見届けたいと移り住んで懸命に働くボランティアの方たちは、2年半経っても変

わっていません。学校の授業では、昨年度から『総合的な学習の時間』の牡蠣の養殖体験活動も再開されました。緑あふれる自然豊かな土地と壮大な海が育む牡蠣、地域の産業に誇りを持って働く大人たちの姿は、まさに子どもたちの故郷、唐桑の姿であり、誇りであると再確認することができました。また、この地域とかわるすべての人の防災意識の高まりも感じています。学校では、いつまたやってくるか分からない災害に備えて、様々な想定をした避難訓練や通学路の安全確認を日常的に行っています。現在は1年生の担任をしていますが、今年度は防災〇×クイズや防災ダックの実践を行う予定です。わずか6、7歳の子どもたちであっても、『自分の命は自分で守る』という意識をもち、万が一の時でも自分で判断し行動できるようになってほしいと思っています。

子どもたちには未来があります。私たち大人にも未来があります。

過去は誰にも変えることができませんが、未来は私たちの手によって創り出すことができます。震災を通して学んだこと、得た教訓を胸に、この時代を子どもたちと前を見つめて歩いていきたいと思ひます。今日という日を確かに生きることを積み重ねていけば、私たちの未来は明るいと思ひています。

4 おわりに

震災から3年目。地域では、地盤沈下対策や土地の造成工事、仮設住宅や雇用等の課題解決に全力で取り組んでいる。被災から立ち上がろうと懸命に努めつつ、学校の子どものことも同時に懸命に支援をいただいている。子どもたちも地域・関係の方々をご招待して、学芸会などで「唐桑がだいすき We love Karakuwa. 私たちが未来を作り出していきます！」と歌声で感謝と決意の気持ちを伝えた。

明治29（1896）年の大津波の25年後には柳田国男がこの地を訪れて次のように書き記したという。「・・・唐桑の宿という部落では、海嘯（つなみ）の疵は全く癒えている。」

東日本大震災の復興には短くない時がかかると言われている。しかし学校と地域は復興の歩みを着実に進めている。3.11を忘れず、輝く未来に向けて学校も子どもも教師も保護者・地域も前へ前へと少しずつ歩みを進めている。

学校・家庭・地域が連携を深める中で、子どもたちは将来の夢をもち絆を確かめながら毎日の勉学に励んでいく。校長として、地域の中核としての学校の役割を必ずや果たし、未来を創り出す子どもたちを育てていきたいと思ひます。



幼・小・中学校の連携を深めた唐桑地区7校・園教職員防災研修会



学校カキ筏へ向かう船は未来へ向かう船



地域と共に「リアス牡蠣まつり唐桑」



私たちの唐桑へようこそ



ありがとうございました



定置網起こし
鮭は太平洋を旅して唐桑沖にまたもどってきた



全校合唱
未来に向けて！



被災からの前進Ⅲ ～児童・職員から～

校長 松本 尚人

1 はじめに

(1) 本校の位置

学区は、三陸復興国立公園唐桑半島の南部に位置し、東・西・南の三方を海に囲まれている。

(2) 震災時の被害

東日本大震災時は、沿岸各地域全てで被災した。特に、西部に位置する小鯖地区は、約14mの津波の襲来を受け、沿岸にあった地域は壊滅的な被害を受けた。本校は40mの高台にあり、津波の被害は無かった。

(3) 震災後の影響

現在も、沿岸部の復旧・復興を巡っては、真剣な検討がなされているものの、その深い爪痕は残ったままである。

今回、作文を掲載した2名の児童は、当時4年生であり、先述した学区内で最も被害の大きかった小鯖地区に居住する児童である。また、教員は、被災当時から現在まで教務主任として、本校の教育活動を先頭に立って牽引し、復旧・復興に尽力した。

尚、執筆者に依頼するにあたっては、当時の思いをできるだけ「ありのままに伝えたい」という思いがある一方、被災者の心情を考慮し、本人や保護者の納得と理解を得るよう配慮した。

2 子どもたちからのメッセージ

震災を経験して

6年 伊藤 夕妃

3月11日、東日本大震災によって、私の通学路は変わってしまいました。通学路が変わったら、少し学校が遠くなりました。その通学路は、草が生い茂り、幅が狭い山道でした。毎朝、友達と一列になって歩いたり、滑りやすかったり、坂道が急だったりして大変でした。その山道から前の通学路が見えるたびに、早く、前の通学路を歩きたいな、と思いました。

4年生の2学期になって仮の道路ですが、前の通学路に近いところを歩けるようになりました。うれしさの反面、津波で通れなくなった道路を見ると、複雑な気持ちでいっぱいになりました。いったいいつになったら、前の通学路を歩けるようになるんだろう、自分が卒業するまでに道ができるのか不安でいっぱいでした。まだ、いつになるか分かりませんが、友達と笑って歩いたあの日のような光景が一日も早くもどることを願っています。

震災から3年近く経ちましたが、私は最高学年の児童会役員として学校行事を頑張っています。後を引き継ぐ後輩たちにもいろいろなことを教えてあげたいと思うからです。

私には、将来の夢があります。それは、建築家です。震災が起きる前は本を読んでなりたいたなと思っただけでしたが、震災後、仮設住宅に住んでいる人を見て、早く新しい家に住めたらいいなと思い、強く決心しました。自分なりのデザインを考えたり、自然に優しい家を考えたりしたいと思います。また、地震や津波にも耐えられる工夫をこらした家も考えたいと思います。だから、今から家でできる節電などの工夫をして、少しずつ建築に関することを勉強していきたいと思います。

震災直後にたくさんの物資をいただきました。その支援のお陰で、私たちは今、こうやって不自由なく生

活することができます。また、日本各地からいろいろなプロジェクトが来ました。私も一度参加して、友達をたくさんつくることができました。こういったプロジェクトを企画してくださったお陰で、県外の人達と仲良くさせてもらう機会が増えました。全国各地の皆さん、本当にたくさんのご支援ありがとうございました。

私は、この大震災を経験して家族だけでなく、多くの人達から支えてもらっていることを知り、これから何かあっても前を向いて進んでいこうという気持ちになりました。そして、この大震災を、いろいろな人達との出会いといろいろな意味での出発点にしたいと思います。

震災を経験して

6年 村上 陽海

東日本大震災で私の住んでいる家が全壊してしまいました。そして、私は、避難所での生活や仮設住宅での生活を経験しました。

避難所には、約4か月いました。全く知らない人と一緒に過ごし、気を遣いながら生活していくのは大変で、ストレスがたまることもありました。でも、みんなで協力して過ごしているうちに、最初は知らなかった人とも仲良くなりました。同じ仮設住宅に住んでいる人達と支え合い、私自身が成長することができました。それに、避難所や仮設住宅で出会った人達は、みんな優しくて素晴らしい方ばかりでした。家族同士で行ったり来たりするなど絆が深まり、今もおつき合いが続いています。

復興に向け、今、いろいろな問題がニュースや新聞で取り上げられています。その中でも、私が一番注目しているのは、津波が来たときのための堤防を造るかどうかという問題です。私は、堤防を造らないでほしいというのが今の正直な気持ちです。私が、このように思った理由は、堤防がないと不安だという気持ちも少しありますが、実際、東日本大震災では、堤防はあったものの流された地域もあったと聞きます。私は唐桑が大好きです。これからも今回のような大きな津波が絶対に来るといいきれないのに大きな堤防を造って、唐桑のすてきな海岸の景色を壊したくありません。だから、やっぱり堤防は造らないでほしいです。

私達の地域が元に戻るためには、これからもいろいろな問題が更に出てくると思います。だからこそ、みんなでしっかり考え、私達の意見にも耳を傾けていただきたいと思います。そして、よりよいふるさとや日本をつくっていく、そういう世の中になってほしいと日頃から感じています。そのため、私も将来、地域のためになれるよう、毎日の生活の中でいろいろなことに挑戦し頑張りたいと思っています。

ところで、私には「モデル」という将来の夢があります。なぜモデルになりたいのかというと、おしゃれをすることが大好きだからです。毎日、学校に着て行く服を楽しんで決めています。友達のコーディネートやテレビ、雑誌を見て、日々いろいろなことを学んでいます。

私はまだ6年生ですが、震災のことを乗り越え、将来の夢に向かって明るく楽しく、一日一日を無駄とにならないよう、日々努力しながら歩んでいきたいと思っています。そして、中学校、高等学校とたくさんのことを学びながら成長し、これからの日本の問題についても真剣に考えられるような人間になりたいと思います。



市内体育祭会場にて

3 教職員からのメッセージ

児童の安全を考える～避難訓練を通して～

防災主任教諭 昆野 興三

本校では、私が着任した平成21年度には、既に小鯖港周辺で、地震・津波を想定して、児童が主体的に考え、避難するという避難訓練を行っていた。その時の訓練は、当時（被災前）としては画期的なものだったので、平成21年度実施の避難訓練の概要を紹介する。

(1) 平成21年度地震・津波対応避難訓練

- ①期 日 平成21年7月1日（水）
- ②場 所 気仙沼市唐桑町小鯖漁港とその周辺

- ③ねらい 大津波が起きた場合に、児童が主体的に判断し、安全に避難するための知識と態度を育てる。
- ④参加 中井小学校（全校児童）
- ⑤協力者 気仙沼消防署唐桑出張所、気仙沼警察署唐桑駐在所、小鯖地区自治会
- ⑥方法 津波が発生した時に、下に示した避難場所（ア～オ）のどこに避難するかを選択肢を与え、児童一人一人に考えさせる。

ア	近くにある自分の家（津波が起きた時、自分の家に早く帰る）	※海沿いの場所
イ	近くの親戚の家（津波が起きた時、近くの親戚の家に逃げる）	※海沿いの場所
ウ	近くの友達の家（津波が起きた時、やや離れた友達の家へ逃げる）	
	※海から120m程離れた海拔の低い所にある集会所（小鯖老人憩いの家）	
エ	やや遠くの小高い所（津波が起きた時、やや遠くの小高い所に逃げる）	
	※徒歩で緩斜面を登り5分程にある小高い場所	
オ	すぐ近くの高台（津波が起きた時、すぐ近くの急な高台に逃げる）	
	※標高約40メートルの所にあり、一気に急な斜面を登る場所	

- ・津波発生（3分後）
- ・避難開始、避難終了
- ・防災教室（避難訓練の講評と今後の津波の高さ）

将来予想される宮城県沖地震では、小鯖漁港に襲来する津波の高さを10mと想定しているとのこと。そこで、児童の立っている高さを引いて、8mの高さの竿先に赤い布を付け、津波の高さの目印として、児童に強く印象付けた。

⑦実践を振り返って

平成21年度の児童数は、全校で114名であった。訓練の実施結果は、事前の予想通りエの「やや遠くの小高い所」を選択し避難した児童が最も多かった。また、他の海沿いや海拔の低い所にある集会所を選択した児童も何名かずついた。当時この地域は、過去に幾度となく津波を経験している所であるとはいえ、既に記憶は過去のものとなり、津波に対して「まさか「絶対にそんなことは・・・」という意識の方が正直強かったのではないかと思う。もちろん、児童の避難訓練中の緊迫感も伝わってこなかった。従って、この結果は、至極当たり前だったと言える。しかし、その中であって特筆すべきことがあった。それは、オの「すぐ近くの高台」に避難した児童が僅か4名ではあるがいたことである。しかも、低学年児童だったことである。大津波を見聞きし、被災を経験し、2年8か月経った今なら誰でも、オの「すぐ近くの高台」を間違いなく選択し避難すると思う。しかし、当時は実施する側も、選択肢は作ったもののオを選ぶ児童がいたことは驚きであった。

(2) 今、3.11を振り返って

平成23年3月11日（金）、午後2時46分。この時刻は、今でも鮮明に覚えている。4～6年児童と共に体育館で行われていた卒業式の予行練習が、終盤に近付いていた頃にあの大地震が起きた。体育館天井の電灯が左右に大きく揺れ、いつ終わるのだろうと恐怖感さえ覚えた。すぐに児童を座っていた椅子に潜らせ頭部を守るように指示したが、なかなか揺れが収まらず、不安で泣き出しそうな児童もいた。校長先生の校内放送の指示に従い、タイミングを見ながら、体育館脇通路を通過して児童を校庭に安全に避難させた。避難してからも余震は大きく繰り返し続いていた。児童の点呼をとり、全員の無事を確認し、ようやく安心したが、まもなく停電で、電話も通じない状態になってしまった。校庭にも幾筋かのクラックが、南北に走っていた。直ちにクラックのない場所に移動させ、児童を待機させた。

児童をプール近くの外トイレに誘導していた時だった。海を見ると大きく窪んだように見え、滝浜漁港の所は海からの強い高い波が次から次へと陸地に向かって容赦なく押し寄せていた感じだった。（これが津波か！）眼下で起きている光景を児童には見せないよう配慮しながら、児童を夢中で誘導した。

当日は雪が散らつき、非常に寒かった。そこで、児童の服を教室から運び出したり、保健室等からあるだけの毛布を持ち出したりして児童に暖をとらせた。その後、迎えに来た保護者の車に児童を全員分乗させてもらい、余震が収まるのを待った。夕方、余震が少なくなり、津波も収まって来たことを確認し、安全な所を通過して帰ることを条件に校長先生から解除の指示が出た。児童の名簿を確認しながら保護者に児童を引き

渡した。

今も思うのは、校長先生が保護者の要望に対して、「安全が確認できるまでは児童を引き渡さない。」旨の冷静な判断と強い信念を示されたのは、中井小学校を束ねる管理職として素晴らしい判断だったと思っている。

この日を境にして、電気や電話等ライフラインが全て使用不能となる中、学校に泊まることになった。電気もないため、暖房もとれない中、気仙沼市内や県内の惨状が噂として断片的に伝わって来た。聞こえて来る情報は、「まさか、まさか。」「えっ。」と、我が耳を疑うものばかりだった。しかし、唯一の情報源のラジオの受信状況も悪く、全体の様子や情報を正確に得られる状況ではなかった。

今でこそ、大地震や津波発生時には「児童生徒を引き渡さない」ことになっているが、当時は、本当に難しい判断だったと思う。大地震が起き、津波が予想される場合は迷わず「てんでんこ」に高い所をめざして自主的に避難する意識を児童一人一人に確実に植え付け、育てていかなければならない。また、緊急時の備えに対する物品等（ラジオや暖房等の寒さ対策、明かり、水、食料）に対しても関心をもたせていきたい。

(3) 今年度の地震・津波対応避難訓練の実践から

本校の避難訓練の基本的な考え方は、「段階的な避難訓練」「臨場感を伴った現場主義・現場での実践」「地域、家庭、関係機関との連携」の3つである。この3つを受けて、今年度は下記の5つを実践した。

日 時	内 容	ね ら い
・平成25年 4月15日 (月) 10:10~(※授業中)	地震、津波対応	1年生が入学し、2年生以上も教室が変わり、それに伴って避難経路が変わったことに対する避難訓練
・平成25年 5月30日 (木) 9:23~(※休憩時間)	地震、津波対応	1回目の避難訓練を生かし、児童が的確に行動する能力と態度を養い、防災に対する意識の高揚を図るための避難訓練
・平成25年 6月12日 (水) 14:40~(※放課後)	児童引き渡し	大規模地震発生時や自然災害時等に、的確に保護者への連絡をすることや児童をスムーズに保護者に引き渡すための訓練
・平成25年 6月27日 (木) 13:40~ (※5~6校時)	登下校時・下校後、 休日・休業日対応	登下校時や休日・休業中に、大規模地震や津波が発生した場合に対する身の守り方や避難の仕方についての訓練(小鯖地区神止浜漁港)
・平成25年 9月18日 (水) 14:40~(※放課後)	登下校時対応	これまでの避難訓練を生かし、主体的に危険から安全に避難するための訓練。また、各集会所や公民館に安全に避難し、児童を確実に保護者に引き渡す訓練

校外に出での実践としては、神止浜漁港周辺と登・下校時の集会所等を活用しての避難訓練の計2回実施しているもので、以下に概要を述べる。

①地震・津波対応の避難訓練 ※6月27日(木)

学区にある神止浜漁港は小鯖地区にある。被災前から避難訓練には協力的な地域で、今回、地域との連携の観点からも自治会長さんを中心に多方面に渡り、応援ご協力をいただいた。

神止浜漁港を訓練場所を選んだ理由は、海辺の低地で避難する範囲や場所も多岐に渡り、児童の自主的な「自分の命は自分で守る」実践的な避難訓練ができる場所と考えたからである。

今回、児童には、ガイダンスで「3分後に大津波がやって来ます。」「自分で判断して安全な所に避難しなさい。」と伝えた。

避難開始。児童はより安全で3箇所位の高台に散らばると思っていたが、全員、一番近くの高台に一気にかけ登ったのである。これまでの避難訓練の成果は出



海辺での避難訓練(地震想定)



同 避難訓練(津波想定)

ていたが、課題として、漁港周辺の広いスペースを十分に生かし切った避難訓練になっていなかった点が挙げられた。

児童が緊急時に自主的・主体的に判断し、自分の命を迅速かつ安全に守る行動が身に付くよう今年度の反省を生かし、工夫しながら避難訓練を重ねていきたい。

②「登下校時における避難訓練」と「集会所等における児童引き渡し訓練」 ※9月18日（水）

この避難訓練は、登・下校時に大きな地震や津波が発生した際、通学路の最寄りにある各集会所に主体的かつ迅速・安全に児童が避難することをねらいとして、これまでも繰り返し行って来た。昨年度は、通学路に沿ってきめ細かい対応をするため、日を替え、2日に分けて行ったが、今年度は、より実践的なものにするため、職員の体制にかかわらず1日で行った。実践の内容は以下のとおりである。

児童を地区毎に集め、ガイダンスを行い、その後、地区毎に集団下校開始。通学路の途中で、「震度6弱の強い地震が発生。」と伝え、児童は、安全に身を守る体勢を各自がとり、その後、最寄りの集会所に向け避難を開始し、無事到着できた。

児童は、これまでの訓練の積み重ねで、自然とこのような行動ができるようになったことは評価できている。避難についての講評後、事前に養護教諭が保護者の意向に沿ってまとめた引き渡し名簿をもとに集会所ごとに児童の引き渡しを迅速に行い、訓練を終了した。

各集会所での引き渡し訓練は、消防署から提案があり、昨年度から引き続き実践しているものである。中井小学校区内では、保護者や地域住民も3.11の際には、最寄りの集会所に避難した経緯もあり、児童も地震、津波等の災害時、最寄りの集会所に避難する意識は定着しつつあると思われる。その意味でも、毎年このような訓練を重ねることは、児童の安全面を考えると大切である。



中井公民館での引き渡し訓練

(4) 結びに替えて

震災前の約1か月程前、気仙沼消防署唐桑出張所の協力による4年児童対象の「少年消防クラブ」が行われた。内容は、ビデオによる「稲むらの火」の視聴だった。稲むらの火は、「村長が、大切な稲むらに火をつけさせ、村人の命を大津波から守った。」という逸話であるが、まさか、児童は、この1か月後にあの東日本大震災が起こるとは想像すらできなかったと思う。「稲むらの火」は、当時の紀州和歌山藩広村での村人の実体験をまとめ、語り継ぐねらいで戦前の教科書にも取り上げられた有名な話である。

本校の学区内にも同様に、津波に備える先人の教えがある。「地震があったら津波の用心」の石碑である。石碑は、本学区のみならず、本市沿岸地域の多くの浜や入り江に建っている。当時の人々が津波の怖さを子々孫々に懸命に伝えようとする思いを改めて感じる。また、現在、この地には、先駆的な「津波体験館」がある。「語り継ぐことの大切さ」が叫ばれている今だけに、その存在と価値はすばらしいものである。

3.11以降、教室で地震が起きた際にも、児童は黙って机の下に潜り、地震が終わるまでじっとしている姿が普通に見られている。また、地震・津波対応の避難訓練では、いつも真剣な眼差しで訓練しており、小鯖港周辺で高台に避難する訓練や学校の近くの滝浜漁港での避難訓練でも、迅速かつ真剣に避難する姿を見ている。

児童が真剣に学び、実際に身に付けたことは非常変災時に大いに役立つことを今回の大震災で実感した。



小鯖漁港付近にある石碑

その意味で避難訓練の意義は大きい。津波に対する認識を新たにし、津波に対する備えや意識を高める教育がもっとも必要だと痛感しているところである。

東日本大震災後、日本人の礼儀正しさや冷静さ、協力する姿勢などが海外から注目を浴びた。あのような状況下でも落ち着いて行動できる日本人を誇りに思っている。これは、将に“日本の教育の賜物”であると信ずる。教育現場に生きる者として、今回得た経験と教訓を肝に銘じ、その担い手となる児童を通じて後世に伝えるため、日々の教育活動に邁進していきたいと改めて感じた次第である。

4 おわりに

「被災から前進するために」第1集・第2集は、校長の思いを綴ったが、この第3集は、児童や職員の思いを綴った内容となった。東日本大震災は、本地域を揺るがし、甚大な被害を及ぼした。当時本校には、98名の児童と15名の職員が在籍していたが、その一人一人が、それぞれに辛く苦しい体験を持っていることと思われる。今回、作文を掲載した2名の児童と職員も、自分自身のありのままの体験に基づいており、児童・職員を代表した内容になっていると思う。

東日本大震災以来2年8か月が経ち、児童の作文にも記述があったように、多くの皆様から寄せられた物心両面の温かい援助と励ましによって、本校は現在、落ち着きのある学校環境と教育活動が営まれていることに衷心より感謝申し上げたい。

東日本大震災を経て、私たち職員は、「非常変災の状況にあっては、無い物ねだりしても仕方がない。目の前の状況をしっかり受け止めて、目の前にいる児童に今できる最善の教育を提供する。」ということを学んだ。

今後とも、本校は、職員一丸となって安全・安心で落ち着きのある学校を構築し、児童が「学ぶ楽しさや喜びを味わうことができる学校」で在り続けることを目指していく。

気仙沼市立 **小原木小学校**

支援への感謝と未来への誓い

校長 千葉 哲

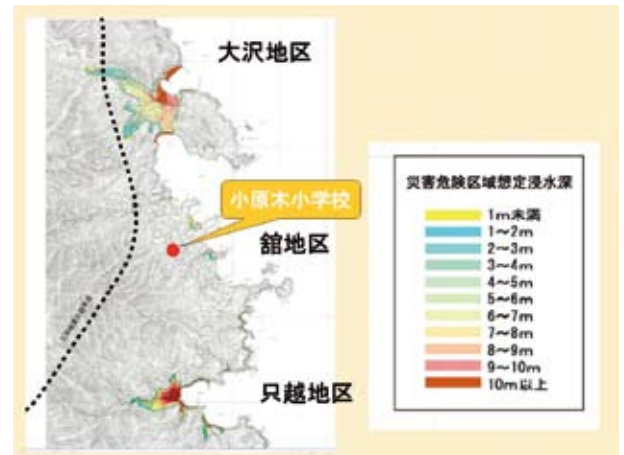
1 はじめに

(1) 本校の位置

本学区は、岩手県陸前高田市に接する宮城県最北端に位置し、南北に3つの地区（大沢、館、只越）で構成されている。校舎は、学区中央の海拔40mの高台にあり、景勝地の大理石海岸と広田湾が眼下に広がっている。

平成22年12月に、三陸自動車道の霧立トンネルが開通し、気仙沼市鹿折地区までの所要時間が10分程度に短縮され、国道45号線による交通の便が大変良くなっている。

また小原木地区は、唐桑半島の入口にあたり、半島先端の御崎までは、約10kmの距離である。



(2) 震災時の被害

震災による本校校舎・児童と職員等の家屋の被害は、次のとおりである。

校舎	東側昇降口付近基礎部分亀裂（亀裂幅 最大数cm 長さ東西5m 南北7m）
校庭	東側亀裂（幅：最大1cm、長さ：5～8m数本、西側土留め石垣：数個崩落）
児童	自宅全壊21名、大規模半壊7名、半壊2名、計30名
職員	自宅全壊3名、大規模半壊2名、半壊0名、計5名
地域	大沢地区8割・只越地区9割の家が全壊及び半壊、館地区5～6軒が全壊及び半壊

地震発生から津波襲来時の時間帯は、全校児童を校庭に避難させ、迎えに来た保護者と共に校地内で待機したことにより、児童にも保護者にも人的被害はなかった。

また、平成25年度全校児童数44名の内、1～3年生が被災当日に保育園児で、交通の遮断等により保護者と離れて保育園で不安な夜を過ごしている。

(3) 震災後の影響

- ①仮設住宅の建設：平成23年8月末に校庭南側に5棟、30戸と駐車場を設置。
- ②校舎前、校庭の5分の1のスペースが運動場所となったため、サッカーなどのボールゲームや走運動等の学習が難しい状況になっている。運動会は、旧小原木中学校グラウンドで小中学校合同開催を継続実施している。
- ③小中学校仮設住宅及び学区外みなし仮設住宅等からの通学児童：14名（平成25年度）
- ④支援の状況：震災直後の支援物資を始めとして、国内外からの多数の支援活動や義援金、メッセージ等をいただき、本校の教育活動の推進に大きな寄与があった。
・義援金の総額：184万6,613円（平成25年11月1日現在）

- ・主な購入物品：長胴太鼓（1）、しめ太鼓（4）、プール用人工芝（40m）、ジェットヒーター（2台）、iPad（4台）、ブルーレイプレーヤー（6台）、ノート型コンピュータ（1台）、職員用ヘルメット（12個）
- ・主な支援活動：オペラ歌手表敬訪問 宮本様、増原様 [パルマ音楽院（イタリア）]
学校支援ボランティア H24通年 [中内祥子様：広島大学、渡辺国権様：東京学芸大学]
緑のカーテン植付授業 [エスベック（株）、みどりの学校推進グループ]
花苗・植え付け作業の支援（年2回）[NPO法人ガーデンを考える会]
1～4年秋の遠足（狛鼻溪）支援 [一関市：菅原様]

2 子どもたちからのメッセージ

「感しゃの気持ち」

3年 梶川 隼和

「平成24年度支援への御礼と感謝の文集」より

ほくは今、感しゃのきもちでいっぱいです。しんさい後、たくさんさんの支援物資がとどきました。食べ物がないで困っていた時、とどいた食べ物は、とっとうれしくておいしかったです。文ぼうぐもうれしかったです。いただいた文ぼうぐは、今も大切に使っています。



ボランティアの皆さんとの長縄とび

また、ひなんじょやかせつ住宅には、たくさんボランティアさんが来てくれました。冬の寒い日に、お茶会を開いてもらいました。あったかいお茶を飲んだ時、なんだかほっとしました。それから、ほくたちといっぱい遊んでくれました。ほくのいたひなんじょは、子どもが少なく、遊んでくれる人もあまりいなかったのです、いっしょに遊べてうれしかったです。おにごっこやかくれんぼ、雪がっせん、とても楽しかったです。

次はほくの番です。もしまたどこかでしんさいがおこったら、しえん物しを送って助けたいです。また、さみしい気持ちになっている子どもといっしょに遊んであげたいです。

3 保護者からのメッセージ

「お世話になった皆さんへ」

4年児童の母

「平成24年度支援への御礼と感謝の文集」より

あの日、私は市内の車中で地震と遭遇しました。「警報・避難」の防災無線が鳴り響く中、すでに渋滞の始まった道路・信号の止まった交差点を何とかくり抜け、無我夢中で子どもたちがいる小学校へと向かいました。

校庭には、掃除着のまま避難した子どもたち。次から次へと集まってくる保護者とともに、学校に避難待機しました。3月の雪の降る寒さと何度も襲ってくる余震に、不安は募るばかり……。しばらくすると、校庭から見える広田の海が茶褐色に濁り、みるみるうちに潮が渦巻きました。かすかに家が流されていくのを見た時は、ものすごい不安が襲ってきました。

私の家は、高台にあったので津波被害は免れましたが、その晩は暗く寒く、余震に怯え、車のラジオで聞く情報に、さらなる不安を感じずにはいられませんでした。

その日から、自宅避難の私たちは、家族や親戚、近所の人たちと協力しながら、いつなくなるか分からない水や食べ物の不安を抱えながら生活しました。

そのうち、私たちのところにも支援物資の配給が始まりました。それらは、日本各地はもちろん世界各国から届けられた物でした。（世界中のみんなに助けられているんだ。）という感謝の気持ちで、いっぱいになりました。



思う存分遊んだ後の笑顔の子どもたち

1か月ほどで、ようやく電気が復旧し、私たちの日常生活も徐々にそれまでの生活に戻っていき、子どもたちの学校も再開しました。中には、震災の不安を抱えたままの子どもたちもいたことでしょう。

でも、全国各地からのたくさんのご支援やボランティアの方々のおかげで、今子どもたちは、明るく元気で笑顔です。いろいろな学校などから送られてくる支援物資とそれらに添えられた励ましのお手紙・メッセージ。その内容に心が温かくなりました。「ありがとう」の気持ちで、いっぱいです。

これからも私たちは、あの震災の記憶とともに生きていかなければなりません。それは、辛く悲しいことです。でも、ご支援をくださった皆さんからの数々のお見舞い・励ましのお言葉、あたたかいお心を忘れずに生きていきます。そして、復興へ向かって・未来へ向かって頑張ります。

4 支援者からのメッセージ

「一歩」：中内祥子さん作詞（広島大学学生）

平成24年度に、本校に学習支援ボランティアとして活動していただいた中内祥子さんが、活動を終了するにあたり、子どもたちに詩をプレゼントしてくださいました。さらに、市内のボランティア活動で知り合った、Ricoさん（群馬県のシンガーソングライター）が作曲をしてくださり、心に響く宝物の曲ができました。

この曲は、昼の放送のテーマ曲として毎日、子どもたちに優しい心を届けてくれています。



「始まりの一歩」CD・ジャケット

「一歩」 作詞：中内祥子& RICO 作曲：RICO

あたたかな春の風に吹かれて
 私たちは 出逢った
 よそよそしかったあの頃
 今ではきらきら 溢れる笑顔たち

こんな日がずっと ずっと続けばいいな
 一緒に笑ったり 一緒に泣いたり
 全部大切な宝物
 夢へ向かって一歩
 立ち止まる日もある だけど一人じゃない
 明日へ向かって一歩
 大きく力強くはばたく
 心は 心はいつもそばに

時の流れは早すぎると
 別れがつかなくなるのは
 愛する幸せを知って
 分け合う喜び君からもらったから

ふとよみがえる 共に過ごした日々よ
 美しくなくても 立派じゃなくても
 優しく強い花を咲かせよう

夢へ向かって 一歩
 立ち止まる日もある だけど一人じゃない
 明日へ向かって一歩
 大きく力強くはばたく
 心は 心は いつもそばに

これから歩む道は でこぼこの道
 それでも歩き続けよう
 未来を信じて 自分を信じて

夢へ向かって 一歩
 立ち止まる日もある だけど一人じゃない
 明日へ向かって一歩
 大きく力強くはばたく

夢へ向かって 一歩
 立ち止まる日もある だけど一人じゃない
 明日へ向かって一歩
 大きく力強くはばたく
 心は 心はいつもそばに

幸せな 幸せな日々をありがとう

5 教職員からのメッセージ

「夢へ向かって一歩、明日に向かって一歩」

東日本大震災後、疲弊していた小原木の土地に日本国内だけでなく世界中の方々から、温かいメッセージや支援物資や義援金の数々をいただいた。中には、実際に本校を訪れ、歌や演劇、パフォーマンスを行って、子どもたちを励ましてくれる方々もいた。

子どもたちは、そうした方々の優しさに触れる中で、人間同士の心の結びつきの素晴らしさを感じ、愛情と勇気・希望をいただいていた。

秋の学芸会では、震災後に様々な方々からいただいた数多くの支援に対する感謝の気持ちと、保護者や仮設住宅を含めた地域の方々に元気を届ける気持ちも込めて合唱を発表している。

次に、これまで3年間の発表曲を紹介する。

(1) 平成23年度：「しあわせ運べるように」

阪神淡路大震災後に、神戸復興を願い作詞・作曲された歌を小原木バージョンとして、全校の児童・教職員で合唱した。

震災から半年、長く厳しい避難所生活を強いられていた家庭のすべてが、ようやく仮設住宅へ入居し新たな生活をスタートさせることができた頃である。

そのような中で開催した学芸会。「自分たちは前を向き、がんばって取り組んでいる様子を届けたい。」「私たちが地域の皆さんを笑顔にしてあげたい。」という声が、たくさんの子どもたちから聞こえてきた。



ボランティアのお二人とのお別れ会

(2) 平成24年度：「ふるさと」

震災から1年半、2年ぶりに市内小中学校音楽祭が開催されることとなった。

震災によって、大きくその風貌を変えてしまった小原木地区。それでも自分たちはこの土地を愛し、この土地で生活し、この土地に住み続けていくという地域の人たちの想いを熱く受け止め、ふるさと小原木に想いを寄せた歌を選曲した。

「支え合いたい人がそこにいる あしたを信じて歩いてる 花も星も虹の橋も すべては 心の中にある」という歌詞に、自分たちからのメッセージを届けた。



全校児童・職員による合唱

(3) 平成25年度：「一歩」

平成24年度、ボランティアとして唐桑で活動する学生や地元の若者が一緒になり、復興まちづくりサークル「からくわ丸」を立ち上げた。その中の2名の大学生が、学習支援ボランティアとして1年間本校の子どもたちのために力を注いでくれた。

校庭に仮設住宅が建ち、思うように運動や遊びができない毎日。家庭に帰っても、仮設住宅内は子どもたちの学習環境としては十分ではない。そんな中、子どもたちを連れ出し、汗だくで校庭を走り回る彼らの周りには、明るい笑い声が響き渡る。子どもたちに正面から向き合い過ぎてきた彼らが、子どもたちとの別れを前にした3月、想いを詩に託し曲をプレゼントしてくれた。

曲「一歩」には、「夢へ向かって一歩、明日に向かって一歩」の詩に表されているように、子どもたちとの



Ricoさんの伴奏による合唱「一歩」

出会いから、ともに過ごしてきた日々の出来事、子どもたちの将来に向けてのメッセージを感じる事ができた。

今年度の学芸会では、そろって来校した中内さん、渡辺さん、Ricoさんと、子どもたちはもちろん、保護者・地域の皆さんとも一緒に歌い合い心をひとつにすることができた。

「一步」は、子どもたちの心の歌として、これからも学校の様々な場面で歌い継いでいきたい。

6 おわりに

本校での、過去2回の津波被害を振り返ると、明治29年6月15日の三陸津波により44名の児童を失い、昭和8年3月3日には2名の児童を失っている。いずれも、夜間の津波による犠牲である。情報も迅速に伝達されない時代のこととはいえ、察するにあまりのある悲しい歴史である。

今回の東日本大震災では、下校前の時間帯で、海拔40m高台にある校舎で待機できたことが、津波からの人的被害を防ぐことにつながった。

震災後、地域の防災士の方からの指導・助言を受け、防災計画を改訂するとともに、小原木中学校生徒会の「海拔表示プロジェクト」の後押しもあり、登下校時や家庭における海拔30m以上に避難するという避難方法についても、地域や保護者とともに研修と訓練を積んでいる。

今後も、減災・防災の意識を緩めることなく、また、いただいた支援に対する感謝の心を忘れずに、「人と人の絆」を大切にしながら、職員が一丸になって充実した教育活動を推進していきたい。



思いやりの心を育み 心やすらぐ学校を目指して

校長 中井 充夫

1 はじめに

(1) 本校の位置

本校は気仙沼市の南西部の標高35mの丘陵部に位置している。

(2) 震災時の被害

震災においては、校舎校地に特に大きな被害はなかったが、木造校舎の一部教室が使用できなくなる程度の影響があった。しかし、学区内は沿岸部や川沿いの低地では津波により、住宅等が流される等の被害があった。児童の家族にも犠牲者がおり、遺児孤児は5人いる。

(3) 震災後の影響

震災後は、本校校庭の南側に仮設住宅20戸が建ち、校庭三分の一程度が使用できない。それに伴い南側入り口は仮設入居者専用の出入り口になり、本校への出入りは正門のみとなっていたが、本年になり徒歩での南側からの出入りは可能にした。校庭に仮設住宅があるが、一周120mのトラックが設置でき、通常の体育や児童の遊び等の運動はある程度確保できている。

2 子どもたちからのメッセージ

あいさつの輪

最高学年となった今年、努力していることがあります。それはあいさつです。

修学旅行で行った会津若松で、すれちがう人やホテルの人にあいさつをするようにしていました。

あいさつを返された時はとてもうれしく感じました。さらに、一人にあいさつをすると、その次の人やそのまた次の人というように、輪がどんどん広がっていきました。そのときから意識をして自分からあいさつをするようにしています。

こんなこともありました。朝、学校について廊下を歩いていたら、あいさつをしてくれた二年生の男の子がいました。知らない顔の子だったので、私はそのまま通り過ぎました。次の日、また廊下で同じ男の子に会いました。すると男の子はあいさつをしてくれませんでした。

私はとてもがっかりし、残念な気持ちになりました。きっと、前の日の男の子も私と同じ気持ちだったのだと、そのとき気付きました。翌日、また同じ男の子に会ったので、今度は自分からあいさつしようと思い、目が合ったときに、「おはよう。」と大きな声で声をかけました。すると、男の子はにっこり笑ってあいさつしてくれました。私はとてもうれしい気持ちになりました。それから私は、知っている人にはもちろんのこと、知らない人にも元気よくあいさつをするように心がけています。

あいさつは、人を元気にする力があり、人と人との輪も広げてくれるものだということを実感しています。あいさつをすることで、相手も自分も気持ちよくなるようにこれからも、「いつでも元気よく自分から」をモットーにしていきたいと思っています。そして、津谷小学校にもあいさつの輪が広がるといいなと思っています。

6年 三浦 鈴



私の夢

6年 三浦 穂乃佳

2011年3月11日からもう2年以上が過ぎました。

あの日私たち6年生はまだ4年生でした。休み時間にとっても大きな音がしてあの地震がきました。停電しガラスが割れました。

地震の後、電気や水道の無い生活は、とても不便でした。でもそのおかげで自衛隊のみなさんの心強さを感じ、近所の人たちとも力を合わせて地域のつながりの大切さを知ることができました。また、学校に送られてくる支援や励ましに感謝の気持ちでいっぱいになりました。

現在、私たちが住んでいる津谷の町もがれきが撤去され、新しい建物や店ができ、元の町に、新しい町になろうとしています。

そして、私たちも今、前を向いて頑張っています。

今年私たちは、最上級生として様々なことに学年一丸となって、どの行事も「今年が最後」と思いながら取り組んできました。

運動会では息を合わせ組み体操に挑戦しました。学習発表会では東北の偉人の生き方をテーマに心を一つに演じ、成功させることができました。

何より思い出に残っているのは福島県会津若松への修学旅行です。同じ被災地として仮設住宅が建っていたり、風評被害があったりしながらも会津の町の人たちはとても親切に笑顔で迎えてくれました。また、旅行中に学習した、野口英世の夢をあきらめない生き方には感動しました。



そして私にも将来の夢があります。それは漫画家です。漫画家になれたら震災の時のつらい経験や、震災を通して感じたことなどを漫画にして全国に伝えていきたいと思っています。

これからも復興が進んでも、地震がきたことや、津波が襲ったことが過去のことにならないようにするために、私は今日までの経験を忘れずに次の人たちに伝えて行きたいです。

3 保護者及び支援者からのメッセージ

人の心は人が支える

PTA 会長 菅原 竜喜

巨大地震が襲ったあの日、日常の生活が一瞬にしてタイムスリップしたかのような別世界に突入した。すべてのライフラインが停止、電気がない、水がない、食べるものがない。何をしていたらならぬのか…思考も停止した。

現代社会の当たり前前の便利さしか知らない私がどのようにして、これからを生きようか悩む日が突然訪れた。いざという時に役立つはずの携帯電話は繋がらず、家族との連絡も途絶え、便利なことに慣れ過ぎた現代人の私は文明の利器に頼りすぎてはならないことを学んだ。極論だが、やはり最後は人の心が人を支えることではないのか。震災が奪い去ったものはあまりにも大きい。

だが、辛さからも多くの学びも得た。それらを私の視点で伝えたい。

地域のコミュニティー

私は、毎日の仕事に追われ、朝から夜まで職場で過ごすことが多い。小さい時から地元に住んでいながら、地域の人を知る機会を得ずにいた。震災を経験して初めて、こんなに身近に親切してくれる人達がいたのだと教えられた。国内外からの支援物資を地域の方々と分け合い、皆が苦しい時にも関わらず、「子どもたちに持って行け」との優しい声を何度も掛けられた。ガソリンもなく、車を動かすことができない人が多くいた中、病院への通院や薬を取りに向ってくれた。また、連絡が取れない方がいれば、市役所まで車を走らせる、他の地域から避難をされた方へも、自分達と同じ地区民として快く迎え入れ、平等に物資を分けることまでされていた。今、自分達が生きることだけでも精一杯なのに。そうした地域に生まれたことを知り、地域のコミュニティーがこうした非常時に大切な役割を担うことを知り、普段から積極的に地域へ溶け込むことが肝要であると感じた。

人から人へ継ぐ努力を

過去の地震や津波の記録を先人たちは石碑等を作り残してくれていた。地域によってはこれによって多くの命が助かったと聞く。震災時には使用不可能であった文明の利器。しかし、映像が記録として残ることはこれから生きる若い世代には必ず役に立つものである。地震は必ずまた起きるし、津波も来る。日常生活を取りもどした私達がどれだけの危機感を後世に伝えていくことができるのかと考えさせられた時、今の記録が必ず役に立つだろう。いろいろな思いを心残りとしてこの世を後にした人々の思いを生かされた私達が引き継ぎながら、震災の悲惨さを残すだけでなく、復興や復旧にどれだけの時間と人が費やされたか、私達が直面した苦難をどう乗り越えたかを映像として残し、語り継いでいかなければならない。

風化させないために、生きる力をつける教育

過去にも宮城県沖に起きた地震を経験していた私達だが、その記憶は風化していなかっただろうか。忘れてはならないと思いつつも20年、30年後には風化していきだろう。しかし「生きる力をつける教育」が風化を防ぐのではないか。いつ何が起こるか分からない世界に生きるのは人間の宿命。人間が生きていくことはあらゆることに対処していかなければならないということだ。過去の地震や津波を風化させず、それを教材として生きる力を身につけることが必要なのではないか。茫然と立ち尽くした人達、何もかも失い生きる気力を失いかけた人達が、「前を向いて生きていかなければならない」と語っている。その人達が乗り越えたものは何であったのか、すべてを失い、希望を見出せないでいた方を支えたのは一体何であったのか、一人ひとりがそれぞれに見出した光は何だったのかを知る必要があるだろう。

1000年に1度の大地震と言われた東日本大震災を自分達の時代で経験したことで、多くの人と出会い、そして物心両面で支えてくれた方々のお一人おひとりの顔が思い浮かぶ。東北に食べ物が送り込まれ、関東や関西ではスーパーやコンビニ等も品物がない日が続いた。寒さ、暑さにも黙々と瓦礫を片付けてくれたボランティアの方々の努力。消防隊、警察官、自衛隊員の方々の心強さ。多くの方々の支援を受けて、私達は立ち上がりそれぞれのペースで前を向いて歩きだした。

「人は人として、人の為に生きること。」と多くのボランティアの方々の背中が私達に話しかけてくれた。いつかこの方々に御恩返しができるような人となり、「震災の辛さ」だけでなく、「人の心の有難さ」も後世に語り継ぎたいと切に思う。

ボランティアそして教師として

津谷小学校講師 佐藤 るみ子

今、私は、「鳥根県砂防ボランティア協会コーディネーター」及び「RUMIKO 平和への願い」の代表として、平成23年3月11日に発生した「東日本大震災」から9日目の3月20日より、「東日本大震災復興へ向けてのボランティア支援活動」に取り組んでいる。



震災当日、テレビのニュースを見ていた私は、何かに突き動かされたかのように、たった一人でハンドルを握り、日本海側から青森に上って岩手・宮城・福島と津波の被災地を南下した。そこは、何処もかしこも地獄の惨劇。あまりのショックで涙も声も止まってしまう、まるで、映画のスクリーンにでも迷い込んでしまったかの様だった。

2週間後に東日本の被災地から鳥根の自宅に帰って来ると、毎晩のようにうなされてしまい、もう何か行動しないと心が破裂してしまいそうになり、鳥根・鳥取と主に山陰の皆さんに呼びかけ

をして、義援金や物資を募り、直接自家用車で避難場所等に届けること45往復になった。

しかし、被災された地域の方々は、東日本大震災から2年8か月もの月日が経過した今でも、復興への萌しが伺えず、震災前の生活がなかなか取り戻せずに、毎日不安な生活を強いられているのが現状だ。

先般、この支援活動を通して、ご縁ができた方々(岩手・宮城・福島)を出雲の国へご招待し、出雲大社参拝(復興祈願祭)や交流会を実施した。

この時、南三陸町志津川中瀬地区行政区長の佐藤徳郎さんより「東日本大震災復興への道」という演題で、





東日本の現状を語っていただいた。講演の趣旨は次の通りであった。「南三陸町復興10か年を立ち上げ、新しい町づくりがやっと出来つつあり、私たちの町は災害に負けることなく 元気に暮らしています。南三陸町は必ず復興します！」

このように、東日本大震災を教訓に、「命の大切さ」ということをつくづく実感した私は、今年度9月より、気仙沼市立津谷小学校に勤務することになり、今日現在、毎日子どもたちと楽しく学習したり、活動したりしている。しかし、正直なところ、震災前までは私にとって全く未知の世界であった東北の地で、それも

子どもの「かけがえのない大切な命」を守ることを責務とする教師の仕事がきちんと出来るのだろうか、とても不安であった。

でも、そんな私の不安も一瞬にして吹っ切れたのは、校長室で初めてお会いした中井校長の笑顔に満ちた優しい歓迎の言葉であった。校長先生のお話から、子どもたちへの愛情は、思いやりの心をもって、子どもたちに「生きる力」を身に付けてやること、そして、「自分の命は自分で守ることができる力」に導いてやることだと感じた。正に、自然豊かな環境づくりをご自身の力で作り上げ、メダカ等の生き物を飼育する中で「命の大切さ」を子どもたちに考えさせる教育の実践者である。

私は、今、本当にこの貴重な体験をさせて頂けることに心より感謝して、自分の健康に留意しながら、背伸びをしないで、私に出来ることの「命の大切さ」を子どもたちや保護者の方々及び地域の方々に啓発していきたいと考えている。

さらに、この津谷小学校での貴重な体験を故郷島根に持ち帰り、「みんなで守ろう大切な命」をモットーに啓発活動を生涯の責務として、取り組んでいこうと思っている。



4 教職員からのメッセージ

焦らず 慌てず でも立ち止まらずに…

養護教諭 錦部 知美

通勤途中に見える景色は、この3年で大きく変わった所と変化の見えない所の繰り返しです。震災前、「津波到達想定地点」の標識に「こんな所まで本当に来るの？」と半信半疑というより、疑いの気持ちで見えていたのですが、実際に津波が起き、新たに掲げられた「過去の津波浸水区間」の標識が、想定地点とに大きな違いが無いことに驚き、自分の危機感の甘さを痛感させられました。「ここまで来るよ。」と教えてくれたのに、「まさか…。ここまで来たら町は全部無くなるよ。」思っていました。でも、町が無くなってしまいう程の、その「まさか…。」起きたのです。

朝出勤すると、校庭で元気に遊ぶ子どもたちの姿が目に入ります。玄関を入ると、水槽をきらきらした目で見つめる子どもたちがいます。これが津谷小学校の朝の光景で、「今日も子どもたちが、元気に無事に過ごせますように…。」そんな思いで一日が始まります。

震災後の子どもを取り巻く状況は、月日が経つほどに変わってきています。しかし、いつでも学校は、子どもたちにとって「自分の居場所がある所」であり、安心して過ごせる場所ではなくてはならないと以前より強く思うようになりました。

これまでに起きた震災の後に、求められてきたのが「心のケア」です。阪神淡路大震災を教訓に「心のケア」に関する研修会が開催され、参加する機会が幾度かありました。そして今回の震災の後にも研修の場を多くいただきました。経過年数とともに起きる心の変化を知ること、そしてそれを理解し対応していくことの重要性を繰り返し話されました。「心のケア」は子どもたちだけに必要なものではありません。大人も子どもも、勿論私たち教職員にも必要なものです。むしろ子どもたちを取り巻く保護者、大人達の心の安定こそが、子どもたちの心の安定に大きく影響していると言えると思います。定期的にスクールカウンセラーに來校していただくようになり、「気になる子」への面談の機会も増えました。その子の背景にあるものを見つめていくと、保護者との関わりに要因がある場合が多々あります。最近は保護者からの面談希望も増えました。保護者対象に「心のケア」に関する研修会も開催しました。参加された保護者の方々には大変好評で

したが、より多くの保護者の方がへ浸透させて行くことが今後の課題です。震災直後は研修会も各校で実施されましたが、これからも継続的に行っていかなければならないのではと思います。

私は一人一人の子どもたちに寄り添うことが出来ているのだろうか、養護教諭の私にできることは何か、専門性と役割とは何かを自問自答する毎日です。そんな中、子どもたちが安心感を持って学校生活を送り、様々なコミュニケーションの中で「自立」出来るように関わっていくことが重要な役割なのかと考えています。自分自身の生活を振り返らせ、子ども自身の「気づき」を大切にしながら、子どもたちが持っている回復力を信じて成長につなげていきたいと思います。人は人とのつながりや信頼関係を感じることで、不安だった気持ちが和らいでいくものだと思います。「自分と他者とのつながり」を感じられる子ども、「安心できる居場所」「元気になれる方法」を見つけられた子どもは、希望を持って前に進むことが出来るのではないのでしょうか。「あなたは一人ではないんだよ」「あなたは大切な人なんだよ」という信頼関係を、伝えていきたいと思います。

また、養護教諭から見える子どもの姿やメッセージを職場内で伝えていくことがとても大事だと感じています。前にも述べたように、子どもの精神的な身体的不安や生活リズムの変調は、子どもだけの問題ではなく家庭環境にも大きく関わっているからです。職員間で共通理解のもと、様々な健康課題を明確にすることで、今何が出来るのかが見えてくるのではないのでしょうか。校内はもちろん、スクールカウンセラーや各関係機関そして家庭と連携を図りながら、子どもたちを「希望ある未来」へつないでいけたらと思っています。

焦らず、慌てず、でも立ち止まらずに、一步一步確実に前へ。

5 おわりに

震災から2年8か月が経過し、通常の学校生活を過ごせるようになってきている。しかし、まだ仮設住宅等に入居している児童等もあり、完全に震災前の生活に戻ったとは言えない。震災後は、教職員に常に話しをしてきたのは、「せめて学校にいる時は、子どもたちに笑顔でそして普通の生活をさせましょう」という事であった。震災を体験した我々は、それぞれの立場で震災を語りつないでいく事が使命だと思う。それが上記のそれぞれの文章に表れている。そして、語りつなぐ事によって自分自身も未来に向かって進もうとする意欲につながる。子どもたち、保護者、支援者、教員からのメッセージはその決意の一つである。

子どもたちは、当校で毎月11日に実施している「津谷っ子防災の日」の講話等を真剣に聞き、避難訓練においては私語を発する子もいない。地震発生時は、教員の指示がなくても机の下に潜るなど子どもたちには、危機に対して敏感になっている。あの日の体験が、自然とこのようにさせているのである。このような状況の中大切なのは、「自分の命は自分で守る」という事である。しかし、自分だけが助かれば良いというのではなく、お互いの事を思いやり助け合う姿勢を身につけさせる事が大切だと考える。そして、その為の一つの方策として「心やすらぐ空間」を学校に設けたいと考えた。自然豊かな校地を活用し、季節に応じた植栽、池のビオトープ化、観賞魚等の飼育等を通して、自然の中で活動させる事により、「思いやりの心」を育てたい。

教職員及びすべての大人が子どもたちの前に元気で立つ事が、最も大事である。そのためには、「無理しない、無理させない」を合い言葉に学校経営をして行きたい。



気仙沼市立 **馬籠小学校**

命のメッセージ

—未来に向かってたくましく生きよ—

校長 木村 玲子

1 はじめに

(1) 学校の地理的位置

学区は全地域が田東山（512メートル）を始めとする山に囲まれ、山峡と馬籠川に沿う平地や丘陵地帯を水田や畑に利用しており、集落もそこに点在している。太平洋からは約5.7キロメートル内陸で登米市、岩手県藤沢町、南三陸町と隣接している。

(2) 震災時の影響

内陸で地盤が強固な地域であるため、津波被害は全くなく校舎や児童の自宅の損壊はほとんどなかった。校庭には仮設住宅が建たず、自宅外からの通学者はいない。水道・電気・電話等の復旧が比較的早く、4月22日の始業式にはライフラインは完全に整った状態であった。

(3) 震災後の影響

本校の震災による一番大きな人的被害は村田敏教諭が震災による津波で亡くなったことである。村田敏教諭は平成23年2月の研修会で左肩を脱臼し、手術後の抜糸のために3月11日は朝から時間病休をとり通院していた。本人から電話で「傷が痛むのでこのまま休暇をいただいて家（南三陸町志津川）で休養したい。」という申し出があり校長は体調を考慮し、全日病休を承認した。

14時46分東日本大震災（東北地方太平洋沖地震）発生。15時30分から16時にかけて校長が安否確認のため携帯電話から本人に2、3回連絡を入れたが繋がらなかった。懸命な捜査活動の末、本人の遺体は4月7日に志津川湾の海洋上で発見されたが、DNA鑑定で本人であると特定されたのは9月8日である。翌年公務災害に認定された。

このことは児童・教職員・保護者に衝撃と深い悲しみを与え、長期にわたって心のケアが必要になったのである。

2 子どもたちからのメッセージ

誓いの言葉

平成24年3月9日 「村田先生とのお別れ式」

児童代表 6年 千葉 大志

火曜日、命の授業で命がつながっていることに気づきました。僕のお父さん、お母さんやお祖父さん、お祖母さんとずっとさかのぼっていくと、誰が欠けても僕は生まれません。僕はこれだけではないと思います。僕たちが食べている食べ物も命のつながりの一つだと思います。僕たちはたくさんの命のつながりのなかで生きています。僕には僕の命のつながりがあるし、皆さん一人一人にもたくさんの命のつながりがあります。

僕たちと村田先生にも命のつながりがあると思います。僕は、4年生と5年生の時、村田先生に教えてもらいました。村田先生はいつも明るく、みんなを楽しくしてくださいました。そしていつも僕たちのことを気にかけて声をかけてくださいました。体育の勉強で、ドッジボールをした時、当てた、当てないでけんかになったことがあります。僕はたいしたことはないと思っていましたが、先生はルールを守ることの大切さを厳しく指導してくださいました。

村田先生からいただいた物があると思います。明るく楽しく物事に取り組むことや、ルールを大切にする

気持ちです。このことは命のつながりに似ていると思います。村田先生の気持ちは僕たちにつながっています。僕はもうすぐ卒業ですが、このことをこれからの生活の中でずっと大切にしていきたいと思っています。



平成24年3月9日 村田先生とのお別れ式
保護者や地域の方も参列してくださった



平成24年11月19日 植樹式
村田先生のお父様から「こぶし」寄贈

3 支援者の方からのメッセージ

「被災から前進するために ～未来へのメッセージ～」

環境経営学会理事（カシオ計算機（株）在籍） 若尾 久

社会貢献の一環として学校に出向き、“命の大切さ・生きる意味・生きる価値”を伝える「命の授業」を始めて6年が経過しました。教職員、保護者、そして生徒さん方、延べ2万名を超える方々にお話をさせて頂きました。この間、様々な出会いを頂きました。私の人生の新たな礎を築くことが出来たことに、今思いを馳せております。多くの出会いの中で、特に心を傾けさせて頂いております、馬籠小学校との出会いについて、思いを綴らせて頂きます。

2011年3月11日、東日本一帯は未曾有の災害に見舞われました。多くの方々が、馴れ親しんで来た愛すべき故郷が目の前で壊されていく姿に、言葉では言い表せない程の無念さと悲しみを感じたことに胸痛む思いでした。また多くの方々が亡くなり、そして、多くの方々が行方不明となったことで、一人一人の心が強い衝撃を受けると共に、将来への強い不安を抱いた瞬間でもありました。このような中で、私が一人の人間として何が出来るかを自分自身に問いかけ、考え考え抜いた末、自らに課した結論は子どもたちに対し「命」のメッセンジャーとして寄り添うことへの思いでした。

おりしも、予てからユネスコスクールでは大変お世話になっておりました、気仙沼市教育委員会の及川先生のお力添えを頂き、幾つかの学校で、「命の授業」を行う機会を頂くこととなりました。その中の一つが馬籠小学校でした。2011年の東北地区のユネスコスクールの大会で、偶然にも木村校長先生との出会いを頂き、お互いに命への思いを交換させて頂きました。馬籠小学校では、6年のご担任の先生が津波で亡くなっておられ、木村校長先生からの、「今、子どもたちに命への思いを伝える時」と言う思い、そして、「3月に予定されている、亡くなられた先生のお別れ会に、子どもたちが命のことをしっかり胸に抱いて臨んで欲しい」と言う強いお志に触れさせて頂いた事で、「命の授業」を本気で伝えていこうと決意した瞬間でありました。2012年2月に最初の授業をさせて頂きました。高学年の生徒さんは、亡くなられた先生のことを思い浮かべられるのか、涙ぐみながら耳を傾ける様子が伺えました。学校全体としては、生徒さんたちの言葉、振る舞いから、被災に対する強い思いを感じざるを得ませんでした。早く前を向いて進んで欲しいと、心から思った瞬間でした。私は、命の大切さと共に、これからどのような気持ちで、自分自身と向かい合って頂きたいのかをお伝えいたしました。

その思いを次のメッセージに託しました。

“さよなら”は、別れを表す言葉ではありますが、別れは、別れのままでなく、必ず新しい出会いとなって、繋がって行きます。生きている人とは“時と場”を通じて、亡くなった人とは、“心と魂”を通じて。皆さんを育て下さった、かけがえのない命は、これからもずっと皆さんの心の中に生きていきます。消えてしまったり、離れてしまうことは決してありません。この尊い命からのメッセージを胸に抱き、いつまでも忘れることなく、そして、心から感謝しながら、しっかり、生きて行って下さい。心に刻んだ、“思い出”と“感謝”と、そして“生きる力”は皆さんにきっと素晴らしい未来を約束して

くれるはずで。

悲しみを、命への思いに変え、
 苦しみを、人への思いやりに変え、
 そして、辛さを、人への優しさに変えて。

この心（命）の力は、未曾有の災害を体験した皆さんであるからこそ、本物となって光り輝くと、私は信じています。皆さんの、一人一人の命が、未来に向かって光り輝いて行くこと、これこそが、失った、かけがえのない人達からの、心からのメッセージだと私は信じます。皆さん、一人一人の命が、未来に向かって光輝いて行くことを心から祈っています。

この後、行われたお別れ会で、6年生の代表が力強い誓いの宣言をされました。誓いの宣言を通して、身近な出来事を命とのつながりで見ることが出来る力、“心の力”を創造されました。この心の力は、“感謝”と言う思いがしっかり支えていました。命の授業を通して気付いて頂いた大切な思いが伝わった出来事でもありました。その後、本年（2013年）2月に第二回目の「命の授業」を行わせて頂きました。驚いたことに、悲しみの表情を見せていた子どもたちからは、その表情が消え、村田先生のような、明るく、前向きな、そして力強い思いがその表情から伝わってまいりました。

木村校長先生を始め、全職員の方々のご努力と、ご家族の方々への寄り添いが大きな力となって、生徒さん方に“光り輝く心の力”が伝わったことを感じさせて頂きました。併せて、生徒さん方から、「命」とは何か、「生きるとはどういうことか」、「生きる力とは何か」を気づかせて頂いた瞬間でもありました。こんな素晴らしい生徒さん方、職員の方々、そして、支えとなっておられたご家族の方々との奇跡の出会いに、心から感謝致します。「命」の意味を伝えようとした私が、今まで以上の思いで、命の意味に触れさせて頂いた馬籠小学校に心から感謝致します。

気仙沼市教育委員会の及川先生と言う素晴らしい指導者、木村校長先生を始めとする心こもった教育者の方々、そして、無条件の愛で寄り添われたご家族の方々の存在があってこそ、生徒さん方の心の変化が醸成されたものと心から受け止めさせて頂きました。私の人生に大きな宝物を頂いた思いです。これからも、馬籠小学校を始めとし、気仙沼の方々には、私が出来る範囲で寄り添わせて頂きたいと思っております。心の同伴者として末永く、気仙沼と関わって参ります。これからは、共に、人生を力強く生き抜きましょう。



命の授業 1・2年生



聴診器で心臓の鼓動を聴き合う



命の授業 3～6年生

4 教職員からのメッセージ

地域を誇りに思い、未来に向かってたくましく生きる子どもの育成

ESD 担当教諭 伊藤 秀樹

ESD とは持続可能な社会づくりの担い手を育む教育である。本地区は歴史的地域遺産に恵まれており、地域人材も豊富なにもかかわらず、地元のことをほとんど知らなかったという児童が多く、学校が地域と連携し、地域遺産を伝承していく重要性を感じた。

そのような折、ユネスコアシストプログラムの研究助成をいただき、平成24・25年度の2年に渡って行った「馬籠歴史探検隊」の実践の概要を述べてみたい。

馬籠は産金を通して奥州藤原氏と深い結び付きのある由緒ある地域である。平成24・25年「馬籠歴史探検

隊」を立ち上げ、3年生から6年生を対象として夏休みを利用して地域学習を進めてきた。平成24年度は、「歴史を学び地域を知る」をスローガンに、地元の歴史研究会である「馬籠風土研究会」のガイドで、地域の歴史あるお堂や神社、古戦場跡、製鉄跡などを巡った。この活動を通して児童は初めて馬籠の金山を知り、産金を通じた奥州平泉の黄金文化と馬籠のつながりについて関心が高まっていった。



事前指導：馬籠風土研究会会長
大江武夫先生と会員の皆さん



藤原秀衡の従姉妹にあたる
尼公ゆかりの薬師堂



馬籠製鉄：仙台藩製鉄発祥の地
隠れキリシタン伝説もある

平成25年度は24年度との連続性と児童の興味・関心から「金」をキーワードに馬籠の産金と世界遺産平泉との関係を学ぶことにした。夏休みに平泉見学に出かけたが、児童にとって一番印象に残ったのはやはり中尊寺金色堂であった。豪華な装飾から藤原氏の勢力を推察すると同時に馬籠の金が使われていたことで地域に誇りをもつようになった。



馬籠の産金と藤原氏の栄華の結び付きを
探る馬籠歴史探検隊



いざ金色堂へ。児童は説明を聞いて
一生懸命メモをとった



讚衡蔵：どんなお宝があるでしょうか
ワクワクです

成果としては①「地域」から「他地域＝平泉」また「地域」という活動の広がりや深まりを得ると同時に地域を客観的・総合的に考えることができるようになった。②地域を多面的に理解し、大切にしようとする態度が育った。③地域の方々に触れ合うことで先人の知識・知恵に対する尊敬の気持ちが育ち、伝承していかうとする意欲が高まった。④外部人材との交流や活動のまとめを通して自分の気持ちや考えを積極的に伝えようとする態度が育成された。

課題として、昨年度は新聞形式でまとめたが対面や双方向での交流ができなかった。今年度は3学期に行われる生活科・総合的な学習の時間の学習発表会でパワーポイントを活用したプレゼンや、来校者との質疑応答といった双方向の交流に加えて、HPなどで広く発信し、流動性が少なく人間関係も固定されがちな本校の課題を克服していきたい。

次年度は3年目のまとめとして馬籠の金山採掘跡を探索する予定である。

5 おわりに

震災から3年経ち、3年間同じ学校に勤務する校長も数える程になった。

これまでを振り返ってみると前任校の東松島市立鳴瀬第一中学校は、平成23年3月11日以降野蒜地区の被災者の避難所になり、3月末まで生徒の安否確認及び所在確認と避難所対応に追われる日々であった。そして4月1日に新任校長として気仙沼市立馬籠小学校に赴任したのである。

本地区は地震や津波による被害がほとんどなく、ライフラインの復旧も他の被災地よりも早かったため、平時の日常が戻っていた。長い春休み中に家庭訪問すると、児童ははじけるような笑顔で迎えてくれたのであった。

しかし、本校にとって最大の震災による被害は、児童や保護者、地域の皆様に厚く信頼されていた村田敏教諭が震災死されたことである。それによって深い悲しみを抱えた児童・教職員・保護者・地域の皆様は、行方不明だった時期、遺体が発見された衝撃、お葬式への参列、学校でのお別れ式、公務災害認定の喜び、村田先生のお父様による「こぶしの木」の植樹・・・という長いプロセスと時間をかけて心の傷を少しずつ癒やしてきたのである。

心のケアにはカシオ計算機の若尾さんに3年間お心にかけていただいております、この12月には3回目の「命の授業」を予定している。若尾さんには本校の実態に沿った綿密な準備に支えられた授業をしていただいている。授業のほかにも様々な支援をいただいているが、特筆すべきは秋になると若尾さんの実家の山梨から宝石のような葡萄が沢山送られてくることである。ほっぺたをふくらませて「おいしいねえ」「こんな葡萄食べたことない」と言いながら葡萄を食べている児童の笑顔を見ていると、心も体も元気になってきていることを実感する。またこれほどまでに本校を大切に思い3年間継続して温かい支援を続けてくださっていることに「感謝」という月並みな言葉では言い表せない感情がわいてくる。

また平成24・25年の2年間に渡って未来に向かってたくましく生きる児童の育成と地域の人材のコラボレーションとして「馬籠歴史探検隊」を実施した。企画の発端は、校長室を訪れてくださる本校の支援者には、地元の歴史や風土に関する深い知識をお持ちの方が多く、興味深いお話を校長室で拝聴する機会に恵まれるにつけ、児童にも是非聞かせてあげたい、地元を知り藤原氏と深いつながりのある故郷馬籠に誇りをもってほしい、という思いがあった。

企画を提案すると、馬籠風土研究会会長の大江武夫先生始め風土研究会の皆様にはお忙しいにも拘らず、1年目は事前指導や見学地の整備、地元の方への連絡、加えて2年目は自作の教材を提示してバスの中でレクチャーまでしていただいた。資料には馬籠風土研究会の皆さんが平成23年に完成させた「馬籠風土記」を活用させていただいた。資金面ではユネスコアシストプログラムの助成を2年連続で受け、交通費や拝観料などは全て助成金から捻出することができた。さらに本校のESDの取組を紹介するカラーのリーフレットも助成金を活用して作成し、各所に配布させていただいた。本活動は学校だけの取組では到底なし得なかったものと関係各所に心から感謝している。

平成25年度は気仙沼市教育委員会から「伝統文化をベースとしたESDの実践推進校」の指定を受けたことを機に、これまでの実践をまとめて第1回宮城教育大学・東北地区ユネスコスクール実践大賞に応募したところ大賞を受賞し、身に余る光栄であった。

その受賞理由に「地域に密着した取組や、震災の影響を受けても、力強く活動する姿勢が素晴らしい」と評価していただいた。3年間最も心して取り組んできたのは、「心のケア」と、「震災の傷を乗り越えてたくましく未来に生きようとする児童の育成」であった。そうすることが、「児童を守ろう」という一心で志津川の自宅から馬籠小学校に向かう途中で大津波に巻き込まれた村田先生の、教育者としての情熱に応える唯一の方法だと確信しているからである。

気仙沼市立 **小泉小学校**

子どもたちの未来に向けて

校長 三浦 雅彦

1 はじめに

(1) 本校の位置

本校は、気仙沼市内の南端部に位置し、東側が海岸に面した標高23mの高台にある。学区の南部は南三陸町に接している。震災後は、地盤沈下により海岸線が大きく内陸部に後退し、学校の東側直下を南北に通る国道45号線を越えて湿地が広がっている。学校の北側には、小泉川（津谷川）が流れ、その手前に震災前は小泉の中心街であった町区の被災地が広がっている。学校の西側には、震災前と変わらず北上山系の霊峰田東山が学区を見下ろすように聳えている。

(2) 震災時の被害

震災により本校学区は壊滅的な被害を受けた。本校校地内に設置された「津波記憶石」には小泉地区の被害として「死者／行方不明者40／1,809人、被災世帯（全半壊）332／568世帯」と記されている。震災当時、本校では子どもたちは全員無事であったが、75家庭（平成22年度）のうち全壊47家庭、半壊7家庭で被災率は7割を超えた。

その他にも JR 気仙沼線や国道45号線を始め主要道路が流失により不通となり、松林のきれいな海水浴場として利用されていた赤崎海岸（小泉海岸）は地盤沈下と津波により大きく姿を変え、松林はほとんど消失した。

校舎は、津波が到達しなかったため、屋根瓦や窓ガラス等が一部破損したものの、部分補修後は使用に問題はなく、ほぼ無事であった。

(3) 震災後の影響

震災後2年8か月を経たが、全校児童76名中半数近くが仮設住宅に在住しており、地域の復旧・復興はまだこれからである（平成25年11月11日現在）。

子どもたちは、明るく元気に学校生活を送っている。しかしながら、多くの子どもたちの生活環境が変化し、心のケアや学力の向上も含めて学習指導と生活指導の改善や重点化を進めてきている。

震災後の児童数は、平成23年度86名、平成24年度79名、平成25年度75名で減少傾向である（いずれも4月1日現在）。転出児童はほとんどいないが、入学児童が減少していることが要因である。その傾向は今後も続く見通しである。

安心・安全な学校づくりは重要な課題となった。地震津波等に備えた緊急対応マニュアル等の見直しや整備を進め、併せて近隣他校（園）や地域と連携した避難訓練の在り方も改善を進めている。

地区内では、三陸道工事と集団移転宅地造成工事が進んでいる。今後、さらに国道45号線かさ上げ工事や防潮堤造成工事等が予定されており、本校学区の交通量の増加が見込まれ、交通安全指導や不審者対応等も含め防災・安全指導が課題となっている。



運動会にて（平成25年5月18日）

2 子どもたちからのメッセージ

震災を受けて学んだ心

5年 中館 ひなた 陽

わたしは、震災を受けてたくさんのことを学びました。

一つ目は、将来の夢です。避難している時に、けがをした人や病気の人を助けたいと思ってから、人に元気をあげる「看護師」になりたいという自分の夢ができました。

二つ目は、思いやりの心や勇気、大切に思う心です。ボランティアさんやほかの県や外国の人が、がれきを片付ける手伝いをしに来てくださったり、筆記用具やノート、食べ物などを遠くから送ってくださったりしてたくさん支援をいただきました。本当にありがとうございます、と言いたいです。それをきっかけに私は思いやりの心や人のために行動する勇気、助け合うことの大切さを学びました。

震災では、この小泉小学校の校舎や校庭がわたしたちをよく守ってくれました。これからも小泉小学校はきれいで、田東山がいつも見られて、元気と活気のある学校であってほしいです。

わたしが考える未来の小泉地区は、もとのように活気があり、いつもにぎわっている小泉がいいと思います。これから小泉地区がそうならいいです。

これからは、小泉のため、自分のため、みんなのため、後輩へ引き継ぐため、「思いやり」や「勇気」、「大切に思う心」や「元気」など、震災で学んだ心を将来の自分に活かし、わたしの将来の夢、看護師を目指していきたいと思います。

未来のぼくへ

5年 高橋 一馬

未来の小泉は復興していますか。多くの人は住んでいますか。

今ぼくは、大震災の日から3年たち、5年生になりました。

未来のぼくは、なにをしていますか。しっかり仕事をしていますか。ぼくの夢は、サッカー選手だったけれど覚えていますか。叶っていますか。

未来の小学校は、人数は百人を超えましたか、それとも百人以下ですか。今は、低学年の人数が少なくなっているの、未来では百人を超えてほしいです。今は、きれいな小学校なので未来の人にもきれいに使ってほしいです。

未来のぼくは、しっかりしている人になってほしいし、小泉小学校もいつまでもきれいであってほしいです。

未来のぼくは、きちんとした良い人になりたいのです。

未来へ

6年 及川 美知

大好きな小泉の町、大好きな小泉の自然、そしてこの町とこの自然が大好きな人々。私は大好きだった。でも、もう二度と振り返りたくないあの日がある。もう、二度と。

2011年3月11日、そのとき私は小学3年生だった。ろうかの水飲み場で粘土板を洗っていたときだった。「ガタゴト、ガタゴト」と物がゆれる音がした。その瞬間、大きな地震におそわれた。だんだんとゆれが大きくなっていく。そしてみんなは先生の指示で校庭に避難することになった。

校庭に出てみるとみんな不安な顔をしている。その後、校長先生がラジオを持って出てきた。

「今、東北地方で大きな地震がおきました。」

「大津波警報が出されました。」

と放送されていた。それを聞いたとたん私は、

「えっ、大津波。」

そのあと私は泣いてしまった。目の前が真っ暗になって泣くことしかできなくなったからだ。

でも、その後お父さんがおばあちゃんとおじいちゃんを車に乗せて迎えに来てくれた。そのとき、

「家族っていいなあ。」

と、あらためて感じた。

その5日後にお母さんと会えた。

後で私の家を見た。残っていたのは、ガレキばかりで、思い出がつまった大好きな、大好きな私たちの家、そして町がなくなっていた。とてもつらくてしばらく何も言えなかった。

でも、それがあってこそ、これからがんばろう、みんなを力合わせて協力していこうって気持ちがあらためて感じられた。もし、これからくじけそうになっても、この時のことを思い出すと、がんばろうという気持ちや協力の大切さを忘れないですむだろうと思う。

震災で苦しんでいる人、悲しんでいる人はまだまだたくさんいると思う。だから私の将来の夢は、そんな苦しんでいる人たちを助けてあげる仕事につくことだ。医者、警察官、ボランティア関係の仕事などにつきたい。小学生のうちは、仕事はまだできないけれど、今できること、やりたいと思うことは、すぐにでもやりたいと思う。

また、大人になったら、震災を次の子どもに伝えて、震災のつらさなどを教えてあげたい。私は、自分の将来の夢をめざして、震災での思いを忘れずに生きていこうと思う。

3 保護者・地域の皆さんからのメッセージ

希望に満ちた瞳のために

5年保護者 佐藤 浩美

「行ってきまます。」

平成23年3月11日。いつもと変わらない朝でした。でも、なにか心にひっかかる感じがして、いつもよりも少し気をつけて登校してほしいと娘たちに声をかけたのを覚えています。

仕事で南三陸町にいた私は、志津川中学校に避難しました。悪い夢をみているような、映画の中でも放り込まれたような、まるで現実とは思えない感覚を、今も消すことはできません。

家族に会うことができたのは、2日後のことでした。「お母さん」と呼ばれることの嬉しさを心いっぱい感じた夜でした。

小泉では、幼稚園児も小・中学生も全員無事だったことを知った時、ただただほっとしました。先生方や、地域の皆さんの対応のおかげだと思いますが、その時は奇跡に思えました。この時を乗り越えた子どもたちの、輝く未来への軌跡へと変わっていくのだと思いました。

そのための第一歩、学校が再開され、徐々に行事が復活し、以前のように子どもたちの活動の様子を見ることができるようになって感じたのは、子どもたちの元気に活動する姿が、その目の輝きが、私たち大人にとって大きな力となり、励みとなることでした。小泉を元気にする源が、そこにあるように思いました。

学校以外でもそれを感じることができました。私は、地区の大漁打ばやしに参加させていただいています。震災後しばらく活動はお休みとなりましたが、参加している子どもたちが、

「いつから太鼓やるの。」

と言ったときの、そのきらきらと希望に満ちた表情が今も脳裏に焼き付いています。

千年に一度と言われる大震災を乗り越えた子どもたち。大変でないはずがないのに、それでも変わらず輝いてくれる子どもたち。私たちに、小泉に、元気を与えてくれる子どもたち。そのままの、希望に満ちた瞳で、それぞれの世界へ羽ばたいていけますように。未来が明るいものでありますように。

そして、大人になった時、全世界からいただいた支援の重さをしっかり感じ、復旧・復興に携わったたくさんの人々の努力に感謝し、恩返しができる人になってほしい、と思います。

大人になったこの子どもたちが生きる小泉に、東北に、大震災の被災地に、日本や世界にも、希望に満ちた人々の輪が広がっていますように。



小泉浜大漁打ばやし保存会

小泉の子どもたちに親父たちが残すもの

PTA 会長 及川 宏

①会員らが集まり「小泉 Cool な親父の会」を結成

「花火をやりたい。PTA の親父たちで小泉の夏の花火大会を復活させたい。」

平成25年3月、小泉小PTA 会長を引き継ぐ時の酒席で、森谷前会長がアツク語った言葉である。1か月後の4月28日、森谷前会長の声掛けで小泉小PTA の親父たちを中心にボランティアや支援者も含め20名ほどが集まり、山田大名広場仮設住宅の集会所で親父の会の設立総会を開催。会則の第2条（目的）は「本会は気仙沼市小泉地区における子どもを中心とした活動を推進することを通じて、あらゆる世代間の交流を促進し、親父としてCool な姿を示し、小泉地区の創造的復興に寄与することを目的とする」とした。被災から2年が経過した小泉地区の本格的な復興に向けて、支援されるだけでなく自らの力で未来の小泉地区を切

り開く、親父たちの姿を子どもたちに見せたい、という思いが込められている。「小泉 Cool な親父の会」の誕生である。

②10年ぶり復活の小泉川花火大会

学校やPTAの行事のたびに集まる親父たち。それに加え、親父の会の本格的な活動が始まった。まずは8月15日の「復活!! 小泉川花火大会」の準備である。森谷前会長のついでで花火師は決まっていた。後は資金集めと役割分担、消防や警察への申請、広報活動、出店関係、実行委員会の設立等々、話し合いは多岐にわたり、仕事帰りに集まること十数回、深夜に及ぶこともあった。花火大会当日は、大勢の小泉地区の子どもたちや住民が集まり、10年ぶりに復活した小泉川花火大会を存分に楽しんでた。親父たちもそれぞれの役割をこなし、終了後の反省会では子どもたちの笑顔と歓声を思い出しながら「やってよかった」「やりとげた」の思いをつまみに大いに盛り上がった。協力いただいた「小泉地区の明日を考える会」や地域振興会、ボランティアの方々、また協賛金をいただいた地元企業や小泉に関連のある企業、会員の勤務先や紹介先などの企業関係者の方々には、感謝の一言に尽きる。お陰様で、当初の予算規模以上の花火があげられ、成功裏に終了した。



小泉 Cool な親父の会

③小泉地区の子どもたちの未来のために

親父の会の活動はその後も続いている。小泉八幡神社祭典での奉納復興素人演芸会や赤崎海岸での生き物観察会など、少しずつではあるが震災前からの行事や新しいイベントを企画開催している。震災時から今日まで、私たちは多くの支援や励ましをいただいた。そのことに感謝の気持ちを忘れてはならない。そして、支援されるだけでなく自らの力でコミュニティーの再生に向けて活動しなければならない。小泉地区の再生には長い時間がかかり、子どもたちの力が不可欠である。親父たちが活動する後ろ姿を見て「小泉のために何かしたい」と子どもたちが少しでも感じたら、親父たちも喜ぶだろう。小泉地区の子どもたちの未来のために、今日も親父たちが集まっているかもしれない。

三つの命を大切に生きる

(有) オイカワデニム 代表取締役/小泉婦人会楽々会会長 及川 秀子

千年に一度と言われた東日本大震災から、2年7か月が経ちますが、いまだ復興途上の当地域。私はこの大震災を経験し、多くの教訓を受けました。いつの日か又起こるであろう天災、震災を恐れず、常に命を守る準備をしておく事が大切と思います。天災、震災は、誰のせいでもありません。でもそこからどの様に立ち上がるかは、そこに住み、そこで生きる人たちにかかっていると思います。美しい町を、ふる里を、子どもたちの笑顔、人々の笑顔を取り戻せるのは、そこで生きる、この地に暮らす自分たちしかいないという事を心に刻み、共に力を合わせ、温かな言葉を掛け合い、自助・共助の心ががんばって生きていく事だと思えます。

私は今回の震災を経験し、これからは「三つの命を大切に生きる」という教訓を受けました。一つ目の命、それは両親から、先祖から頂いた大切な大切なたった一つの尊い自分自身の命、「生命」かと思えます。そして、二つ目の命、それはそれぞれが持つ「使命」という命だと思えます。11年3月11日を、これからもずっと、ずうっと後世に伝えていく。これも、あの日を生き残れた私たちの大事な使命と思えます。大震災被災地は今も悲しみの底にあります。しかし、被災地の「その時」と「今後」は、これからの災害に対する大きな参考となるはず。被災地域が体験した現実を語り、そして未来の減災、逃災に向けて伝え続けることが、予測できない災害への備えとなり、あの時から今にと続くみな様より頂いた御支援に対する恩返しの一つとなるのではないのでしょうか。今の自分に出来る事を、常に、相手の立場で思い考えながら生きていく。これも使命。そして三つ目の命。それは、この事をいつの時も、どんな時も一生懸命がんばる!! という命。「生命」「使命」「一生懸命」。この三つの命を大切にがんばります。



自社工場にて
(2011年4月4日撮影)

そして、これからの子どもたちに対しては「自分自身」を、「命」を輝かせながら「NEW STEP」ニューステップ。「新たな未来へ」を目指し、みんなで手を携え、力強く前を向き、一步一步進んでほしい、と願っております。

大好きな小泉を子どもたちへ継ぐために—集団移転は未来への贈り物—

小泉地区の明日を考える会事務局長／小泉小学校学校評議員 加納 保

震災からの復興、始まりは病弱な両親や家族を一刻も早く家に入れたいとの思いからでした。集落を襲った20メートルを超える大津波、一欠片さえも残さず全て海へと呑み込んでいった現実を目の当たりにし、集落の誰一人として二度と同じところには住めないと直感したのです。震災後まもなく夜な夜な住居の再建のはなし、そこから一緒に造成して家を建てよう。どうせなら集落みんなで同じ場所に暮らせる何かいい手段がないものか模索する毎日でした。やがて隣町に電気や電話が繋がり、仲間の会社事務所を拠点として過去の事例を調べたら防災集団移転促進事業を知り一筋の光が見えたような気がしました。しかしながら、その採択条件は被災地集落に一軒でも再建する人がいてはならないなど大変厳しいものでした。被災している人達の今後の生活を確認する必要があることから、防災集団移転促進事業の内容説明会の開催を市役所をお願いし、更には9割以上の家屋が流失し運営困難な自治会の代わりに「小泉地区の明日を考える会」という組織を立ち上げて被災住民の意向調査など地域復興の中心的な役割を担う組織として活動することにしました。直面している課題は、「住民合意」被災した元の場所に再建しない確認と被災した世帯の過半数が防災集団移転に参加することの確認です。避難所の目の前には仮設住宅が建設中、避難所からバラバラに別れる前に確認のアンケート調査をする必要があり、時間が限られていました。震災からまだ2か月、どうしたらいいのかわからない人が多数いましたが、わからない人は、とりあえず集団移転に入ると説明し、9割以上の世帯が集団移転に参加、残りの世帯も被災場所には再建しないと答えてくれました。これをもとに小泉地区防災集団移転協議会を設立、気仙沼市長に要望書を提出しました。時に平成23年6月14日の事です。



明日を考える会館にて

このアンケート調査を進めながら、私たちは単なる個々の住宅再建ではなく、新しいまちを環境に優しく、暮らしやすい自慢できるまちを造ろうと考えました。しかし、どのように進めたらいいのかその手法がわかりません。私たちにあるのは、新しいまちを自分たちが造るというヤル気だけでした。人づてを頼って、やがて奥尻島の復興に携わった方々に巡り会うことができました。北海道大学の森傑教授と札幌の設計事務所、株式会社アトリエブシクの和田常務と石黒専務の二人、この方々の全面協力により私たちの防災集団移転促進事業が動き出しました。平成23年7月6日の集団移転事業のキックオフ、第1回復興フォーラムで森先生の講義「集団移転は未来への贈り物」と題して、この震災からの復興は、自己の家を建てることではなく新しいまちを造ることなんだと話して下さいました。震災がなくてもいずれ廃れていく過疎の町、私たちはそこから立ち上がるチャンスを与えられたのだと気持ちを切り替える事ができました。未来への贈り物として新しいまちづくりに取り組む気構えができたのです。

平成25年3月11日で、あの日から2年が経ちました。まちづくりワークショップも数えれば25回、自分たちの震災前の暮らしを振り返って、地域のいいところや継承したいところ、生活様式、自治会組織、場所であ

ったり、人であったり、自然だったりと一人一人が小泉という地域と向き合ってみつめ直した最初の3か月。早く家を、早く造成工事をと苦情をいわれながらも進むべき道が明るく照らされているような気がしていました。9月末の台風の夜、遠く札幌から車で小泉地区の模型を持ってきて下さった石黒専務、以前家のあった場所へ自分の名前が入ったパーツをはめ込む作業、今でも涙する思い出深いワークショップでした。その日から住民の顔が明るくなったような気がします。それからのワークショップは、新しいまちへの基本的なコンセプトを十分話し合ってきたので順調に進めることができました。



小泉地区防災集団移転事業 鳥瞰図

小泉に似合う家とは、魅力のあるまちづくりやまちなみの維持管理や運営方法など参加されている住民からは積極的な意見や提案が出されるようになりました。加えて森先生からは、世界的に誇れるまちの事例を高齢者にも分かりやすく大学の講義のように解説して貰い、先進の住宅団地を視察した時にはお互いにクルドサクヤラドバーンの言葉を説明し合う光景には驚きもしました。少しずつ少しずつ小泉地区のラドバーン（歩車分離）の防集団地が浸透し、自慢のまちの計画になってきました。

いろいろな方々の支援をいただきながら平成24年5月22日大臣同意を得ることができ、やがて詳細測量に着手、この春には用地買収と造成工事へ着工と足早に過ぎた日々でした。いろいろな苦労やくじけそうな出来事も大好きな小泉を子どもたちへ継ぐために、もう一度小泉コミュニティを再生することが私たち小泉地区の明日を考える会と厳しい生活に耐えながら協力してくれる住民のみなさんとの集団移転であり、未来の小泉の人達への贈り物なのです。完成までは、もう暫くありますが全員元気にその日を迎えられることと信じておりますと共に全ての方々に感謝申し上げます。

さて、一回り前の話になりますが、私がPTA会長に就いていた時に現在の赤いとんがり帽子の校舎が建てられました。小泉に育む子どもたちや地域住民の灯台のような存在となって、行く先を明るく導いてくれるとのイメージであったと記憶しています。少子高齢のこの地域では地域全体で子どもたちを見守り、子どもたちが地域に元気を届けてくれる大切な関係にあると感じていますし、その姿が避難所生活の中で十分に活かされていました。子どもたちには、これからも大人たちの復興に向かう姿を日々感じながら小泉のよいところを知ってもらいたいと思います。そして、やがて「ゆめのつばさをひろげて」大きくはばたき、ふるさと小泉を継いでほしいものです。

参考

- [平成23年]
- 4月24日 小泉地区の明日を考える会結成
- 6月5日 小泉地区集団移転協議会設立
- 6月14日 気仙沼市長へ防災集団移転促進事業実施を求める要望書提出
- 7月6日 第1回小泉地区震災復興フォーラム開催
- 7月20日 第1回まちづくりワークショップ開催
- 12月9日 小泉町地区防災集団移転事業申込書提出
- [平成24年]
- 5月22日 国土交通大臣同意となる
- [平成25年]
- 6月 造成工事着工
- 7月1日 「大好きな小泉を子どもたちへ継ぐために」書籍発刊

4 教職員からのメッセージ

未来の子どもたちのために

2011年3月11日、東北地方に未曾有の大震災が発生しました。激しい、濁った水の流れの中に、一つの町がすっかり飲み込まれてしまう光景には言葉を失いました。さらに、波が引いたあとの町の様子は、筆舌に尽くせぬほどむごいものでした。

美しい白砂の小泉海岸。その水は透明で、夏になるとたくさんの海水浴客で賑わいました。また、よい波があることでも有名で、一年を通じてサーフィンをする人々が訪れてもいました。海岸線に並ぶ松原は海風を防ぎ、川に沿って水田が広がっていました。川の南側には町区の集落があり、豊かな自然の中で、人々は日常の営みを続けていました。この風景が、今はすっかり変わってしまいました。浜区も、海岸沿いの家屋はなくなり、盛んだった養殖業もまだまだ本格的な再開にはこぎ着けていません。

三陸海岸に住む人々は、昔から津波の大きな被害を受けてきました。昔の大津波がどこまで到達していたのかを示す場所や、言い伝えが数多く残されています。先人達が、子孫に同じ被害を受けさせたくないという思いで残したものです。しかし、時がたつにつれ、便利さを優先してしまい、気をつけようという気持ちが薄れてきました。その結果、また大きな犠牲を払う結果になってしまいました。この大きな災害を体験し

教諭 菅原 聖子^{しょうこ}



小泉海岸の清掃活動（平成19年）



田東山から望む小泉（平成22年）

た今、その言い伝えをしっかりと見直し、この大震災のような被害を二度と起こさないように、学校や家庭で子どもたちを通して伝えたり、地域の防災方法を確立したりするなど、何らかの形で後世に伝えていくことがわたしたちの大切な役目だと思います。

避難所で暮らした一週間、家を無くしたり家族を亡くしたりという過酷な被災体験をしているにもかかわらず、嘆いたりわめいたりする人も不平不満を言う人もなく、みんなが寄り添って前へ進もうとしている姿に、私は、人の強さ、素晴らしさを感じました。

子どもたちは、心に、目に見えない深い傷を負っていることでしょう。しかし、子どもたちはそんな姿を表には出さず、避難所生活の中でも明るく元気に動き回り、周囲のみなさんの笑顔を引き出してくれていました。それには、たいへんな事態にもかかわらず、みんなのために力を尽くす大人の姿が大きく影響していたのだと思います。

今回の震災では、たくさんのボランティアの方々国内外から来てくれました。また、たくさんの支援のメッセージや物資も頂きました。同じ人間として心を痛め、寄り添おうとしてくれたことに心から感謝しています。子どもたちには、困っているときに手をさしのべてくれた人々への感謝の気持ちを忘れずにいて、逆の立場に立ったとき、その人を助けるために行動を起こすことのできる人間になって欲しいと思っています。

私たち教師は、勉強を教えるだけでなく、子どもたちの未来のために防災の知識や方法を教えて、命を守りつないでいくことが大切な仕事になります。また、人とのつながりを大切に、自分だけでなくみんなのためになる行動を心掛けることの大切さも伝えていかなければなりません。それは、感謝の気持ちをもつことで実現できることなのかもしれません。

かつて、4年生を対象に津波避難の授業をしたことがあります。通学途中に津波警報が出たら、どの道を通って登校あるいは下校したらよいかの学習でした。川の傍はもちろん、自動販売機やブロック塀など、倒壊する恐れのある物の傍は通らないことを学習しました。また、登下校中の避難場所を家族で確認しておくようにも指導しました。その時は、まさかこんなに大きな津波が来るとは想像もしていませんでしたが、その学習を一度で終わらせるのではなく、継続していけばよかったと思います。

「まさか起きない」ではなく「もしかして」という気持ちを常に持ち続けたいと思います。



国語の授業（1年生）

5 おわりに

「ゆめのつばさひろげて」は、平成16年に本校創立130周年記念事業で、新築された校舎の玄関前に設置された記念碑に刻まれた言葉である。当時の熊谷美和子校長は『「新校舎で力いっぱい学び、夢をもって21世紀の時代を大きく羽ばたいてほしい。』『地域を発展させるたくましい力となってほしい。』という願いが込められている」と記念誌に綴っている。

今、宮城県では「人と『かかわる』、よりよい生き方を『もとめる』、社会での役割を『はたす』」を三つの視点とし、夢や希望をもち、その実現に向かって意欲的に物事に取り組む姿勢を育む「志教育」を推進している。しかしながら従前から本校では地域と共に歩みながら、同様の願いをもって子どもたちの教育を進めていたことを知らされる。

震災は子どもたちの心の中に大きな影を落としたが、つらい体験の中で学んだことも少なくない。多くの子どもたちが正面から向き合い、自分の歩むべき生き方を見出そうとするたくましい姿に驚かされる。それ以上に、小泉の父親たちが、そして母親たちが、さらに地域を支える大人たちが、今なすべきことに立ち向かい、子どもたちの未来に向けてそれぞれの役割を果たし最大限の努力を尽くす姿に、惜しめない拍手を送らざるを得ない。

私たち教職員は、楽しく、美しく、充実感溢れる学校づくりに一丸となり誠実に取り組んでいく。



感謝の思いを未来に

校長 畠山 雅宏

1 はじめに

(1) 学校の位置

本校は「日本の快水浴場百選」にも選ばれた「大谷海水浴場」から直線距離で約400m、海拔が約18mの高台に位置している。

(2) 震災時の被害

平成23年3月11日に発生した大地震による津波は、一方は海岸部から本校に向かう道路沿いを流れる滝根川を遡り、もう一方は校舎の北側から東方に広がる農地を回り込むようにして800m以上遡り、本校の校舎を取り囲むように合流した。

この津波により、既に下校していた

1年生男児が迎えに来た祖母と幼稚園児だった妹とともに車ごと流され未だに行方不明となっている。また、3割を超える児童が自宅を津波で流され、職員の約半数も自宅や実家が被災している。



(3) 修学旅行の支援

電気や水道等のライフラインが使用不能となり学校が再開するまで一か月以上の期間を要することになったが、その間の学校の取り組みについてはこれまでの記録集に既に記載されてある。

今回は、震災により夢や希望を失いかけた子どもたちが、震災に負けず前に進もうと再び立ち上がる大きな力となっている全国から寄せられる励ましや支援の中から、多くの方々のご尽力により実現できた本校の修学旅行について紹介したい。

昨年度と今年度の2年間、本校の6年生は横浜・鎌倉方面への修学旅行を、招待旅行という形で実施した。これは多くの方のご厚意、ご支援により実現できた旅行である。1年目の昨年は神奈川県新聞社が主催した被災地支援の『輝望(きぼう)プロジェクト』により、2年目の今年は様々な紆余曲折があり、もともと修学旅行招待の橋渡しの役割をさせていただいていた、横浜市在住の日本青年会議所の加藤英二さんを中心とする有志の皆さん(YOKOHAMAで学びーば実行委員会)のご厚意により実現できたものである。

そんな修学旅行を経験できた子どもたち、保護者の方、支援の中心となって活動して下さった加藤さん、6年生の担任にそれぞれの感想や思いを綴ってもらった。

2 子どもたちからのメッセージ

修学旅行

6年 大原 柊太

ぼくは9月11日に起きると、修学旅行が楽しみな気持ちと、不安な気持ちの両方がありました。初めて行く横浜までの旅にやはり少し心細い気持ちがあったのです。だけど、今振り返ると、行ったところ1つ1つが楽しく、なかなか体験できないことばかりで、すごくよかったです。

楽しかった1日目は、まず東北新幹線はやて106号に乗って、東京駅に行きました。ぼくは電車や新幹線が好きなので、すごく興奮してしまいました。夜には、中華料理をいっぱい食べられてうれしかったです。

2日目は、八景島シーパラダイスでいろんな魚やめずらしい生き物がいて、アシカのショーがありました。特にすごかったのが、ジンベエザメやタカアシガニです。どれもぼくより大きくてびっくりしました。アシカのショーでは、かわいいアシカがいろんな芸をしていたので、ぼくは、

「アシカってこんなに頭がいいんだなあ。」
と思いました。

夕食は、HANZOYAに行き、テーブルマナー教室に美味しいご飯も食べられてとても満足しました。

3日目は修学旅行最終日です。この日は、カップヌードルミュージアムに行き、世界に一つだけのカップヌードルを作りました。ぼくはシーフード味にヒヨコちゃんナルトなどを入れました。この頃には、ぼくは、「もっと横浜にいたいなあ。」

とっていました。この修学旅行はぼくにとって最高の思い出になったと思います。

この修学旅行に行けたのは、たくさんの人たちの支援のおかげなので皆さんに本当に感謝しています。見学したところはどこも、自分たちがなかなか行けないところばかりでした。HANZOYAさんでは、ぼくたちのためにマナー教室を開いてもらったり、鶴見大学では歯科衛生士の体験をさせてもらったりと、驚きの連続でした。この修学旅行でもらったたくさんの楽しい思い出と、感謝の気持ちを忘れずに、これからもがんばりたいと思います。



思い出に残った修学旅行

6年 平塚 友菜

私たちが2泊3日にわたって体験したことはなかなかできないようなことばかりでした。いろいろな人が私たちの修学旅行を支えてくれました。そんな修学旅行で私が特に楽しかったことは3つあります。

1つ目は、修学旅行1日目に行った小町通りです。小町通りに並んでいた店の中で、ジブリの物をあつかう店があったり、とても親切な店の人がいたり、サービスで少しお菓子を食べさせてくれたりと、たくさんの方から親切にしてもらい、私はとても楽しかったです。

2つ目は、八景島シーパラダイスに行ったことです。その中でも私が楽しかったことは、海の生き物たちのショーを見たことです。天井からつるされているボールを、イルカが水面からジャンプしてキックしている様子が私の一番心に残っていることです。

3つ目は、HANZOYAでフランス料理を食べながら、テーブルマナーを学んだことです。フランス料理は、普段の生活では食べられないような料理で、とてもおいしかったです。そして楽しみながら食べることができ、とてもよい思い出になりました。

3日間の体験は、どれもふだんはできないようなものばかりでした。私たちが楽しい思い出を作ることができたのは、たくさんの人たちのご支援のおかげだと思います。鶴見大学の皆さん、總持寺の皆さん、HANZOYAの皆さん、本当にありがとうございました。



私たちの修学旅行のために、いろいろな面で支えてくれた人たちへの感謝の気持ちを忘れずに、これから過ごしていきたいと思います。

最高の修学旅行

6年 紺野 凜紗

私たちは9月11日から13日まで神奈川県鎌倉市と横浜市に修学旅行に行きました。東京に行ったことはあったけれど、神奈川県に行ったのは初めてでした。初めての神奈川県での思い出が各日ごとにあります。

1日目には、鎌倉の大仏と重慶飯店さんでの夕食です。鎌倉の大仏では、大仏の中に入れたことが大インパクトです。中には、私たちでは読めない文字が書いてありました。それと、想像以上に大仏が大きかったことです。

重慶飯店さんでの夕食は、すごくおいしかったです。本格的な中華料理が食べられてうれしかったです。

2日目は、總持寺のお務め見学と座禅体験です。朝は4時半起きでした。お務めはこれまでも見たことがありましたが、あのような大勢でのお務めを見たのは初めてでした。座禅体験は前にもやったことがありましたが、久しぶりにやれてよかったです。なかなかできない体験をさせていただき、本当にありがとうございました。

八景島シーパラダイスでは、イルカショーなどを見ました。シロイルカはすごくかわいかったです。ショーに出ていたイルカ4頭はジャンプ力がすごかったです。

HANZOYAさんでの夕食はテーブルマナー教室付きでした。初めての体験でしたが、料理もおいしく食べられたのでよかったです。

3日目は、カップヌードルミュージアムに行きました。カップに絵を描くだけではなく、自分でカップヌードルづくりを体験できる場所もあったので楽しかったです。そして長い歴史を積んだカップラーメンのを知ることができてよかったです。

この修学旅行は、いろいろな皆さんのおかげで成り立ったので、感謝しています。私たちが楽しめるように計画してくださったり、旅行中もいろいろと気づかせてくださったりと本当にありがとうございました。こんなすてきな神奈川県にまたいきたいと思います。



貴重な体験をした修学旅行

6年 小山 亜美

私は9月13日からの3日間、いろいろな人たちの支援をいただいて修学旅行に行ってきました。その中で、たくさんの貴重な体験をしたり、見学をしたりしました。

まず1日目は、鎌倉市内の観光で、鎌倉の大仏を見たり、大仏の中に入ったり、小町通りで買い物をしたり、鶴岡八幡を見たりと、鎌倉の歴史にひたりました。夕食は中華街で、初めて本格的な中華を食べました。あまり食欲がなかったため、少ししか食べることができませんでしたが、とてもおいしかったです。

2日目は、朝の5時からお務めを見学して、その後に座禅体験をしました。思ったよりつらくなかったです。

朝食を食べ、午前中は鶴見大学で大学病院の見学などでした。歯科衛生士体験では、意外と簡単に感じましたが、水しぶきがとんで少し冷たかったです。大学の図書館では、歴史を感じるものをたくさん見て、勉強になりました。なかなか見られないものを見られてよかったです。

昼食は学食で食べました。スイーツもいっぱい出てきて、すごくおいしかったです。

午後からの八景島シーパラダイスでは、いろいろな魚を見ました。ショーでは、ジンベエザメやシロイルカ、アシカなどが出てきて、いろいろと楽しませてくれました。お土産屋がいっぱいあって、どこで買い物をしようか迷いました。

夕食はHANZOYAで豪華なディナーをたくさん食べたり、テーブルマナーを学んだりしましたが、テー



ブルマナーは将来役に立つと思いました。難しいと思っていましたが、意外と覚えやすかったです。

3日目はカップヌードルミュージアムに行き、マイカップヌードルをつくりました。一生の思い出になりました。

この修学旅行で、私は楽しい思い出をたくさん作ることができました。それができたのは、数多くの人たちの支えのおかげです。鶴見大学の先生やお兄さんお姉さんたち、總持寺の皆さん、HANZOYAの皆さん、引率して下さった村田さんなどたくさんの皆さんにお世話になりました。

1つ1つの思い出の中に、優しくしてくれた皆さんの笑顔があります。皆さんへの感謝の気持ちを忘れないうようにしたいと思います。

3 保護者、支援者からのメッセージ

いつの日か恩返しを

6年保護者 小野寺 優子

息子に「修学旅行の意味、三つっていったらなんだろう？」と尋ねてみました。

1. 友達ともっと仲良くなる
2. 遠く行ったことのない土地で何かを学ぶ
3. 楽しい思い出作り

このように答えてくれました。

具体的に聞くと「泊まる事で相手の事をもっと知ることが出来るし、鶴見大学では歯科医体験ができたし、気仙沼とは違う商店街で買い物したりお土産選んだり…」と息子なりの思い出をニコニコと話してくれました。

コース料理に触れる事など普段無いし、お寺での宿泊体験も貴重なものでした。帰宅後もお寺で見た難しい漢字の意味を調べたりして、とても有意義な時間を過ごしたようです。

そこで「もしね、『家のお仕事無いから修学旅行のお金出せないの。ごめんね。』って言ったらどうする？」と尋ねてみました。

それまで楽しそうに話していた息子は一瞬絶句した後でうつむきながら、

「修学旅行は行かない…、行けない。」とつぶやきました。

私は「それが、ご支援頂いているっていう事なんだよ。」と話して聞かせました。

我が家は家業で貸衣裳店を営んでおります。店舗1階と隣接するスタジオが大規模半壊しましたが全壊は免れました。多くの方がそうだったように、震災後は全ての仕事が一旦キャンセルになりました。特に卒業式を目前に控え、用意した袴全ての予約を無しに…と言うのは非常に大きな痛手でした。避難所で10日ほどお世話になった後は現実が待っていました。仕入れた商品の支払いはあるし、収入のめどは立ちません。喪失感に襲われる中、とにかく営業中ののほりを立て、ただただ店の片付けと水汲みに追われました。

市内でご披露宴が無い頃、松島や仙台のお客様が「力になりたい」とこちらで婚礼衣裳を決めて下さったのは言葉にならない嬉しさでした。

「支援」とはお金だけではありません。興味関心を持って戴く嬉しさ、支えてもらっている有難さです。今回の修学旅行も本当に感謝の言葉しかありません。

今は「このお店に津波が入ったなんてウソみたい」とおっしゃって頂くことがとても嬉しいです。そして、精一杯お仕事をしていくことが支えて下さったお客様へのお返しだと思っております。

今は無我夢中ですがいつの日か支援が無くても生活できる時、改めてご支援頂いたことに深く感謝できるのではないかと思います。

今年は無理かとも思いましたが、皆様のお骨折りで神奈川へ行き貴重な経験をさせて戴きました。

末筆になりましたが先生方はじめご支援・応援頂きました関係者の皆様に御礼申し上げます。本当に有難うございました。

宮城県気仙沼市立大谷小学校修学旅行

YOKOHAMA で学び一歩実行委員会 加藤 英二

2011年3月11日に発生した東日本大震災で、福島、宮城、岩手県の沿岸部は津波によって甚大な被害を負いました。私は、この震災で大打撃を受けた被災地の小学生を何十校と慰問させていただきました。そんな中で、慰問をさせていただいた幾つかの小学校の児童が、経済的理由で修学旅行に行くことが困難な状況にあるということが私の耳に入ってきました。

横浜で育った私は天変地異による災害など受けたことがなく、平穩にこれまでを過ごしてきました。義務教育の過程での運動会や遠足、修学旅行などの学校行事は全て楽しく経験しました。そのような私には大谷小学校の児童が置かれている現状に対し、悲しさと悔しさしか抱くことが出来ませんでした。自分は無力で、何一つ手を差し伸べる手段もないが、何とかして彼ら彼女たちに小学校生活で唯一の行事である修学旅行を実現させてあげたいと強く思いました。そして、ただその一念で、2012年、2013年の2回に渡り、神奈川県にお招きさせていただきました。



2012年度は神奈川新聞社様のご協力の下に実施することが出来ました。また、2013年度には、横浜市の有志による多大なるご支援とご協力の下に実施することが叶いました。

被災地では震災後3年の時間が過ぎようとしています。未だに様々な問題や解決しなければならない難題が山積みのまま今日を迎えています。この震災で負った物的な傷と人的な傷、そして心の傷は癒えることなく児童の心に重くのし掛かっています。

私は、この修学旅行を通じ、大谷小学校の児童に二つの視点での体験と経験を積んでほしいと思い支援活動を進めてきました。一つには、まだ目にしていない社会の大きさと広さを見て欲しいということ、児童が生きている社会は目の前に見えている世界だけではないということです。

そしてもう一つは、大人の背中です。世の中にはどんな困難にも屈することなく立ち向かう、格好のいい大人がいること、そんな大人の姿を目の当たりにして欲しいということです。

私が小学生の頃、尊敬できる大人や、あんな風になってみたいと思わせる大人が大好きでした。また、そんな大人になりたいという一心で、そんな大人像に憧れて、現在も日々を過ごしています。私とその格好いい大人かどうかは別として、児童の目の前に広く大きく広がっている世界観と、初めての体験の数々の機会と出会いを、彼ら彼女たちの純粋な眼と心で観て実感して欲しいとの願いで、この修学旅行の実現に努めてきました。

修学旅行に訪れてくれた児童たちと過ごした3日間は、とても楽しく過ごすことが出来ました。重そうなリュックを背負って東京駅からバスまで向かう時の、辛そうな中にも瞳を輝かせている児童たちの顔、2日目の早朝4時30分からの總持寺での朝課、そして座禅体験、ようやく訪れた朝食を目の前に説法を受けて食事がありつけないでいる児童たちの心模様、八景島シーパラダイスでの自由行動や夜食時に水分を摂りすぎでお腹を壊している児童など、朝の4時から起きて全力で活動してきた身体とは思えない程のパワーには圧倒されました。

大谷の子どもたちの心に何が刻まれたのか私には分かりませんが、私の心には生涯忘れることの出来ない、とても大切な修学旅行の思い出が刻まれました。

これ程素敵な思い出を作ってくれた大谷小学校の児童たちに、心からお礼を伝えたい。

ありがとうございました。

そしていつの日か、彼ら彼女たちが立派に成人し、社会の力となり、気仙沼を、日本を支え、人に夢と希望を与えることの出来る人間に育てられることを、私の夢にしたいと思います。

気仙沼の町の復興にはまだ長い時間がかかるとは思われますが、一日も早く、未来に向けてその心を開いている大谷の児童の純粋無垢な瞳に、夢見ることの出来る日々が訪れることを、衷心より祈念申し上げます。

4 教職員からのメッセージ

感謝の思いを

教諭 高橋 学

大谷小学校に赴任して、6年生を担当することになり、修学旅行の予定が2泊3日で横浜方面だと知らされて、当時の私は大いに驚いたものです。この地域の小学校の修学旅行といえば会津若松方面というのが定番で、横浜方面というのはあまり耳にしたことがなかったからです。

また、震災の支援の意味でこの企画を行っていただいていると知ったときはさらに驚きました。しかも今年は紆余曲折を経て、新たにプロジェクトを立ち上げての実施をいただいたとのことで、『YOKOHAMAで学びーば実行委員会』の皆様方には、どのような言葉で感謝の意を表していいのかわかりません。すばらしい体験の機会を与えていただいたことは、子どもたちにとって何物にも代えがたい贈り物でありました。

さて、当の大谷小学校6年生の子どもたちはといえば、6学年スタート当初から期待に胸を膨らませ、どのような内容になるものか、企画段階から心躍らせていたようです。

鎌倉大仏から鶴岡八幡宮へ、鎌倉の風情漂う町を散策しながら見学。見る景色すべてが新鮮で、土地の人たちに声をかけてもらったこともよき思い出になったようです。

横浜に戻っては、本格的な中華料理をいただきました。おいしい料理を口いっぱいにはおぼったとびきりの笑顔が忘れられません。

曹洞宗大本山總持寺に宿泊させていただき、翌朝は早朝からお務めを見学・座禅体験まで行わせていただきました。一般の参加者の方々とともに参加し、その厳かな雰囲気にな身を置くことができたのが何より貴重な体験でした。

鶴見大学では、本物の実習着を身につけて、歯科衛生士の疑似体験をしました。こんなことは今回の機会でもなければきっと一生体験することはないでしょう。担任としてはこれが一番うらやましかったです。できるなら自分も行ってみたいかったほどに…。

その後も八景島シーパラダイスでショーを見たり展示を見たり。夜は HANZOYA さんで夕食をいただきながらテーブルマナー教室。夢のような内容で、この紙面で振り返るだけでも、本当にため息の出るほどのものばかりでした。

子どもたちの作文を読みながら、彼らが純粋にこの企画を楽しみ、喜び、よき思い出にしたことを実感しました。何しろ、新幹線に乗るのも初めてだったり、横浜を訪れるのが初めてだったり、横浜・鎌倉の空気に触れることそのものも楽しめていたのですから。しかしながら、それと同時に私は少しだけ不安になるのです。それは、この企画の有り難みに子どもたちがどれだけ気付いているかということです。また、担任として、私がどれだけ気付かせてあげられたかということです。子どもたちは今回の修学旅行の思い出を一生のものとしてこれから生きていくでしょう。その大切な思い出の中に、お世話して下さったたくさんの方たちの思いや願いが込められていたことを、笑顔とともに胸に刻んで、忘れずにいてほしいと切に思います。



5 おわりに

今回私は、修学旅行隊の隊長として、訪れる先々で多くの支援者の皆さんと直接お会いすることができた。そこでお会いした皆さんから感じた、被災地の子どもたちに寄せる厚い思い、深い愛情は予想以上のものであった。また、子どもたちも純粋に、そして素直に、準備されたプログラムに取り組み、明るい楽しそうな笑顔を見せてくれた。そんな子どもたちの姿に、支援して下さった皆さんから「明るくて素直ないい子どもたちですね」「子どもたちの笑



顔を見ると、私たちが元気になります」「子どもたちと一緒にいると、楽しくてしょうがない」などの感想を聞くことができ、招待された側の責任者としては、ホッと一安心することができた。

しかし、学校に戻ってからの帰校式で子どもたちにも話したが、子どもたちがこれだけの支援をしていただけに本当に相応しかったのかどうかは、これからの生活にかかっている。これからの生き方で、支援して下さった皆さんの気持ちに答えていかなければならない。

今回お世話になった皆さんに直接恩返ししていくことは不可能であるが、「あの子どもたちのために頑張った良かった」と言ってもらえるような生活をしていくこと、そのような子どもたちに育てていくことが、子どもたちと我々職員に課せられた責務であると感じている。

このような修学旅行を経験できた子どもたちが、現在の感動や感謝の気持ちを忘れず、今回支援して下さった皆さんと同じような年齢になった時に、見ず知らずの困っている誰かのために、何の迷いもなく動き出すことのできる大人になっていたら、この上ない喜びである。

そのような子どもたちの成長を信じ、学校が被災地の元気の源となるべく、日々の教育活動をより一層充実させていかなければならないと考える。



被災から前進するために ～未来へのメッセージ～

校長 小野寺 良一

1 はじめに

(1) 本校の位置

本校は、気仙沼市の中心部の高台（標高32.9m）に位置し、市立図書館や市民会館が隣接しており、教育環境に恵まれている。学区には市役所や主産業である魚市場など市の中核を構成する施設がある。

(2) 震災時の被害

東日本大震災により校舎は土台のコンクリート部分の剥離、体育館ガラス8枚破損、玄関アプローチ支柱ひび割れ等の被害を受けた。学区内の海岸部は津波により壊滅的な被害を受け、生徒の家の3分の1が流失、全壊、半壊した。

(3) 震災後の影響

校庭には85世帯の仮設住宅が立っている。震災から3年が過ぎようとしている現在でも、校庭の4分の3が使用できない状況にある。また、仮設住宅や被災による賃貸住宅から通学する生徒が2割超。就学支援を受けている生徒も半数を超えるなど、生徒を取り巻く環境はまだ厳しい状況にある。

(4) メッセージ提供者について

子どもたちからのメッセージでは、①学校市（生徒会）執行部からのメッセージ、②少年の主張での小山奏子さんの弁論を紹介する。学校市は、地域の復興に貢献する活動を自主的に立案し、実践している。また、小山奏子さんは、被災して避難所で生活する中、「ファイト新聞」の発行に関わり、避難者を励まし続けた。教職員からのメッセージでは、③藤田篤志教諭からのメッセージを紹介する。藤田教諭は、震災当時に本校に勤務し、避難者や生徒たちのケアに尽力すると共に自ら被災状況や本校の復興の取組を積極的に発信している。いずれもテーマに沿ったメッセージである。

2 子どもたちからのメッセージ

(1) 復興に向けての学校市（生徒会）の取組

①学校市テーマの設定

今年度のテーマ：『昇華』～みんなで手をつなごう～

「昇華」とは、「物事が一段上の状態に高められる」という意味の言葉です。サブテーマとあわせて、「手を取り合って高め合い共に前に進もう」という思いが込められています。全校生徒が同じ目標に向かって一つになり、助け合い、高め合いながら、前に進んでいきたいという願いを表しています。

②学校市（生徒会）アクションプランについて

1学期中に学校市（生徒会）執行部と各委員会の委員長で組織する中央委員会を開催し、各委員会のアクションプランを設定・実施することを決定し、各委員会毎に話し合いを行い次の通りアクションプランを考えました。

【各委員会のアクションプラン】

委員会名	主な活動
執行部	各行事の案内を作成し、仮設住宅の方々や地域の方に配付する。文化祭全校制作を仮設の方々と共にやる。
代議委員 生活委員 整備委員 応援委員	あいさつ運動と仮設住宅周辺のゴミ拾いを実施する。
保健委員 図書委員	合同で保健カルタを制作し、仮設住宅の方々と交流する。
新聞委員	仮設住宅向けの新聞作成（行事の報告等）し、配布する。
放送委員	仮設住宅の方々にアンケートを実施し、イベントや住民の方々の声を昼の校内放送等でお知らせする。
福祉委員	仮設住宅の方々とプルタブ等の回収を共同して行う。

【アクションプランの活動の様子（一部抜粋）】

○生活委員・整備委員・応援委員が1学期中に代議委員が夏休みに仮設住宅周辺のゴミ拾いと草取り作業を行いました。



○生徒会執行部が中心となり、文化祭の全校制作を仮設の方々からも協力を得て完成し、開会行事で披露しました。



③全国生徒会サミットへの参加について

学校市（生徒会）執行部5名が公益財団法人夢現エデュテイメントが主催する「SEND to 2050 PROJECT 全国生徒会サミット in 福島」に参加し、全国から集まった生徒会のメンバーと交流活動や熟議を行い、「自分たちの地域のできるアクションプラン」について考えました。また、参加して学んだことや考えたことの報告を文化祭のステージで発表しました。

④支援者へのあいさつや感謝の手紙

ア) 支援をいただいたUBS銀行への訪問（3年修学旅行）

5月に行われた3年生修学旅行の企業訪問で支援をいただいたUBS銀行を訪問し、会社見学、具体的な仕事内容を聴き、支援に対する感謝の気持ちを伝えました。

イ) 大阪西ロータリークラブへのお礼

修学旅行のために支援金をいただいた大阪西ロータリークラブの方が来校し、学校市（生徒会）執

行部が全校生徒を代表して、感謝の気持ちを伝え、修学旅行文集を手渡しました。

⑤これまでの活動から見えてきた課題・未来へのメッセージ

これまでの学校市（生徒会）の市長を務め、これまでの運動会や文化祭などの学校行事の運営や中学生代表者会議、全国中学生生徒会サミットなどの活動を通して、様々なことを経験し、学ぶことができました。特に全国生徒会サミットでは、自分の意見や考えをもつことの大切さを学びました。全国から集まった同年代の人たちと熟議（話し合いや発表会）を行ったことで、自分の考えを堂々と発表できるようになり、物事の考え方についての新たな発見もありました。また、全校で行ったアクションプランや文化祭での全校制作などの活動を通して、全校生徒が学校市（生徒会）活動に積極的に参加しようという気持ちの高まりが感じられるようになりました。課題としては、計画であげているアクションプランのうち前期に実施できなかったものもあったので、後期の活動で実施していきたいと考えています。また、気仙沼中学校の周辺には、仮設住宅のほかにも、小学校や市民会館、市立図書館、保育所など、様々な地域の施設もあるので、地域と更につながる活動について見直していきたいと思っています。

震災から2年と半年が過ぎましたが、私は時折、これからの気仙沼はどうなっていくのだろうと考えるときがあります。復興まではどのくらいの時間がかかるのだろうかと不安になるときもあります。でも、私たちが生まれたこの気仙沼が震災前よりも素晴らしくなるよう、私たちに今、そしてこれからできることを考え、できることから実行していきたいと思っています。

（2）弁論『前に進もう』

3年 小山 奏子

あの日、地面の奥底から聞こえる大地を揺らす音が東日本中に鳴り響きました。

次の日、私は自分の家を見に行きました。すると、そこにはおびただしい数のガレキしかなく、私の家はありませんでした。私は帰る場所を失いました。

その日から、気仙沼小学校での避難所生活が始まりました。何をやる気にも、何も考える気にもなれず、ただ漫然と毎日が過ぎていきました。そんなある日、同じように気仙沼小学校に避難していた、昔から知り合いの女の子から「新聞を書かない？」と誘われました。私は暇つぶしにでもなればと思い、一緒に書くことにしました。そして、一枚の新聞が完成しました。その新聞に女の子は、『皆さま、いろいろなご不便があると思いますが頑張りましょう。私たちも頑張ります』と書いていました。私は、はっとさせられました。私は、その女の子に、「何で新聞を書くの？」と聞いてみました。すると、「この震災で大人の人たちは皆暗い顔をしているから、私たちの新聞を読んでちょっとでも元気になってもらえればと思って。」こう言っていました。

私より年下の小学一年生の女の子が、私たち子どもの力で周りの人たちに対してできる精一杯のことを考えていたのです。私は、自分が恥ずかしくなりました。この女の子は今の状況にしっかりと向き合い、周りの大人たちを笑顔にしようとまで考えていたのです。私は、何をやる気にもなれず、何も考えることもしないまま、現実から逃げていたのです。

この時から私は、この状況と向き合い、少しでも前へ進もうと決意しました。

女の子が考えた新聞は『ファイト新聞』と名づけられました。ファイト新聞は四人のメンバーから始まりました。そこから人数はどんどん増え、最終的には十二人まで増えました。新聞には、避難所の皆さんに元気になってもらえるようにと、炊き出しの内容やボランティアの皆さんのこと、イベントなどの身近なことを取り上げ、書いていました。私も自分にできることとして、一生懸命記事を書きました。そんなある日、同じ避難所にいた女性のお年寄りの方が私に、「いつも新聞を読ませてもらっているよ。とても元気をもらっている。ありがとう。」と言ってくれました。私は、嬉しさが体中からこみあげてきました。もしあの時、この震災と向き合うことからずっと逃げていたら、今こんな気持ちを味わうことはできなかったんだ。どんな時でも現実と向き合い、前へ進むことが大切なんだと気付きました。このことに気付かせてくれたファイト新聞に、私は感謝しています。今も三か月に一度のペースで活動を続けています。

私の住んでいる街は、まだ復興したと言える状態ではありません。将来を担う私たちの世代がしっかり現実と向き合い、将来を考えていくことが大事なのだと思います。

私は今、中学三年生で、自分の進路を自分で決めるときがきました。私は将来、保育士になりたいと思っています。今は、自分の進路としっかり向き合い、自分のできることを精一杯やって、夢に一步でも近づきたいと思っています。

3 教職員からのメッセージ

教諭 藤田 篤志

(1) 東日本大震災発生時の私

平成23年3月11日14時46分、宮城県沖を震源とする M9.0震度6弱の地震が発生。

私はその時、校舎1階の一室で生徒と共にいた。今までに経験したことのない激しい揺れで、生徒の安全確保のためにすぐに机の下にもぐらせた。そして、揺れが収まった後、生徒と一緒に急いで校庭へ避難した。その後、校長の指示のもと、学校にとどまっていた生徒、避難してきた生徒の掌握、地域住民のための避難所開設の準備などに追われた。

(2) 学校再開に向けて

3月11日、体育館避難所で避難者800名ほどが寒い中で一夜を明かした。3月12日、泊まっている生徒で「気中ボランティア」を組織し、協力してプールから水をくんだり、掃き掃除や挨拶運動を行ったりした。私はビスケットを配って回った。全員に渡るように3枚ずつ配った。それでもすぐになくなるほどの避難者数であった。

(3) 学校の再開

日本の方々のみならず、世界中の方々から支援をいただいた。教育活動に対する経済的支援、物資支援や生徒への励ましの手紙、千羽鶴、メッセージカードなど数え切れないほどの支援で救われたことは確かである。その激励に応えようとお礼状を作成して送付したり、実際に支援していたの方々のもとへ訪問したりして、感謝の気持ちを伝えてきた。そのような活動の中で、生徒の情動的、道徳的な気持ちの成長を感じることができた。

(4) 総合的な学習の時間の取組を通して

○テーマ「ボランティア活動～東日本大震災後、「今」私たちにできること～」

全校生徒の約3分の1は家屋を流失・全壊・半壊した。家族を失うなどの直接被害を受けた。そのような状況の中で、同じ校舎の中に生徒と避難者が共生することになった。

生徒たちには、避難者のために自分たちにできることを考えさせ、自分たちから行動し、お互いの気持ちを共有し合うことは、気仙沼の将来について見直す良い機会となるのではないかと考えた。また、自分の生き方を見つめ、よりよく問題を解決する資質や能力を育成していきたいと考えた。

手作りのビスケットとメッセージカードを校舎内の避難者の方々に配った班と一緒に写真を撮りながら同行した。体育館に避難されていたお婆さんが生徒からプレゼントを手渡され、握手をした瞬間、涙を流しながら「宝物にします。このメッセージカードは私がここから出て生活できるようになったら、『私はこんなにたくさんの人から助けられたのよ』と自慢するんだ。」と話されていたのが印象的だった。



手作りクッキーと
メッセージカードのプレゼント



避難所になった体育館の清掃作業

(5) 交 流

○目黒区立目黒第三中学校との交流

震災当時、目黒区の方々から物的支援、人的支援をいただき、とても助けられた。その恩返しをしたい

と震災後の2年間、目黒区立目黒第三中学校と交流を行った。感謝の気持ちと当時の様子や現状について伝えるため、修学旅行で訪問した。私は担任として、交流会の企画を三中の先生方と連絡を取り合いながら進めた。

○岐阜県大垣市立大垣東中学校との交流

大垣東中で教育実習をしていた大学生が震災後、気仙沼に災害ボランティアとして参加したことがきっかけで交流が始まった。合唱曲に復興の願いを込めて「ひかり」を歌ってくれた。そのお礼として、生徒がメッセージを書いて送った。その後、生徒会が全校生徒に呼びかけ、集まった寄付金は生徒会担当の先生が気仙沼中まで持って来てくださった。



目黒第三中との交流
将来の夢について語り合う様子



目黒三中で集合写真

(6) 現在の思い

震災から2年7か月が過ぎ、学校は通常通りの生活に戻ったように思われる。しかし、市内のがれきは撤去されたものの、家屋や工場の建設は制限され、復興は進んでいるとは言い難い状況である。その様な中で生徒は、いつものように笑顔で元気に学校生活を送っている。その笑顔に教員として励まされ、エネルギーともなっている。

(7) 未来に向かっての思い

震災から1年以上が経過し、市内の様子も落ち着きを取り戻しつつある。被災地とそれ以外との温度差をひしひしと感じていた。今までたくさん届いていた世界中からの応援メッセージや手紙などが極端に少なくなってきた。「忘れられている。」そんな気持ちが強くなってきたとき、「今こそ、発信しなければいけない」と感じ、震災当時の様子やその後の復興へのプロセスを伝えるため、「発信」と決心した。

＝「発信」した主な学校＝

- 平成24年7月28日 奈良県奈良市立平城西中学校（生徒100名）
- 平成24年7月29日 ESD フォーラム in 京都（全国各地の先生方30名）
- 平成24年8月7日 山口県美祢市立別府小学校（児童・生徒9名）
- 平成25年7月10日 茨城県土崎市立都和中学校（生徒150名）
- 平成25年7月12日 海星学院高等学校（生徒7名）



2012年7月28日 奈良市立平城西中学校
震災について生徒とのディスカッション



2013年7月10日 茨城県土浦市立都和中学校
震災当時、その後の防災についての講演会

「風化」

人の記憶は徐々に消えていき、いずれは忘れていく。しかし、この1000年に1度とも言われている東日本大震災の記憶を忘れてはいけない。と同時に世界中の人々の記憶から消させてはいけない。そんなことを考え始めていたとき、韓国招へいプログラムに参加したメンバーの同窓会が京都で開催されることになり、私も参加した。そして、その中で知り合った奈良県の中学校の先生から「是非、うちの中学校で震災の話をしてほしい。」と言われた。

「震災時の気仙沼の状況、現在の復興に向けての取組、その状況を伝えるチャンスだ。」
と思い、快諾した。

とても暑い日だった。部活動に参加していた生徒100人が集まり、私の話を聴いてくれた。感想を聞くと「その日、奈良もかなりゆれた。テレビで火の海になっている状況を見て、とても驚いたのを覚えている。しかし、テレビでの報道が徐々になくなり、もう忘れかけていた。今日、先生の話聴いて、被災地に住んでいる人たちの気持ちがよくわかった。今日、家に帰ったら家族に話したいです。」

ということだった。「子どもたちの心に種をまく」そんな感覚だった。話を聴いてくれた子どもたちが家族、友達など周りの人々や、将来は自分の子どもに震災のことについて話をする事で次の人に種をまき、その連鎖で風化が阻止されるのではないかと感じた。

これからもチャンスがあれば、種をまく活動を続けていきたい。

(8) 最後に

震災で自分が受け持っていた1学年の1人の尊い命が津波によって奪われた。享年13歳。その生徒はとても明るく、何事にも一生懸命取り組む男の子だった。震災当日、卒業式の準備を終え、地震発生40分前に下校した。バスケットボール部だった彼は卒業式の振替休業日に練習試合があるというバスケットシューズを取りに部室に行き、体育館を出て行く彼と私はいつもと変わらない「さようなら。」を交わした。次に彼に会ったのは安置所になった面瀬小学校の体育館だった。彼は生きたかった。今後も元気に勉強、部活動をしたかった。しかし、津波によって命を落とすことになってしまった。

震災当時から生徒には

「今は勉強しかない。それが期待に応えることであり、一生懸命勉強していつか少しでも恩返しできるような大人になろう。」

と指導していた。その意識は根付いてきているように思う。今後も大震災をバネに強く生き抜いていく強い生徒に育ててほしいと願っている。震災で命を落とした彼のためにも…。

私自身は今、目の前にいる生徒が10年後の気仙沼の将来を創造する人になるという意識を強くもち、その重責を感じながら教育にあたっていく覚悟である。

4 おわりに

震災後生徒たちは、被災地気仙沼のために何ができるかを考え、ボランティア活動を続けてきた。昨年度、全国生徒会サミットに参加した学校市（生徒会）執行部のメンバーを中心に、これまでの活動を整理してアクションプランとして立案し、活発に実践を行ってきた。その取組は文部科学省で報告し、高い評価を得た。

そのことが大きな自信となり、今年度も発展的に実践している。仮設住宅周辺でのボランティア活動で感謝をされたり、全校制作（復興モニュメント）で感動を共にしたりしながら、少しずつ前進している手応えを感じるようになってきている。

また、本校の教職員も、自ら被災するなど、厳しい生活環境、教育環境の中、生徒の心のケア、復興の担い手となる人材育成のため、復興教育に力を注いでいる。

これからも、生徒と教職員、そして地域住民が心をつなげて、ふるさと気仙沼の未来に明るい希望がもてるように、力強く歩んでいきたい。



未来に向かって

校長 菊地 道雄

1 はじめに

(1) 本校の位置

本校は気仙沼市北東部の標高38mの丘陵部に位置している。

(2) 震災時の被害

①地域

中心となる市街地は津波、その後の火災によりほぼ壊滅的状態となる。

②生徒・職員・保護者

卒業を控えた3年生(男子)1名が死亡。親を失った生徒2名。家屋の6割が倒壊や一部損壊となる。また、職員の3分の1の家屋が全半壊となる。



H25.9.19 本校屋上から

③校舎

校舎に大きな被害はないが、体育館は避難所として使用された。

(3) 震災後の影響

震災直後は、体育館に500名を超す避難者が収容された。その後、避難者の増加と、病弱者や体育館で亡くなられた方がみられたことから、生徒のみを校舎2階の教室に移動させ、生活させた。

そして、体育館は、震災の年の10月まで避難所となり、校庭には120世帯の仮設住宅が建設された。現在、校庭は運動会や一部の部活動では使用しているものの、大幅に制限されている状況が続いている。

また、職を失った保護者もあり、PTA活動は難しく、地区の自治会も半数以上は再開の見通しが立たない状況となっている。

(4) 執筆者人選の理由

今回、記念誌発行に当たり、生徒自身が「今日までどのように学校生活を送ってきたか」、保護者が「どのような思いで、子どもたちを見守ってきたか」、そして、教職員が「子どもの心のケアにどのように取り組んできたか」をここに記すこととし、生徒会総務、卒業生代表、PTA会長、そして、養護教諭からの寄稿とした。

2 子どもたちからのメッセージ

『よりよい未来へ向けて 今私たちができること』

～震災からの学びを生かした、活気ある生徒会活動を目指して～

鹿折中学校生徒会総務

(1) 生徒会（鹿峰会）の紹介

私たちが組織する生徒会は『鹿峰会』といい、全校生徒193名が会員となっています。生徒会総務を中心としてさまざまな行事や活動を行っています。

震災により、校庭に仮設住宅が建設されているため、限られたスペースで授業や部活動、運動会などを行ってきました。地域の方々や支援団体のご厚意で、近くに運動場を整備していただき、現在は様々な活動に使わせていただいています。

また、震災に負けることなく希望をもって、いろいろなことに挑戦していこうと、今年度の生徒会テーマを『鹿風伝来～鹿中の風を未来に伝えよう～』としました。全校生徒が一丸となって学校を盛り上げ、地域にも元気を与えていきたいと考えています。



(2) 震災後からの取組や震災からの学びを生かした生徒会活動の取組

① 支援への感謝の気持ちを表す取組

多くの方々から、様々な支援をいただいています。特に、千葉県の上野台中学校、兵庫県の武庫中学校からは、数度に渡りたくさんの義援金をいただきました。今年の3月には、武庫中学校から生徒会や野球部の皆さんが来校し、交流会をしました。



② 地域や仮設住宅などとの関わりを大事にした取組

ア 運動会や文化祭などの学校行事

学校行事には、校庭仮設住宅の自治会長さん

を訪問し、招待状を手渡しました。運動会では、地域の方も参加できる種目を考え、一緒に楽しむことができました。文化祭では、ご来場いただいた方々と「花は咲く」の合唱を行いました。

イ 合同避難訓練

昨年からは仮設の方々と合同避難訓練を実施しています。今年度も継続して行っています。

ウ 委員会活動

環境委員会ではプランターで花を栽培しています。今後は、そのプランターを仮設の方々へプレゼントをします。

③ 震災の体験等から学んだ「絆」「仲間」などの気持ちを生かした取組と課題

ア 多くの方々から、支援や励ましの言葉をいただいています。支援をいただくことに慣れ、感謝の気持ちが薄れてきた気がします。そこで、支援や励ましの言葉をいただいた学校・団体へ、今の頑張っている姿を、メッセージカードやビデオレターなどを送ることで、感謝の気持ちを表したいと思っています。

イ 校庭に仮設住宅があることから、多くの場面で、協力や支え合いが大切だと感じます。私たちの頑張る姿に、地域の人たちも元気や勇気もらい、活気ある鹿折学区にしていきたいと考えています。

卒業式 「答辞」

平成23年度鹿折中学校卒業生代表 伊藤 大輔

校舎に降り注ぐ日差しも、次第に暖かさを増し、登校坂の膨らみ始めた桜のつぼみに、春の訪れが感じられるようになりました。

今日のこの良き日に、私たち卒業生69名のために、このような盛大な卒業式を開いていただき、感謝の気持ちでいっぱいです。

大きな期待と不安を抱え、長く急な登校坂を上った入学式の日から3年が経とうとしています。通い慣れたこの道を歩くのも今日が最後だと思うと、寂しさが込み上げてきます。昨年3月11日、卒業する先輩方

が守ってきた伝統を受け継ぎ、学校を支えていこうと意気込んでいた私たちは、変わり果てた「まち」を見て言葉を失いました。

学校が再開しても、体育館と校庭が使えない生活は不自由なもので、例年行っていた活動などは到底できるはずありませんでした。しかも、その頃の私たちは、これからのことなど考える余裕もなく、自分のこと、今を生きること精一杯でした。しかし、次第に落ち着きを取り戻すにつれ、こんな状況だからこそ、私たち最上級生として学校全体を盛り上げ、支えていかななくてはならないという思いが湧いてきました。悩みに悩んだ末、「生徒会総務、各種委員会、部長会など、それぞれが協力し合って新しいものをつくり上げていくしかない」という結論になりました。

校庭で行った中総体壮行式は、初の試みでした。どの部の部長の言葉にも、震災による練習不足を感じさせない強い決意が込められていました。そして、鹿中生全員で作った円陣では、全校生徒の声が一つになって大空に吸い込まれていくと同時に、私たちの心も一つになり、絆を確かめ合うことができました。

9月、運動会は、仮設住宅の建つ、狭く限られた校庭で行われました。例年とは大きくプログラムを変更し、地域参加型にすることで、避難所や仮設住宅の皆様とも交流することができ、互いに理解を深めることができました。仲間や地域の皆様と一緒に汗を流し、共に盛り上がったことが、私たちにとって一番の喜びとなりました。

10月、大都市、東京への修学旅行が実現しました。一度はあきらめていた修学旅行でした。しかし、私たちの思いを、先生方や保護者の皆様が理解してくださり、修学旅行に行くことができ、最高の思い出をつくることができました。

文化祭は、10月30日に開催の予定でしたが、体育館はまだ避難所になっていました。それでも、体育館で文化祭を行いたいとの希望を持ち、一心に準備を進めました。そして、多くの皆様のお力により、体育館で行うことができました。当日は、「さくら講座」の発表の仕方を工夫し、合唱では、どの学年も最高のハーモニーを体育館中に響かせました。当日祭はあきらめざるを得ませんでしたが、例年にも増して、内容の濃い文化祭とすることができました。

私たちのこの1年は、怒濤のように過ぎ去っていきました。しかし、思い返せば一つ一つの出来事が、とても貴重で特別なものでした。また、3年間共に過ごしてきた69人の仲間たち、そして転校して新たな地で頑張って卒業を迎えた6人の仲間は何ものにも代えられない宝物だと改めて実感しました。

在校生の皆さん、部活動をはじめ、様々な活動で皆さんと一緒に目標に向かって努力した日々は、私たちにとっても、かけがえのない思い出です。今後、皆さんの前には多くの高い壁が現れるでしょう。しかし、どんな時も、手を取り合い、心をつなぐればきっと乗り越えられるはずです。皆さんなら、この鹿折中学校の良き伝統を受け継ぎ、さらに発展させることができると信じています。

また、いつも温かく見守ってくださった地域や仮設住宅の皆様。私たちが無事、3年間の中学校生活を送ることができたのは、皆様のお陰です。仮設住宅の皆様には、時折、ご迷惑をおかけしましたが、優しく声をかけてくださり、いつも応援してくださったことに心より感謝申し上げます。

～ 中略 ～

今日、私たちは卒業の日を迎えました。1年前は、「その時」を生きることだけで精一杯だった私たち。しかし、今、私たちは、それぞれの夢に向かって新たなスタートを切ろうとしています。同時に、「当たり前」の事を当たり前にする喜びも感じています。これから、私たちが歩いていく道には、数え切れない程の困難や苦しみが立ちはだかると思います。そんな時には、この鹿折中学校で学んだことを生かし、その先にある希望を信じて、自分の足で一歩ずつ進んで乗り越えていきます。

私たちは「チーム鹿折」です。

最後になりましたが、鹿折中学校の更なる発展と、皆様のご多幸を祈念し、答辞といたします。

3 保護者からのメッセージ

被災から前進するために

鹿折中学校父母教師会会長 畠山 康基

早いもので、未曾有の大震災からもうすぐ3年が経とうとしています。、まだまだ復興はほど遠い中、震災の年に入学した中学生は、間もなく卒業を迎えようとしています。

震災直後は、この先どうなるのだろうという不安が一杯で入学式に参加し、体育館は避難所、校庭も使用できずに、一番大切な心と体をつくるこの時期に、勉強も運動も出来ないのではないかと心配したものです。

しかし、校長先生をはじめ先生方がまずは子どもたちを落ち着かせて、普段の生活を取り戻そうと頑張ってくれたお陰で何とか無事に一年を過ごすことができました。

そして、二年目以降も子どもたちは、大人でもストレスを感じる大変な状況の中で、いろいろなアイデアを出し合い、運動会、文化祭を仮設の人たちと一緒に楽しみ、確実に一步一步成長していました。

いつも明るい顔で、楽しそうに友だちと会話しているのを見ると、安心するとともに、この子どもたちは、一生、震災の経験を忘れることなく、頑張っていけるのだろうか心配にもなります。子どもたちの未来の

ために、大切なこの時期を保護者と学校、そして地域がしっかりと手を組んで、子どもたちを見守り、励まし、叱咤して、強い体と心を育てて行かなければと思います。そのためにも、子どもを取り巻くすべての人の繋がりを強くして、悩んだり困っている人たちを支え合い、生活の基礎となる家庭を穏やかに過ごせる環境にするのも、我々の役割だと思えます。特に、当地区は自治会の7割が被災して、今までの生活を取り戻すことに精一杯で、子どものことは見過ごされそうになった時、PTAが頼りになれる存在であればと感じます。そして、大人が子どもたちのために環境を整え、安全で安心な学校生活を送れるようにすることが願いであり、責務です。

10年先、20年先の地域復興の主演となる子どもたちが、この災害をネガティブにとらえるのではなく、貴重な経験を後世に伝え、そして次の災害時には被害のない街づくりを目指して欲しいと思います。そして、今回、日本中、そして世界中からの支援と励ましをしっかりと心に刻み、これからの大人への階段を上って欲しいと思います。そして、きっと素敵な大人へと成長してくれることを願っています。

最後になりますが、たった一度の楽しいはずの中学校生活を大震災とともに生きた子どもたちは、この苦しみを乗り越えて、どこにいても必ず活躍できるはずだと信じています。



4 教職員からのメッセージ

「心のケア」への取組～スクールカウンセラーとの連携をとおして～

養護教諭 鈴木 真弓

東日本大震災から2年6カ月が経過しました。現在、多くの生徒は毎日、笑顔で落ち着いた学校生活を送っています。しかし、時間の経過とともに、家庭環境や生活環境の問題も複雑化しており、ストレスによる心の問題の増加が懸念されます。そのような状況を踏まえ、外部機関やスクールカウンセラーと連携を図り、震災直後から継続的に生徒の心のケアに努めています。

(1) 平成23年度（1年目）

学校再開後の4、5月は辛い体験を思い出し、授業中、突然泣き出す生徒や過呼吸になる生徒が多く、保健室はその対応に追われました。体育館で避難生活をしながら学校に通ってくる生徒も多く、プライバシーのない生活へのストレスや失職した親の経済面を心配し、進学への不安で精神的に不安定になる生徒もいました。そのような状況下、6月に緊急派遣で島根県からカウンセラーが来校し、「ストレスマネジメント」の授業をしていただき、被災後に起こりうる心の変化やその対処法について学びました。



ストレスマネジメントの授業

(2) 平成24年度（2年目）

震災から1年が経過し、生徒は落ち着いた学校生活を送れるようになりましたが、仮設住宅に住んでいる生徒や学区外からスクールバスや家族の送り迎いで通学してくる生徒の中には、ストレスを抱えたり精神的不安定を訴えて保健室に来室する生徒もいました。対処法として、スクールカウンセラーから「リラクゼーション」の授業をしていただきました。

①第1回「リラクゼーションの授業」H24.6.8実施

ストレスを感じたり、嫌なことを思い出した時の対処法として、「タッピングタッチ」と「イメージトレーニング」を学習しました。

②第2回「リラクゼーションの授業」「心とからだのアンケート」H24.11.16実施

リラクゼーションの授業の後、自分の気持ちを振り返るためにアンケートを実施しました。実施後はチェックリストとして、全校生徒分をカウンセラーのアドバイスを受けながら分析しました。結果については全職員で共通理解をはかり、体制を整えてケアできるようにしました。また専門的なケアや支援が必要な生徒については養護教諭による健康相談やカウンセラーによるカウンセリングを実施しました。



リラクゼーションの授業

③第3回「心の授業」H25.3.1実施

震災から2年が経過しようとしている時期、生徒のアニバーサリー反応も懸念され、3回目の授業は時期を考慮しながら実施しました。生活の中で嫌なことを思い出し、身体に色々な反応が出ることもあるけれど、うまく付き合っていくことが大切であることを学習しました。

(3) 平成25年度(3年目)

①「グループエンカウンター授業」3年生対象 H25.9.20実施

深呼吸法とタッピングタッチでリラックスした後、一人一人が本音を出し合うことにより、お互いの理解を深め、自分自身も受け入れていくグループエンカウンターを学習しました。

②「心の授業」「心とからだのアンケート」H25.10.2実施

アンケートに記入した後、自己採点し、自分自身の健康状態を振り返りました。その後のワークショップでは人と上手に付き合っていく方法について学習しました。

東日本大震災から3年、現在多くの生徒は元気に学校生活を送っていますが、一人一人抱えている悩みは大きいものと思います。生徒の心に寄り添いながら、心のケアについてはこれからも継続して取り組んでいきたいと考えています。

5 おわりに

東日本大震災から3年。今なお、むき出しとなった家屋の土台のコンクリートが、子どもの心を傷つけている。鹿折地区に打ち上げられた「共徳丸」の船体は、2年7ヶ月後に解体され、今はその姿はなく、それぞれの人の心の中に刻まれている。そして、地域の土地のかさ上げ工事がやっと始まったばかりで、震災復興住宅の建築や商店街の復興はまだまだ先のことである。

しかし、我々教職員は、いつの日か、校庭で元気に活動する生徒の姿を思い浮かべ、今、目の前にいる生徒に、将来の夢と希望を与え、ふるさと「気仙沼、鹿折」を誇りとし、必ずここにまた帰ってこれるよう、「自ら将来を見据え、心豊かに、力強く学び続ける生徒の育成」に、これからも日々努めていきたい。



復興へのメッセージ

校長 佐藤 富夫

1 はじめに

(1) 本校の位置

本校は気仙沼市のほぼ中央に位置し、東は気仙沼湾、西は太田高原、南は面瀬川、北は神山川に囲まれた丘陵にある。近隣には気仙沼西高等学校、気仙沼支援学校、市立美術館、市立総合体育館、市営コートなどがあり、気仙沼市の文教地区として位置づけられている。また、松峰園、福寿荘、恵風荘、みずなしの丘などの福祉施設がある。

(2) 震災時の被害

震災当時の生徒や職員の人的被害はなかったが、生徒数名に家族や親戚を亡くした生徒がいた。建物被害としては、校舎の繋ぎ目の破損、校舎の屋上にある給水タンクの破損、体育館や柔道場の壁、天井、窓ガラス等の破損があった。また、30数名の生徒の家屋が全半壊であった。職員では6名の住居が全壊であった。

(3) 震災後の影響

震災から3年が経過した。お陰様で震災直後と比べれば、多くの支援やボランティアの協力により、ある程度ではあるが落ち着いた学校生活を送れるようになったと感じている。県内外はもとより世界各国の皆様からの善意の支援や励ましのメッセージを多数いただき、当時の子どもたちはもちろん職員も元気をもらい、そして勇気付けられた。

特に、子どもたちは家族や住居そして学校が被災し、震災前と比べればだいぶ様々な面で制限された生活を送っているにも関わらず、愚痴や不平ひとつ言わず、努めて明るく前向きな姿勢で、学習や運動に、そしてボランティア活動に励んでおり成果も上がっている。頭の下がる思いである。

このようなことから震災による影響は、当時は少なからずどの子どもたちも受けていたわけであるが、そこから少しでも早く立ち直ろうとする前向きの姿勢が多くの子供たちに湧き上がり、そしてそれらを打開しようと考えそして行動することで、だいぶ人間的にも成長しているのではないかとと思われる。

このように震災によるマイナス面からこれらをプラス面に変えようとする作用は人間だけが持つ不変の気質ではないかと思われる。今後は何があっても絶対諦めないという姿勢を育てたいものである。



「花のみち45」ボランティア植栽作業

2 子どもたちからのメッセージ

私のメッセージ

3年 小野寺 愛

それは私の誕生日の次の日のことでした。2011年3月11日、東日本大震災で多くの人の命が奪われ、すべての人が絶望の淵にたたされました。今までの生活がまるで幸せな夢のようだったと感じ、夢であってほしかったと心から思いました。

私の家は被害に遭わなかったものの、父が働いていた会社が津波で流されてしまいました。そのため父は

群馬県に単身赴任することになり家族と離れて暮らすことになりました。それから月日がたち私が中学2年生の時、父は家族と離れ離れのまま突然の病気で死んでしまいました。その時私は、あの悪夢のような東日本大震災の日に、どんなに多くの人が悲しみ世の中にどれだけの涙があふれたのだろう。そしてあの時私と同じように「後悔」をした人がどれだけいたのだろうと感じました。

私は父が死んだ時「父は生きていて幸せだったのだろうか。どうして私はもっと優しくできなかったのだろうか。どうしてちゃんと話を聞いてあげられなかったのだろうか。」とたくさんの思いと後悔が心の中に生まれました。最後まで父にそっけなくしてしまっていた自分を憎みました。私は沢山の「ありがとうとごめんね」という言葉をもっともっと父に伝えたかったのですが、それはもう叶うことがないのです。

父の死をきっかけに私には「死」が大変身近になりました。そして人が死んでいくことと周りにいる大切な人について初めて深く考えるようになりました。

大切な人の死を経験した私が、今思うことと伝えたいことがあります。

それは家族や友達をもっと大切にしてほしいということです。周りにいる大好きな人や大切な人がそばにいて、隣で笑っていることはあたり前なことではありません。それはとても大切なことで最高の幸せなのではないかと思います。そして大好きな人とはいつか必ず離れ離れになってしまいます。だからこそもっと家族や友達の話に耳を傾けてほしいのです。笑いあっている時間をもっと大切にしてほしいのです。そして何より、自分の素直な気持ちを相手にしっかり伝えることをしてほしいのです。これが私が伝えたい未来へのメッセージです。

私は父にもう自分の気持ちを伝えることはできません。けれど私には周りに大切な人が沢山います。だから家族や友達を大切に小さな幸せをかみしめていきたいです。

東日本大震災と父の死は私を大きく成長させてくれました。人間は簡単に周りのことに気づくこと、自分を変えることはできないと思います。だからつらい経験をした私たちが伝えていかなければなりません。私のメッセージで誰かの気持ちが少しでも動くことを願っています。

未来への希望へと変えるとき

3年 小野寺 遼介

あれから、もうすぐ3年の時が過ぎようとしています。皆さんは、あの3・11の出来事を忘れてしまっ
てはいませんか。あの日は、悪夢ともいえる大津波が、ここ宮城県をはじめ、岩手県や福島県などの沿岸部を
呑み込み、多くの傷跡を残しました。あの日以降、被災地には、絶望や悲しみ、不安が、被災した人々の心
の中から溢れ出るようになってしまいました。津波から九死に一生を得て、生き残った人もいますが、中には、「もう死にたい」「生きる意味なんてもうない」と、生きることに希望を失ってしまった人もいます。こ
んなにも、人々の心を傷つける災害はこれ以降、来ないで欲しいと強く願っています。

自分がこれまでに築き上げてきたものや大切な人を、一瞬の出来事で失ってしまうという悲劇は実際に体
験したことのある人ではないと、分からないと思います。だからこそ、後世の人々にはその悲しく恐ろしい
経験をしないで済むように、それを伝えていかなければなりません。それが被災者である私たちの使命だと
強く感じています。

被災地の現状は、土地のかさ上げやがれき処理、高台移転、災害公営住宅の建設などの事業に懸命に取り
組んでいる状態です。他にも、他県からのボランティアやさまざまな支援物資が届きそれが、復興への後押
しとなり、日本各地の地域との繋がりが、より一層強くなったと、日々感じています。しかし、本当の意味
での復興には遠い道のりです。

今、被災地では、国からの支援に頼りながら、復興へ向かってはいます。しかし、個々の生活に目をむけ
れば、依然として仮設住宅で生活する人は多く、十分な支援を得られているとは言えません。

私の親戚や友達にも、そのようなことで苦しんでいる方もいます。家を流され、家族を失い、夢も希望も、
未来も失い、浮かび上がってくるものは、絶望と哀しみだけです。しかし、彼らは今、その困難を乗り換え、
失った夢や希望、未来を掴もうと必死に生きています。

このように、今回の災害に負けず、人々は苦しみに耐え、復興への道を、踏ん張って懸命に歩み続けてい
ます。自分たちの未来を信じ、みんなの力を結集することで、絶望を希望に変えることができるのです。そ
してそれが、未来に、美しい気仙沼を創造する原動力となるはずで

私たちは、過去に後戻りすることは決してできません。しかし、過去を振り返り、未来に繋げる力を得る
ことは可能です。今こそ、本当の被災者の底力を見せつけるときなのではないでしょうか。過去と現実、そ
して未来をしっかり見据え、共に前へ歩いていきましょう。

3 保護者からのメッセージ

歩みを前へ、未来のために みんなでつくろう気仙沼

PTA会長 村上 佳市

平成23年3月11日に発生した東日本大震災。未曾有の大災害で多くの被害を齎しました。

当時私は気仙沼市役所で予算委員会に出席しており、災害発生が予想されたため市職員とともに対応に当たりました。二人の子どもは、松岩中学校と松岩小学校にいましたが学校に対しては全幅の信頼を寄せていたのであまり心配せずに災害対応に当たることができました。子どもたちの引き渡しについては一部で保護者の強硬な場面があったということを知りましたが、先生方のご努力により子どもたちの命が守られました。このことは、その後の学校運営や子どもたちの学校生活において大きな意義があったことと感じております。

震災後は、松岩小学校は災害避難所となり、先生方は学校運営と避難所運営を余儀なくされ、卒業式、入学式の準備など多くの課題に直面することとなりましたが、子どもたちのために一生懸命頑張ってくださいました。被災した先生もおられる中、率先して避難者の対応にあたられた先生方に感謝の言葉を申し上げます。子どもたちも初めて体験した未曾有の大災害に耐え、被災者と一緒になって避難所運営に携わったことが大きな経験になったことと思われまます。

その後、松岩中学校、松岩小学校とも、卒業式、入学式を無事に挙行することができ、新年度のスタートをきることができました。松岩小学校の避難所開設は十月ごろまで続き、教室や体育館が使えず授業に支障が出始めていました。しかし、被災者の方々と協力し合い無事被災者全員の方が仮設住宅等に移っていただき、災害避難所を閉じることができました。

松岩中学校においては、仮設住宅の校庭への建設が決定し、体育の授業や部活動に多大な影響が出ることに懸念されることとなりました。しかし、当時の校長先生の申し入れにより校庭の三割を何とか残すことができ、ソフトテニス部の活動が辛うじて行われています。もちろん、野球部の部活動は制約され、練習試合など遠くに出掛けることが多くなり、子どもたちにも保護者にも大きな負担となりました。私の長男も野球部に所属しておりましたが、遠くへの練習試合などで送迎ができず、多くの保護者のみなさまにお世話になり、大変ありがたく思いました。

現在、松岩中学校のソフトテニス部に所属する次男も簡易コートでの練習が多く、自前のコートで練習できることを望んでおります。また、練習試合の時も他の保護者の皆さんにお世話になっており、大変感謝申し上げます。

このように多感な時期の子どもたちの活動に制限があることは大変心苦しく、一刻も早く解決しなければならないことと思います。この大震災があったから仕方がないということでは済まされない問題です。東日本大震災さえなければごく普通に学校生活を謳歌し、自由闊達に勉強や部活動に打ち込められる年代なのです。運動が制限され、仮設住宅が校庭にあり、生活の一部を垣間見られるこの環境を一刻も早く解消する事が急務であり、われわれ大人がそれに向けて行動を起こさなければならないと考えます。

東日本大震災から、三度目の冬を迎えようとしています。それぞれの心の中で復興に向けた歩みを前へ前へと着実に進めなければなりません。一人一人が前を向いて気仙沼の復興、子どもたちの未来について思いを巡らせ、考え、実行していくことが復興を加速させる原動力になると思います。

一期一会という言葉がありますが、子どもたちの一期一会は制限された毎日であり、戻らない時間です。震災前の環境を取り戻してあげたいと思っています。多感な子どもたちの健やかな成長こそが未来の気仙沼市を支える礎となり、復興を加速することになります。子どもたちの心身のケアをしっかりと行い、未来の気仙沼を支えていく原動力としての活躍を期待し、子どもたちをしっかりと育てていくことが肝要であります。

2020年に東京オリンピック・パラリンピックが開催されます。七年後の大会を目指し、躍動する子どもたちの姿を私たちがしっかりとサポートするべきと考えております。現在隣りまちの運動施設を借りて行っているスポーツ大会を、自前でできるようなスポーツ施設を気仙沼市に作れるようみんなで声を大にして訴えていきたいと思います。産業や街づくりは大切なことですが、それに携わり、生業として動かしていくのが今の子どもたちです。子どもたちの夢を現実にそして成し遂げるため我々が全力でサポートしていきましょう。そのためには少しずつでもいいから歩みを前へ。立ち止まらず一歩一歩着実に、みんなで新しい気仙沼市を作りましょう。

結びに、私たちは、東日本大震災から生き延びて守られた命です。交通事故などで失われることなどなく、そして相手への思いやりである挨拶をしっかりとできるよう保護者のみなさまにおいても子どもたちとの挨拶や会話などで家庭内でしっかりとコミュニケーションを図っていただきますようよろしくお願い申し上げます。

私は、東日本大震災発生当日は翌日に行われる卒業式の会場設営で松岩中学校の体育館にいました。大きな揺れとともに、窓ガラスや照明のガラスが割れ、雨のように降り注ぐ異常な状況下で「これがあの宮城県沖地震か?」と思いました。揺れが小さくなったところで、準備にあっていた生徒を校庭に避難させ、さらに校庭に避難してくる自動車を誘導していました。自動車の誘導にあたっている時、大島の横をかすめ迫り来る3本の白波を見つけ、それが津波であることはすぐにわかりました。母親がいる鹿折の自宅が気になりましたが、そのうち「鹿折はもう地獄だ」という情報がどこそことなく入ってきました。自分の自宅がどうなったのかおよそわかったのは数日後でしたが、もう諦めるしかありません。本当に気仙沼の、いや宮城県・東北地方の風土を一瞬に塗り替えた悲劇というほかありませんでした。

あれから2年と9か月が過ぎ、緩やかな歩みではありますが、人々の生活も落ち着き始めたと思います。しかし、まだまだ復興までは長い年月を要するのではないかと思います。というのも、津波被害にあった地域を盛り土して、再度住宅地として開発するにしても、もうそこには戻りたくないという人々の声も聞こえてくるからです。そこに人が戻らなければ、かつてそこに存在した地域は再生しません。ならば、思い切って新たなコミュニティとなる地域を全く別の場所に作るしかないのではないかと思います。住民が戻らなくなったかつての住宅地（コミュニティがあった場所）を、企業が工業団地のような形で新たな地場産業を生み出してくれるのであれば問題はないと思います。しかし、また津波被害を被るかもしれない土地に参入してくれる企業がそう多くあるでしょうか？ならば、別の活用法を考えてみるのも一つの策ではないかと思います。ここでは、あくまで私的かつ妄想的プランとしてですが、盛り土をする代わりに今の土地を活用する方法で産業を興すのはどうでしょうか。

ここ数年、世間の注目を集めているエネルギー資源開発の一つとして藻類から石油を生み出す技術があります。例えば、緑藻類の光合成で炭化水素を精製できるボトリオコッカスや有機栄養分（主に生活排水に含まれる養分）を餌に石油を作り出す藻類のオーランチオキトリウムを、プラント（巨大なプールのようなもの）で大量に育てていきます。すでにこの研究は、被災した地域でも実験的に進められています。この試みの利点は、休眠地（海岸近くの住宅地として利用する計画の地域）を利用して、土地の嵩上げをせずに海水を引き込んでプラントを作ることができる点です。プラントと言っても巨大な建造物を作る必要はなく、小学校のプールをいくつも集めたような施設を作るだけで可能だそうです。住宅も建たない工場も誘致できない土地は、かつてそこに住んでいた人々にとっては何もないだけにゴーストタウン以下の悲しい光景になってしまうと思います。であれば、かつて住んでいた地域の名前を残したまま、新しいプラントから新たなエネルギー資源を生み出す産業ができることは、ここ気仙沼に住む人々にとってそう悪いことではないと思います。多少の高潮や降水でも打撃を受けない産業であれば、国の事業としても、企業の事業としてもチャレンジする価値のある事業になるのではないのでしょうか？ 国や研究機関、企業が実験的であれ、この地で新たなアクションを起こすことは、私たちにとっても喜びになりますし、仮に産業ベースに乗る見込みになるならば、この地に新たな雇用と産業を生み出すはずで、今までの水産業と共存共栄してきた気仙沼市ですが、従前の復興までに回復するのが難しいのであれば、新たな産業を生み出す考えも必要かと思います。もちろん、海や水産資源が魅力である故郷の素晴らしさはアピールしながら、将来の気仙沼の姿を考えていくことが、子どもたちの未来を切り拓くことにつながるものだと信じます。以上は私の個人的意見ですが、多くの人が未来の気仙沼のビジョンをもってそれに挑戦していくことは必要であると思います。

それと一番忘れてはいけないことは、この悲劇を将来二度と繰り返さないことです。一つは、この震災がもたらした事実を、次の世代へ次の世代へと正確に風化させずに伝えていくことです。巨大なモニュメントがなくてもいいのです。語り伝えていくことと映像を活用した被害の様子や伝播は可能です。そして、二つ目は住宅地や学校などを津波の及ばない土地に建設する町づくりが必要だと思います。私たちがこれからもみんなに誇れる故郷・気仙沼を再生していくことが、子どもたちの未来を作ることにつながっていくと信じます。

5 おわりに

上記のように「子どもたちから」「保護者から」「教職員から」の視点で、現時点での思いや願いを綴ってもらいました。その中でも子どもたちのメッセージからは通常は何事もなかったような生活をしていても一人ひとりの心の中には今なお大なり小なりの「心の傷跡」を垣間見ることができた。

それと同時に、今後自分たちがどのような生活を送り、どのような行動をして行くべきかという未来への決意や意欲そして希望がしっかりと語られている。また、保護者や教職員のメッセージからは、この震災によるマイナス面をここに住む人々、子どもから大人まで含めて、皆が協力し合い助け合うことでプラス面に変えることができたこと、その活動によって子どもたちが人間的に大きく成長したことが伝わってくる。

そして誰のメッセージからも今後の復興に向けた希望や前進することの大切さ、そして何よりも人間同士の温かいつながり「絆」が最も大切であることが語られている。

このような一人ひとりの「思い」や「願い」を少しでも実現すべく学校としても教職員一丸となりその支援に尽力していく所存である。



特別支援学校との交流（グランドゴルフ）



苦境にあっても天を恨まず

校長 今野 勝美

1 はじめに

(1) 本校の位置

本校は気仙沼市内の中部、階上地区に位置し、海と山に囲まれた自然豊かな地域である。特に、太平洋に突き出た岩井崎は、三陸復興国立公園の南端であり、震災以前は潮吹き岩をはじめ石灰岩に打ち寄せる白波と松林のコントラストが風光明媚な観光地として有名であった。また、太平洋に面したお伊勢浜海水浴場は、全国快水浴100選にも選ばれた遠浅の浜として、毎年多くの海水浴客が訪れる気仙沼有数の海水浴場である。

13地区からなる学区は、農業や沿岸漁業が主要産業であったが、時代とともに職業も多様化し、核家族や共働き家庭が増加しつつある。保護者は教育熱心で、学校への積極的な協力を惜しまない。生徒は率直で礼儀正しく、一人一人が何事にもしっかり取り組もうと励むとともに、みんなで力を合わせて頑張ろうとする団結心も強い。

学校は昭和22年の開校当時から太平洋を見渡す丘陵地（海拔30m）にあり、115名の殆どの生徒が徒歩で通学している。少子化に伴い年々生徒数は減少傾向にあるが、平成17年からは宮城沖地震に備え、災害発生時にまず自分の命を守る「自助」、地域住民や公的機関と取り組む「共助」、公的機関の活動を知る「公助」を3年サイクルで学習する防災教育に取り組んでいる。

(2) 震災時の被害

震災当日は卒業式の前日であり、教職員と在校生がその準備に追われている時間帯におこった。卒業を控えた3年生は全員下校していた。

人的被害としては、杉の下地区の避難場所に避難していた3年生3名が津波被害の犠牲となったほか、生徒及び教職員の家族や親戚にも津波被害による犠牲者が多数出た。階上地区は、208人（地区住民の約4.3%）という気仙沼市で最も多い犠牲者数がでた。

物的被害としては、校舎の壁面に小さな亀裂が入ったものの、窓ガラスが割れたりする被害はなかったが、生徒の自宅の約3割、教職員5名の住居が大津波により全壊した。また、階上地区全体で約67%の家屋に被害が出た。地域全体のライフライン（電気、水道）が切断されたため、しばらくの間不自由な生活を強いられた。

(3) 震災後の影響

校庭には仮設住宅96世帯が建設され、運動するスペースが無くなってしまった。そこで、陸上練習や野球部の練習については、階上小学校まで片道12分かけて歩き、借用して行っている。生徒の中には、仮設住宅や学区外から通学する者もあり、これまでの生活リズムや家庭学習環境に大きな影響を及ぼした。

また、大部分の保護者の職場が被災し失業したことから、就学援助の受給率が全校生徒の約半数にも上ったほか、転職や出稼ぎを余儀なくされた家庭もあった。住宅再建あたっては、安全安心な土地を求め、学区外に建設し区域外通学する者も出てきた。震災前には13地区あった学区は、震災の影響で1地区が自治会を解散したことから、12地区に減少した。



グラウンドにある仮設住宅（校舎屋上から）

2 子どもたちからのメッセージ

「震災を受けた学校の生徒会長として」

生徒会長 柏 岳斗

『苦境にあっても天を恨まず』当時の生徒会長であった梶原先輩の「卒業生代表の言葉」を心に刻み、僕は階上中学校に入学しました。あの時小学6年生だった僕たちは、避難所になっていた体育館の4分の1のスペースをお借りし、午前中に小学校の卒業式を挙げさせて頂きました。午後に行われた中学校の卒業式には僕も避難者の一人としてその場にいました。その中で発せられた梶原先輩の言葉の重みを、より深く感じる立場になるなど、その時は思いもしませんでした。中学校は体育館をはじめ、特別教室が避難所になっていたため、入学式は3階多目的室で行われました。僕の家は流し、段ボールで仕切られた体育館が我が家の居住スペース。2つ上の兄と歩いて数十歩の教室に通いました。校舎の中も避難者の方々と同居の毎日。命が助かっただけでも……と思えた震災直後から時間が経つにつれ、皆疲労の色が見えてきました。それでも僕たちが毎日を乗り越えられたのは、不平一つ言わず、お互いを気遣い、毎日を丁寧に過ごしていた階上中学校の先輩や友だち、そして僕らを常に支え、励ましてくださった先生方の存在が大きかったからだと思います。あの日雪交じりの寒くて暗い中、懸命に誘導し自分の服を脱いで避難者に着せていた先輩。3年間の防災教育の経験を生かし、ボランティアに来てくださった卒業生。自らも被災した人が多かったのに、皆明るく声を掛け合い、労を惜しまず体を動かしていました。「防災学習の階上中」と小学生の僕も聞いていましたが、一部の人だけでなく生徒一人一人が自分の意志で活動している姿に驚き、感動しました。兄が生徒会副会長を務めていたこともあり、生徒会総務の先輩方のリーダーぶりを目の当たりにした僕は、自分も生徒会の一員として何かの役に立ちたいとの思いが強くなっていきました。



H25全国生徒会サミット in 福島

その後1年生の後期から生徒会副会長を、2年生の後期からは生徒会長を務め、階上中学校生徒会をまとめることになりました。震災直後から階上中学校は、内外の実に多くの方々からご支援を頂き、来校なさった方々にはもちろん、お招き頂いた先でも階上中学校の防災への取り組みや日頃の学校生活の様子、被災の状況や復興の進み具合を説明することが多くなりました。

兵庫県の淡路島で行われた「高校生ミーティング」「SEND TO 2050プロジェクト」「全国生徒会サミット」等たくさんのイベントに参加する機会を頂きました。また、来年の8月には「OECD パリ国際会議」にも参加してきます。そういった場で僕が果たすべき役割は、被災地の現状を知ってもら

うことと、震災は決して他人事ではなく、形は変わってもどの国のどんな地域のどんな人々にも起こりうることを知ってもらい、生き延びる術を学び合うことだと思っています。今回の震災で生死を分けたのは偶然でも運命でもなく、必然だったと思うからです。

「想定外」という言葉を何度も耳にしましたが、過去の教訓をしっかりと生かし、自然と共存することをもっと本気で考えていたら、救えていた命や財産はたくさんあったのではないのでしょうか。

震災後も僕たちの階上中学校は、その取り組みの素晴らしさを高く評価して頂いています。しかし、かけがえのないものを失った分だけ、その経験をバネにし、さらに多くのことを他へ発信していく必要があるのだと思います。

佐賀県民の方々から「君たちは気仙沼の未来、そして希望！」という言葉頂きました。僕たちは地域の希望となるべく、日々の学習や部活動に励んで心身を鍛えることはもとより、多くの人との関わりの中で支え合って生きているのだという自覚をもって、個々の力を高め、強く優しい人間になるために努力をしなければなりません。

『苦境にあっても天を恨まず』……自然の中で生かされている僕たちは、恩恵だけでなく苛酷さも受け入れる覚悟をもち、どうすれば被害を最小限にできるか、英智を結集して子孫が二度と同じ苦しみに遭わないように、この経験をしっかりと伝え続けなければならないと思っています。

3 地域の方々からのメッセージ

「東日本大震災—私の体験」

同窓会長 近藤 公人

その日は、気仙沼高校教育振興会の理事会。開会して間もなく東北地方太平洋沖地震に見舞われた。当然、気仙沼高校の3階会議室は嵐の海に浮かんだ船のように揺れ、校長先生をはじめ、出席者は机の下に身を置いているものの、倒壊を覚悟しただろう。長い揺れが収まって直ぐ会議を閉じ、それぞれ退散した。

私は、地元新聞社に勤務していたので、第一に号外発行が頭に浮かんだ。しかし、状況把握が先決と現場に向かった。情けないが、家族も心配で、山道を自宅へ向かい、辿り着いたら妹が玄関先で呆然としていた。小雪が舞い散り寒いだろうと思って「車に乗ってエンジンをかけておけ」と言い残し、津波を俯瞰できる場所に向かった。

昭和35年のチリ地震津波以来、これまでの経験から津波は、大島龍舞崎と岩井崎の間から来ると信じていた。確かにその場所から津波の第一波が見えたが、その時、後ろで、バリバリ、ドドーンという轟音が響いた。振り返ると、絶対来ないと思っていた我が家に、どす黒い津波が向かっている。あっという間に、我が家も波に飲み込まれた。

急いで我が家に引き返した。家はがれきに埋まりながらも辛うじて残っていたが、止めてあった妹の車も、フェンスも植木もない。がれきを乗り越え、妹を呼んだが、答える筈もない。仕方なく、辛うじて波の乗らなかった岩井崎入口の畠山商店に行ったら、震えている妹がいた。左手にタオルを握り締めたまま…。

妹が言うには、ドーンと音がしたので、振り向いたら、一番上に家の屋根や大きなトラックを載せた波が迫って来ていた。急いで車を切り返し、畠山商店の方に向かった。タッチの差で我が家は波に覆われたという。家が残ったのは、我が家が終点であり、勢いが弱まったためと思われる。

我が家の近隣には大型の冷凍・冷蔵庫が林立しており、大量の魚介類を保存していた。この魚介類が一挙に流れ出し、我が家周辺だけで数千トンが散乱したといわれる。我が家の庭木にはサンマなどが鈴生りになっており、家の中では押入れやコタツの中までサンマ、サバ、イカ、イサダ、ヨシキリザメのすり身などでいっぱいだった。がれきの山で立ち入りできない日が続き、これらの処理ができないまま、冷凍保存されていた魚介類が溶け出し、腐臭が酷い。

被災見舞いに訪れた人も強烈な腐臭のため、数分で帰ってしまうほど周辺集落には酷い悪臭が漂う。大量のハエの発生で壁は真っ黒。市や保健所などにも再三相談したが、“たらい回し”で埒が明かない。このため、周辺の人たちの協力を求め、関係者（地主を含む）と階上大谷土地改良区（小野武久理事長）、地区水利組合（村上一郎組合長）の了解を得て、津波の被害を受けた田畑約10haに「EMアグリ・フィッシュ・クリーン大作戦」を展開、EM菌を散布した。作業には、茨城県から深夜に出發してきたというボランティア26人をはじめ、周辺の自治会、市内の有志、土地所有者、同級生や友人など合わせて約70人が参加した。散布すると鼻を突く悪臭は和らぎ、変色した水は徐々に透明度を増して行く。驚異的な効果にボランティアの皆さんをはじめ、参加者全員が感激していた。

EMの効能は聞いたことがあるが、体験したことがないだけに、何も手を打たないで居るよりは…という軽い気持ちだったが、翌日の早朝は、あれほど鼻を突いた悪臭が大幅に和らぎ、マスクをしなくても苦にならないほどになっていた。散布から6週間経てからは悪臭もハエもすっかり姿を消した。

現在は、臭いもハエもない快適な生活を送っているが、目の前の集落が壊滅し、我が家から岩井崎の噴潮や大海原が見える。一寸揺れると避難する生活を送っている。

階上地区沿岸部は壊滅的被害を受け、多くの人たちが亡くなった。未だ行方不明の人もあり、この惨状を後世に伝えるべく、有志とともに記録誌「服膺の記」を発行した。災害時には階上中体育館に約1,200人もの避難者が殺到した。大人たちに混じって同校の子どもたちの働きぶりは見事だった。

現在、「逃げること」を第一に掲げ、津波を和らげ、人や家財などの海上流出を防ぐため海辺に森をつくる活動をしている。安心安全確保のため、地域が一体となった防災活動も展開されており、地域の実情に合った防災施設整備を働きかけていきたい。階上地区は養殖漁業や観光、農業などを生業としており、高所に立って将来像を見据えて復興を推進し、震災前の“日常”を一日も早く取り戻してほしい。



被災直後の階上地区国道45号線

「全国大会までの道のり」

男子卓球部元コーチ 熊谷 信弘

東日本大震災によって、当然のことながら、活動休止を余儀なくされた階上中学校男子卓球部はいつ練習再開できるかわからない状況でした。しかし、震災発生から約2か月後、部員達のあきらめない気持ちと周囲の多大なる支援により、ついに普通教室での練習再開を実現させました。練習再開に際しては避難所の被災者の方々が重い卓球台を2階まで運ぶのを手伝ってくれたと聞きました。このような状況の中で、被災者の方々は自分のことで精一杯のはずなのに、子どもたちに震災前と同じ生活をさせてあげたいという気持ちを感じ、また、人が人を思いやる心が私の胸を熱くさせました。

教室での練習はし烈を極めました。夏の湿気と流した汗は床を滑らせ、部員たちの転倒を幾度も招きました。また、狭いので十分なフットワークを取ることができず、壁に何度も体をぶつけながらも一生懸命白球を追いつけましたが、このような環境に誰一人として不平不満を漏らす部員はいませんでした。むしろ、震災下で、好きな卓球の練習ができるという幸せに感謝しているようにさえ見えました。

このような部員達の頑張る姿を見て、なんとか環境の整ったところで練習させてやりたいと思いました。方々尋ねたところ、卓球を通しての知人からの紹介で、一関市の小さな体育館を借りることが出来ました。そこを休日の練習にあてようと考えたのです。しかし、練習会場は見つかったものの、震災で家族を亡くしたり、家を流失してしまった部員もいた中で、保護者が送迎を承諾してもらえるかが問題となりました。日々の生活さえも大変な時に、部活のために協力して欲しいなどは、とても言い出しづらかったのです。しかし、それは私の杞憂にしか過ぎませんでした。保護者の気持ちは私達と同じだったのです。練習会場への送迎はおろか、県内外への遠征まで支えてもらい、そのおかげで集中して練習に取り組むことが出来ました。そして、この頃から、部員たちの目の色が変わってきたのを感じ、一層、練習に熱が入りました。



団体優勝後の記念撮影

そして迎えた第31回宮城県新人卓球大会で、階上中学校男子卓球部は順調に勝ち進み、決勝までのぼりつめました。決勝の対戦相手は以前、練習試合で負けていた石巻市の河南西中学校でした。試合はダブルス（フルセット）、4番手（フルセット）、5番手（フルセット）、逆転につぐ逆転で3ポイントをとり、3対2で激戦を制し、県優勝を果たすことが出来ました。それと同時に、福井県で行われる全国中学選抜卓球大会に出場することとなったのです。このような目標をはるかに上回る結果を残せたのは震災前まで、とすれば指導者にやらされていた練習から、自らが努力できるようになった部員達の成長とそれを影で必死に支える保護者の支援があったからだと思います。

震災を乗り越えて、部員達が私に見せてくれた姿は、苦境に対してひるまず、立ち止まらず、ただ、ただ、目標に向かって真摯に努力する美しさでした。また、このように脇目もふらず努力できたのはさまざまな支援を頂いたおかげ、ということ部員達も私も忘れずに感謝しなければならないと思います。

あの悪夢のような出来事から2年半が過ぎ、今もなお、苦しい状況下におかれている子どもたちが多くいる中で、夢を実現したいと考えている子どもたちに対して、さまざまな分野や場面での支援の輪が広がり、その足がかりが出来るよう、また、チャレンジの場に立てるようにと祈らずにはいられません。復興にはまだ遠い気仙沼市ですが、未来に向かって歩き出している子どもたちは、この町の宝だと思っています。私も微力ながら自分の出来ることをこつこつと支援し続けていきたいと思っています。

4 教職員からのメッセージ

「被災からの足踏みと第一歩」

教諭 戸羽 康幸

……目の前に、3つの人影が見える。3人とも見覚えのある顔ぶれ。その内の1人の肩に手かけながら声をかけようとする。『お前たち、生きていたのか』と……。

次の瞬間、手は空を切り脱力感とともに目が覚める。震災後の半年間、よく見ていた夢の内容です。夢の中の3人は、私が教員生活で初めて中学校の3年間を持ち上がって担任した学年の生徒であり、3月12日は卒業式の予定でした。しかし、津波によって尊い命を失ったのです。

本校では、震災以前から総合的な学習の時間の中で防災学習に取り組んでいました。学校だけでなく、階

上地区の方と協力して活動していたようすは、毎日新聞社らが主催する『ほうさい甲子園』において賞をいただくなど、地区内、外から評価されていました。そのような中で起こった東日本大震災で、防災学習の成果はしっかりと表れました。

地震発生時、生徒は近くの椅子で頭部を守るなど、避難行動に素早く移りました。学校での避難所生活が始まると、食事の配給を手伝ったり、掃除を行ったりと、積極的に働きました。また、防災について学習した本校の卒業生たちは、地域の大人に交じって避難所の運営を手伝いました。生徒たちの活躍はまだまだ語り尽くせませんが、本当に素晴らしいものでした。

しかし震災は、翌日の卒業式に控え、当時の3年生が早めに帰宅していたタイミングで発生しており、生徒全員の安否を確認できずにいた中、3月14日、とうとう訃報が耳に入りました。生徒の1人が本校の運動着を着たまま波に打ち上げられていたとのこと。現実を受け入れざるを得ない場面でしたが、信じたくないという思いでいっぱいでした。

3月22日、2人の生徒の行方がわからない中、10日遅れの卒業式を行いました。その後1人の死亡が確認され、もう1人は、未だ不明のままとなっています。

4月21日、例年よりも遅い新年度がスタートしましたが、私は心が晴れぬまま生活をし、冒頭の夢を繰り返し見るようになっていました。本校の特色である防災学習も、震災の経験を踏まえ、改善しながら活動が始まりましたが、私自身は『今行っている活動が、本当に正しいことなのだろうか』といった迷いをもちながら、どこか身が入らないままの取り組みになっていたように思います。

震災から半年が過ぎたころ、ふと宮城教育大学へ行きました。自分の母校であり、学生時代にお世話になった方々と話をしてきました。その中で、先の夢について触れた時、「そうやって亡くなった生徒のことを忘れないでいることが、とても大切なことなのだよ」と話され、はっと気づかされました。

その時まで、私は震災に関する一切のことを『忘れない』とっていました。辛いし、大変だし、嫌な思いばかりです。正直なところ、この文章を執筆している現在でも、当時のこと、3人の生徒のことを思うと胸が痛みます。しかし、この痛みは、彼らが確かに生きていたという証です。だからこそ、過去をなかつたものと捉えず、現実としてしっかり受け止め、彼らのことを決して忘れずに生きていくことが大切なのだと思えるようになりました。

それからは、本校での教育活動はもちろんのこと、気仙沼市教育研究員にもなり、意欲的に防災に関わる教育活動や研究に取り組んできました。そして、いつの頃からか、3人の夢は見なくなっていました。それでも私は、彼らのことは決して忘れないでしょう。震災からこれまでの生活を通して、生徒には、これからの将来を築くための大きな可能性を秘めていることを再認識しました。そして生徒が大人になり、次代のリーダーとなるためには、社会の中でよりよく生きていくための力を養っていくことが大切なのだと思います。生命を守るための防災教育を始め、日常の授業や部活動指導など、さまざまな活動を通して生徒の力を伸ばしていけるよう、日々努力していきたいと思っています。



震災後の職員室風景

5 おわりに

『未来の防災戦士の育成』をテーマに平成17年度から取り組んできた「防災教育」が東日本大震災時、在校生や卒業生たち一人ひとりの体と心に染みつき、避難所運営やボランティア活動などにおいてその成果が発揮された。地域の方々からも当時の階中生及び卒業生たちの行動を高く評価されるとともに、これらの取組を地域にも取り入れていくことになりました。“階上地区防災教育推進委員会”の立ち上げです。地域の自治会や振興協議会、小学校や保育所など地域が一体になった防災教育活動です。この取組は、宮城県が推進している地域連携型の教育活動、いわゆる階上小学校在籍の防災主幹をコーディネーターとし、防災教育を核に据えた協働教育プラットフォーム事業へと発展できるものと考えます。

また、震災後、あらゆる方面から御支援いただいたことに感謝するとともに、今回の震災で学んだことをベースにブラッシュアップした「階上中防災教育」を役立てて欲しいという願いのもと、全国に発信して

います。平成25年度においては、「青森県階上中学校との交流」、「鎌倉ジュニア防災フォーラム」、「第2回階中生を神戸に招こう」、「全国生徒会サミット」、「岡山市操南中との交流会」に生徒代表が出席し、本校の防災に関する取組について発表するとともに意見交換を行いました。さらに、インドネシアで行われた「防災教育・心のサポート」に関する国際的なワークショップにも日本を代表して参加し、各国の防災教育の在り



インドネシアで行われたワークショップ

方を学ぶことができました。今後も気仙沼市のESDにおけるユネスコスクールの一員として、『未来の防災戦士の育成』をテーマに防災教育を継続的に実施していきたいと考えています。

最後に今回、階上中のページに執筆を依頼したところ、快くお引き受けいただいた方々を紹介いたします。

執筆者プロフィール

①柏 岳斗 氏（第66代生徒会長）

震災当時、本校体育館に避難していた彼が、当時の生徒会長である梶原裕太君の答辞「苦境にあっても天を恨まず、これからは生かされた者がみんなで力を合わせて助け合うことです。」を聞き、心に刻み入学。そして生徒会長を務め震災後の生徒会活動を牽引したことから、その思いをここに寄せてほしく、原稿を依頼しました。

②近藤 公人 氏（階上中学校同窓会長）

震災時は、三陸新報社編集局長を務めており、当時の生々しい状況取材するとともに復興に向けての取組などについて紙面を通して訴えてきました。当地区の震災時の状況を風化させないためにも今一度筆を執っていただきました。

③熊谷 信弘 氏（元階上中学校男子卓球部コーチ）

震災直後の平成23年度秋の県新人卓球大会男子団体で見事優勝を果たした時の外部コーチです。震災後、体育館や校舎が避難者へ開放しながら学校再開をしましたが、練習環境は最悪でした。しかし、選手、コーチ、顧問が一丸なり取り組んだ末につかんだ勝利は、卓球界に一石を投じました。熊谷さんには、その当時の取組と指導者の思いについて書いていただきたく執筆を依頼しました。

④戸羽 康幸 教諭（震災当時から本校に勤務）

本校6年目になる戸羽教諭は、震災前の防災教育から携わり本校で震災を経験。震災直後からの被災者への対応は勿論のこと、生徒の安否確認や学校再開に向けて尽力したこと、そして復興への思いを執筆してほしく依頼しました。



津波にも残った横綱秀ノ山像



「みどりの真珠」が 美しい輝きを取り戻すために

校長 菅原 裕

1 はじめに

(1) 本校の位置

大島は、三陸復興国立公園の南端に位置し、東西約1km、南北約7.8km、周囲約22kmの気仙沼湾に浮かぶ離島である。東部から南部にかけて太平洋に面し、南部には名勝「龍舞崎」、東海岸には「小田の浜海水浴場（日本快水浴百選特選）・海中公園」や鳴り砂の「十八鳴浜（国指定天然記念物）」、北部には標高235mの「亀山」があり、大島瀬戸を隔てて唐桑半島に面している。

(2) 震災時の被害

東日本大震災では最大20mともいわれる大津波が幾度となく襲来し、4つの集落が根こそぎさらわれる甚大な被害を受けた。ライフラインと通信手段は断裂し、島と市街地を結ぶ客船、フェリーも大方被災したことにより航行不能となり、以後5日間に渡り、島は完全に孤立状態となった。島民約600人が大島小学校の体育館に避難した。その後、3日目には、対岸から漂着した燃焼物が亀山の山林に飛び火して燃え出し、亀山付近の三つの集落の住民も本校体育館に一時避難した。懸命の消火作業により、夕方には、火の手は小康状態となったが、くすぶり続けていた炎が5日目、再び勢いを増し、内湾浦の浜まで迫り、全島民避難命令も噂される緊迫した状況に陥ったが、全島民による決死の消火作業で、ようやく鎮火することができた。島全体の、家屋被害（住家のみ）は全壊・流失312棟、大規模半壊87棟、半壊68棟、一部破損272棟、犠牲・不明者は31名であった。また、沿岸及び養殖漁業、飲食業、旅館業等に従事する人々は壊滅的な被害を受けた。本校においては、多目的室が天井及び照明器具の破損・落下により使用不能となり、1階から3階までの壁の十数カ所に亀裂が入った。また、コンピュータールームのホワイトボードが落下し、図書室の書籍もほとんどが落下・散乱した。さらに、特別教室等の教材・教具についても相当数破損・散乱した。生徒については全員無事であったものの、大規模半壊以上の被災世帯が13世帯、家族が犠牲となった生徒は5名いた。職員についてもほぼ全員の自家用車が流され、3名の住まいが被災した。

(3) 震災後の支援と生徒の活動

被災直後から、生徒は避難所で大切な働き手となり、互いに励まし合いながら、子守や避難所の世話、炊き出しの手伝いなど、仕事を見つけては懸命に働いた。汽船の航行が回復すると、日本中、時には海外からの励ましや支援が日を追うごとに多くなり、生徒はその温かな心遣いに触れながら、「感謝の気持ち」を育み、その支援、応援に応えようと「チーム大島 心をひとつにプロジェクト」を立ち上げた。

生徒会が中心となって礼状を作成したり、地域の復旧、復興に役立つ作業に取り組み、その年の3月には「逆境をバネに震災体験を学びに替えて頑張ろう」「震災を風化させずに語り継ごう」とモニュメント（石碑 絆 心をひとつに）を校地内に設置した。学校再開後、「自分たちの頑張りで地域に笑顔と元気を」をコンセプトに掲げ、地域への貢献活動として小田の浜・浦の浜の清掃活動を行い、また、運動会、中学校総合体育大会、文化祭などに明るく前



向きに取り組み、「つばきマラソン」や「大島地区民運動会」などの地域を挙げた行事に島民の一員として参加するなど、地域振興に貢献する生徒の姿は地域に笑顔と活力を与えてきた。

また、被災後の支援が縁で始まった目黒区の東山中学校との相互交流活動、群馬県沼田市沼田南中学校や京都府福知山市の久野中学校との交流活動は、本校生徒にとって、コミュニケーション能力や表現力を育む機会でもあり、地域を知り、地域を愛する心の育成に繋がっている。

本校の特色ある教育活動である自校筏によるホタテ養殖体験学習も、震災で流された筏が、各方面からの支援により、昨年再建し活動が再開された。震災後、本校には数百に及ぶ学校や諸団体から応援や支援が寄せられている。大島全体には2万人以上のボランティアが全国から駆けつけている。応援や支援は現在も続いており、支え合いの輪や絆が広がっている。



2 子どもたちからのメッセージ

ここから私は

3年 小松 希衣

「震災で辛かったことを、プラスにとらえ、前向きに生きましょう。」「辛いのは、あなただけではありません。しかし、みんながあなたを応援しています。」みんなが、本当にそう思っているのでしょうか。気仙沼に住む私たちは、辛かったことをプラスに考えられるようになったかと思っていますのでしょうか。少なくとも私は違います。震災から2年半、たったそれだけの時間でプラスに考えられるほど、私は強くありません。それでも、多くの方は、「強く生きろ。」「復興支援をしてくださる方々に応えなさい。」「私たちの経験を残していきましょう。」と言います。命令をされているような気分になり、正直なところ、そのような言葉を聞くだけで、心が掻きむしられるような苦痛を感じました。

震度7ともいわれる大きな揺れ。体育館にいた私は、体育館が崩れてしまうのではないかと思い、恐怖を感じました。あの時ほど、両親のことを考えた時間はありません。深夜になり、家族が避難所にきました。その時の安心感は、今でも忘れられません。ところが、それをつかの間、そこから過酷な状況が待っていました。毛布一枚で2、3人が身を寄せ合い寒さをしのがなければならない。

足を伸ばすスペースはなく、一睡も出来ない。私の心の最も大きな傷となったのは、母から聞いた言葉です。「家は津波で流されてしまった。」夜が明け、自宅があった場所に行ってみました。何もない。思い出の品々は何もなくなっていました。小学校の時にもらった様々な賞状、大切な友達からもらった私の宝物。私の成長を記録していたアルバム。何も残っていません。かろうじて、一、二枚の写真を見つけました。それだけでとてもうれしいと感じました。その時の私は悲しいという感情はありませんでした。あまりにも非現実的すぎて、理解することができなかったのだと思います。

私は、昨年支援で、ハワイに行きました。印象に残っているのは、ワイキキのビーチです。世界トップクラスの美しい海。自然を大切にし、自然と寄り添うような場所でした。

多くの友達もできました。

「海、私が住む大島の海もこんな風にきれいだったなあ。でも、今は……。」

そのとき「ハワイの海はとてもきれいで、自慢の海です。」そこで知り合った現地の人の言葉が突然耳に入ってきました。そして、「あなたの住む町の海と、この海はつながっています。世界中の海はつながっています。海を怖がらないでください。」と続く言葉に涙が出ました。悲しいという感情が戻ってきました。帰国して自分の住む大島の海を改めて見ました。島内にははがれきがたくさん残っていましたが、海は穏やかな波をよせていました。この海は、美しかったハワイの海とつながっている、心からそう思える自分がそ



ここにいました。

私の友達も家を流され「自分の家に帰りたい。元の家に戻りたい。」と私に言いました。同じ感情をもった友達も気仙沼にはたくさんいます。震災をプラスに考えることはまだできません。しかし、全国各地から温かい支援と励ましを受け、未来に向かって頑張ってきた自分が今ここにいます。悲しいという感情とともに、震災の記憶とこの先一生付き合っていく覚悟はできてきたと思います。そして、震災の体験をプラスに考えることができるようになる日も、そう遠い日ではないかもしれません。

3 支援者からのメッセージ

中学生と大島の未来を考えるプロジェクトを通して

私たちは、大学で建築や都市計画を学ぶ学生で、現在大島のまちづくりのお手伝いとして、月に1回ほど大島に来ています。今回、中学生と一緒に大島中学校の「総合Ⅰ」の授業『大島の未来予想図』に関する調査、議論、制作に携わらせていただくことになり、約2か月間にわたってお手伝いさせていただきました。この授業と一緒に取り組む中で、大島への熱い思い・深い考え・明るい未来像を持って取り組んでいる中学生の姿を見て、私たちも学ぶことの多い2か月となりました。

神戸大学 磯谷 二郎



□未来を考える前に過去・現在を見つめ直す

未来予想図を考える前に、中学生と、大島の良いところを見つける話し合いや現地調査をグループに分かれて行いました。まだ誰にも教えていない自分だけの絶景ポイントや震災前に乗った亀山リフトの気持ち良さなど、過去・現在の大島の良いところを見つめ直した上で、大島の未来に残したいものを考えました。最初は、「未来予想図=新しいもの」という発想になりがちでしたが、話し合うにつれて、大島の今までの魅力をより良くするための議論に変わり、個々の中学生が漠然と抱いていた大島の良いところが確かなものになったのではないかと、思います。



□大島をもっと楽しむためのアイデアを考える

大島の良いところを再確認した上で、大島の良さをさらに体感できるアイデアをみんなで出し合いました。緑の真珠と謳われる大島の自然を楽しむために亀山全体をアスレチックにしようとか、太平洋を眺めることのできる龍舞崎に高齢者でも楽しめるようにトロッコを走らせようなど面白いアイデアがたくさん出てきて、私たちも中学生の柔軟な発想に驚かされ、真剣に大島の未来を考えて笑顔で話し合っている姿は、2か月間の中で、とても印象的でした。

□自ら考えたことを相手にうまく伝える

文化祭で「総合Ⅰ」の授業のまとめを発表するにあたって、たくさん浮かんだアイデアをどうすれば相手に伝わるか表現の方法についても、話し合いを何度もしました。その結果、模型を作ってイメージしてもらったり、パンフレットを作って配るなど様々な工夫をしました。相手の気持ちを考えてどのように感じるかを想像しながら発表することで、伝えることの難しさ、共感を得た時の感動を味わえたのではないかと、思います。

□総合Ⅰ「大島の未来予想図」に参加して

総合Ⅰの授業を通して、中学生の皆さんは大島のことをより好きになったと思います。私たちも大島のことごとく好きになりました。これで終わりではなく「大島の未来予想図」を常に描き、大島の次世代を担う中学生の皆さんで未来予想図が実現していることを楽しみにしています。

4 教職員からのメッセージ

一步一步

現在の中学生は、震災時は小学生で、直後の夜は多くの児童が大島小学校体育館で小学校教師の周りで、肩を寄せ合い過ごしていた姿を思い出す。ライフラインが完全に普及するまで時間がかかっていた大島にあって、当時の中学生は地域の大人や支援にあたってくれた方々と共に避難所の炊き出しや清掃など学校の枠を超え、まさに地域の一員として地域の復興に取り組んでいる中で学校が再開した。

中学生は自分たちにできることは何かを考えながら学校生活を送っていた。小中が合同で行う運動会は、地域の大きなイベントである。そこで生徒たちは、島内の住民はもちろんボランティアで訪れている方々に元気と勇気を伝えたいと、準備から運営まで児童・生徒一丸となり取り組んだ。

当日はボランティアの方々がリレーや綱引きに飛び入り参加するなど、今までにないほどの人が集まった。そして、フィナーレを飾った大島ソーランでは力強い踊りと児童・生徒たちの元気あふれる声が大島内に響き渡った。児童・生徒たちのやり遂げた後の自信に満ちあふれた表情と会場に訪れていた人たちの、笑顔や涙が印象に残っている。

震災直後から中学校には国内外問わずたくさんの支援の手が差しのべられた。そこで生徒会は、「心をひとつにプロジェクト」を立ち上げ、感謝の気持ちを伝えるとともに、復興に向けて自分たちが元気に取り組んでいる姿を発信した。震災の体験を後世に伝えるために石碑を建て、総合的な学習の時間をとおしてハザードマップづくりや大島周辺の海洋生物調査に取り組んだ。また、大島中学校のホタテ筏は流出してしましたが、ホタテ支援員の方々の呼び掛けによりいち早く、筏を再生していただき、ホタテ養殖体験が再開した。大島の再生を目指し、ボランティアと協力しながらガレキ撤去や修学旅行、体験学習で訪れた中学生とともに浜辺の清掃活動をし、島の観光資源でもある海水浴場の再開にも取り組んだ。生徒は震災前は比較的人とかかわる機会は多くない環境にあったが、支援を受けての国内外へのホームステイや訪問による交流活動などさまざまな人と関わりをもつことができた。このような経験を通して、支援への感謝のみならず、自分たちの暮らす大島への思いをより一層確認することができたのではないかと感じている。

そして、今年度は生徒は今までの活動を通して身に付けたことを基に、新たな形で支援への恩返しを行っている。それは、多くの人々の思いと協力で復興を遂げている「ふるさと大島」を自分たちで創造していきたい、という思いを総合的な学習の時間に「大島未来予想図」として表現した。この学習には、都市開発などの建築関係を専門とする大学教授と大学院生で組織する大島みらいチームの協力を得ながら、自分たちが知っている大島のよさを見つめ直し、その魅力を各地域に発信して、たくさんの人に大島を知ってもらい、来島してもらいたいという願いがあった。

生徒たちは、3コースに分かれ観光スポットを見所マップとして紹介、観光体験コースを提案したり、観光名所の環境整備など真剣に大島の未来を考え、学習に取り組んだ。この活動でもまた、さまざまな人々との出会いで生徒が成長することができた。

伊豆大島の災害のニュースを知った直後のこと、生徒会長の呼び掛けで生徒会が募金活動に真っ先に取り

教諭 菊地 俊輔



組んだ。伊豆大島にある中学校とは震災後の支援や離島甲子園でのつながりなど交流があったが、生徒たちは「困ったときはお互い様」という思いを、すぐに行動に移すことができたのである。

生徒たちの活動はPTAにも広がった。震災後から生徒たちが共に学校生活を過ごし、被災地の支援で出会った人との絆【友愛】、そして自分たちができる復旧、復興への取組を通して得た経験【創造】を、これからの大島に生かしていこうとする姿【前進】には、本当にたくましさを実感している。大島中学校の生徒は今まで身に付けてきた感謝力を原動力として、これから社会を担っていってくれることを期待している。



5 おわりに

震災から2年8か月が過ぎた。現在は、ほぼ震災前の教育活動ができるようになったものの、校庭には今だ仮設住宅が立ち並び、校舎の壁には震災の爪痕としての亀裂が残っている。生徒たちの心に刻み込まれた忘れられない光景、悲しみの記憶は決して消えるものではない。しかし、辛い経験を乗り越えようと共に励まし合い、たくさんの支援に「感謝の心」を育み、自分たちの頑張りを前進の力に変えて、将来に向けて着実な一步を踏み出してきている。東京チャリティーマラソンへの参加、エコキャップ運動、伊豆大島の台風被害への主体的な募金活動など、支援を受けるだけでなく、震災からの学びを自分たちで発信しようとする取組が今年からスタートした。島民に向けて未来の大島の夢と希望を発信した「大島未来予想図」の取組は、未来に生きる生徒たちの着実な前進である。震災後、様々な支援を受けながら多くの人たちと関わり、温かさにふれ、感謝の心を学んだ「友愛」の精神。自分たちができる復旧、復興への取組や、未来の大島をデザインし、地域に発信した「創造」の精神。そして、困難を乗り越えながら、未来に向かって着実に進もうとする「前進」の精神。これは、まさに本校の教育目標「創造」「友愛」「前進」が目指す生徒の姿である。

本校教育目標は、郷土の詩人水上不二が昭和31年に作詞した本校校歌の中の言葉の一部を取って制定された。この3つの指針は、戦後の復興期から約半世紀の時を超えて、復興の担い手として「力強く生き抜く」生徒の育成を私たちに託したメッセージであるとも受け止められる。水上不二が作品の中で太平洋に浮かぶ「みどりの真珠」と讃えた大島が美しい輝きを取り戻すことができるように、地域の復興を担うたくましい人材育成に尽力していきたい。





「拓け 新しき世紀」

校長 熊谷 利治

1 はじめに

(1) 本校の位置

本校は学区内を国道45号線が通り、大川と神山川に挟まれたかつての田園地帯である。震災によって市街東部沿岸地域が壊滅的な被害を受けたため、本校がある西地区に事務所や商店等が移り、市内で最も往来の激しい地域となっている。保護者の職業は多様で学校教育に対する関心は高く、父母教師会の活動にも積極的に協力していただいている。

(2) 震災時の被害

蛍光灯が落ち、壁には多数のひび割れができた。壁も落ちた。さらに、大津波は海から2 km以上離れている本校の校庭にまで押し寄せた。幸い校舎の中に水は入らなかったものの、周囲の道路は1 m以上冠水し、水が引いた後もがれきや汚泥で容易に通行できない状況だった。生徒は全員無事であった。しかし、家族が犠牲になった生徒が数名いた。震災当初、自宅が壊れたり、自宅が浸水して住めなかったりした生徒は全体の約30%であった。校舎は地盤沈下が進み、コンクリートが宙に浮いている場所も多数見られた。学校周辺の道路は、比較的早い時期に車が通れるくらいの撤去が進んだ。しかし、異臭が漂っていた。



(3) 震災後の影響

本校生徒は九条小学校と南気仙沼小学校から入学してきたが、震災により南気仙沼小学校区が大きな被害を受け、気仙沼小学校と南気仙沼小学校が統合された後は、旧南気仙沼小学校区から入学してくる生徒は激減した。そのため、平成24年度は特別支援学級を含めて12学級であったが、平成25年度は9学級となり、教職員も6名減となっている。未だ20名弱の生徒が仮設住宅や学区外から通学しており、登下校に係る保護者の負担は大きい。震災の影響で心のケアを必要とする生徒は減少傾向にあるが、影響の個人差は大きくなってきており、引き続き家庭環境に十分に配慮しながら、個々の生徒に対応していく必要がある。

また、地盤沈下も起きており、校庭の標高はわずか3.3mである。学校周辺は大雨の度に冠水し、校門付近の道路は場合によっては50cm以上の冠水に見舞われる。今年度も本校体育館を地域の避難所として開設することが3回あった。

2 子どもたちからのメッセージ

生徒会執行部として

震災から2年半が経ち、条南中学校の生徒会が取り組んでいることの一つとして、神戸への訪問があります。これはNPO法人SEEDS ASIAさんからご協力をいただき、阪神・淡路大震災から復興した神戸へ学校の代表として参加するものです。

この訪問では、阪神・淡路大震災のメモリアルイベントへの参加、長田区の商店街の訪問や「人と防災未来センター」に行くなど、神戸の復興をたくさん見てくることができました。特にメモリアルイベントでは、東日本大震災で被災した地域でも、このようなメモリアルイベントを神戸市などと同じように10年以上続けてほしいと思いました。神戸への訪問で交流をした方々とは、また交流が続いているところもあり、これからもこの交流が続いていけたらいいなと思います。

他にも取り組んでいることとして、今年度から新しく復興委員会という委員会を設立しました。今まで支援をいただいた方への感謝の気持ちのお礼状を書いたり、全校生徒に支援のメッセージを紹介していたのは執行部でした。しかし感謝の気持ちを伝えたい、そして条南中学校から元気を発信していきたいと思いをもっている生徒がもっと復興活動へ参加できるようにと考え、復興委員会を設立しました。これからは復興委員会が条南中の復興の中心として進んでいくと思います。気仙沼がさらに復興・活性化することに条南中学校がもっと関わってほしいと思います。

3年 C・S



生徒会復興委員として

私は6年生のときに東日本大震災を経験しました。ものすごく大きな地震でみんなびっくりしていました。ニュースで津波が来ていることを知り、私は家には帰らず家族で気仙沼高校に避難することになり、避難所生活が始まりました。その日は雪が降り、とても寒く、そして電気もつかないという最悪な状況でした。「海が燃えている」や「気仙沼も終わった」などと周りの人が言っていて本当に怖かったです。家に帰りたくても町は浸水していて、身動きがとれませんでした。家に帰ることができても家には魚がいて、家族の思い出の物は水没し、涙があふれてきました。そんな中、4月に私はこの条南中学校に入学しました。私はとても楽しみにしていました。学生服を着て避難所から登校する気持ちは複雑でしたが、久しぶりに友達に会えるわくわく感でいっぱいでした。楽しい日々が続き、町も少しずつ復興していき、不安がなくなっていきました。仮設住宅に住むことが決まったときはとても嬉しかったです。

3年生になり、私は復興委員会に入りました。入った理由は自分たちも何か復興のために力になりたいと思ったからです。そして、それを実行するために委員長にもなりました。復興委員会は今までにひまわりの植ええや七夕、復興教室の製作、東京の方とのイベントなどたくさんの活動に取り組んできました。仮設住宅で行った東北復興支援では東京の方と一緒に無料で焼きそばやかき氷などを提供しました。仮設住宅の方に喜んでいただきとてもうれしく思いました。もっとこういう機会をこれからも続けていき、少しでも地域の方に元気になってもらいたいと思いました。また、復興教室の製作では、教室をペンキでぬり、これまでにいただいた絵やこいのぼりや、これまで活動してきた記録などの掲示を行いました。この教室で仮設の方と交流をしていくとともに、学校にいらっしゃるお客さんに見てもらいたいと思っています。

最後に私たち復興委員会は地域の人、仮設住宅の人達と楽しみたいと思っています。私は中学生ができることは全力でやっていきたいし、それが少しでも地域の復興につながっていけばいいと思います。

3年 M・K

3 支援者の方からのメッセージ

NPO 法人 SEEDS ASIA 栗原 誠

SEEDS ASIA は、仮設住宅や被災した地域のコミュニティづくりや、気仙沼市教育委員会・教育研究員とともに、ESD と防災教育の研究に取り組んでいる神戸の NPO です。条南中学校とのお付き合いは、2012年1月の神戸の阪神・淡路大震災メモリアルイベントに生徒・先生をお招きした時から始まりました。自衛隊の基地として復興と再生の最前線で機能していた条南中学校。基地はやがて仮設住宅へ変わり、多感な年代に余りにも多くの変化が起こりました。阪神・淡路大震災の被災地、神戸でも、様々な変化があり、そして復興に向かっていきます。神戸の復興の様子を見聞きする中で、気仙沼の復興のためにできることは何か、少しでもつかむきっかけになればという想いで神戸視察を企画しました。



そして今年、2度目の神戸視察を行いました。同行した生徒の皆さんは復興委員会を立ち上げました。「自分たちにできること」をテーマに我々や先生方と一緒に考えて、そして行動してきました。復興教室作りでは皆ペンキだらけになって大騒ぎでした。考え行動する。それこそが復興なのだとは私と考えます。

3年生の総合的な学習の時間「共生」では、NPO、NGO とは何か？支援とは何かを学び、実践しました。仮設住宅へのイベントには気仙沼復興協会福祉部さんが、地域を調べる授業では地元商店会の会長さんが、たくさんの方々の積極的な協力があって授業は内容の濃いものになっていきました。地域の方々の中学生への期待は大きいのです。

昨年に続き私が関った演劇の授業では「導き地蔵」を生徒たちは選びました。津波のお話ですから難しいテーマです。しかし、津波をテーマにした物語を選んだ生徒たちの心には、無意識かも知れないけれど、それを「乗り越えよう！乗り越えたい！」という欲求があったのだということを私は稽古を通して知ることができました。かなりレベルの高い演技と心構えを求めましたが、皆必死でついて来てくれました。文化祭本番での拍手は、生徒たちの必死さが観客の心を動かした結果です。活き活きと演じる生徒たちは、いつの間にか少しだけ大人になっていました。



これから先、仮設住宅から災害公営住宅等に移行していきます。また一からコミュニティづくりをしていかねばなりません。この時、中学生の皆さんのできることは決して小さな力ではありません。中学生の若い力が大人を動かし、社会を動かし、地域を蘇らせる原動力になると信じています。

4 教職員からのメッセージ

防災主任教諭 I・K

2011年3月11日金曜日、14時46分。次の日に予定されていた卒業式の準備も終わり、生徒は体育館から教室へ移動し、6名の女子生徒が掃除道具などの片付けを行っていたその時でした。激しい揺れが起こり、生徒たちは悲鳴を上げました。体育館にいる教員は私一人。条南中勤務2年目の私は、総合的な学習の時間で2年間防災コースを担当し、いろいろな場所で地震が起きた際の避難の仕方について生徒たちと学習していたため、すぐに生徒を体育館中央付近の照明等が落ちてこない場所に誘導し様子をうかがいました。しかし、揺れは収まる気配もなく、照明の揺れ方もいつ落ちてきてもおかしくないぐらい激しく揺れていました。依然、激しい揺れは続いていましたが、少しだけ揺れが小さくなったときに、体育館から外へ生徒を避難させました。その後も激しい揺れは続き、外から見た校舎はひねり崩れるのかと思うぐらいでした。その後、揺れは収まり、生徒が校庭へ避難してきました。恐怖のため泣いている生徒も多くいました。生徒の身の安全を確認した後、雪を避けて体育館へ移動しましたが、余震のためまた校庭へ。さらに、大津波警報発令。校

庭まで津波が入り、周りの道路にも津波が来たため、条南中は孤島のように became. その後、校舎西側の方から水が引き始め、迎えに来た保護者には生徒を渡しましたが、体育館で夜が明けるまで過ごした生徒もいました。その後本校は避難所になったため、そのまましばらく過ごしていた生徒もいました。そんな心細い中、東京消防庁が救助に来ました。次の日、条南中が大分県から2日間走り続けて到着した自衛隊の基地になり、その活躍ぶりを目の当たりにしました。あの行動に、心細かった私たちが、どれだけの勇気ももらったことか。そして、いろいろな人たちの力を借りて、復興に向けて一步一步前進してきました。



今年、条南中5年目の私は防災主任となり、震災当時の条南中を知る先生方も5人になってしまいました。また昨年2012年12月7日に起きた地震による津波警報で、条南中付近は高台へ逃げようとする大量の車で身動きがとれなくなりました。当時を知る人間として、その経験から必要だと感じる取組があります。それは、いつ起こるか分からない地震に対応する力を付けることです。通学途中や休み時間、部活動中など、いろいろな場所、いろいろな時間帯で、どのような対応をするかを考えるだけでも効果は出ると思います。本校は、震災当時に校庭まで津波が来ているので、津波警報が出た際の避難経路の確認も必要です。また、応急手当の仕方やAEDの使い方、非常食作り体験など、少しでも経験しているだけで非常時には大いに役立つものと考えています。それらを体験させるために、現在本校では、総合的な学習の時間や避難訓練等において、様々な状況を想定しての訓練や学習に取り組んでいます。そして、その体験や今まで復興のために励んでくれた自衛隊等の行動を思い出し、生徒たちにはお互いに助け合いながら生きていけるようになってほしいと思っています。そして、いろいろな体験からマニュアルにとらわれず自ら考え、判断できる人間に育ってほしいと願っています。

5 おわりに

4月、私は生徒会の心のこもった歓迎のメールを受け本校に赴任した。響き渡る生徒の声と、見守る先生方の優しい眼差しに感激し、故郷の町をとても愛おしく感じた。震災後3年を迎える今でも、辛い思いをしている生徒がいる。しかし一方では、困難を乗り越え、前に歩き出そうとしている生徒もたくさんいる。この町には人の役に立つことを喜び、未来の気仙沼に思いを馳せる若者が育ちつつある。

「我ら拓く 新しき世紀」

これは本校校歌の結びである。先生方の英知を集結し、地域の方々や関係諸機関の方々のお力をお借りしながら、新しい気仙沼、そしてすばらしい宮城を築く志の高い若者の育成を目指し、条南旋風を巻き起こしていきたい。





「真の復興を目指して」 ～教育による日本人の心の継承～

校長 佐藤 敏典

1 はじめに

(1) 本校の位置

本校は、気仙沼市中部にあり、最短の海から直線で約1,200m、高度約24mの丘陵部に位置する。市街地の南進による人口流出で宅地が多く造成された平成20年4月に気仙沼市の行政地域の一つとして独立した。

平成2年に開校し、今年度で24年目を迎える。平成20年頃までは世帯数が増加傾向にあり、それと共に生徒数も増加してきたが、他地域の少子化同様、本校の生徒数もやや右肩下がりである。

東日本大震災では、自宅の流失や損壊、浸水等の被害を受けたほか、保護者が失職した家庭も多い。



校庭より見た本校校舎

(2) 震災時の被害

①震災時の状況

卒業式を翌日に控え、3年生は午前中で下校。1、2年生が午後会場準備を進めていたその時、午後2時46分、マグニチュード9、震度6弱の巨大地震に見舞われた。

防災無線からは大津波警報が流れ、下校途中の生徒が戻り、面瀬小学校の教職員や児童、地域住民の方々も次々と校庭に避難してきた。

気温が低下し雪が降り、余震が何度も繰り返された。津波の高さが10メートルを超えるとの情報もあり、校庭までも津波が達する恐れがあると考え、校舎2階を2次避難場所と決め、避難者を2階の多目的室に移動させた。

震災直後、教職員は、避難する生徒の安全確保のため対応すると共に、自家用車で避難してくる住民の方々の車の誘導にもあたった。また、津波で溺れたり、けがを負った人も避難してきており、けが人の搬送を手伝ったり、保健室でけが人の応急処置などを行った。

②学校の被災状況

学校は、津波による直接の被害はなかったが、地震により、体育館の窓ガラス1枚、家庭科室の食器類が多数破損した。また、コンピュータ室のエアコンの落下、屋上の給湯施設からの漏水、廊下の壁の多数の亀裂、エレベーター棟の連結部分の破損、駐車場の陥没と亀裂などの多くの被害があった。

③地域の被災状況

尾崎地区のほとんどの家屋が流出し壊滅状態となった。また、千岩田地区と下沢地区も家屋の流出、半壊などが多く見られ、被害は甚大であった。学校はじめ地区一帯が停電、断水となった。

(3) 震災後の影響

保護者を含めた地域住民の方々や急きょ避難してきた方々のため、避難所として体育館を開放解放した。それにより、保健体育の実技授業ができなくなったり、卒業式ができなくなったりする



校庭に設置された仮設住宅

など、活動が制限された。また、4月から校庭全面に仮設住宅が建設され、校庭での活動も全くできない状況で新学期を迎えた。保健体育と部活動の活動場所は、近くの空き地を借用したり面瀬小学校に依頼し使用させていただいた。

しかし、十分に活動ができないことから体力の低下が見られるようになった。また、運動をはじめ、すべての活動が制限されたことから、精神的に抑制され、学習態度や生活態度に悪影響を与えるようになった。

さらに、活動の制限により、教育課程を多少変更せざるを得なかったと同時に、小学校の校庭を使用させていただいたことから、小学校の活動や教育課程にも影響を及ぼした。

生徒個人では、自宅流失等のため学区外に居住し、通学する生徒がでてきたり、仮設住宅に居住する生徒がいるなど、通学や生活に支障をきたす生徒が多数いた。



文化祭郷土芸能

2 子どもたちからのメッセージ

(1) 中学生代表者サミットから（面瀬中学校生徒会からの学校紹介資料）

話題提供資料

気仙沼市立面瀬中学校

テーマ 『よりよい未来へ向けて 今私たちができること』
～震災からの学びを生かした活気ある生徒会活動を目指して～

1 学校紹介

面瀬中学校の全校生徒は、225名（1学年83名、2学年72名、3学年70名）です。

本校では「**㊦**思いやりのある心豊かな生徒」「**㊧**問題を見つけ自ら学ぶ生徒」「**㊨**積極的に体を鍛える逞しい生徒」を目指す生徒像として掲げ、私たちはそこに一歩でも近づけるように互いに努力を重ねています。

震災後、校庭には仮設住宅が建ち並んでいます。しかし、小学校の校庭をお借りすることができ、保健体育の授業や部活動を続けることができます。感謝の気持ちを忘れず、日々の体力の向上に努めていきたいと思えます。また、近々、仮設の校庭が造られることになり、楽しみにしています。



今年度生徒会テーマ

今年度は、昨年度以上に学校生活を充

実させるために、生徒会テーマを「疾走～更なる道を切り拓け」としました。今までの活動に満足せず、全校生徒が目標に向かって一つになり、全力で道を切り拓いていこうという思いが込められています。

2 各校の震災関連の生徒会活動、学校の取組の紹介

(1) 実践例1 面瀬中住宅交流

5月、6月に1、2年生が面瀬中住宅交流会を行いました。面瀬中住宅で暮らす方々との交流を深め、人とかかわり合い方や、その大切さを学び、社会的な役割への理解を深めることが目的でした。

面瀬中住宅の周りの草取り、ゴミ拾いやお茶会などを行い、おじいさん、おばあさん方から震災の時のお話や現在の生活についてお話をいただきました。その中で、住民同士で情報交換をしながら、身体が不自由な人には、住民全員でサポートしていることを知りました。

今回の活動を通して、人とのつながりの大切さや、地域のかかわりの大切さを学びました。そして、私たち中学生ができることを考え、実践していきたいと思えました。今後も面瀬中住宅の方々との交流を続けていきたいと考えています。



仮設住宅の方々との交流

(2) 実践例2 絆・仲間

震災後にたくさんの支援を頂いた中学校との交流が今でも続いています。

7月22日には、震災のあった年に来校して支援をいただいた、長野県の信州大学附属松本中学校の生徒会の方が再び来校しました。松本中学校の生徒会からは、総合的な学習の時間に役立てたいということで、震災当時についての質問を受けました。また、面瀬中住宅を住民の方に案内していただき、現在の生活の様子をおうかがいするなどして交流しました。

この他にも、新潟県五泉中学校からはチューリップの球根を頂き、春には色鮮やかな花を咲かせました。五泉中学校には、震災後からたくさんのメッセージや支援を頂いています。また、岡山県京山中学校から、バスケットボールやバレーボール、テニスのネット、デジタルカメラを頂きました。

このように支援して下さる方々に対し、私たちはお礼の手紙や生徒の笑顔や花が写っている写真を送りました。今でも支援して下さる方々とのつながりは続いています。今後も感謝の気持ちを伝えながら、交流を続けていきたいと思っています。

(3) 実践例3 あいさつ運動

震災を受け、中学校から地域の方々へ元気を発信できるように、あいさつ運動を続けています。昨年度は生活委員が特定の曜日に校門付近で朝にあいさつ運動を行っていましたが、今年度は、よりあいさつが活発に交わせる学校を目指し、毎朝部活動ごとにあいさつ運動を行っています。その結果、立ち止まってあいさつをする生徒が増え、校内では、さわやかなあいさつが飛び交っています。また、登下校の際に地域の方々にもあいさつができるようになり、地域の方からお褒めの言葉をいただくこともあります。

これからも全校でさわやかなあいさつを交わせる学校にするため、そして面瀬地区をさらに元気にするために、この活動を続けていきたいと思っています。

3 その他

『NEO』(総合型地域スポーツクラブ) との面瀬ふれあい交流会や、みなとまつりの『はまらいんや』への参加などを通して地域の方々との親睦を深めています。

(2) 生徒作文

～一日一日を大切に～

2年 藤本 瑞生

3月11日、14時46分。僕は、小学校の体育館で卒業式の会場作成をしていました。始めは小さかった揺れも徐々に激しさを増していき、立っていることもできないほど強くなりました。

ふと上を見上げると、天井にはものすごい勢いで揺れる照明器具やバスケットボールがありました。

「あれが落ちてきたら・・・」

初めて遭遇した生命の危機に身がすくみ、「死」の恐怖を感じました。そして、揺れが収まり外に出たときに「生きていてよかった」という思いは、今でも鮮明に覚えています。

僕は、震災で学んだことがあります。それは、生きることの難しさです。震災では多くの命が犠牲になりました。人に「死」はつきものですが、誰も死にたいと本気で思っている人はいないと思います。

「いつ死ぬかわからない」「明日死ぬかもしれない」。だから人は、一日一日を大切に、楽しく悔いの残らないように過ごしている、ということを改めて実感しました。

復興にはまだまだ時間がかかります。しかし、人はたくさんの困難を乗り越えて成長していくものです。つまり、乗り越えられない困難はありません。

僕が所属している野球部は、震災の影響で練習場所を失い、思うように練習することができませんでした。しかし、地道な努力によって、地区中総体では、3位という成績を残すことができました。

今、自分の代となり、僕は部長としてチームを引っ張っています。それと同じように、地元の復興も引っ張っていける、そんな存在になり、震災という困難を乗り越えていきたいと思っています。



校舎周辺のランニング

3 保護者からのメッセージ

～教訓 そして、未来へ～

東日本大震災から、二年半の月日が経とうとしています。子どもたちの心は、今も痛みをおっています。その痛みは、成長していく過程の中で忘れることはないでしょう。

先日、面瀬小・中合同で避難訓練が行われました。登校前、自宅で大震災発生、という想定でそれぞれの避難所へ向かい、人数を確認し、津波警報解除後、集団登校をするという訓練でした。初めての試みだったので戸惑いもありました。でも、そんな心配をよそに、子どもたちは、それぞれの避難所を目指して行きました。その間、中学生は小学生の面倒を見ていました。

小学生は、中学生と会えて安心していただけました。普段、このような機会がなかったので、良い体験をさせていただいたと思います。

地区懇談会で、先生方と保護者の方々が集まり、震災をテーマにした話し合いも行われています。お互いの情報交換もしています。その中で感じることは、どの家庭においても、もし、また地震が起きたら……という話し合いが行われていて、震災に対しての意識が高いことが伺えます。

このような出来事があって以来、親としての無力さを感じることがあります。そんな時、子どもたちの笑顔に救われいやされます。これから楽しいことばかりでなくいろいろな場面に遭遇すると思います。この体験をバネにして乗り越えていってほしいと思います。最初に述べたように、心の痛みは忘れることはできませんが、小さくなっていくように、そして、たくさんの笑顔が見られるように応援していきたいと思っています。

保護者 高木 博美



小中合同避難訓練

～震災を乗り越えて～

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、それは日本中にとてつもない影響を与えたと思います。

震災発生時、私は職場におり、家族も家や学校などそれぞれバラバラになりました。震災で混乱している中で電話も繋がらず、家族の安否確認もできない状況でした。夜になってようやく家族全員の無事が確認できた時はホッとしましたが、次の日、家の状態を見た時は愕然としました。

あるはずの家がない。我が家だけでなく私の住んでいた地区全てが何もなくなただガレキの山になっていました。その後に家族に再会することができ、家を失った喪失感と家族に再会した時の安堵と喜びは未だに忘れることができません。

震災後、幸いにも妻の親戚の善意により学区外ではありましたが、市内に一軒家を借りることができ家族全員で住むことができました。そうした震災の混乱期に、子どもたちが小学校を卒業し中学校に入学しました。私自身、震災対応の仕事に忙殺される中、親としてこれまでとはガラッと変わってしまった環境に子どもたちが順応できるかどうかものすごく不安でした。それからしばらくは震災の影響からくるストレス、今後の生活再建に対する不安、思春期に入った子どもたちに対する接し方の変化など様々な事に悩みながらの生活が続きました。そのような中で、学校の先生方はじめ周囲の方々の力によって様々な相談に乗っていただいたり、住宅再建に目途がたつなど前途に希望を見いだすことができました。

今年に入り新しい住居が完成し、再び学区内に引っ越すことができ、私自身一つの区切りがついたかなと思っています。これも自分の力でなく、家族や周囲の方々のお陰であると心から感謝しております。このことを忘れずに、まだまだ完全に復興したとは言い難い地域の復興に尽力していきたいと思っています。また、来年高校受験に挑む子どもたちに対しては、今はまだ自分の将来の姿を想像できないかもしれませんが、どんな道に進むにせよ、高校生活の中で必要最低限の知識（学力だけでなく社会的常識や様々な人との接し方など）を身につけて世の中に出て欲しいと願っています。受験勉強は今まで経験したことがない長いスパンでの学習が必要になり、そこからくる不安やストレスはものすごく大変だとは思いますが、ぜひ乗り越えて、精神的にも一段とたくましく成長して欲しいと心から願っております。

保護者 松本 賢



運動会

4 教職員からのメッセージ

～未来に向かって～

教諭 渡部 一之

2011年3月11日、私は、仙台市にある中学校の体育館で、翌日に控えた卒業式の準備をしていました。準備を始めて間もなく、あの巨大地震が発生しました。はじめはすぐに収まると思い、そのまま仕事を進めました。しかし、なかなか揺れが収まらず、それどころかますます激しくなり、慌てて生徒の上に覆い被さりました。生徒は泣きじゃくっていましたが、私も気が動転していたので何も声を掛けることができず、ただ彼らの身を守ることにしかできませんでした。

ようやく揺れも収まり校庭へ出ました。地面には所々地割れがあり、陥没の恐れもあったことから、教頭先生の指示のもと、安全を確認した後再び体育館へ避難させました。雪もちらつき寒さに凍えるも、インフラがストップし暖が取れない。いったいこの先どうになってしまうのかと先が真っ暗になりました。夕方になると地域住民の方々も避難してきたので、教職員はその対応に追われ、慌ただしく一夜を明かしました。翌日は、救援物資が次々と届いたので、食料には困ることはなくなりましたが、インフラはストップしたままで通常通りに使用できず、不自由な生活を強いられました。しかし、避難所運営をする中で、教職員、生徒、地域住民と連携を図り、それぞれの役割を担い、互いに生きようと必死に行動しました。時に意見の対立はあったものの、協力することが大切であることを確認し合いながら、一致団結し円滑な運営ができました。人間の団結力の底力を見たように思います。

震災後、日本人の他を思いやるすばらしい心が報道され、多くの外国の方々からも賞賛を受けました。

私自身も感動しました。私たちは、この千年に一度といわれた大震災を子どもたちに伝えていかなければなりません。そして、震災があった事実ばかりでなく、それ以上に、すばらしい日本人の心も伝えていかなければなりません。私は、教育者の使命として、未来に向けて子どもたちに伝えていこうと思います。



運動会全校応援

5 おわりに

学校から歩いて15分ほどで尾崎地区にたどり着く。尾崎地区は壊滅状態。今や一軒の民家もない。海水浴もできた砂浜も消え失せ、防波堤も破壊されたまま無残に残っている。尾崎地区にある尾崎漁港には、高さ10メートルにも満たない小高い丘があり、そこには、尾崎神社がひっそりと鎮座する。ほとんど地元の人しか訪れることがない小さな神社だが、津波の時、40名から50名ほどの方が、この神社に避難し難を逃れたと聞く。今では、無残に残った景色を見下ろすかのように佇んでいる。現在では、尾崎地区という名称がなくなり、運動会でも尾崎地区だけテントがなく、寂しい思いである。しかし、尾崎地区の子どもたちは、他の地区や中学校の仮設住宅から通学するなど、不便な生活を送りながらも、逆境に耐え健気に、そして、元気に学校生活を送っている。

震災時、秩序や礼儀を守り、冷静に対処した様子が世界に発信され、多くの外国の方々から日本人の持つ精神について賞賛の言葉をいただいた。「こんなすばらしい日本人を作り上げたのは、我慢や礼節を教えた教育にあると、私は信じて疑わない」「被災した子どもたちは、教育を受ければ、将来きっと、日本や地域のために役立つ人間に育つだろう。」と元台湾総統である李登輝氏がメッセージを残している。我々に課せられた使命は、まさにこのメッセージそのものであると私は思う。単なる知識の伝達や形として見える業績等ばかりでなく、今まで日本人が綿綿と継承してきた目に見えないもの、例えば慈しみ、いたわり、情け、正義、勤勉、正直、親切、誠実、忍耐、感謝、報恩、協力、利他の心等々を、教育によって継承していかなければならない。それが私たちのこれからの使命と考える。真の復興は、そこから始まるのではないだろうか。

今後、このような震災により学んだことが風化され、徐々に忘れ去られるに違いない。しかし、我々は、決して忘れることなく、継承していく努力をしなければならない。将来の気仙沼を、東北、宮城県、そして、日本の将来を築く子どもたちに伝えていくことが、我々教師の使命であると考えている。将来、面瀬地区すべてのテントがそろう運動会を期待してやまない。



「自分に出来ること……」 未来志向への転換

校長 中里 寛

1 はじめに

(1) 本校の位置

本校は市の西部に位置している。本校学区は南北に15km、東西に10kmの長さで、面積は市全体の43%を占めている。北部の月立地区、西部の落合地区、東部の新城地区と学区が広いので、約5分の1の生徒がバス通学をしている。

(2) 震災時の被害

本校学区は海岸線を持たないため、津波による家屋の被災はほとんどなかった。生徒は全員無事保護者の元へ返すことができたが、家族については、父親が死亡した生徒が1名、祖父が死亡した生徒が1名であった。築後13年の校舎への被害は、窓ガラスの破損一か所と壁のひび数か所、そして体育館に数か所の雨漏り程度と軽微であった。



(3) 震災後の影響

被災が軽微だった本校学区内には、大小16カ所の仮設住宅が点在して建ち、最大で約560名が入居していた。本校プール建設予定地にも4棟の仮設住宅が建設された。本校には震災を機に6名の生徒が転入してきたが、その後も転居による転入生徒（主として小学生期に転居した者）が増加傾向にあり、25年度現在では15名に上っている。生徒の中には、地震の恐怖を忘れられない者も多く、現在でも地震が来ると怯えることがあるので、配慮が必要である。

学校施設の被害は少なく、校庭には仮設住宅が建たなかったため、学校教育活動に目立った影響は出ていない。社会体育や文化活動で外部団体が体育館や校庭を借用するケースが増加している。

2 生徒からのメッセージ

あの日……小さなおにぎりから

3年 千葉 康平

はまらいんや、天旗祭、豊富な海の幸。リアスの海。人々の夢があふれた活気ある港町が、波によって希望と夢がのまれて流された。海から恩恵を授かっていた街が、今度は海に裏切られた。東日本大震災。この経験を通じて、この世界に諦めを持った人は数知れず、僕もその中の一人だ。

まるでアフリカの貧困層のような生活……。世界でも裕福な国、日本。7年後にはオリンピックも開かれるこの国が、一瞬にして地獄と化したあの日から、僕は、それまで世界にあると信じていたものが次々と崩壊していくように感じられてならない。「何とかできないか」あの日の記憶とともに、僕が死ぬまで忘れてはならず、考えなければならない責任が僕にはある。僕が実際に体験し、感じたからだ。あの日、泥や瓦礫の中、空腹で不安でいた僕は、不思議なことに、いつかテレビで見たアフリカの砂漠で飢えに苦しむ人々を思い出し、この状況が僕たちだけの問題とは思えなかった。泥かきや水汲み、重労働の後に支援の小さなおにぎりをさらに家族で分け合い食べた。噛みしめると、作ってくれた、届けてくれた方々に感謝した。小さなおにぎりは、何も見えない明日を照らす太陽のように「大丈夫」と希望を感じた。

あれから3年弱過ぎた今、街は一見、大分復興してきたかのように見える。しかし、人々の心は街のように見ただけでは分からない。大切なものを沢山失った心の傷みは日を追うごとに深さを増していくのではないだろうか。あのとき、小さなおにぎりに希望を感じたのは、この苦しみを分かってくれる人がいる、自分たちのことを気にかけてくれる人がいると思えたからだ。太陽は、どの国にも分けへだてなくある財産だ。暖かさや光を与えてくれる。見上げるといつもそこにある。僕は、人知れず苦しんでいる人、独りぼっちで忘れられているような孤独を感じている人の心を温かく照らす太陽のようにありたい。被災した僕は、今震災があったことを忘れる時の方が多くほど幸せに暮らしている。だが、僕の生活が、あらゆる方々のお陰で成り立っていることを実感したのは、皮肉にもあの震災があったからだ。

僕はまだ自分のことで精一杯で、誰かを支援する、助けることはできない。でも、この震災で助けてくれた人、心を寄せてくれた人、悲しい思いをしていた人、苦しみから抜け出せないでいる人の存在を忘れないでいることが出来る。この地に限らず、僕たちと同じような、いや、それ以上の苦しみや諦めを感じている人たちが世界中に沢山いる。天災だったり、人災だったり、理由は様々だが、傷みは同じだろう。そんな人たちに、僕が小さなおにぎりに暖かさや希望を与えられたように、ほんの一筋でも光を与え、明日を生きる元気が湧くような社会を作る一翼として真摯に成長していきたいと思っている。



3 保護者からのメッセージ

できることから

3年保護者 山岸 由美

人やものを大切にしたい、と以前よりも強く感じています。

三人の子どもは、当時、小中高校生で三者三様の場所にいました。二人は、各校で先生方に守られながら過ごしていました。残る一人は、語学研修中のオーストラリアで震災を知り、連絡不通のまま、ホストファミリーが温かく見守り続けてくれました。家族がずっと見当がなかったリアルな映像を彼女だけが見て恐怖におびえた反面、彼女だけがあの激しい揺れを体験していません。数か月後再び大きな地震があった時、悲鳴や号泣で騒然となった教室で、東日本大震災の揺れを直接には知らない自分に気づき愕然としたそうです。

沢水を汲んで、炭を入れて浄化して使ったこと。雪を風呂場や発泡スチロール箱に詰めて保冷庫にしたこと。初めてのことでばかりでしたが、沢水が汲める場所を知っていたし、炭の使用法を子どもたちが学校で学習していたし、雪遊びの経験も役に立ちました。

実際に経験したことは、非常時でも同じような行動がとれました。見たり、聞いたり、読んだりしたことも、次の行動につなげることができました。けれども、経験・体験できることは限られています。あとは想像し、いかに工夫し柔軟に対応していくか、そのための土台作りが大切になるのでしょう。

天災は、自分に何ができるのか、自分の役割は何か、に気付かされるチャンスだと思うとの話を知人より聞きました。この方のご家族は60余年前の台風で被災、行方不明のままです。心の痛みを知るゆえに、今回も被災地に想いを寄せ、高齢になった自分にでもできることを、と探していらっしゃいました。



停電下、手書きの卒業のしおりで送り出していた小学校の卒業式。支援活動のため体育館に駐留していた東京消防庁の方たちは、開場まで、発電機で暖をとらせて下さいました。ほのかなぬくもりとたくさんの人の想いが心強かったです。

広域通学の高校は三人に一人の被災率。自然科学部の彼は、自分たちにできることとして、放射線量測定や、塩害の田んぼにケ

ナフを栽培して除塩を試みました。

気仙沼での実体験のない娘は、人に寄り添う優しさや強さ、想像する力をこれからも磨いていくことでしょう。

人を大切に思い、自分にできることは、と考え行動する。これまでの経験をいかして笑顔につながる活動をする。そのためにも新しいことやちょっと苦手な分野にも身を置いて経験値を高めて欲しいです。ワクワクすることや世界観が変わることもあるかもしれないし、たくさんのつながりができるのは力強く、そして楽しいからです。



4 教職員からのメッセージ

炊き出し、そして給食再開へ

栄養教諭 村上 鮎美

震災翌日から、当時勤務していた新月共同調理場では、市からの要請で市内各避難所へおにぎりの炊き出しが始まりました。補食給食が実施されている旧唐桑地区を除いた市内の学校給食では、炊飯を外部委託していたため、調理施設に炊飯機器はありません。そのため、普段はおかずを作るガス回転釜を使用し炊飯を行うことになりました。私を含め、初めての経験に、調理員と試行錯誤しながらの炊き出しがスタートしました。

多い時では、1日約6,000個のおにぎりを作ることができたのも、地域の方をはじめ、たくさんの方々の協力があったからです。雪の舞う中、調理場で炊きあがった大量のご飯を、中学校の家庭科室まで何度も運んだり、避難者の方々や地域の方々に混ざり、一日中おにぎりを握ったりと、約一か月間続いた炊き出しでは、新月中の生徒達の活躍が、とても頼もしく感じられました。

震災発生数日後からは、様々な支援物資も届きました。中には、期限表示のないもの、すでに期限が切れたもの、また、停電が続く中、冷凍品や冷蔵品など、食べて良いのかどうか判断に迷うものも多くありました。食べるものがないという状況の一方で、「絶対に食中毒を起こしてはいけない」という思いもあり、苦渋の判断を求められた日々でした。

震災発生約一週間後からは、おにぎりだけでなく、おかずの提供もできるようになり、献立を考えることになりました。学校給食は、当日納品、当日調理が原則のため、調理場には常時調味料程度しか食材はありません。そのため、食材は支援物資の中から選んで使用しました。震災後、避難所の食事ではごはんやパンが多く、栄養が偏っていたため、肉や野菜、果物などを取り入れながら不足していた栄養を少しでも補えるように、また少しでも温かいものをとということを心がけました。学校給食の献立を考える際には、栄養バランスはもちろんのこと、食材の安全性、地元食材や旬の食材の活用、子どもたちの嗜好等様々なことを考慮していますが、この時ばかりは、「とにかく食材を無駄にしないこと」を大前提として考えていたことを思い出します。

4月25日から学校が再開され、入学・進級と新しい生活をスタートさせた子どもたち。その震災後初めての給食は、牛乳とパン、デザートの特設給食でした。子どもたちには、いつもの給食で新学期を迎えてほしいという思いと、衛生的にも安全な状態で給食を提供できる状態ではないという現状を目の当たりにし、悔しい思いで初日を迎えました。

しかし、給食時には、「みんなで食べられてうれしいね」「食べられるだけありがたいよね」という会話が合ったことを聞きました。このことは、震災後、思うように食べることができない時間を経験し、子どもたちの食べることへの意識が変化したことを感じた瞬間でもあり、また同時に、その気持ちをいつまでも忘れないでほしいとも思いました。



5月からは、いよいよ完全給食が始まり、初日は子どもたちにも人気のあるカレーを提供しました。食材の流通状況が悪く、使用できる食材にはまだ限りがありましたが、日常が少しずつ戻り、久しぶりに給食を作ることができるということをととても幸せに感じました。いつもは残りがちな野菜サラダも、空っぽの食缶がたくさん調理場に返ってきて、とてもうれしく思いました。

震災から2年以上が経ち、あれほどまでの経験をしたにも関わらず、当時の様々な記憶はだんだんと風化しつつあります。しかし、成長期の子どもたちが、避難生活中短期間ではありながら、満足な食事を摂ることができなかったということは事実であり、震災により大きく食生活が変化したということも忘れてはならないと思います。蛇口をひねれば水が出る、ほしい食べ物がいつでも手に入る、当たり前のことだと思っていたことができなくなった時、こんなにも人間を不安にさせるということを私達は痛感しました。「食」は生きることと切っても切り離せないものです。冷たく硬くなったおにぎりでも大切に食べたこと、わずかな食料をみんなで分け合ったこと、家族や仲間と一緒に食事の時間を過ごすことで、不安な気持ちをほんの少し和らげられたこと。食べることには、おなかを満たすこと以上に、心を満たしてくれる不思議な力がありました。食に関わる者として、このことを忘れず子どもたちにも伝え続けていきたいと思っています。



5 おわりに

3名の皆さんの寄稿文を読み、あらためて被災した人々の悲しみは尽きず、不幸には限りがないことを思い知らされる。原因は地震であり、津波である。あの地震がなかったら……人が天を、運命を恨むのは自然な心の動きだろう。

しかし、これらの寄稿文は、どれも未来に目が向けられている。本校3年の千葉君は、「震災の苦しみから抜け出せない人の思いを忘れないで、傷みをもつ人々が、明日を生きる元気が湧くような社会を作る一翼を担いたい」と、決意を述べてくれた。保護者の山岸さんは、震災までに体験的に学んだことと、想像力を働かせることで天災を乗り越えていけること、そして、三者三様の体験をした子どもさんの姿から、人を大切にし、自分に出来ることを考えて行動できる大人になることへの期待を記している。そして、村上栄養教諭は、「食」は生きることにほかならないが、それは人とのつながりをとおして、心を満たす側面でも重要であり、それを子どもたちに伝えたいとしている。

「過去と他人は変えられないが、未来と自分は変えることができる」。これは、つい最近、ある方から教えていただいた言葉だ。「天を恨むのは自然な心の動き」ではあるが、辛い過去から立ち上がり、未来を切り開こうとしていくのも、また同時に人間の本質なのだろう。「かわいそうな私」「悪いあの、あのこと」ではなく、「自分に何が出来るのか」を問い始め、立ち上がり始めた人々は明らかに増えている……震災から2年半が経過した今、それは大きいうねりとなり、未来への大きな足がかりとなりつつある。



生徒の夢と希望を確かな未来へ

校長 小松 康男



1 はじめに

(1) 本校の位置

本校は気仙沼市東部の唐桑半島中央部の標高約65mの高台に位置しており、生徒数136名、学級数7学級（普通学級6、特別支援学級1）である。半島は三陸復興国立公園の一部で、巨釜、半造、鳴り砂で有名な九九鳴き浜、折石、八隻曳などのすばらしい景観や巨石、奇岩などは、雄大にして大自然の美しさを表している。中央は馬の背のような丘陵地で平地が少なく、地区民は海岸線に集落をつくっている。周囲が海に囲まれ、沿岸漁業、養殖業が盛んな地域である。

(2) 震災時の被害

東日本大震災発生時、校舎は大きな揺れに襲われ窓ガラス等の破損があったものの、地震発生後地域を襲った10数mの津波の被害はなかった。しかし、学区内の海岸に面した集落は大津波で壊滅的な被害を受け、養殖施設等も甚大な被害を受けた。

(3) 震災後の影響

市内の多くの中学校では校庭に仮設住宅が建設され、校庭がほとんど使用できない状況になったが、本校では校庭への仮設住宅の建設もなく通常の教育活動ができている。震災から2年8か月が経過したが、復旧・復興がなかなか進まない中で経済問題等生徒を取り巻く状況は厳しいものが続いている。就学援助を受けている生徒は41名、仮設住宅等から通学している生徒が17名おり、被災した生徒とそうでない生徒の生活面・経済面での格差が今後大きくなることが懸念される。



このような中で、

- ・生徒が生き生きと活躍し、一人一人に成就感や達成感を味わわせる教育活動を推進する
- ・確かな学力を育てる分かる授業、魅力ある授業を推進する
- ・夢や志を育む教育活動を推進する

を学校運営の最重点に教育活動を進めている。

2 子どもたちからのメッセージ

震災から学んだこと

生徒会長 山崎 真輔

2011年3月11日、震度7の地震と想像をはるかに超える大津波に襲われた。私たちの住む町唐桑も例外ではなく甚大な被害を受けた。幸い私たちの通う唐桑中学校は、海に面しているこの地域の中でも高台にあり、津波による直接的な被害は免れることができた。

あの日から1か月半後、私はまだ学校生活の準備も整わぬうちに入学式を迎えた。当時、震災の事と新しい生活への不安定な気持ちで頭がいっぱいなままでのスタートとなったことを今でも覚えている。

しかしそのような悩みはまもなく解決することとなった。なぜなら、同じ境遇のクラスメイト、担任の先

生、そして何よりも頼もしい先輩たちに出会い、支えられたからである。そのおかげで今の自分があるといっても過言ではないと思う。

中でもより輝きをはなって見えたのは「生徒会執行部」だった。学校が例年より遅れてのスタートだったのにも関わらず、焦るどころか堂々と学校の先頭に立ってリードしている姿は私の憧れとなっていた。

それから1年後、私は2年生となり、憧れだった先輩たちのように生徒会執行部の一員となった。それからは毎日がとても忙しかったが、同時にとても充実していた。何より、憧れの先輩方と同じ活動ができること自体が喜びだった。

それから何か月かが経った頃から、あることがきっかけとなり、横浜市立戸塚中学校との交流が始まった。震災当時、戸塚中学校の生徒会長だった方の母親が私たちの住む町唐桑町の出身ということで支援物資を私たちに送ってくださったことからスタートしたのだ。

交流の方法は初めは手紙だったが、今では、プロジェクターを使ったテレビ会議にまで発展し、とてもやりがいを感じた。そして初めて支援物資をくださった方々へ手紙などではなく、顔を合わせて自分の言葉でお礼をすることができたのも嬉しく思っている。

戸塚中学校との交流は生徒会長が代替わりした後、現在もなお継続している。その後私は、生徒会長という立場になり、やる気も今までにも増して一層高まっていった。

ある日、戸塚中学校との間で、前年から話が出ていた「義援金」の使い道について話し合うことになった。去年は加湿器を購入したが、今年はどうすべきか、執行部全員で話し合った。様々な意見が出たが、その中で、「唐桑の夜道って暗いよね。」という一言から、私たちは震災時の生活のことを思い出し、そしてある案を考えた。「ソーラーライトを設置するのはどうだろう？」

義援金を中学校のためだけでは無く、地域の皆さんのために使うことが決まった瞬間だった。震災で暗くなった唐桑の夜道を照らすことで、遠く神奈川の戸塚中学校のご好意が、いつもお世話になっている地域の方々にも有効に役立ち、そして少しでも恩返しをすることができると思うと、とても嬉しかった。

戸塚中学校側もこの案に賛成をしてくれ、すぐに実行に移すことが出来た。

自分たちの配布したライトが設置され、暗い夜道がほんのり明るくなった。その明かりを眺めながら、私の心は達成感でいっぱいになり、幸せな気持ちになった。誰かの役に立てることはとても嬉しい。

私は震災のあの日から、辛いことがたくさんあったが、様々な人に助けられてここまでくることができた。これらの経験や中学校生活で積み重ねてきたこと無駄にせず、これから生きていく上でもいつまでも忘れないでいたい。そして今度は私が困っている人を積極的に助けたいと思う。

将来は「人の役に立つようなやりがいのある仕事をしたい！」それが今の私の目標となり、夢になった。



3 保護者からのメッセージ

震災をどのように生かし、つなげるか

父母教師会副会長 千葉 正樹

あの大震災から、2年8か月以上が経ちました。徐々に復旧・復興してきていますが、まだ先の長い道のりが存在することには変わりがありません。しかし、このような状況の中でも前向きに考えられる「心」をもつことの重要性を感じます。

私の中で勝手に思っている名言があります。それは、「ピンチはチャンスだ！」です。震災は自然が起こしたもので、地球上に住んでいる限り受け入れなくてはならないものだと考えます。ただ起こってしまったことは仕方がないと割り切れるのではないと思いますが、時間とともに前に進まなくてはならないと思います。振り返るなどは言いません。この状況において、ポジティブに考えることが大切ではないでしょうか。

この震災で、「生きる」ということを真剣に見つめ直す機会になったと思います。今まで当たり前だったが、すごくありがたいものに感じる事ができました。また、人への感謝の気持ちや思いやることの大切さを再認識できた機会になりました。そして、生きるための努力や工夫・仕様を改めて問い直すきっかけにもなりました。このことにより、今まで以上に防災意識や自然に対する畏敬の念、人への感謝や思いやりという意識を高くもつことが、今後に生かされるためには重要だと考えます。

そこで私なりに思うことは、良い意味での「みちくさのすすめ」です。子どもたちにとって、今の社会はある意味「あそび」が少ないように思えるのです。確かに今はハイテクなゲーム機やスマホのような通信

ツールがあり、物質的には豊富かもしれませんが。しかし、私には無機質で不自然な遊びに感じられて仕方ありません。そんな中、この震災を経験し、今まで当たり前だったはずの生活が一時的に失われました。でも、その状況に応じた生活ができたのです。震災前まで、非効率とされたものが見直されました。道には多くの人が歩き、薪を拾い暖を取り、またローソクで明かりを作り、暗くなれば就寝し、明るくなれば起床した昔の生活をしたのです。不便な中でも充実感を得られたように思えたのは、私だけでしょうか。今の子どもたちに温故知新的な生活や体験が必要に思うのです。今の田舎の子どもたちは、都会の子どもと比べて心身ともにひ弱に思えるのです。これから子どもたちを心身ともに鍛える一つとして、「みちくさ」を勧めたいと思うのです。私が子どもの頃には、親が忙しく子どもにかまっていられない状況でした。子どもにとって自由奔放に楽しく遊べたい時代だったと思います。確かに今のように物的には貧相でしたが、想像力豊かに「みちくさ」を楽しんできました。今も両親・祖父母・先生方が見たら卒倒したに違いありません。それだけ冒険にみちた「みちくさ」でした。その「みちくさ」を経験したからこそ、自然の危機回避能力や生活の上での創造性や想像力を培ってきたと思われてならないのです。必ずしもまっすぐ早く目的地に行かなくても良いという感覚を味わいました。人生においてもそう思えるようになれば、もっと気楽にしっかりと考えたことができるのではないかと思います。寄り道やゆっくり進むことで、見逃しがちな大切なものを発見できることができるかもしれません。ある法人の理事長の言葉を最近私はよく使います。「失敗ではなく経験」。良い言葉だと思います。たいてい失敗は学びのある経験となります。何事も前向きに捉えるような言葉だと思います。

この震災で様々な経験したことを生かすためにも、「ピンチはチャンスだ！」の前向きな気持ちで既成概念にとらわれず、積極的に未来を切り開く意識を！ それは子どもに限らず、大人もそうありがたい物です。そうすれば少しが明るい未来が期待できるでしょう。

4 支援者の方からのメッセージ

「よそ者」との協働を活かす

からくわ丸事務局長 加藤 拓馬

2011年4月5日夜、気仙沼市唐桑地域に初めて入ったときはまだ電気も復旧しておらず、星のみが煌々と輝き、しんと静まりかえったまちでした。3月に東京の大学を卒業した筆者は、内定先の会社にも行かず、ただただ「とんでもないことが日本で起きた」「これは今東京でサラリーマンをしている場合ではない」と決めつけて、知り合いの紹介で唐桑での復旧支援活動に参加したのでした。それから半年かけて、瓦礫の撤去作業とボランティアの現地コーディネート役を務めます。

例えば、平時に一旅行者として唐桑を訪れたなら、こんなにもこのまちに惹かれることはなかったでしょう。皮肉と言えはいいのでしょうか、こんな非常時だからこそ唐桑の底力を見せつけられ、そこに引き寄せられていったのでした。住民も同じく、この地域を見直す契機を得たように思います。古井戸を開け、薪で飯を炊き、改めて昔ながらの生きる術、そして「結っこ」(互助の精神の重要性を再認識する機会となりました。「おだった(調子に乗った)ひと様にもう一度一からやり直せという自然のお叱りでねえかなあ」と住民は言います。多大な犠牲を被って吐くこの言葉は決して軽いものではありません。歯を食いしばりながら冬を越す東北特有の辛抱強さとその対極にある三陸の漁師特有の情熱と豪快さが織りなすバイタリティ(生命力)は、関西出身の筆者にとって驚きに匹敵するものでした。

一方で、その地域コミュニティに大きなひびを入れたのもこの震災でした。住民同士のいさかいを露呈し、安住の地を奪い去り、人口流出に拍車をかけます。「おれあ、人間の心のどん底を見たよ」と人の醜さを辛辣に語る漁師もいました。

そんなときにある言葉を知ります。「コミュニティ再構築に必要な三つの『もの』がある。地域のしがらみに捉われず客観的な立場で見ることができる『よそ者』、次世代を担うエネルギーをもった『わか者』、そして愚直に突き進む『ばか者』だ。」なるほど、「よそ者」である筆者が地域の「わか者」と協働すれば、そして一緒に「ばか者」になれば、短期的な復旧支援に留まらず、中長期的な復興まちづくり活動ができるんじゃないか。気づけば唐桑滞在は一年に及び、2012年春、



唐桑への移住を決意。そして、地元のわか者と学生ボランティア数名とともに「からくわ丸」というまちづくり団体を立ち上げるに至ります。お陰様で生計は助成金と寄付でなんとかなっていました。

からくわ丸の取り組みは地道なものです。メインで取り組む「まち歩き」という活動では、地元の年配の方、地元のわか者、そして外から大学生を呼んで来て、集落内を改めてまちの魅力や課題を探しながら歩きます。半世紀以上ここに住む地元民では逆に気づけないものでも、よそ者なら発見できるのです。その集落特有のさりげない生活の知恵から自然の中での遊び方まで話は及びます。そしてそれを再認識し、わか者につなげていきます。わか者とは地元の20代～30代、中高生などです。記述の「三つのもの」を上手く活かそうという取り組みです。発見したものは、発表会を開いて、冊子にまとめて、住民にフィードバックします。地域の再発見こそ、まちづくりの第一歩だと信じています。

震災を機に唐桑が得たものがあるとすれば、それは「チャンス」の一言です。今この三陸は「震災」というマイナス要素がかつてない外部との交流人口を生んでいます。よそ者を単なる支援者やボランティア（タダの奉仕人）として見るのではなく、まちの魅力と課題を掘り起こす協働アクターとして認識し、上手く活かす必要があります。よそ者を代表して、お願いしたいと思います。

からくわ丸が立ち上がって1年半が経ちましたが、今は地元のわか者が中心となって活動を継続させていこうと奮闘中です。この地域に合った進化のスピードというものがあるので、急いで大きな変化を生む必要はありません。今年の夏には、唐桑の中学生とまち歩きを楽しみましたが、きっと彼らが活動の意味を知るのはもっともっと先のことでしょう。地道な継続が求められます。

多くの犠牲の上に震災が喚起した「地域の底力」そして「外との交流」を、しっかり次世代へつないでいきましょう。未だ急速に均一化が進む日本の地方ですが、地方の均一化は最早時代遅れです。気仙沼・唐桑のオリジナリティを、内と外の協働で育む作業が今求められています。



5 教職員からのメッセージ

「何かできることを」から感じること

教諭 七宮 克徳

「心揺さぶる卒業式に」を胸に、当時勤務していた大島中学校で卒業式に向けた指導をしていた。平凡ながらどの学校にでもある光景だったように思う。まさしくその時、大地震が発生した。あの日を境に学校も、クラスも、チームもなくなった。教師として毎日校門で、廊下で、そして教室で、言葉と笑顔を交わしていた日々。あの瞬間以降、その「普通」が「普通」でなくなった。

自分の足元は何でこんなことになっているのか？と疑問をもちながら、着の身着のまま夜を迎え、空を見上げると、憎らしいほど星がきれいだった。小学校の体育館ではケアを必要とする老人の世話をする介護士がいて、心細いであろう老人、幼児の話し相手をしている中学生がいた。

40日ほどが経ち、どうにか新年度をスタートしようとしていたところに、「チーム大島～心をついに～」が発足した。そのきっかけとなったのは、間違いなく、避難所生活を送らざるを得なかった状況下での中学生が、「大島をどうにかしたい」と強く思ったその気持ちであった。自然と誰かの手伝いをする、食事を配膳・下膳する、配給された水をポリタンクで運ぶ、など、「何とか今日を、そして、明日を」生き延びようとしていた。まだまだ、この日本には「支え愛」「助け愛」「励まし愛」が息づいていた。多くのものが無くなって、初めて気付く「美しきもの」であった。

その姿を見て、魂の純粹さを学ばなければと思った。助けを必要としている、悲しみを抱く子どもを助けるのは、大人の役目。「子どもの努力を発揮させる環境を創る、チャレンジできる場所を探す。」震災以降、実感していることだ。「未来を生きていく人を育てる」ことが教師の使命であり、だからこそ、子どもたちには「己を磨き続け自分の足で歩ける大人になれ」と、一層声を上げたい。

「人の行く裏に道あり花の山」

誰にでも、その人にしか切り拓くことができない境地がある。同じような才能、能力であっても、その人の中に宿った才能は、その人が発揮することで、独自のものになる。過去を反省したり、未来に生かそうとしたりすることは決して悪いことではないが、過去や今にあまりにこだわると、良きにつけ悪しきにつけ、

自分の可能性が狭まってくる。そんな時にモノを言うのが、ある分野で身に付けた知識や知恵を、他の分野の知識や知恵と結びつけること。つまり、「すべての物事はつながっている」という意識をもち、実際に行動すること。自分が必要だと感じた時に学ぶからこそ、血肉になるのであって、必要性を感じてもないのに、無理矢理教えられても何も残らない。「学ばないと好きなことはできない」という理論がまかり通って常識のように言われていることが、そもそもの間違いかもしれない。将来どんな分野で生きていくにしても、それを追求しようとするれば（思えば）、必然的に学びたくなる。学ぶより前に、どんなことでもいい、やりたいことを見つけることの方が優先されるべきこと。

「夢はでっかく努力苦咲（どろくさく）」

誰も気付かないような路（みち）に咲いている花だって、一生懸命咲いている。人に誉めてもらうために咲くのではなく、自分のために咲いている。踏まれても立ち上がり、空に向かって咲いている。努力して、苦労して、最後の最後に咲いた花は美しく導く、本当の光を放つ。

中学生が大人になる頃（実はそんなに遠い未来の話ではないのだが）の社会において、現在山積みとなっている社会問題が、すっきり解決されているとは到底思えない。だからと言って、どうか、「なんて大変な時代に生まれてしまったのだろう」「どうしてこんなにピンチになってしまったのか」などとは思わないでほしい。どんな時代にも困難はあったし、どんなピンチも切り抜けてきた。自分が今どこにいるのか、どういう状況になっているのか、はあまり意味のないことだ。一番重要なことは、自分が「どこ」にいるかではなく、「どの方向」に向かっているかだ。どういう思いをもつか、すなわち、どういう夢を描くか、どう行動するか、運命をどうとらえるかが、とても大切なことだ。

九回二死満塁の場面でマウンドに立てるのは、チームの中でも絶対的な信頼を得ているピッチャーだけ。選ばれたクローザーは、自分の使命を自覚しながらマウンドへと向かう。こんなに名誉なことはない。ワクワク、ドキドキしながら、自分自身を磨き続けてほしい。



6 おわりに

東日本大震災から2年8か月。学校は日常を取り戻しつつある。しかし、まだ多くの生徒が厳しい環境の下での生活を送っており、地域・家庭が震災前の状態に戻るまでまだまだ多くの年月がかかる。

そのような状況の中でも、生徒は明るく元気に学校生活を頑張っている。運動会や文化祭などの学校行事や部活動、生徒会活動に一生懸命取り組んでおり、毎時間の授業も落ち着いた雰囲気の中で学習が進められている。大変な状況だからこそ、自分たちが何事にも真剣に取り組む、しっかり学校生活を送ることが家族や地域を元気づけることにつながり、全国から支援いただいた方々への御礼にもなると考えている生徒が多い。

震災から2年8か月の生活の中で学ぶべきことも数多くあった。生徒にとって、単なるマイナスの経験に留めることなく将来の大きな成長のきっかけになるよう、また、生徒が夢と希望を確かな未来へつなげることができるよう、最大の教育環境は「教師」であるという認識に立ちながら教職員の英知を結集して教育活動を推進していきたい。





霧立山の麓から 幸せの風を吹き起こそう III

校長 高野 勝則

1 はじめに

(1) 本校の位置

地理的には宮城県の最北東端に位置し、東は太平洋広田湾、西は北上山系稜線をもって気仙沼市鹿折地区と、南は唐桑半島部、北は岩手県高田市に隣接し、リアス式海岸特有の地形で自然に恵まれた風光明媚な地域である。

学区は北の県境から「大沢」「館」「只越」の3地区からなり、学区の中央を国道45号線が南北に縦断、また、平成22年12月に三陸自動車道の一部として霧立トンネルが先行開通し重要な交通路となっている。

(2) 震災時の被害

地震による被害は、地滑りや亀裂が特に盛土の部分に多く発生した。国道などでも路肩の崩れや亀裂が多く発生、宅地でも被害が見られ全壊の家屋もあったが、住宅の多くは家財の転倒や落下などによる被害であった。校舎、校地は地割れ、内外の壁の亀裂等の被害があった。

津波による被害は、学区内3地区中2地区（大沢地区、只越地区）で甚大であった。大沢地区と館地区は浸水高16.4m、只越地区は遡上高27.6mの大津波が襲来した。大沢地区は高台の家屋を除いてほぼ流失、壊滅状態となった。館地区では海岸沿いの家屋が津波により流失するも被害は少なかった。只越地区は国道45号線より海側の家屋が津波で流失、漁港の水門なども破壊され壊滅状態となった。生徒、教職員の人的被害はなかったが、震災時の在籍生徒32名の内13名の生徒と教職員5名の住居が全壊等の被害を受けた

津波による瓦礫や火災で交通が遮断された。車での移動は学区内の一部に限定され、停電、断水、電話も不通となり一時は陸の孤島となった。

- ・陸前高田方面…大沢地区の国道45号が瓦礫で遮断、気仙大橋等落下により通行不能
- ・唐桑半島方面…只越地区の道路が瓦礫で遮断し通行不能
- ・気仙沼中心部…鹿折地区の国道45号が瓦礫と火災にて遮断、緊急車両を除き通行不能

(3) 震災後の影響

震災後2年半となり、学区内の世帯数は563戸→515戸、人口1612人→1400人（H23.3.31→H25.9.30）となった。また、平成25年度在籍生徒36名の内10名は地区内仮設住宅や学区外のみなし仮設住宅、親戚宅より通学している。さらに準要保護生徒は震災直後より減少したが、10名が該当している。校庭には仮設住宅50戸があり、校庭が使用できない状態が続いている。このように震災の影響は未だに厳しいものがあるが生徒は明るく素直で、意欲的に学校生活を送っている。

3世代同居の世帯が多く、家族の絆、地域の連帯が強く、みんなで子どもたちを育てようという地域の教育力の高さが感じられる。

2 子どもたちからのメッセージ

「忘れないために」(平成25年度第35回少年の主張全国大会 内閣総理大臣賞受賞)

3年 梶川 裕登

皆さんは、以前の気仙沼の街並みを思い出せますか。僕は、はっきりと思い出すことができません。今の景色を以前からあった景色として錯覚してしまっているのです。

それに気付いたのは、小原木中学校での活動からでした。

小原木中学校では、海拔表示プロジェクトを行っています。その場所が、海拔何mなのかを調べ、電柱など見えるところに、このような表示版を取り付けていきます。海拔を意識し、どの高さまで逃げればよいのか、参考にしてもらおうと考えたプロジェクトです。

調べてみると、小原木中学校は海拔70m。気仙沼高校は40.5m。市立病院は13.8m。エースポート(船着場)は0.8mでした。僕が住む只越地区の津波の最大値は27.6m。海拔5.2mしかなかった僕の家は、残念ながら、もう影も形もありません。

僕たちはまず、この表示版を館地区に取り付けました。この地区はほとんどが海拔20m以上で、被害の少なかった場所です。次に大沢地区の取り付け。ここは、海と少し離れていても多くが海拔2m程度で、大きな被害のあった地区です。

取り付け作業の中で、僕は、変わり果てたこの地区の姿を見ながら、言いようのない不思議な感覚に襲われていきました。それは、草が生い茂る、何もなくなったこの景色を見ても、僕は、違和感を全く感じなくなっているのです。今のこの景色にすっかり慣れてしまった自分がそこにいました。あたかもこの景色は、僕が生まれる前からずっとこうだったんだと。いや、それは違う。こんな姿ではない。ここには僕の友達の家が立ち並び、漁港から見える海はもう少し遠く低くて、コンビニはここにはなかった。かつて過ごしてきた風景が、僕の頭の中から薄れていってしまう。取り付けをしながら、何が以前で、何が今なのか。何が変わって、何が変わっていないのか。

その後、何かに誘われるように、かつての自分の家があった場所に行ってみました。いま残っているのはコンクリートの土台だけ。ここで生活の営みがあったなんてこれっぽっちも感じられません。でも、この景色にも何の違和感を感じない自分がそこに立っていました。ここには、皆で笑った家があったはず。地域があったはず。そして、笑顔のおじいさんがいたはず。でも、もう・・・震災から2年あまりしか経っていないのに、10年以上も暮らした環境を感覚を失いつつある自分がいたのです。僕を今まで育ててくれたこの温かな場所を、僕は心の片隅から消し去ってしまうのかと、自分自身がとても怖くなりました。

人は忘れてしまうもの。慣れてしまうもの。悲しみの中になんかいてもいけない。切り替えて前へ進まなくてはいけない。古いものや壊れたものを直し、新しいものに変える。でも、それだけでは、真の復興ではないと僕は思います。辛いけれど、そこに町があったことを、僕たちは忘れず、しっかり伝えていかなければならないと思うのです。

「忘れないために」その一つの手立てが、海拔表示プロジェクト。身を守ることの大切さを伝えながら、地域を回り、昔の景色、育った環境、地域の温かさを、もう一度確認し、取り戻し、そして伝える。

僕は、これからも、ここにどんな人たちが住んでいたのか、どんな町があったのか、そして震災でどんな被害を受けたのかをしっかりと後世に伝えていきたいと思っています。それが、海と一緒に生活していく僕たちの役目だと思っているから・・・。



全国大会の発表



内閣総理大臣賞表彰

3 教職員からのメッセージ

「海と生きる」子どもたちのために

防災主任教諭 齋藤 潤

「海と生きる。」これは、気仙沼市震災復興計画のキャッチフレーズである。気仙沼市震災復興委員会では、その意味を「先人たちはこれまで何度も津波に襲われても、海の可能性を信じて再起を果たしてきた。人智の及ばぬ壮大な力としながらも、海を敵視せず、積極的に関わり合って暮らしてきた。それは、単に「海で」生活していたのではなく、人間は自然の一部であることを経験的に体得し、対等の関係を築いて「海」と生活したとも言える。・・・」と説明している。

「海と生きる」とは「海とともに生きる」ことである。「海とともに生きる」小原木の子どもたちに何を学ばせるべきか、何を身につけさせるべきか、東日本大震災の教訓を基に小原木中学校では現在、「災害に対する生き抜く力を身につけさせる」・「防災文化の礎をつくる。」この2つを重点事項として防災教育に取り組んでいる。

その防災教育の一つに「海拔表示プロジェクト」がある。地域住民と協働で、学区内の電柱等にその地点のおよその海拔を示したオリジナルの表示板を取り付け、生徒のみならず地域の防災対応能力を高めようというプロジェクトである。

このプロジェクトのねらいは次の3点である。1つ目は、表示板を取り付けることで、日常的に海拔を意識した生活環境を作り出し、海拔に関する感覚を育成する。そのことで生徒および地域住民の防災対応能力を向上させることである。また、表示する海拔によって表示板の色を変えており、この色について事前に繰り返し説明しておくことで、緊急時の幼児、低学年児童の避難行動のためのわかりやすい目当てにすることである。2つ目は、地域住民と協働してプロジェクトに取り組むことで、生徒の地域の一員としての意識やふるさと復興の担い手であることの自覚を高めることである。3つ目は、メンテナンスなど定期的にこのプロジェクトに関わることで、東日本大震災の記憶を忘れないようにし、災害の教訓を風化させることなく後世に伝承することである。

生徒を対象に昨年行ったプロジェクトに関する意識調査結果をみると、プロジェクトに対してほぼ100%の生徒が肯定的に捉えており、活動に対する満足度も高いことがわかった。また、「地域」というキーワードをあげて回答していた生徒が多いことから、プロジェクトが地域との連携強化という点で成果があったことがうかがえた。さらに、地域住民から注目されるとともに、新聞で報道されたり、校外で行った活動報告の機会に高い評価を受けたことが、生徒の自己肯定感や自己効力感を高めることにつながり、心のケアの観点からも有効であったと考えられる。

このプロジェクトは継続してこそ意味のある活動である。生徒の前向きな気持ちを大切に、今後もこのプロジェクトを充実、継続させるための方策を検討していきたい。

「釜石の奇跡」といわれ、その防災教育の取り組みで注目された群馬大学の片田先生は「学校で防災教育を10年継続すると、小学6年生は22歳の大人になる。さらに10年続けると32歳になり、親になる。まっとうな親のもとで次の世代が育つと考えるならば、学校での防災教育は、防災文化の礎をつくることになるんです。」と述べている。東日本大震災という大災害を経験し、自然の力に対して、防潮堤などのハード面だけですべてを防ぎることができないことを実感した。だからこそ、自然災害から命を守る最大の力となるのは「教育」の力であると痛感している。震災を経験した者として、「やれること、やらなければならないことはなんだろう。」このことを常に考えながら、これからも「海と生きる生徒」とともに防災・減災について考えていきたい。



JICA 教育関係者本校視察訪問



保育所にて海拔表示を教える



海拔表示板の修理

4 おわりに

本校では震災後、「小原木ブランドの生徒の育成～困難に負けないだけでなく、さらに気仙沼の中核になれる人間を育成する～」というスローガンを掲げ教職員一丸となって教育活動にあたってきた。その成果は2年半後の今、様々な場で生徒の活躍となって表れている。特に震災の経験を生かし、地域と連携した防災教育は内外からすばらしい評価をいただいた。

上記「子どもたちからのメッセージ」はその取り組みから学んだことを発表し全国一位に輝いた梶川君の原稿である。また「教職員からのメッセージ」を執筆した齋藤教諭は学校を代表し、今年度、全国でこの実践を発表し、防災教育の大切さと小原木中学校が震災から立ち直っていく様子を知らせている。本校の防災教育は震災を風化させないために役立っている。

全校生徒36名の小さな中学校が全国に発信した、この小さな取り組みが今後どういう形で広がっていくのかが楽しみである。また、小原木中学校の生徒たちが今後どのように成長し、復興の力になっていくのかが楽しみである。

辛い震災の経験は、一方で夢と希望を持つことの大切さ、志を持つことの大切さを子どもたちと私たち教職員にも教えてくれたと思う。いやそう思って頑張らなければならない。小原木ブランドの生徒の育成を目指して・・・また明日から。



JICAの皆さんと交流



伝統の小原木ソーラン



秋田県大仙市立中仙中学校との交流



よりよい未来へ向けて 今、私たちにできること

(H25「中学生代表者会議」テーマ)

校長 佐々木 弘晃

1 はじめに

(1) 本校の位置

本校は、気仙沼市の南部、旧本吉町（平成21年9月1日気仙沼市に編入）に位置し、西は岩手県一関市、南は南三陸町に隣接している。東部は太平洋に面し、南、北、西は、北上山系の支脈によって囲まれ、これらの山岳より注ぐ水は西から東へ起伏によって蛇行し、町の中央を北西から南東に向かって津谷川となって流れる。

(2) 震災時の被害

津波は、地域住民の想定を超え、津谷川を約4kmもさかのぼり水田をのみ込み、大量の瓦礫を運び一部の人家に壊滅的な被害を及ぼした。本校体育館は、避難所として、5日間にわたり、最大100名の避難民を受け入れた。

(3) 震災後の影響

地域全体の被害は比較的少なかったものの、親を亡くした生徒が3名、家が全半壊した生徒が4名、また、震災後に離職した保護者が70数名あり、各家庭で状況は異なるが、経済的な影響も含めて、生徒の学校生活には少なからず影響が出ている。幸い、校舎・校庭等への被害は少なく、日々の教育活動を当たり前に行えることに感謝すると同時に、管内の教育関連行事等への会場提供など、恵まれた状況にある本校が果たすべき役割の一つと考えている。

2 子どもたちからのメッセージ

「中学生代表者会議をとおして」

東日本大震災から2年8か月が経ちました。瓦礫処理や漁業の規制が無くなっている様子から私自身も復興へと着実に向かっていると実感できることが多くなってきました。しかし、いまだに震災当時から進んでいないことがあるのも事実です。そんな中、故郷である気仙沼を含む東北地方に僅かでも貢献したいという思いを強くするようになりました。

そのきっかけになったのが、今年の8月に津谷中学校を会場として行われた中学生代表者会議です。

中学生代表者会議には、市内13校と石川県金沢市の学校から代表生徒が参加し、一つのテーマについて話し合うというものでした。その準備はとて大変なものでした。夏休み中に登校し、資料の作成や司会練習など準備を進めました。その中で津谷中の生徒会のメンバーだけで代表者会議のテーマである「よりよい未来へ今、私たちができること～震災後の取組を生かした活気ある生徒会活動を目指して～」について話し合いをしました。そこで、これまで復興について話し合うことがなかったことに気が付きました。話し合いをしながら私たちの代で震災の記憶を風化させてはならないという思いになりました。

生徒会長 小野 晶生



「未来」を真剣に語る

そんな思いで臨んだ代表者会議当日。各校の現在の状況や震災からこれまでの取組について発表し合う全体会から始まり、午後はテーマについてグループに分かれての話し合いが行われました。話し合いでは、津谷中生だけでは思い付かなかった意見や考えが出されました。その中に「小さなことでもできることから行動していく」という意見がありました。改めて気仙沼の現状と向き合った中で、この言葉は私の心に強く残りました。それだけでなく、参加したみんなと未来について和やかに、しかし真剣に意見交換することで、とても明るく前向きな気持ちになりました。

このような話し合いの雰囲気から私は、人と人とのつながりが大切だと改めて思いました。同年代の各中学校代表が一つのテーマについて話し合うことでよりつながりを深めることができたのです。被災地の復興に自分一人ではわずかなことしかできないと私はそう思っていました。しかし、人と協力すれば大きな力となり、復興へ向けてその「総力」を発揮することができるのではないかと感じました。

中学生の私が被災地のためにできることは限られているかも知れませんが、それでも代表者会議で話し合った理想の気仙沼市に近づけるよう、小さなことからできることを実践し、人とのつながりを大切にしていきたいと思います。私もいずれ成人し、社会人になります。そうすれば、私ができることもさらに増えることと思います。被災地の復興のために進んで力を尽くしたいと思います。そして東北が復興し、世界に誇れるような故郷にしたいです。そのためにも、まず、これからの人生を、胸を張って生きていこうと思います。



班ごとの発表にも熱が入りました！

3 保護者からのメッセージ

地域と共に

PTA 会長 千葉 マキ

「ここが安全です。ここから一人も帰しませんから。」と、当時小6と小4の子どもの通う津谷小学校の校長先生の迷いのない言葉でした。「そんなに深刻なの。なぜ自宅へ帰さないの。」正直そう思いましたが、校長先生は、「ここが一番安全です。」ときっぱり。そして、まさにそれが正解だったのです。震災後に、津谷地区に伝わる昔からの言い伝えについて、校長室だよりが届きました。地元に住む私たちが知らなかった津波についての言い伝えです。どこに逃げるのが安全なのか。この言い伝えが、3月11日に、私たちを守ってくれたのだと思いました。

防災教育が重視されていますが、学校は普段から地域と共に地域の中にあることを意識して、私たち保護者（家庭）は学校と地域との橋渡しの役目を果たしていかなければと思います。私たちはたくさんの人によって支えられて、生かされているということに感謝して日々過ごし、また、この震災のことを次世代にきちんと伝えていくことが私たちの大切な役目だと思っています。地域を守るということは、地域だけでなく外部の方々と当地に足を運んでくださる方々との関わりが復興と復興につながっていくものと思います。

震災後間もなく、当時群馬県で勤めていた会社を辞めてボランティアとして駆けつけて下さった高橋伸夫さんと、震災跡を見て知り、東海トラフ減災体験活動として、民泊した浜松市東部中学校の生徒さんからのメッセージをご紹介します、むすびとします。

H23.5.2から当地を訪れたボランティアの方からのメッセージ

大阪府 高橋 伸夫

1年ほど本吉にてボランティアをさせて頂きました。「この震災をどのように生かし、つなげるか」というテーマで寄稿の依頼を受けました。考えてみたのですが、正直自分にそこまで客観的に見られるほどの余裕がまだありません。我々、県外に住む人間が知らず知らずのうちにこの町の人々に変な重圧を与えた結果、焦られているのかと考えてしまいました。

あの日から2年半が過ぎ、被災地に対して早期自立を促すような文面の全国紙をよく見かけます。しかし、着実に一步を踏み出せた人がある一方で、様々な理由で踏み出せない人があるのもまた事実です。

今、我々ボランティアに求められているのは、そこに対する支援なのではと個人的には考えています。

減災体験活動のため、本吉を訪れた浜松市立東部中学校3年生からのメッセージ

3年 藤田

あのとき聞いた、東日本大震災の話は、衝撃の連続でした。本吉町の震災前の写真をお父さんが見せて下さった時に、橋があったり、民家があったりしたけれど、震災後の状況を目の当たりにして、改めて地震の恐ろしさを知るとともに、津波は大きな力があると実感しました。今回の体験で、多くのことを学ぶことができ、浜松でも生かしていきたいと思っています。



浜松市立東部中学校3年生のみなさん

3年 小池

僕は、今何不自由なく元気に暮らしています。そして、僕は本吉に行くからは不自由なく生きている幸せに気付きました。千葉家の皆さんは家で不便なこと、水、食料、電気など苦労したことを教えてくれて、いろいろなところに連れて行っていただき、震災の怖さ、すごさを知らされました。このことを忘れずに、生かされていることに感謝をしていきたいと思いました。

3年 千葉

一日目に連れて行ってもらった学校のグラウンド。そこにあったたくさんの仮設住宅を見て、すごくびっくりしたと同時に、子どもたちはグラウンドで遊ぶことができないので、すごくかわいそうだと思います。また機会があれば気仙沼市に行きたいと思います。ここで学んだことを家族や友達などに伝えて、もし地震や津波がきてもすぐ逃げられるようにしたいです。

3年 鈴木

最初行く前は、津波なんて走って逃げれば助かると思っていました。けれど気仙沼に行ってから、そんな容易なことではないと思うことができました。僕の家では津波が来たら、近くにあるマンションに入るか、など様々な疑問がでてきました。これもまた今回の体験のおかげで気付くことができました。

3年 滝川

僕は、今回の民泊には行っていませんが、小池くんの友達で、手紙を書きたいので書きました。あなた方を応援しています。震災のことは忘れず考えて、自分にできることをやって、できそうなことがあれば積極的に活動し、命を大切にしていきたいと思っています。

4 教職員からのメッセージ

「未来の担い手を育む心」

生徒会担当兼防災主任 教諭 伊藤 陽司

東日本大震災を経験し、当たり前にある幸せをこれまで以上に強く感じるようになった。また、震災時に共に助け合い、励まし合う中で、人の優しさや地域の人との関わり大切さを心底実感した。だからこそ子どもたちにも“今ある幸せに感謝し、人とのつながりを大事にしてほしいという思いを抱くようになった。苦しい中でも人との絆や協力し合う姿勢があれば、どんなことでも乗り越えていけるということを体験した。だからこそ未来に向けた一歩も人とのつながりや感謝の中から生まれてくるのではないかと考えている。

震災から2年8か月が過ぎ、少しずつ落ち着いた生活が戻りつつある。同時に復興が叫ばれるようになって久しい。しかし、復興はどこまで進んでいるのだろうか。地域の将来の展望が決して明るいと言えない現状がある。不安材料が多いこの世の中で、子どもたちに「君たちが将来を担っていかねばならないのだ」と無責任に言えるだろうか。そんな思いがあった。地域の未来を担う子どもたちをどのように育てていけばいいのか自分の中ではっきりと答えを見いだせないうでいた。

そんな中で、8月21日（水）本校を会場に第44回気仙沼市中学生代表者会議が行われることになった。テーマは『よりよい未来に向けて 今、私たちにできること』～震災からの学びを生かした活気ある生徒会活動を目指して～である。生徒会担当としての立場もあったが、それ以上に自分の悩みを子どもたちと共に考え

ていける良い機会であると思った。

会議の準備を進めながら感じたことは、子どもたちの「前向き」な思いであった。何か自分でもできることをしたいという思いをもちながらも、どう行動を起こしていいのかわからないといった様子であった。将来を悲観するよりも現実を受け入れて、何ができるのかを考える姿勢に驚きと頼もしさを感じた。やれることはしたい。でも、できることってなんだろうか。そのことを市内の中学生と話し合うこととなった。代表者会議では、「地域とのつながり」や「学校（生徒会活動）の活性化」、「みんなで取り組むこと」など多くの意見が出された。テーマは難しいが、その中で前向きに意見を交わし合い、互いに笑顔を見せる子どもたちの姿に、やって良かったと思えるものがあつた。未来に向けて話し合い、気持ちを共有することの良さを感じてもらえたのではないかと思った。現実の苦しさはある。しかし、子どもたちから感じた前向きな思いを生かし、現実の辛いことを一人ではなく、多くの人の手で共に乗り越えていく姿勢を大切にしたいと感じている。自分達の故郷を思い、これから街をよりよく築き上げていく。ここにいる人達とのつながりや居る場所、帰る場所を守りたいという思いを大切にできる人の心を育む指導が未来を創り上げると信じている。未来の担い手を育てているのだという思いを胸に私自身努力していきたいと考えている。



地域を越えて心が一つになった！

5 おわりに

未来は遠くにあるものと考えてしまいがちであるが、実は、今、目の前にいる子どもたちの姿こそが、未来そのものである。今夏、本校が会場及び事務局校となって開催された第44回気仙沼市中学生代表者会議を通じて、その思いを強くした。遠く金沢市からも参加をいただいたこの会議は、中学生の無限の可能性、そして澁刺としたエネルギーに溢れ、この子どもたちの未来は、想像以上に豊かでたくましいものになると感じた。

「震災」という、想定外の苦境にある私たちであるが、まさにピンチはチャンスであり、そのチャンスを広げ、気仙沼の、宮城の、東北の、そして日本の未来を創っていく中心となるのが目の前にいる子どもたちである。この地域が本当に復興していくためのカギは、「人づくり」にある。人は人のために何かをしてあげたい生き物である。しかし、何かをしてあげるには、確かな技術や技能が身に付いていなければならない。そしてその技術や技能を生かすためには、前向きで真摯な心や態度が備わっていないと行かない。

私たち津谷中学校職員は、今後も地域や保護者と手を取り合い、一丸となって、日々の教育活動を工夫改善し、将来、人のために何かをしてあげられる人間を一人でも多く育てていきたいと考えている。まさに、「よりよい未来へ向けて 今、私たちにできること」である。

気仙沼市立 **小泉中学校****小泉の明日を信じて**

校長 加藤 高政

1 はじめに**(1) 本校の位置**

本校は気仙沼市内で最も南に位置し、東側に広がる太平洋に岬のように突き出した高台の上にある。その標高は震災前で25m、海岸線からの距離は約600mであり、小学校や幼稚園が隣接して建っている。その下には国道45号線とJR気仙沼線が併走し、陸前小泉駅があったが、今は線路は無く、BRTバスの停留所になっている。かつて教室からは砂浜と松林が美しい赤崎海岸が見えたが、その眺望は一変し、水平線から広い海面が間近まで続いて見える。

(2) 震災時の被害

震災による校舎の被害は少なく、教室の木枠の窓ガラス数枚の落下・破損、屋根瓦の一部損壊、音楽室の梁の根元の崩落ぐらいであった。津波は、標高22.5mの校庭のわずか2m下まで到達したが、校地内には上がらなかった。しかし、高台の下の平地や丘陵の裾野にあった多くの子ども達の家は跡形もなく流され、生徒の約7割は自分の家を失った。

(3) 震災後の影響

体育館は震災当日から避難所となり9月まで運営が続いた。ライフラインはすべて断ち切れ、3月26日には薄暗い多目的ホールで卒業式、修了式、離任式を行った。電気が復旧したのは4月初め、水道は5月の連休に復旧した。学校は混乱の中、4月21日に平成23年度の始業式、入学式を実施した。4月初めから校庭の仮設住宅の建設が始まり、5月には入居が始まった。家を失った生徒たちは8か所の仮設住宅と借家に移り、そこから通学することになった。

残された校庭は10m×100mだけだったが、生徒はそこで体育の授業や部活動を行うことができた。細長い校庭は、生徒たちの創意工夫により、手作りの運動会の舞台となった。仮設住宅に住む地域の皆さんと触れ合う機会も増えた。多くを失ったが新たに得たものも多かった。

平成25年4月時点で、全生徒の5割以上が仮設住宅等、自宅以外から通学している。また、依然として保護者の所得は安定せず、就学援助を受けている家庭は7割を超えている。昨年度後半から家を新築する家庭も出てきたが、集団移転を待っている家庭も少なくなく、保護者の焦りやいらだちが感じられ、生徒への影響も懸念される場所である。

**(4) 執筆者人選の理由**

子どもたちからのメッセージには、今年度、地区の英語弁論大会で優秀賞を受賞し、県大会に参加した2年生女子の和訳を載せた。地域の明日を見つめた力強い弁論である。また、教職員からのメッセージは、震災時、本校に勤務していた二人に執筆してもらった。震災から、生徒達とともに、学校教育の再生に向けて取り組んできた貴重な経験に基づくメッセージである。

2 子どもたちからのメッセージ

英語弁論 「Tomatoes are waiting for us.」

トマトが私たちを待っている

2年 及川 麻海

私はとても幸せです。なぜなら、学校から美しい海が見えるからです。その美しい海は、私に笑顔をくれます。しかし、反対側に目をやり、街を見ると笑顔を失ってしまうのです。津波が来て、多くのものを奪っていきました。今では、ほんのわずかしが残っていません。そして現在、海水の影響で、農業に適さない土地になってしまいました。私たちはその塩害から土地を改善させようと、新しいことを試みています。ひまわりや、綿、トマトなどが塩害を抑制するためにいいという人もいます。トマトは特に栽培しやすく、日本人はほぼ毎日のように食べている、身近な食べ物です。また、ダイエット効果もあると言われています。

今、私の話を聞いている皆さんは、こう思っているでしょう。「なぜこの少女はトマトの話をしているのか？」それではお話ししましょう。

去年、担任の先生がこのような質問をしてきました。「私たちの街にはどんなボランティア活動が必要だろう？」時間をかけて話し合い、ついに、私たちはその答えを見つけました。世間では東北の復興について多く語られていました。学校や道路、店などの修繕など、でも人々の心についてはあまり触れられていませんでした。そのことから、私たちは人々の心を癒そうと考えました。私たちは新しい笑顔を人々に届けたい。どうしたらいいのだろう？ そうだ！ トマトを育てよう！ 生で食べてもいいし、トマトソースを作ってもいい。人々にトマトを贈れば、以前のような笑顔を取り戻すだろう。

実際、あるボランティア団体が私たちの街の復興を手伝おうと計画していたと聞きました。彼らも同じような考えを持っていたのです。彼らはかつて農地だった所をトマト畑にしたいと考えていました。なんと、いいタイミング！そして私たちは一緒に農場を作り、トマトを栽培したのです。朝や夜にトマトの苗に水をかけました。朝、夕と畑に行ってトマトの管理をしました。夏休みも続けました。多くの人たちがトマトを待っていると思うと、私たちはとても忙しかつたのですが、とても楽しかったです。

みなさん、聞いてください。植物に優しいことばをかけると、植物が元気になるということを知っていますか。次のような話を聞いたことがありますか。とてもすばらしい話なのです。例えば、朝には「おはよう。とってもかわいいよ。」、帰宅してから「ただいま。会えてうれしいよ。」などと植物に語りかけます。このような言葉をかけると、植物は元気になるのです。これは、植物は人の気持ちや優しい言葉を理解できるということです。一方で、植物に何も語りかけない場合は、元気がなくなるらしいです。私たちの街の人たちのように、トマトに元気になってもらいたい。私たちが元気なトマトを作れば、人々は元気になるだろう。そして、元気になった人たちが元気なトマトを作る！すばらしいサイクルですね。



私たちはトマトに栄養を与え、トマトはゆっくりと大きく、みずみずしく育ちました。トマトは私たちの言葉を理解し、微笑み始めました。私たちは共に活動することや行動に移すことの大切さを学びました。街の人みんながこの経験を生かして頑張っています。私たち中学生にも多くのことを教えてくれています。私が見たいもの、それは畑や品質のよい農作物でいっぱいになった街。私たちは今年もトマトを育てています。この秋の収穫が待ちきれません。私たちは今日も畑に行きます。

なぜなら…トマトが私たちを待っているから…。



3 教職員からのメッセージ

「先輩の強い気持ちを引き継いで」

教諭 大内 忍

東日本大震災の翌年度、私は3年生の担任としてスタートを切った。

当時の3年生はたったの6名だったが、全員が最上級生の自覚をもって学校を建て直していった。もちろん、普通の学校生活が送れていたわけではなく不便なことだらけだったが、6人の結束力は強かったし、学級内では弱音を吐くことがあっても後輩の前ではまっすぐ前を向いていた。開催されるかどうか分からない中総体に向け、テニスコートがあることに感謝しながら部活に励んだ。避難所となっている体育館は使えないのでバレー部とバスケ部は外で練習をした。部に1人か2人しかいない3年生だったが強いリーダーシップで後輩を引っ張り、自らを鼓舞しながら役割に徹した。

夏休みが明け、それまで地区と合同で開催していた運動会は、この年初めて中学校の単独開催となった。取りやめにしようか、小学校の校庭を借りようか。中学校の校庭には仮設住宅があり、狭すぎるのでは……。私たち職員でさえ迷っていた時、当時の実行委員長が、「おもしろそうですね。中学校でやりましょう。」と声を上げた。「やれる種目をやればいい。種目はみんなで考えればいい。おもしろそうですよ。」と。

この年の運動会は縦割り班による6チーム編成。3年生がリーダーとなり、ビーチフラッグやドッジボールなど、生徒全員で考えた種目で行われた。狭い校庭だからこそできた運動会だ。

この時から、「自分たちのアイデアで行事を創り上げる」という新しい伝統ができ、今年で3年目となる。まるでずっと前からそうしてきたかのように、今では生徒全員に浸透している。あの年入学してきた1年生はもう3年生。逆境を知恵とチームワークで乗り切った先輩の強い気持ちをしっかりと引き継いでいる。



「この子たちだからこそ」

教諭 小山 和彦

「先生。悪い夢なら、早く覚めてほしい。」

震災の翌日、変わり果てた小泉の様子を見ていたとき、ある女子生徒にそう話しかけられたことを今でもはっきりと覚えている。

この子たちの卒業式の式場準備が終わったちょうどその時に地震が起こった。華やかに装飾された体育館はその夜から避難所になった。卒業式は、2週間後に多目的ホールで行われた。停電で薄暗い中、入場してくる卒業生たちを見て、こんなはずじゃなかったのに、と思うと咽喉の奥が苦しくなった。あの時卒業していった生徒たちは全員無事に志望校に合格し、今高校三年生。卒業後の進路が決定したという知らせが届き始めている。

中学校でも、震災の年に入学した19名が間もなく卒業を迎える。多くの方々からたくさんのご支援をいただいていた。当時の生徒会長が、「頑張っている姿や、笑顔で元気に学校生活を送っている姿を見せること、それが支援してくださった人たちに感謝の気持ちを伝える一つの方法だと思う。そして、それは、周りの人たちに元気を与え、この地域の復興を支える大きなエネルギーになるのだと信じている。」と語った。そして、



「震災に甘えるな。」という当時の校長の励ましの言葉。それらを実践すべく、運動会や文化祭は生徒のアイデア満載の、生徒が主体的に活動する行事として生まれ変わった。また、震災前から地域創造をテーマとしていた総合的な学習の時間は、その内容や活動により深まりを持つようになった。震災の辛苦に耐えながらの生徒たちの頑張りに、エネルギーを与えられているのは私だけではない。

悪夢のような出来事から、子供たちは様々な体験をし、多くのことを考え、学んできた。まだまだ辛い日々は続くが、この子たちだからこそ、この地域の復興のために必ずや大きな力になってくれるものと信じている。

4 おわりに

今、小泉の町は大きく変わろうとしている。かつての町は約1 kmほど南西の集団移転地の周辺に移る予定である。グリーンロード沿いに次々と新しい家が建ち始めている。浜地区や小泉川の両岸にあって被災した家も山側に移動を始めている。昨年度、建設された瓦礫処理場は平成25年9月までにその役目を終え、10月からは撤去作業、そして元あった田んぼの再生が進んでいる。11月からは集団移転地の造成作業が急ピッチで進められ、地域の数か所に設けられた土の仮置き場との間をたくさんのトラックが行き来している。今は休止しているが、やがてこの地域を通る三陸自動車道の工事も再開されるであろう。さらには、海岸に防潮堤ができる。学校から海は見えるのだろうか、今見える学校の様々な場所からの景色を記録しておきたいと思う。



地域にとって必要なのは、新しい町、住居とともに、雇用の創出である。家建てても収入が安定しなければ、地域に雇用の場がなければ、いずれ人はその土地を離れてしまう。10年後の地域社会を背負って立つ子どもたちのために、小泉、本吉町、気仙沼市の新しい町づくりを推進していかなければならない。その計画づくりの中に、どんどん子どもたちを参加させていかなければならないと強く思う。

この震災を通じて、生徒たちは不自由さ、創意工夫と創造の楽しさ、自由な発想の大切さを学んだ。支援してくれたたくさんの人々との交流を通じて、人間の温かさと感謝の気持ちを知り、自分たちの気持ちや考えを相手に伝えることの大切さを学んだ。このことは自信につながり、地域の未来を切り開いていく時の大きな力になるものと信じている。



復興の道は厳しい。学校では明るく過ごす生徒たちも、家に帰れば否応もなく現実と向き合わなければならない。将来の不安やあせりを感じることも多いであろう。保護者の動揺が子どもたちに伝わり、気持ちが不安定になる生徒もいるであろう。だからこそ、学校は子どもたちにとって、保護者や地域の人々にとってのオアシスでなければならないと切に思う。

そのために我々教師ができることを考え、生徒の力を信じ、互いの信頼関係の中で、新しい活力に満ちた学校づくりに邁進していきたい。10年後、成長した生徒たちが明るく語り合える、心地よい新しい小泉の町ができていることを信じたい。



感謝の気持ちを力にかえて

校長 舛田 育久

1 はじめに

(1) 本校の位置

本校は、県北部気仙沼市の南の旧本吉町に位置し、海と山に囲まれた農山漁村の自然あふれる地域である。震災前、学区にある大谷海岸は全国で最も駅から近い海水浴場として快水浴場百選にも選ばれ、夏には多くの海水浴客でにぎわいを見せていた。震災後、地盤沈下による砂浜の減退、松並木の消滅により遊泳ができない状況にある。

(2) 震災時の被害

震災時、海拔16メートルにある本校にも津波は押し寄せ、校舎1階とその周辺に大きな被害を受けた。その後、校庭に仮設住宅が建てられたため、校舎裏に仮校庭を整備していただき、現在は通常に近い学校運営を行うことができている。

(3) 震災後の影響

震災時より今現在に至るまで、県外も含め多くの方々より支援をいただいている。どれもが暖かく、どれもありがたい支援である。生徒はもちろん、教職員もその支援から元気をいただき、前向きに進むことができた。全国で唯一防災環境科をもつ兵庫県立舞子高校からは今年も70名の生徒が夏にやってきて、体育館に2泊をしながら交流を深めていった。また、愛媛県三崎中学校からは毎年収穫したサツマイモと温かいメッセージをいただいている。

今回、生徒、保護者、教員、支援者といったそれぞれの立場から、震災をとおして思いを記録として残すことは大変意義のあることであり、震災の記憶が日を経つにつれ薄れていく中で、防災の意識を再確認するよい機会となった。

2 子どもたちからのメッセージ

「震災を忘れないために」

1年 菅原 夏音

平成23年3月11日。私は当時、小学4年生でした。私はこの時、あんな恐怖がおとずれるとは、思ってもみませんでした。時計の針が、午後2時46分を指した時、突然ゴゴゴッ…という低い音が耳に入ってきたのです。「何だろう」と思った瞬間、教室中が激しいゆれにおそわれました。棚から落ちる本やノートなどが、教室の中でどンドンぐちゃぐちゃになっていきました。その後、けたたましい音のサイレンが鳴り、「大津波警報。早く海から離れて下さい。」との放送が町中に響いていました。「…大津波？」私はその時、津波に対してあまり実感がありませんでした。でも、私が見た津波は、私の想像をはるかに超えた、とても恐ろしいものでした。津波が車を、木を、町をのみこんでいく…！

海の水が引いた後、変わり果てた町並みが私の目にとびこんできました。たった数分前まで見ていたはずの建物が、木が、町並みが、ないのです。でもそれはまぎれもなく、私たちが住んでいた故郷でした。あの地震、あの津波、あの恐怖。私たちの町は、一瞬にして壊れてしまったのです。でも、震災は何もかも奪ってってしまったのでしょうか。いいえ、違います。震災は、私たちに生きる知恵と、人々のありがたみと温かさを教えてくれました。

震災が起こる前までは、私は自然災害をまるで他人事のように思っていました。「どうせここは大丈夫。津波なんて、そんなに高い波が来るものじゃないだろう。」と。そのうえ、どこかで災害が起こっても「かわいそうに」くらいにしか思っていないませんでした。でも、震災を機に、その考えはまちがっていたことに気づかされました。さらに、1か月以上の水、電気のない生活で、あらためて普段の生活のありがたみを感じました。

町・心の復興を進めるためには、みんなで手を取り合い協力していくべきだと思います。例えば、地域全体で防災意識を高めるためのイベントを行ったり、防災マップを配布したり、学校行事に地域の方を招いて交流をしたり、自分が役に立てることを積極的に行っていきたいと思います。私は、必ず気仙沼の復興を実現させてみせます。私たちの故郷が、とてもすてきで温かい町に戻るのを信じて。

「前進するために」

2年 三浦 菜々子

2011年の3月に起きた東日本大震災で、多くの方が亡くなりました。今生きている人の中にも、心に傷を受けた人が沢山いると思います。震災当時は電気や水道などのライフラインが途絶え、快適とはほど遠い生活をしていました。そのとき、支援やボランティアとして来てくださった人たちの温かさ、優しさを知ることができました。他にも、生活が不便だったことで、当たり前前の生活のありがたさや恵まれた環境で生活できる幸せを感じることもできました。そして何より、命の尊さや大切さ、家族や友達、自分自身の命の重みをとて強く感じました。

しかし、私達は2年過ぎたことで、これらのことを忘れかけていると思います。私は今回の震災で亡くなってしまった人のためにも、もしまた大きな地震が起きたときに同じような被害を出さないためにも、あのときのことを忘れてはいけないと思います。そして、もう一つ大切な事は、伝えることです。地震が来たら津波が来るということ、津波の怖さ、自分で自分の命を守らなければならないということ。これを地震や津波の被害のなかった地域の人や次の世代に伝えることが、被災地の防災強化だけでなく、日本全体の防災、これから先の世代の防災になります。

伝えることは誰でもできて、みんなで伝えればたくさんの人に知ってもらうことができます。私達がこれからしていけること、できることは、話して伝えたり、写真を見せたり実際に被災地を見てもらい震災を知ってもらって、二度と私達のような大きな被害を受けたり辛い思いをする人がでないようにはたらきかけることです。そして、防災の大切さや当たり前前の生活のありがたさを広めていくことです。

大谷中学校では、兵庫県舞子高校の皆さんをはじめ、県外の学校とのつながりが沢山あります。それを生かし、震災のこと、これからみんなにやってほしい防災のことを広めていきたいです。また私は、今回の教訓を生かし、沢山の物や人に感謝して、いろいろな人の役に立てることをしていきたい、自分から周りの人を助けにいける人になりたいです。

「震災から復興へ」

3年1組 小原 燎世

震災を経験して、もう3年あまりの歳月が流れようとしている。こうして考えてみると、月日が経つのが本当に早いなとしみじみ実感する。だがしかし、復興が進んでもとの気仙沼が今ここにあるという訳ではない。復興は着々と進んでいるのだが、元通りになったといえば嘘になるのだ。しかしこれでもまだ気仙沼は良い方だと僕は思う。中には、復興の光が少ししか差していない所もあるのだ。

最近ではオリンピックの東京招致で日本は盛り上がっている。でも、喜ばしい反面、あまり喜べない人がいるのも現状だ。なぜなら、まだ復興が終わっていないからだ。理解に苦しむと思うが、実際に見てもらえば分かるだろう。今も僕たちの学校には仮設住宅が建ち並んでいる。漁業を始めとする様々な仕事に携わっていた人たちは、やはり資金面で再開できず、大変な苦行を強いられている。これでは、復興しているのかと目を疑うほどだ。しかし、今回僕が伝えたいのは復興の真髄は人々の心にあるのではないかということだ。

僕はまず、地域の復興は人々の心の復興からだと思う。人々の心が復興すれば、自然と他の面も復興すると思うからだ。しかし現在、着実に人々の心は復興しつつある。前までの活気のあった気仙沼に戻ってきているのだ。それもこれも全世界からの様々な支援のおかげに他ならない。そ



「大谷っ子米」の販売

のことに對して、僕は素直に感謝と喜びを感じている。そして、ここ気仙沼もいつかまた普通の生活を取り戻し、普通に生活できる日がくることだろう。

未来のここ、気仙沼に住んでいる皆様。復興が終わる日がくることを願います。これからも震災で亡くなった方々の分も幸せに生きて笑顔を絶やさないでください。僕もこの命、大切に生きて行きます。

3 保護者、支援者からのメッセージ

「震災を経験して思うこと」

父母教師会会長 尾形 明門

宮城県内では、この10年間で大きな地震が何度となく発生しており、その度に甚大な被害が発生してきておりました。私は職務上被災地に入りライフラインの確保の一端として応援給水を行って来ておりますが、被災地では大きな余震を何度か経験し地震の恐ろしさを肌で感じていました。ここ数年テレビ等で大きな地震が宮城県内で発生すると言われ続け、地震の恐ろしさを経験していたにも関わらず他人事として、家庭や職場での防災意識が欠如していたことに気がきました。

3月11日の東日本大震災で自分たちが被災者となって、水、食料、電気など、それまでの生活では当たり前前と思っていたものが急に無くなった途端、私たちの生活は一変してしまいました。この大震災によって、私たちが失ったものは計り知れませんが大震災で沢山の方々からの支援を受け逆境に立ち向かう時こそ、絆が支えとなりました。子どもたち自身も復興に向けた活動に参加し、そこで得られた経験の中で「人のために役立つこと」「社会の中で自分のできる役割を持つこと」の大切さを実感し、志を持って歩み出した生徒も増えていると思います。

このように復興のために何か役に立ちたいと考えている子どもたちの思いを大切に、学校、保護者、地域がそれぞれの立場において真剣に考え、そして家庭と学校、地域が相互に連携して社会全体が一つになり、ふるさとを支えていこうとする人づくりをすることが大切だと思います。

「災間」を生き抜く者として

気仙沼の港で目にした「第18共徳丸」の姿。この大船が、海から津波と共に打ち上げられ、建物や家屋、人を押しつぶしたのだと思うと、恐ろしさで体の震えが止まりませんでした。震えが止まぬ手を合わせ、災害の犠牲となった方々、その他全てに對して祈ることしかできない自分。そして生徒たちに目をやると、集まって黙禱を捧げていました。

その場から立ち去る時に、辺り全体を生い茂っている草むらに目をやると、その草むらの根元には、建物の礎がいくつも残っていました。東日本大震災直後では、この礎はむき出しだったに違いありません。それが1年、2年と経つにつれ、草の中に埋もれてしまったのです。その草むらの前に立っていると、「人々の震災に対する意識も、たった2年間で、どこかに埋もれつつないだろうか。」という思いがよぎりました。この5日間で最も辛いと思った瞬間の一つです。この地は、程なく新たに住宅が建設される予定になっています。この地が新しい建築で満たされたとしても、私はこの津波のことを決して忘れません。この地を訪れたことは、この地の歴史に深く刻まれた東日本大震災のことを伝えていく使命があるのだと感じました。震災の体験を話してくださることは、話してくださるご本人も、その度に痛みを伴うと思います。しかし、その痛みをもってしても、心の底からお話をしてくださるといふ、その力強さに圧倒され、心身ともに震えました。そう、人は弱くて強いのです。

元来、「災間」とは、災害と次の災害の時間的間隔を意味しています。さらに私は、この言葉に次の2つの意味を加えようと思っています。一つ目は、世界中の様々な災害が起こっており、国を超えてそれらを共有する必要があるという物理的間隔であり、二つ目は、災害に對する人々の意識を高めていく必要があるという心理的間隔です。

私は阪神・淡路大震災と東日本大震災を実際に体験していません。しかし、震災直後の神戸で暮らしてきたこと、舞子高校で環境防災科の担任・授業をさせていただいていること、さらにこの5日間で様々なお話

兵庫県立舞子高等学校教諭 的野 記子



を伺い、交流会に参加させていただいたこと。これらの経験を胸に、私もこれらの震災の歴史の担い手として、震災のこと、いのちのことを世界中に伝えていき、「災間」に向き合っていきます。

東日本大震災被災地支援活動に参加して

兵庫県立舞子高等学校 女子生徒

今年も大谷中学校でワークショップと「ふゆみずたんぼ」の雑草抜きをした。今年はそれに加えてまち歩きもした。まち歩きをしているとき去年いっしょにワークショップをした男の子に再会した。去年は自分の夢をみんなの前でいうことができなかった男の子だったが、今年は自ら高校生に話しかけていて驚いた。「去年一緒にワークショップしたんやけど覚えてる？」と尋ねると、私が話している途中で「あー！」と言って思い出してくれた。数十分間一緒にいただけだったが覚えてくれていたのは嬉しかった。そして、元気でいてくれてこうしてまた出会うことができた。継続してボランティア活動ができていいるから実現できた再会である。これからも連絡をとりこの繋がりを大切にしたい。その男の子とまち歩きの間長く話していた。数日前にあった震度5弱の地震は大丈夫だったかと聞くと「もう慣れた。」と言っていた。震度5もの地震は普通なら慣れるはずがない。

大学に入ったら災害時でも臨機応変に動けるよう幼稚園教諭になるための勉強と並行して防災のことを勉強していきたいと考えている。今は大きなことはできないが、せめて「自分の命」「家族の命」を守りたいと思う。

また、私個人としてはこれからも被災地と繋がりたいと思う。私は震災から2か月が経った宮城県へドロボロ瓦礫の撤去などのボランティアをさせていただいた。私が見てきた限りではそのときと比べるとまちはきれいになっていた。大きな瓦礫の山も消えた。だが、更地も多く、まだまだ復旧段階だと感じた。3回目の今回、自分のできることの小ささに悩んだ。家の基礎だけが残っているのを見るたびに無力感を感じた。泣くだけではいけない。今回が最も何か行動に移さなければならないという責任感を強く感じさせられた。今回の被災地訪問は作業などのボランティア活動がなかったことでそう感じるのかもしれない。だから私は、今までよりも一層強く人に東日本大震災で起きたことを伝えたいと思った。

私にできることは限られている。あの地震を、津波を、被災地を忘れず、被災地と繋がりたいと思うことが大切である。だが、私が一番できると思うことは、もうあのような被害を出さないためにも防災の大切さを伝えることだ。そして、話を聞いた人は、行動に移してほしい。



4 教職員からのメッセージ

「未来につなげるもの」

教諭 伊藤 浩志

学校裏に広がる「ふゆみずたんぼ」は灰黒色の濁流に呑み込まれ、校庭には膝上まで瓦礫と海水が重く静かに侵入してきた。避難した先で「もうだめだ」と蹲（うずくま）る生徒を宥（なだ）め、津波に浸っている校庭の高齢者を無我夢中で抱きかかえ、「しっかりしなきゃ」と連れ添っていた介護の女性を励ました。ふと、計り知れない不安と恐怖が襲い「なんなんだ！」と心の中で叫ぶ。その時、「先生！毛布運んでいい？」とある生徒が声を掛けてきた。避難した高台近くの公民館にある毛布を寒くて凍えている人たちのために出したいと申し出てきたのだ。その生徒たちは、すでに自分ができることを探しあてていた。生徒の声に救われた一瞬だった。

その毛布は、自分たちは使わず、高齢者や津波に濡れた人たちを優先に配られていた。その夜、大谷中学校の体育館は緊急の避難場所になる。誰も帰るすべはなかったのである。そこでも大谷の中学生たちは、無欲に動き続けていた。外に出てみると、大谷から見た気仙沼方面の山並みは濃い橙色に染まっていた。「陥没して、火の海」で携帯電話のメール受信は途絶えていた。これらの光景は一生忘れることはないだろう。

あれから3年。普段の生活の中で震災経験を語る機会は少なくなってきた。しかし、できるだけ多くの人に伝えなければならないと感じている。震災は起きた。そして、人も自然も誰も悪くない。「未来につなげるもの」それは、人と人とのつながり、人が自然と共に生きる術を考え、様々な変化に主体的に順応してい

く先に創られる未来があると思いたい。そのために必要なものは何か。自分が自分であるための「セルフケア」、自然体で危機管理を自覚していく「無意識の防災」、そして震災の記憶を語り継いでいく「伝承」。簡単に言えば、自分自身をしっかり守り、備えを忘れず、体験談を伝え続けていくことが、未来へのアプローチになるのかもしれない。

あの時、大谷の中学生は、パニックになるほどの衝撃を受けながらも、自分にできることを当たり前のようしていた。それは、教師としてこれからの中学生にも必要な力であると伝えていきたいと考えている。何人かの卒業生は、地元の復興のためになることを将来の仕事にしたいという者も出てきた。未来に自分の志をつなげている人たちが確実に育っている。震災の先にみつめた志もあるということも加えて話していきたいと思う。



5 おわりに

今の子どもたちは、間違いなくこれからの気仙沼市や大谷の復興の担い手である。確かに大変な思いはしたが、子どもたちは震災から何かを確実に学び取っていることを感じる。失ったものばかりではなく、そこから将来に繋がる大切なものを感じ取っているのである。

それは、与えられたものというよりも、子どもたち自身が感じ取る中で考え、自分のものとしていったものであると思っている。

最後に支援をいただいている愛媛県三崎中学校へ送った生徒の手紙を紹介したい。

三崎中学校のみなさんへ。愛媛県と宮城県では、とても遠く感じますが、みなさんがビデオレターやメッセージを送ってくださっているので、とても近く感じます。私たちはあの3・11の震災で多くのものを失いました。家や家族を失った人もいます。ですが、失ったものだけではありません。得たものもあります。それは、交流です。三崎中のみなさんや兵庫県立舞子高校のみなさんとも交流しています。

私は、この震災を恨んでいません。このように三崎中のみなさんや多くの人と交流できるようになったからです。それと、私たちのことを思い、みなさんが歌ってくださったあの曲を聴いて、とても感動しました。これからも仲良くしてください。

編集後記

気仙沼市立学校長会は、過去2年間「被災から前進するために」という主題のもと、校長の視点から震災について記述してきました。

第3集をつくるに当たって、5月～7月の校長会役員会で3回協議をし、3年目は視点を変えて各学校で震災を経験した児童生徒、保護者・地域の方々、そして、教職員の意見をまとめようという方針と内容が決まりました。

このことを教育委員会に報告すると、支援を続けているの方々からも寄稿していただくとより良いものになるのでは、とのご指導がありました。

構想から3か月、8月の校長会で次のように提案しました。

「校長が執筆者を依頼し、原稿が手書きや聞き取りであればそれをデータ化する。校長はじめとおわりの文章及び題名を書く。締切りは3か月後の11月としたい。」

そこから校長会一丸となって作成に取り組むこととなりました。

執筆者の皆様からは学校毎、そして、個々の立場から「この震災をどのように生かし、つなげるか」という観点でご寄稿いただきました。

将来、震災の記憶がない世代となっても、この地で、この学校で何があったか、防災にどのように取り組んだか、子どもたちや保護者はどう考え立ち直っていかうとしたのか、そして、支援者の方々はあるどのような思いで気仙沼に来たか等がしっかりと分かる記録集となりました。表題通りの「被災から前進するための未来へのメッセージ集」が完成しました。

発刊に当たり執筆者の皆様、関係者の皆様に厚く御礼申し上げるとともに、このような記録や記憶の掘り起こしを定期的に行い、末永く語り継がれることを未来に託して、編集後記といたします。

編集委員会一同

編 集 委 員 会

1. 気仙沼市立学校長会

編集委員長	藤村俊美	(鹿折小学校)
副委員長	佐藤富夫	(松岩中学校)
副委員長	菅原輝夫	(新城小学校)
副委員長	山本正美	(九条小学校)
委員	加藤高政	(小泉中学校)
委員	木村玲子	(馬籠小学校)
委員	畠山雅宏	(大谷小学校)
委員	熊谷正子	(唐桑小学校)
委員	熊谷聖	(落合小学校)
事務局	豊田康裕	(白山小学校)

2. 気仙沼市教育委員会

学校教育課 副参事 及川幸彦

3. 宮城教育大学

国際理解教育研究センター 教授 市瀬智紀

◇表紙写真撮影 藤村俊美 (鹿折小学校)
◇題字揮毫 小野寺隆成 (元階上中学校)

平成26年3月発行



被災から前進するために

第3集

未来へのメッセージ



第3集

被災から前進するために

未来へのメッセージ



このパンフレットは環境に配慮した
「水なし印刷」により印刷しております。



環境にやさしい植物性インキ
[VEGETABLE OIL INK]で
印刷しております。